

昭和59年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 VIII

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

浪岡城跡の発掘調査事業も昭和53年度から継続し、その間青森県における中世史解明の糸口を数多く提起してまいりました。このたび、昭和59年度分の報告書を刊行できますことは、城跡に対する町民各位ならびに発掘を御支援いただきました関係各位の熱い声援があったればこそと、深く感謝申し上げる次第です。

昭和59年度におきましては、浪岡城跡の主館と考えられる「内館」の調査ということもあり、東北地方でも珍しい礎石建物跡が検出され、5971枚にも及ぶ備蓄銭貨の出土や信仰的色彩の濃い伏せ鉄鍋遺構・柿^{こけり}経の出土など、貴重な出土品を顕現できました。また、浪岡城跡が内館を中核に順次拡張されていったことも、出土遺物や遺構からある程度推定されるようになり、歴史的経緯における考古学研究の位置づけが高まっていると考えられます。

今後は、浪岡城跡を「史跡公園」として環境整備する予定であり、関係各位には旧に倍しての御指導・御助言をお願い申し上げます。

昭和61年3月31日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は昭和59年度に調査した浪岡城跡内館と北館西館間の堀跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国（50％）・県（8％）の補助を受け、浪岡町（町長・工藤善弘）・浪岡町教育委員会（教育長・蝦名俊吉）が総額1,200万円で実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年5月15日から同年12月1日が野外調査、昭和59年12月2日から昭和61年3月30日までが屋内整理作業として実施した。
4. 本書の編集は工藤清泰がおこない、執筆は以下の通りである。
 - I 調査に至る経緯……………工藤 清泰
 - II 調査の経過…………… 〃
 - III 検出遺構と主な出土遺物…………… 〃
 - IV 出土遺物……………木村 浩一
 - V 浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について……三浦貞栄治
 - VI 浪岡城跡内館出土の備蓄銭貨について……工藤 清泰
 - VII まとめ……………工藤 清泰
5. 本書は、本文7項目、写真図版（PL.）30枚、挿図（Fig.）73枚、表（Ch.）57枚、付図1枚で構成した。
6. 遺構の略称は以下の通りである。

S B	礎石・掘立柱建物跡	S T	竪穴建物跡		
S E	井戸跡	S D	溝跡	S F	焼土遺構
S X	性格不明遺構	S P	特殊遺物埋設遺構		
7. 遺物の略称は以下の通りである。

P	陶磁器・土器類	F	鉄・銅製品	C	銭貨
S	石製品	B	骨類	M	木製品・漆器被膜等
N R	皮革製品・縄類・自然遺物				
8. 遺構の土層注記にあたっては、「新版標準土色帖」小山正

忠・竹原秀雄編著（1976. 9）を参考した。

9. 本書を作製するにあたり、実測・浄書等は下記の方々の手に寄る所が多大であった。記して感謝申し上げます。

（敬称略）

武田嘉彦、佐々木忠義、斉藤とも子、坂本里見、

成田和佳子、工藤馨、常田紀子

10. 本書の刊行にあたり、下記の機関・各位の御指導・御助言を得た。記して感謝申し上げます。（敬称略、順不同）

文化庁記念物課、県教育庁文化課、石村喜英、坂詰秀一、

小井川和夫、青森県立郷土館、

県埋蔵文化財調査センター、三上次男、桜井清彦、

八戸市立博物館、越田賢一郎、高橋与右ヱ門、石川長喜、

福島政文、白鳥文雄、

目 次

発刊にあたって

例言

I 調査に至る経緯	1
II 調査の経過（調査日誌より）.....	4
III 検出遺構と主な出土遺物	7
IV 出土遺物	89
V 浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について	131
VI 浪岡城跡内館出土の備蓄銭貨について	138
VII まとめ	163
写真図版	167
付図	

I 調査に至る経緯

浪岡城跡の調査は、昭和52年に北館と東館間の堀跡に最初の鍬を入れて以来、昭和53年から同58年まで主に北館の平場部分およびその周囲の堀跡を中心に進めてきた。その結果、北館平場における遺構配置と出土遺物の概要が知られるようになり、北館が浪岡城跡における重要な位置を占める館であることが知られるようになった。しかしながら、従来から本丸的機能を有していたであろうとされていた内館については、明治時代から公園として使用されていた事、さらに運動場として地表面がかなり攪乱されていた事などにより、遺構の残存状況は不良であろうと推測され、北館調査終了後に発掘調査を実施する予定になっていた。内館が浪岡城跡の主館であるという事は文献史学研究者の強く主張する所であった。今回の調査はそういう意味で、浪岡城跡における各館の機能を考える上で極めて重要な意義を有することになる。浪岡城跡が将来史跡公園として環境整備するにあたって、各館の機能を考慮した計画を進める必要がある点で、内館の調査に期待する所は多大であった。以下、該調査の調査要項を記し、調査に至る経緯とする。

昭和59年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。発掘調査は昭和53年度（補助事業）から始まり10年計画で継続する予定であり、将来「史跡公園」として環境整備を実施する上で基礎資料を得るためにおこなうものである。

2. 調査期間

事前作業 昭和59年4月2日～5月26日

発掘作業 昭和59年5月28日～12月1日

整理作業 昭和59年12月2日～昭和61年3月30日

3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内

浪岡城跡内館 約3,000m²

4. 調査員等

調査顧問	村越 潔	弘前大学教育学部教授
〃	佐々木達夫	金沢大学文学部助教授
〃	高島 成侑	八戸工業大学助教授
調査員	宇野 栄二	浪岡町文化財審議委員
〃	葛西 善一	浪岡町文化財審議委員

調査員 佐藤 仁 弘前高等学校教諭
" 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校実習講師
" 三浦貞栄治 浪岡高等学校教諭

5. 調査協力員等

調査協力員 長瀬昇、矢島敬之、阿部雅士、小林淳、五十嵐唯子、鈴木武誌、須山満夫、熊谷清秀、田中小百合、谷川隆三、島田誠、三上正行、増尾知彦、辻佳伸、阿部楨子、須藤光治、仙北和美、能登谷宣康、田中裕征、下山信昭、宮城恵美（弘前大学学生）、木村恵（東北女子大学生）、中村真理子（東北大学学生）、津川賢、天内俊英

調査補助員 工藤馨、坂木里見、有馬千枝子、武田嘉彦、佐々木忠義、伊藤圭子、成田和佳子、齋藤とも子

調査作業員 常田節子、相馬誠一、対馬ナリ、坪田京子、天内弘子、工藤ツカ子、太田芳子、三浦秋子、鎌田峰子、奈良岡昭江、村岡せい子、奈良岡きぬ、小田切美津枝、太田容子、長谷川ちよ、津川百合子、有馬テコ、加藤美代子

6. 調査主体者

浪岡町 町長 工藤善弘

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101の1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会社会教育課

教 育 長 村上良民（昭和59年10月1日より蝦名俊吉）

社会教育課長 鎌田 静治

社会教育係長 木村 鐵雄

同 課 主 事 工藤 清泰

" " 成田 和子

" " 櫛引 顕芳

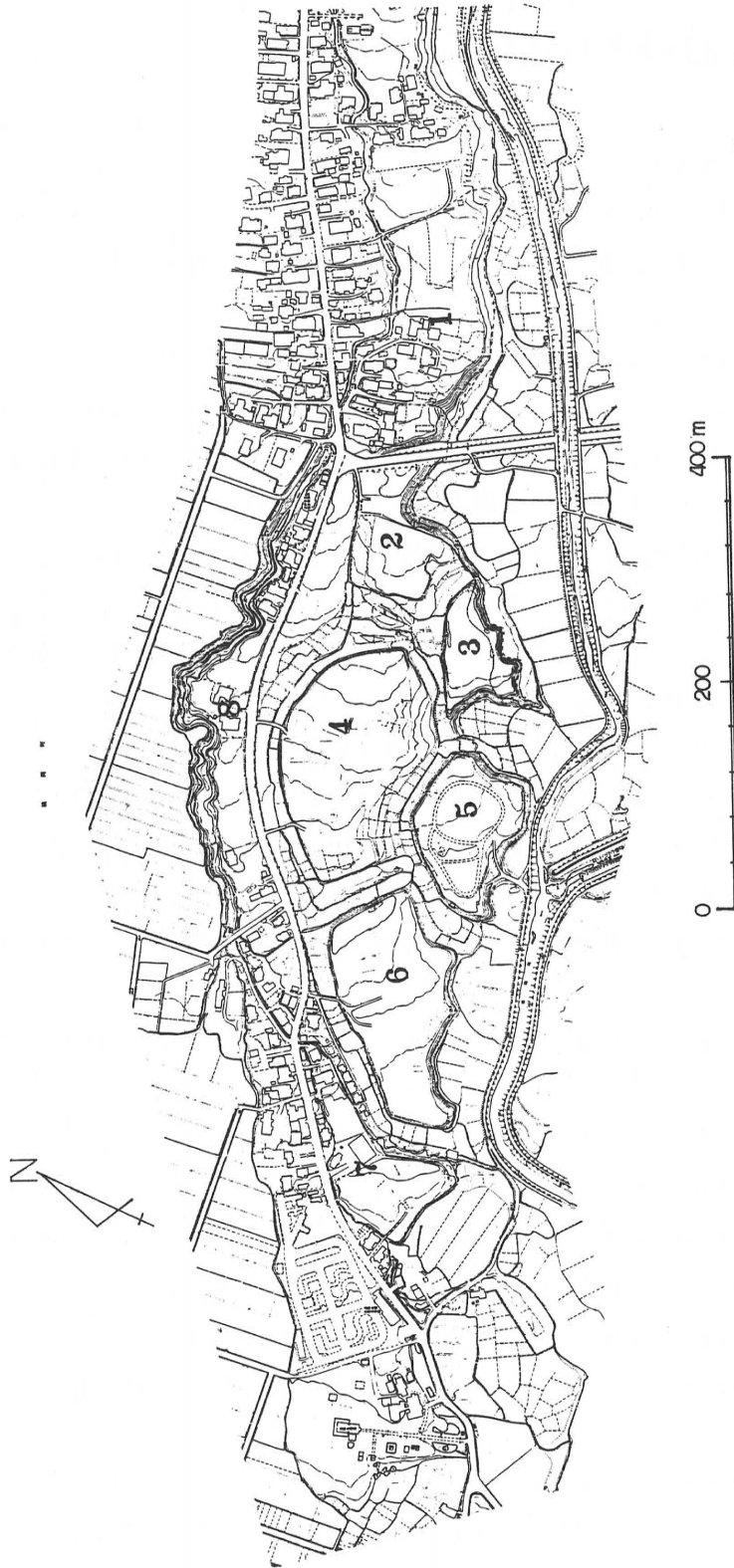
8. 調査方法

平場はグリッド方式により、遺構・遺物の検出に努め、堀跡はトレンチ方式で遺構確認と遺物の把握に努める。

9. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が作製・刊行する。

Fig. 1 浪岡城跡全体図



- | | | | |
|------|-----------------------|------|-------------------------|
| 1. 新 | 館15,480m ² | 5. 内 | 館 7,890m ² |
| 2. 東 | 館 5,400m ² | 6. 西 | 館13,830m ² |
| 3. 猿 | 築 3,750m ² | 7. 校 | 館 8,550m ² |
| 4. 北 | 館15,450m ² | 8. 無 | 名の館22,250m ² |

史跡指定地 ----- 215,800m²
 公有地 188,300m²

II 調査の経過(調査日誌より)

昭和59年

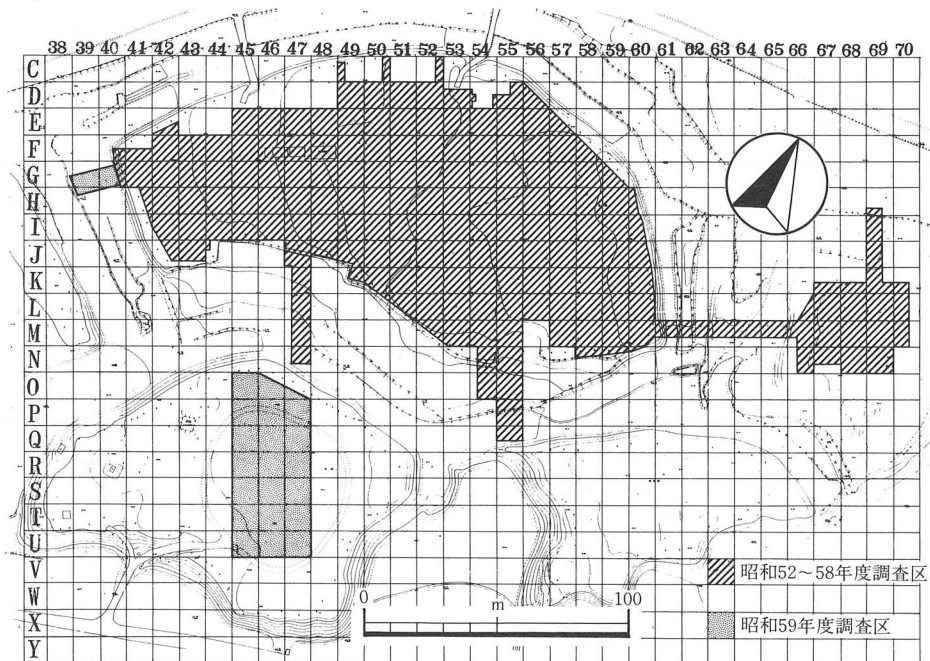
- 4月2日 発掘調査事業開始。
- 5月21日 内館の水準点を基準軸としてグリッドの設定をおこなう。グリッドは10m×10mを1グリッドとし、南北線(O~W)東西線(39~50)の配置に基づき仮杭を打つ。
- 5月22日 仮設定したグリッドに基づき部分的に試掘を始める。その結果、グリッドによって表土層および地山までの深さの相違が認められ、出土陶磁器も中世から現代までの幅があるため、部分的には地山段階での遺構確認も必要であると考えられた。
- 5月24日 調査員等打ち合せ会を開催。年間計画の方針、発掘箇所の検討をする。
- 5月30日 Q45区より表土除去作業を開始する。以下P・Q・R45区の順に進める。
- 6月12日 Q・R・S46区の表土除去作業。Q・P・Q・R45区のI・II層における石(自然石を含む)の配置実測を進める。R46区II層から鋤先と美濃灰釉皿が隣接して出土する。(PL. 2-(1))
- 6月14日 P47区から順にQ・R・S47区へと表土除去作業を進める。
- 6月15日 P47区II層から白磁・染付の壺の破片が出土する。周囲には厚い灰層が認められることから遺構面の可能性もある。同16日も同一箇所から陶磁片が出土する。
- 6月18日 S47区II層から底に「大」の墨書がある青磁皿出土。(PL. 2-(2))
- 6月19日 各グリッドのII層を掘り上げた段階で各種の遺構が検出され始める。SE80掘り下げ開始。
- 6月21日 S45~47区までの北壁層序図の作製にかかる。基本層序の確認。S48・49・50区についてはグリッドの北半分をトレンチ状に掘り下げる。
- 6月25日 T・U・V46区およびT・U47区の表土除去作業を始める。
- 6月29日 V45区II層から赤絵が施された染付皿片出土。(PL. 2-(4))
- 7月3日 表土除去終了区の中で、焼土範囲の認められる部分があったため、平面実測および断面実測をするが明確に遺構として認定することは困難である。
- 7月7日 表土除去面積 2,700m²となり、各種遺構の掘り下げも始まる。
- 7月16日 SE82・84・85、SX202・205・206・211、ST246・248・249の掘り下げが始まる。
- 7月24日 弘前大学教育学部考古学研究室の学生が発掘に参加。
- 7月25日~27日 小学5・6年を対象とした児童の発掘調査教室を開催。参加児童57名、

町内の小学生だけでなく、大鰐町・平内町からも参加した児童があった。

- 8月1日 S45区SE80底面より井筒と推定される曲物が出土。R46区SX213からは径21cm前後と推定される内外面朱塗りの漆器高台が出土。(PL.2-(6))
- 8月2日 ここ数日、雨が降っていないため土の乾燥が激しく土層の注記等に困難をきたす。
- 8月6日 SE82・84・86・90・92等の井戸跡を集中して掘り下げる。
- 8月9日 SE92の底から内部に鉄製品の入った内耳鉄鍋が正立の状態出土。SX205の掘り下げ中セクションベルトが崩壊し作業員が一時生き埋めとなる事故が発生し、発掘作業を中断した。
- 8月10日 事故の対応策を検討し、井戸跡の掘り方には充分注意することとした。
- 8月12日～19日 盆休み
- 8月20日 今日から昭和58年度検出した北館G41区の柵形遺構と対応する掘跡の調査をすることとし、G39・40区を7m幅のトレンチ状に掘り下げを開始する。主として弘前大学の学生が調査にあたる。
- 8月23日 G39・40区の掘跡から塔婆状木製品(PL20-(4))が出土するも明確な墨書は認められない。
- 8月29日 内館平場では各種遺構の掘り下げとともに掘立柱建物跡として並びそうな柱穴の精査に入る。また木椀を有する井戸跡(SE82・86)の精査も進む。
- 8月31日 S46・47区から浅い円形ピットに礎石を配置したような建物跡(SB38)が検出される。掘跡の調査は終了する。
- 9月3日 SB38の礎石配置を確認するため、東側へ調査区を拡張する。Q46区の柱穴内から銅製宝珠形分銅(PL2-(7))が出土する。
- 9月7日 SB38は、長軸7間に短軸4間の規模で西側に1間四方の張り出しを有することが判明し、部屋割りも想定できるに至る。
- 9月10日 O45区から縹状になった銭貨群が発見され、実測や取り上げに手間どり午後10時頃まで作業を実施する。(SP11)
- 9月11日 同じくO45区から円形ピットに内耳鉄鍋を伏せ、内部に鍬、苧引金、刀、轡、釘、鎌、さらに撚り縄が入った遺構が検出される。(SP12)
- 9月14日 SP11検出の銭貨群の枚数はおよそ5,981枚(後に詳細に数えた段階では5,971枚と確定する)と数えられ、縹の状態も良好であることが判明した。
- 9月17日 P45区SX226の覆土から、石製人形頭部(PL.2-(8))が出土する。
- 9月26日 発掘調査区北側の検出遺構を集中的に実測し始める。それと併行して南側の検出遺構の精査に入る。

- 10月2日 浪岡町で県埋蔵文化財講習会が開催され、参加者が現場を見学する。(約30名)
 - 10月5日 女鹿沢小学校4年生と父母の会が現場を見学。(約130名)
 - 10月8日 T46区SX244を掘り下げるうちに、覆土内から破片となった大量の遺物が出土することを確認する。一日に100点以上の遺物を出土することもあった。
 - 10月15日 実測作業とSX244の掘り下げが進展する。
 - 10月16日 浪岡町文化財審議委員が現場を見学する。(約10名)
 - 10月25日 現場説明会用に1/200の平板実測を始める。
 - 10月31日 SX244の掘り下げがやっと終了し、復元可能な陶磁器、小札等の大量の鉄製品、革製品等の特殊な遺物など出土遺物の全容がわかるようになった。
 - 11月6日 遺構実測作業と併行してベルコン等の発掘器材を整理・運搬する。
 - 11月9日 現場での発掘作業をほぼ終了し、残った実測作業を進める。
 - 11月10日 昭和59年度現場説明会を開催。(約50名の参加者)(PL1-(4))
 - 12月1日 雪の降りしきる中、実測・レベルング作業を終了し現場を引き上げる。
 - 12月7日～9日 町制施行30周年の記念事業の一環として、浪岡町の顔というべき浪岡城跡の出土品展示会を実施する。町内外から434名の見学者があった。
 - 12月3日～昭和61年3月15日 報告書作製のために整理作業を実施する。
- ※発掘調査において作製した図面および出土遺物は、浪岡町教育委員会で保管している。

Fig.2 グリッド配置図と発掘調査区



III 検出遺構と主な出土遺物

昭和59年度の調査は、内館平場と北館・西館間の堀跡の二箇所を実施した。内館平場については、内館のほぼ中央部を約 2,500㎡にわたって実施し、堀跡については昭和57年度に検出した柵形遺構との関連から約70㎡をトレンチ状に掘り下げた。以下個別に報告する。

1. 内館平場の調査

内館平場における遺構の検出状況をみると、礎石建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 8 棟、竪穴建物跡 15 基、井戸跡 33 基、竪穴遺構 31 基、溝跡 9 本、焼土遺構 15 基、蓄銭遺構 1 基、伏せ鉄鍋遺構 1 基となり、礎石建物跡は浪岡城跡で初現のもの、伏せ鉄鍋遺構は全国的にも類例がほとんどなく貴重な検出事例となった。

A 礎石建物跡

S B 38 (PL.3-(1)~(3)、Fig.3、Ch.1)——S・T46・47・48区検出、長軸 7 間、短軸 4 間の母屋に西側南端に 1 間×1 間の張り出しを有する。径70~80cmの掘り方内に大小各種の川原石を配置しており、礎石(根石と考えることも可能)を配置した点からすれば礎石建物跡と考えられるが上部構造における柱を部分的にも土中に埋めることから掘立柱建物跡の構築意識を抜き出ないものである。礎石の配置をみると、抜き取られた部分(c1、a6、e8)も考慮して、西側と東側に大別でき西側に 2 間×3 間の部屋を南北に並列し、東側へに 3 間×3 間の部屋に南側と東側に廊下ないしは縁側を配置する状況とみられる。つまり、六間 2 室と九間 1 室を基本とする部屋割りであり書院造りの系譜に連なると考えられる。間尺については、層序断面の観察で柱の「あたり」を理解できる例があり、b1からb5までの 4 間は身心786cmで 1 間あたり196.5cmとなる。また比較的礎石配列の連なる部分をみると、a0からa8までの 8 間は157.4cmで 1 間あたり196.75cm、e1からe7までの 6 間は1,186cmで 1 間あたり197.6cm、a4からe4までの 4 間は786cmで 1 間あたり196.5cm、a7からe7までの 4 間は 788 cmで 1 間あたり197.0cmとなる。このように、柱根および礎石間の間尺平均値をみると196.5~197.6cmというように1.1cmの微差しか認められず、和尺で言う 6 尺 5 寸(196.96cm)を基準尺として使用していたことが理解できる。礎石の据え方をみると、直接地山上に置く例(e1・e3他)、掘り下げた柱穴の中にたたいたと思われる堅くしまりのある土を入れその上に置く例(a5、b5他)があり、柱穴の掘り方や礎石の形状によって相違するようみられる。もっとも、礎石間の比高をみると(Ch.1(a)) b1とd7では37cmの差があり、水準的な考慮なしに礎石を据えていることから間尺のみには一定の規格性を有したものの他は素材(石材、柱材等)に合わせて構築したら

Ch. 1

(a) SB38 柱穴計測表

PitNo.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	礎石標高(m)	備考
a-0	方	41×36	43	35.78	
a-1	円	118×105	48	35.76	
a-2	円	90×(96)	69	35.60	
a-3	円	77×71	26	35.80	
a-4	円	74×71	31	35.79	
a-5	円	86×83	32	35.82	
a-6	方	88×(76)	33	-	
a-7	方	80×75	35	35.99	S 116 礎石
a-8	円	87×84	31	35.97	
b-0	方	110×83	36	35.78	F 1513、 F 1512、 F 1610 角釘 かすがい
b-1	円	96×88	41	35.74	
b-4	方	94×74	36	35.74	
b-5	方	80×65	29	35.87	
b-6	円	76×78	23	36.00	
b-7	円	83×74	30	36.00	P 2988 青磁
b-8	方	82×81	34	35.98	P 3165須点器つぼ P 2026 染付
c-1	円	91×82	23	-	P 2910 美濃 F 1311 角釘
c-2	円	65×75	24	35.82	
c-3	円	76×75	29	35.90	
c-4	円	76×70	30	35.89	
c-7	円	79×67	26	36.03	
c-8	円	73×63	28	36.07	
d-1	方	94×86	32	35.77	
d-4	円	93×85	32	35.90	P 3143 白磁
d-7	円	90×(100)	23	36.11	
d-8	円	76×(76)	33	36.07	
e-1	円	93×86	19	35.93	
e-2	円	89×73	34	35.77	
e-3	円	87×76	20	35.95	
e-5	方	83×74	20	36.02	
e-6	円	75×75	24	36.05	
e-7	円	77×76	32	36.09	P 1019、 P 2969、 染付
e-8	SX331によって消滅している。				P 3006 染付 P 3169、 P 3171、 P 3172、 F 1510 白磁 F 1511 不明 F 1512 角釘 F 1514 鉄 F 1515、 F 1516、 F 1376、 F 1366、 C 347 角釘 B 174 札 P 3084 利流不能 染付

(b) SB38 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土が少量と炭化物を少量含む。
2	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土をブロック状に多量に含む。
3	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土をブロック状に微量と炭化物を多量に含む。
4	黒色土(10YR2/1)に炭化物を少量含む。
5	にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)の単層。
6	黒色土(10YR2/1)の単層。
7	黒色土(10YR1.7/1)の単層。
8	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土をブロック状に含み、明褐色焼土と炭化物を含む。
9	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土を全体的に含む。
10	黒色土(10YR2/1)ににぶい黄褐色粘土が含まれる。
11	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土をブロック状に含み、炭化物を少量含む。しまり強い。
12	暗褐色土(10YR3/3)に黒色土を含む。
13	黄褐色砂質土(10YR5/6)の単層。
14	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土と浮石を微量と炭化物を少量含む。
15	黒色土(10YR2/1)に浮石を微量含む。
16	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
17	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土を少量含む。
18	黄褐色砂質土(10YR5/8)に黒色土を含む。しまり非常に強い。
19	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土が微量含む。
20	黒褐色土(10YR3/2)の単層。しまりなし。
21	黒色土(10YR2/1)に黒褐色土を微量含む。しまりなし。
22	黒色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土を微量含む。
23	黒色土(10YR1.7/1)に炭化物を塊状に含む。
24	黒色土(10YR2/1)と黒色灰との混層。
25	黒褐色土(10YR2/2)の単層。
26	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土を少量と炭化物を含む。
27	褐色砂質土(10YR4/6)の単層。
28	地山、黄褐色砂質土(10YR5/8)。

Fig. 3 SB38実測図

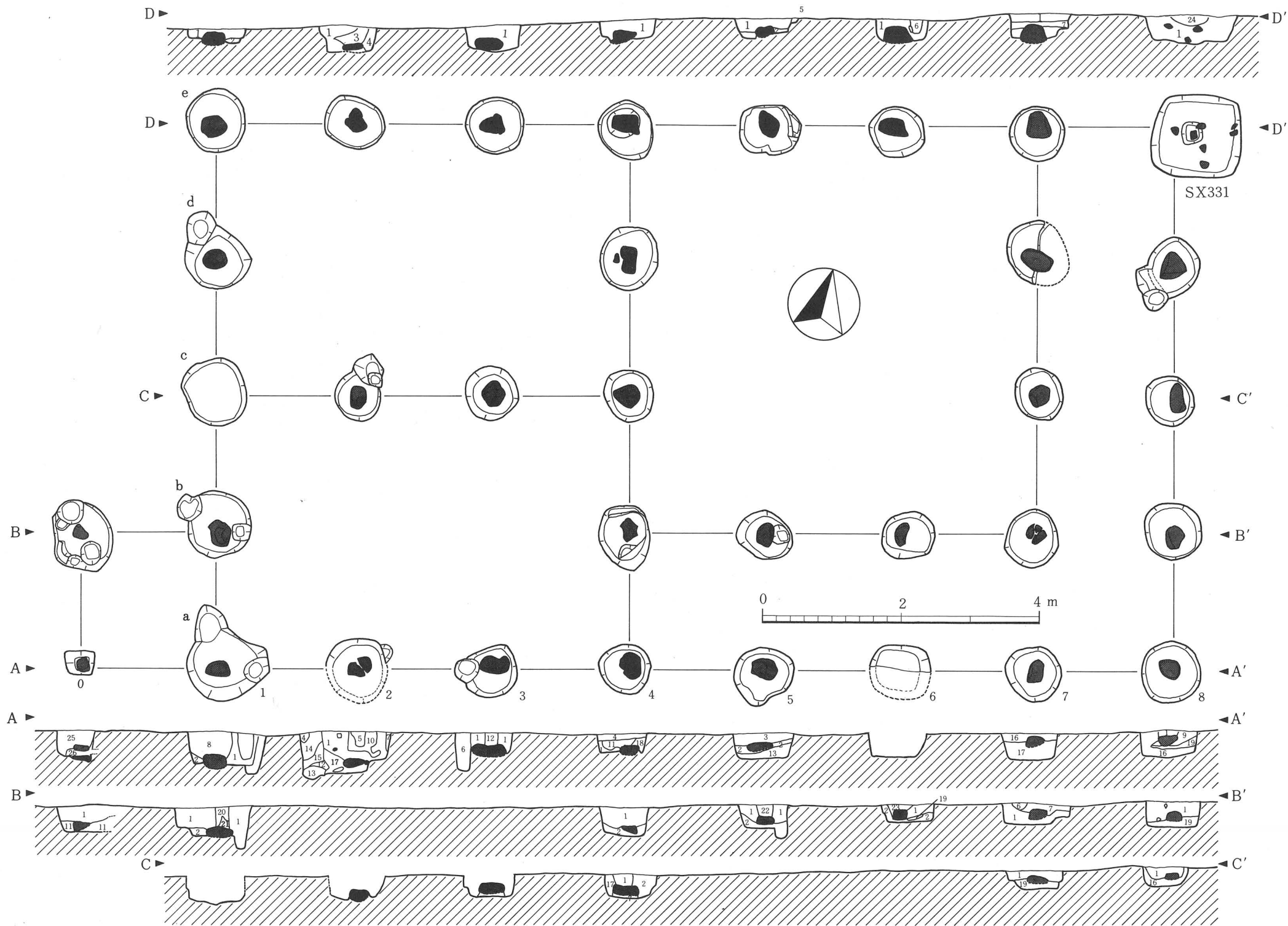
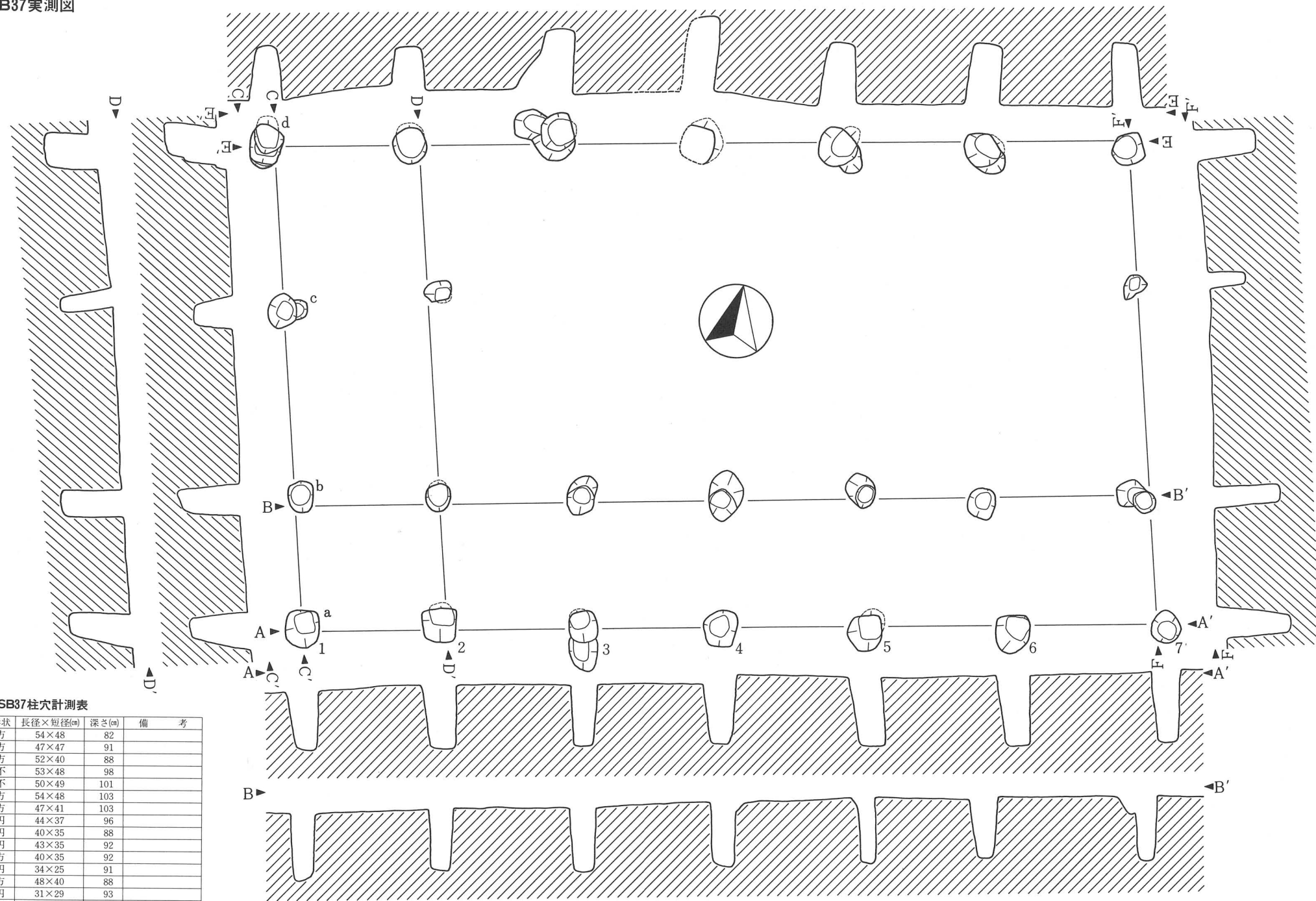


Fig. 4 SB37実測図



Ch. 2 SB37柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(m)	深さ(m)	備考
a-1	方	54×48	82	
a-2	方	47×47	91	
a-3	方	52×40	88	
a-4	不	53×48	98	
a-5	不	50×49	101	
a-6	方	54×48	103	
a-7	方	47×41	103	
b-1	円	44×37	96	
b-2	円	40×35	88	
b-3	円	43×35	92	
b-4	方	40×35	92	
b-5	円	34×25	91	
b-6	方	48×40	88	
b-7	円	31×29	93	
c-1	円	51×40	58	
c-2	不	38×28	74	
c-7	不	32×25	56	
d-1	不	41×41	79	
d-2	円	51×47	62	
d-3	円	52×47	93	
d-4	不	49×47	108	
d-5	不	54×54	89	
d-6	不	54×46	88	
d-7	方	46×43	93	

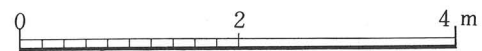
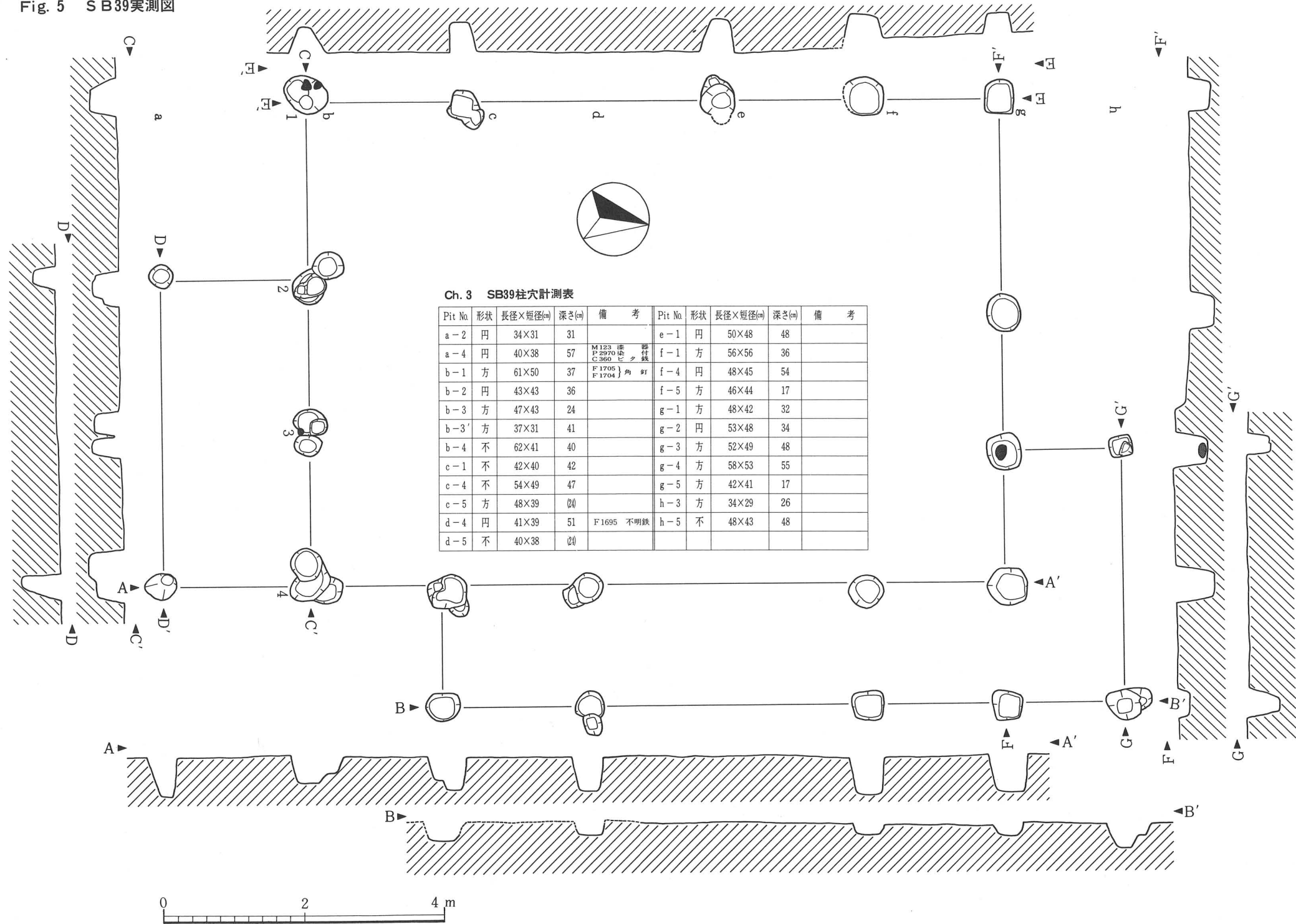


Fig. 5 SB39実測図



しい。本建物の位置は、内館中央からやや南東に偏るもののほぼ中央部とみて良く、磁北に対し短軸は $N-14^{\circ}-W$ となる。重複する遺構としては、S T 252（新）、S X 219（新）、S X 331（新）がありいずれも柱穴内の礎石を抜き取っているとみられることから本建物跡よりは新しい構築遺構と推定される。廃絶時期については明確とは言いがたいが、b7覆土から青磁片、b8覆土から染付片、d4覆土から白磁片、e7覆土から染付片が出土していることから16世紀代と考えて大誤ないであろう。

B 掘立柱建物跡

S B37 (PL. 4 -(1)~(2)、Fig. 4、Ch. 2) — O・P45・46区検出。長軸6間、短軸3間の規模で南側と西側に1間の庇を有する可能性がある。長軸方向の間尺は、a1からa7までの6間は1,210cmで1間あたり201.6cm、b1からb7までの6間は1,206cmで1間あたり201.0cm、d1からb7までの6間は1,210cmで1間あたり201.6cmであり、6尺6寸から6尺7寸の間尺を使用していることになる。ところが短軸方向については、a1からb1までの3間の中でa1からb1は6尺6寸、b1からc1とc1からd1については8尺4寸を基準として柱穴を配置している。特に長軸方向と短軸方向は直交しないで長軸が $E-12^{\circ}-S$ 、短軸 $N-14^{\circ}-W$ と約 2° のズレが生じている。柱穴の掘り方は、方形のものが多く一辺45~50cmで深さは平均90cm以上とかなり深い。そして大部分の柱穴は南から北へ傾斜を有して掘り下げられており、単純に住宅跡とばかりは結論されない掘立柱群である。柱穴からの出土遺物はまったくなかったため、重複するS E86、S E92等の遺構を考慮しても廃絶時期は15~16世紀と推定される。

S B39 (Fig. 5、Ch. 3) — P・Q46・47区検出、長軸5間、短軸3間の母屋に北・東・南側に変則的に1間ずつの張り出しを有する。長軸方向の間尺はb4からg4までの5間が997cmで1間あたり199.4cm、b1からg1までの5間が997cmで1間あたり199.4cmとなり6尺6寸を基準としている。短軸については間尺は一定せず、g4からg3までは199cmと6尺6寸を基準としているのに対し、g1からg3およびb1からb3までは510cmとなり16尺8寸で2間となっている。これはS B37でもみられた短軸の間尺であり興味深い。張り出し部分については、北側と東側が母屋部分から約170cmの長さで5尺6寸の間尺を使用し、南側については約200cmで6尺6寸の間尺を使っている。柱穴の掘り方は母屋部分が比較的大きく深いのに対し、張り出し部分は小さく浅い傾向を有する。柱穴覆土から出土遺物がなかったため廃絶時期は明確でないが、重複するS E84（新）との関連やS B37の長軸方向は本建物跡の短軸方向が似ている状況から16世紀頃と推定される。なお、長軸方向は $N-9^{\circ}-W$ でありS B37のそれとは若干の差異を有している。

S B40 (Fig. 6、Ch. 4) — O・P45区検出。長軸3間、短軸2間の母屋の北東側に間

尺を変えた3間×2間の張り出しを有する。母屋部分(A・B・C・D1~3)の間尺は長軸・短軸ともに6尺6寸(約199.9cm)を基準とするのに対し、張り出し部分のd3からe3への北側とb4からb5への東側への間尺が4尺(約121.2cm)を基準とした柱穴配置がみられる。柱穴の掘り方も母屋部分は径40cm以上であるのに対して張り出し部分は径30cm強と若干小さくなっている。長軸方向はN-23.5°-Wである。柱穴からの出土遺物としてはd4から瀬戸灰釉水注片が1点

Ch. 4

SB40柱穴計測表

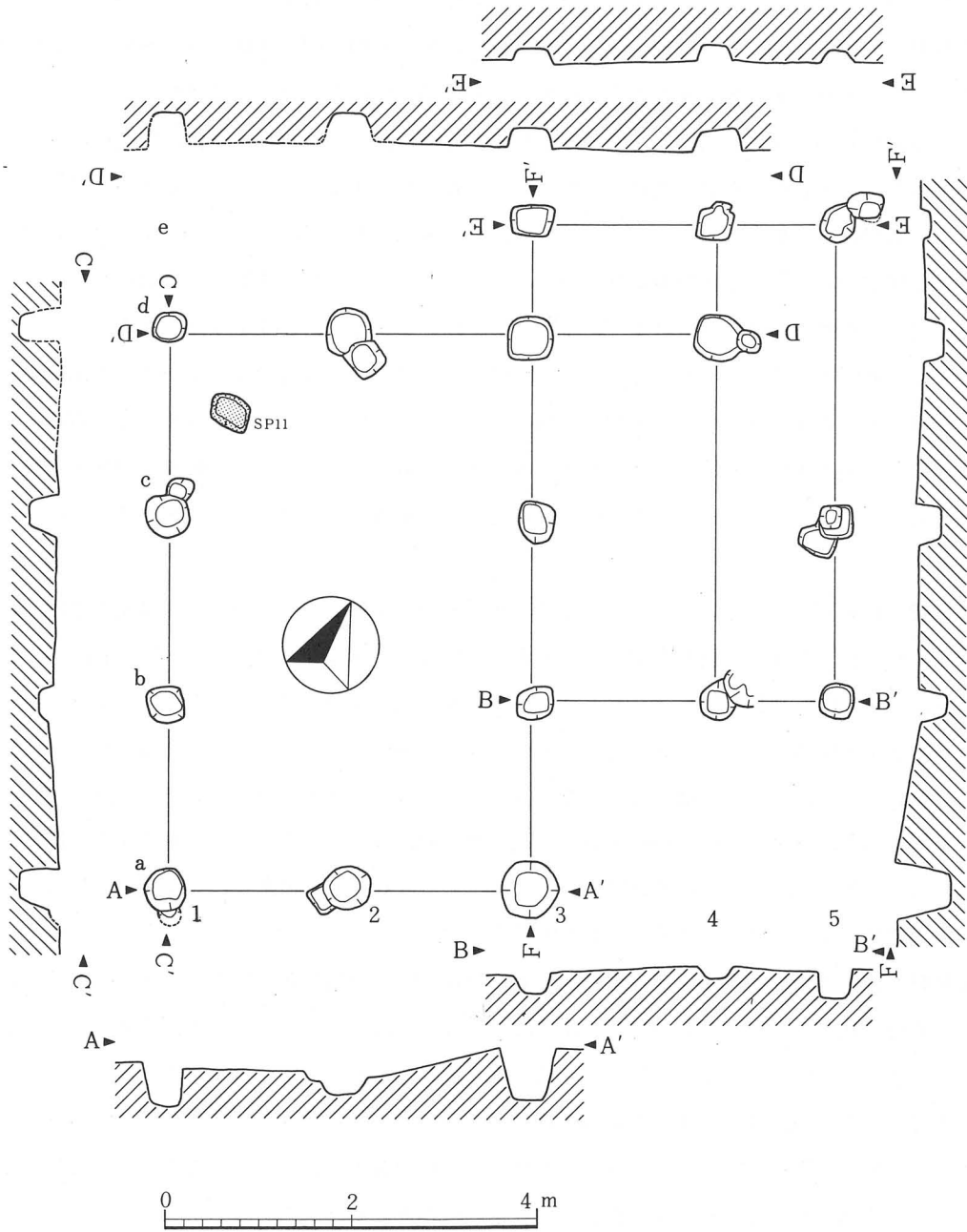
Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
a-1	円	48×42	41	
a-2	円	49×48	18	
a-3	円	61×61	57	
b-1	方	40×39	16	
b-3	方	40×34	20	
b-4	不	40×38	14	
b-5	方	37×35	32	
c-1	円	46×45	35	
c-3	方	44×39	22	
c-5	方	37×35	19	
d-1	円	35×33	(34)	
d-2	方	50×49	(32)	
d-3	方	49×46	27	
d-4	方	52×47	23	P3085 瀬戸水注
e-3	方	44×33	11	
e-4	不	40×37	17	
e-5	不	42×32	14	

Ch. 5

SB41柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
a-1	方	44×43	30	
a-2	方	57×46	29	P3425美濃 F1731不明鉄
a-3	方	47×46	30	
a-4	方	37×36	(30)	
a-5	不	49×48	40	P3429瓦器
b-1	不	49×40	30	
b-3	不	37×33	39	F1760角釘
b-5	円	51×46	33	
c-1	方	51×39	41	
c-3	方	47×40	35	
c-4	不	66×(65)	37	
c-5	方	44×42	47	P2923染付磁 P2924白磁
d-1	方	52×47	37	P2980青磁 P2981 "
d-2	方	48×46	31	
d-3	方	54×44	34	
d-4	不	62×60	35	
d-5	方	52×48	40	P2934瓦器 C30元豊通宝 F1314不明鉄 C30淨化元宝
e-1	不	41×34	50	C319政和通宝
e-2	方	40×37	(28)	

Fig. 6 SB40実測図



あり、本建物跡の廃絶時期は15世紀から16世紀と推定される。なお、本遺構と直接関連するかどうかはいまひとつ明確ではないものの母屋北西隅の床面下から小ピットに埋蔵された5971枚に及ぶ銭貨が出土しており、掘立柱建物跡と銭貨埋蔵の関連から注目されるところである。

S B 41 (Fig. 7、Ch. 5)——R・S 46・47区検出。長軸4間、短軸3間の母屋で、北側西隅に1間×1間の張り出しを有する。母屋は2×3間の部屋を二列平面形で配置する形式であり、西側が六間、東側に四間と二間の部屋割りが認められる。ただし、東側の四間の部分についてはちょうど合致する竪穴遺構(S T 250)が存在し、馬屋等にもみられる形態と類似している。間尺は、長軸方向がa1からa5までの4間で848 cmとなり1間あたり212 cm、d1からd5までの4間で850 cmとなり1間あたり212.5 cmであることから7尺を基準とする間尺である。これに対して短軸方向はa1からe1までの4間で796 cmとなり1間あたり199 cmであることから6尺6寸を基準としていることが理解できる。柱穴の掘り方はほぼ方形に近く一辺50cm前後のものが多く深さも30~40cm前後と平均的に構築されている。柱穴からの出土遺物には、青磁・白磁・染付・美濃灰釉、瓦器、釘、元豊通宝等の銭貨があることから、廃絶時期は16世紀前後と考えられる。なお、短軸方向はN-20.5-Wであり、重複する遺構としてはS X 202 (旧)がある。

S B 42 (Fig. 8、Ch. 6)——P・Q 45・46区検出。長軸3間、短軸2間の母屋の東側と南側にそれぞれ1間ずつの庇を有するものと考えられる。母屋部分と考えられるb・c・d・eの1・2・3列については、長軸の間尺が6尺4寸(約193.9 cm)短軸の間尺は6尺6寸(約199.9 cm)を基準とする配置を呈し、東側および南側の庇部分は母屋から4尺(約121.2 cm)の長さを有して位置している。柱穴の掘り方は、母屋と庇部分相方径40cm前後の方形を呈し深さが60~90 cmと形状の割には深いという特徴を有する。長軸方向はN-18°-Wであり、重複する遺構にはS B 39、S E 89、S E 98、S X 222、S X 258があるけれども新旧関係は不明確で、柱穴からの出土遺物もない。よって廃絶年代も不明である。

S B 43 (Fig. 9、Ch. 7)——Q 45区検出。長軸4間、短軸2間であるが未調査の西側へ拡張する可能性が高い。a3からe3までの4間における間尺は7尺(約212.1 cm)を基準とし、a1からa3までの2間については6尺6寸(約199.9 cm)を基準としているようである。柱穴の掘り方は方形のものが多く、深さも50cm前後と平均している。長軸方向はN-25°-Wであり、重複する遺構としてS E 87・S E 99等がみられる。a3柱穴覆土から雷文帯を有する青磁碗片が出土していることから廃絶年代は15世紀~16世紀と推定される。

S B 46 (Fig. 10-(1)、Ch. 8)——O・P 45・46区検出。長軸4間、短軸で2間の規模を有し、短軸方向はN-13.5°-Wである。長軸方向の間尺は6尺6寸(約199.9 cm)であるのに対し、短軸方向は8尺から8尺2寸の幅(約242.4~248.4 cm)で一定していない。柱穴の掘り方は、

Fig. 7 SB41実測図

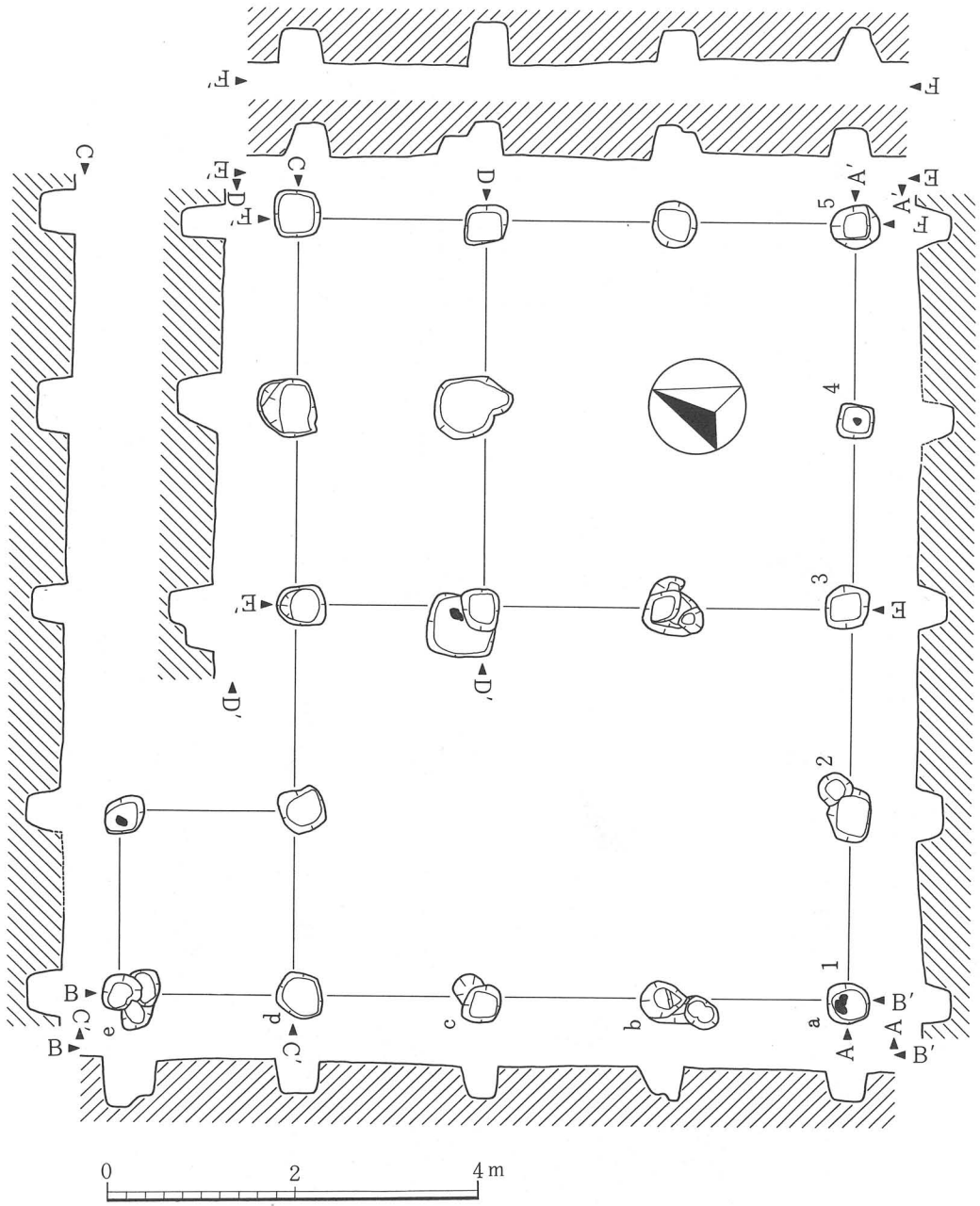


Fig. 8 SB42実測図

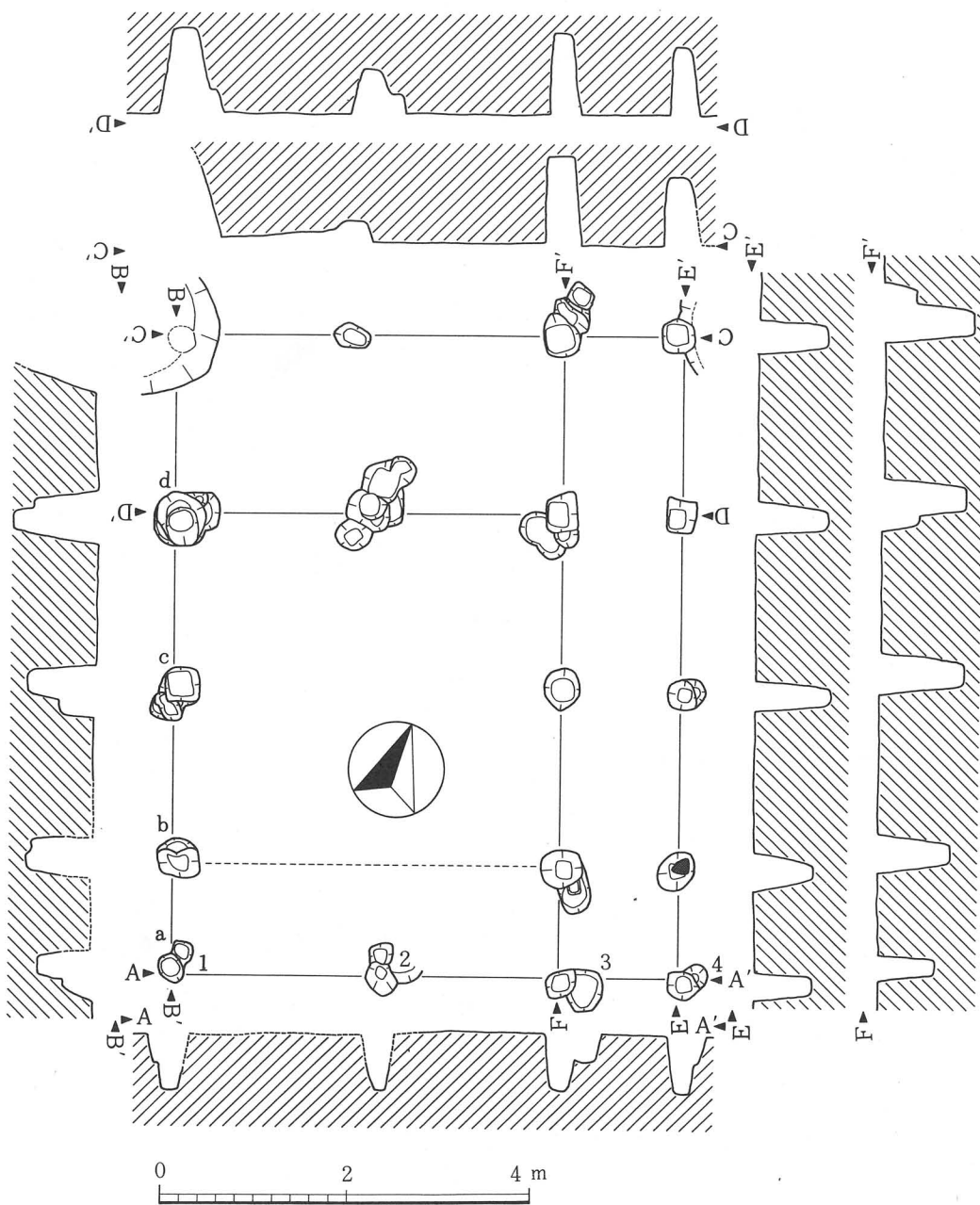
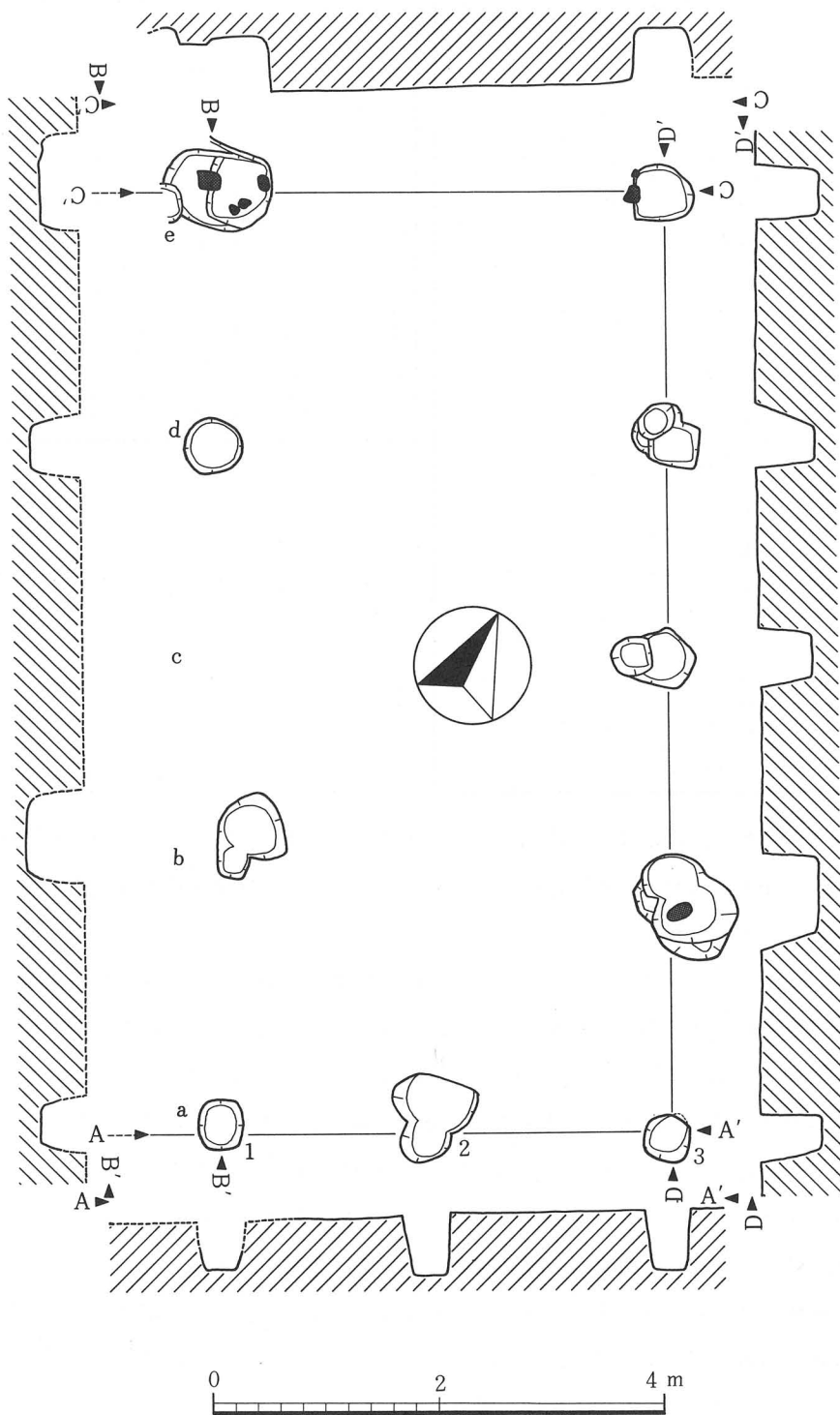


Fig. 9 SB43実測図



Ch. 6 SB42柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	不	33×25	(63)	
a-2	不	39×28	(66)	
a-3	方	32×28	61	
a-4	不	31×31	59	
b-1	方	44×33	(73)	
b-3	方	46×41	78	
b-4	不	22×39	66	
c-1	方	37×37	75	
c-3	不	45×39	90	
c-4	方	33×30	81	
d-1	方	41×35	93	
d-2	不	45×38	44	
d-3	方	41×33	88	
d-4	方	35×31	74	
e-1	-	——	-	
e-2	不	38×25	22	
e-3	方	50×38	98	
e-4	方	37×36	76	

Ch. 7 SB43柱穴計測表

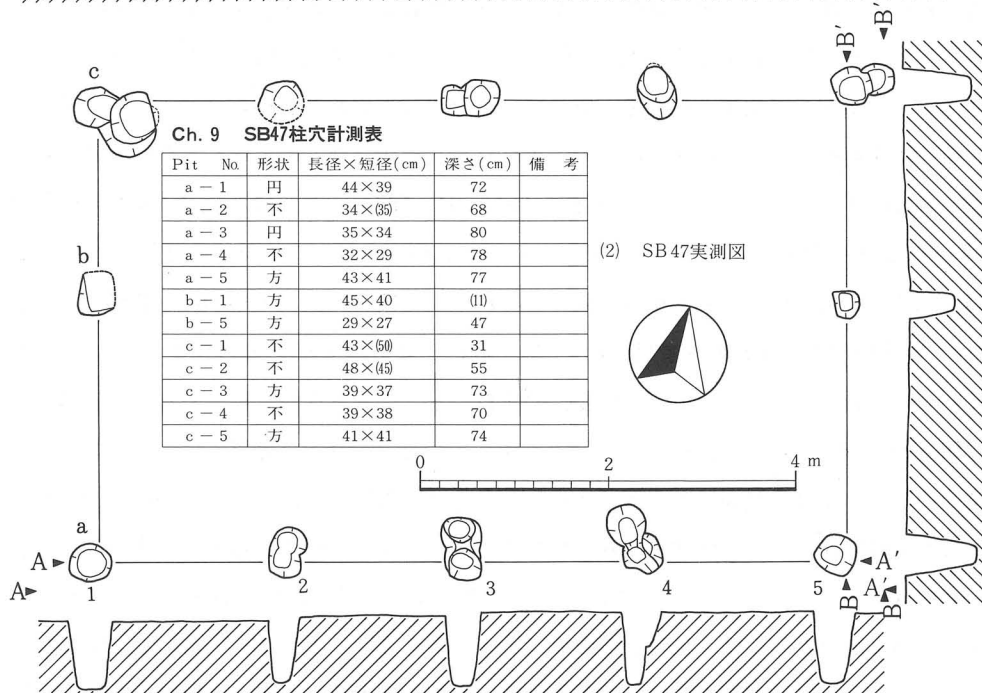
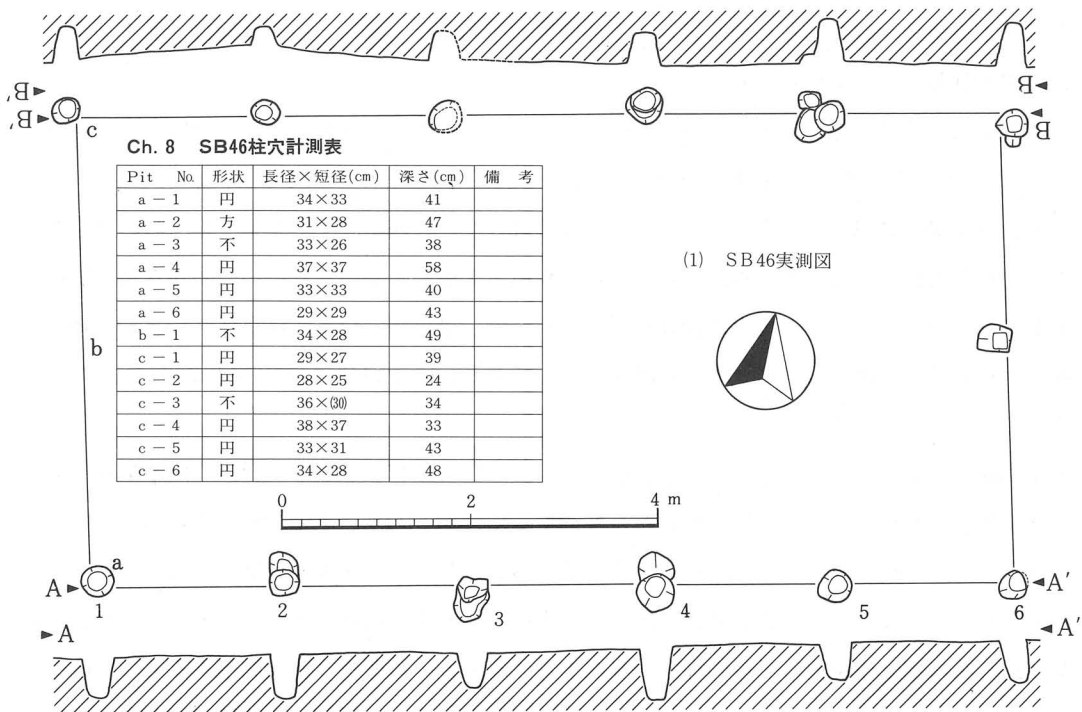
Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	方	44×40	(43)	
a-2	不	44×(40)	54	
a-3	方	41×40	53	M129 漆器 P2975青磁
b-1	不	59×58	(56)	
b-3	方	73×(51)	52	
c-3	不	50×48	46	
d-1	円	51×50	(50)	
d-3	方	44×39	54	
e-1	不	51×(63)	48	
e-3	方	54×50	56	

径30cm前後の円形のものも多く、深さは40cm以上のものが多い。柱穴等からの出土遺物はないが、長軸・短軸共にSB37の軸に近似している点からSB37を構築する前後いずれか近い時期に構築されたと考えられる。

SB47 (Fig.10-(2)、Ch. 9)——O・P45・46区検出。長軸4間、短軸2間の規模を有し、短軸方向はN-12°Wである。長軸方向の間尺は6尺6寸(約199.9cm)を基準としているのに対し、短軸方向は2間に対して16尺4寸(約496.9cm)を基準とし、a1からb1まで9尺8寸(約296.9cm) b1からc1まで6尺6寸(約199.9cm)を取り、a5からb5まで8尺8寸(約266.6cm) b5からc5まで7尺6寸(約230.2cm)の間尺を取っているようである。柱穴の掘り方は、径40cm前後の方形のものも多く、深さは70cm前後と比較的深いものが多い。柱穴等からの出土遺物はみられなかったため、廃絶時期については不明である。

上記の遺構の他にR・S・T45・46区でもある程度の柱穴列の並びは確認したが、明確に掘立柱建物跡であると認定するまでは至らなかった。また、SB44については調査区が昭和59年度・60年度の2ヶ間に亘ったため次回の報告に回した。

Fig.10 SB46・SB47実測図



C. 竪穴建物跡

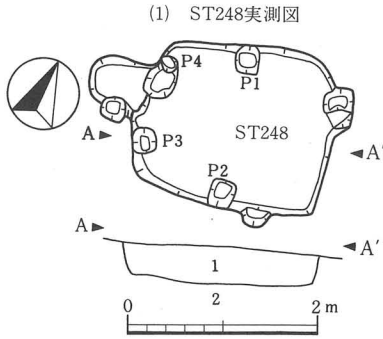
ここで報告する竪穴建物跡とは、竪穴構築でありなおかつ床面等に柱穴を有することから、明確に上部構造が存在したものを扱い、上部構造が不明確な遺構については後に「竪穴遺構」として一括報告するものである。

ST 248 (P L. 5-1)、Fig. 11-1)、Ch. 10) —— P 46区検出。長軸216cm、短軸177cm、深さ40cmの不整形を呈する。北壁と南壁の中央に一個ずつ対峙する柱穴 (Pit 1・Pit 2) があり、本遺構に付属すると考えられるが、他は確証がない。西側に小さな張り出し状の部分があるけれども出入口部分とは考えられず、覆土堆積も1層しか認められないことから短期間に廃棄された可能性が高い。出土遺物は覆土から青磁碗、染付碗、白磁八角小坏 (Fig 42-185) 瀬戸灰釉瓶子の各破片と鉄釘3本、鉄滓が出土しており、16世紀代には廃絶したと考えられる。

ST 249 (P L. 5-2)、Fig. 11-2)、Ch. 11) —— O・P 47区検出。北側が未調査のため明確な規模はわからないが、柱穴配置から推測するに長軸700cm、短軸460cmぐらいの長方形プランと考えられ、深さ20cmは後世の削平を受けた結果である。柱穴配置はおそらく3間×2間であり、深さ50cm以上の方形基調の掘り方が多い。Pit 1からPit 8がそれである。東側に張り出し状の部分や床面に多数の柱穴が存在するけれども、本遺構に直接関連するものではないと考えられる。覆土からの出土遺物としては、青磁稜花皿、白磁皿、越前甕、無文銭、鉄釘、漆器被膜等があり、15~16世紀代の廃絶と推定される。また、覆土上層にあたるが後世の削平を考慮するとあながち本遺構と無関係と思えない遺物の集中地域が認められた。(スクリーントーン遺物集中範囲) この範囲から底に圖の書かれた白磁端反皿、硬質端反大型白磁碗、見込に羯磨文外面にアラベスク文を描いた染付碗 (Fig. 44-209)、見込に花樹文外面に牡丹唐草文を描いた端反染付皿 (Fig. 43-196)、外面に花樹文を描いた染付壺口縁部片 (Fig. 43-195)、見込に折菊文底に「大明年造」銘のみられる染付碗 (Fig. 44-211)、朝鮮碗 (Fig. 44-214) の陶磁の他、銅製飾り金具 (Fig. 51-327)、鉄釘塊等が灰層の中から集中して出土している。一括廃棄と考えた場合16世紀代の資料としては貴重な意味を有するよう思う。

ST 250 (Fig. 12-1)、Ch. 12) —— R 47区検出。一辺300cmの正方形に近いプランであるが遺構間の重複によって壁面は不明確である。深さ約28cmの床面上に10箇以上の柱穴を検出し、そのうち本遺構に伴うものは棟通りに存在したPit 2とPit 4の配置の可能性が高い。なお、Fig. 12-1)の中でスクリーントーン部分はS B 41等の掘立柱建物跡に付属する柱穴である。覆土からの出土遺物としては、染付碁笥底皿 (Fig. 43-200) [この破片はS X 211出土の皿と接合している] 口縁内湾白磁皿、美濃灰釉皿、土製埴塼とそれに伴う溶解物、不明鉄製品、鉄滓、洪武通宝、無文銭、穀臼 (Fig. 52-334) があり、16世紀代の廃絶と推定される。また、

Fig.11 竪穴建物跡実測図 1



Ch.10 (a) ST248柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	31×26	39	
2	方	30×26	30	
3	方	28×26	18	
4	不	20×17	43	

(b) ST248覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	暗褐色土(10Y R%)に明黄褐色土(10Y R%)をブロック状に含む。下層ほど小粒状となる。
2	地山、黄橙色(10Y R%)～明褐色(10Y R%)砂質土

Ch.11 (a) ST249柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	48×32	53	
2	不	33×26	69	
3	方	33×30	54	
4	方	32×32	56	
5	方	33×26	52	
6	方	26×22	62	
7	不	31×26	56	
8	不	36×50	54	

(b) ST249覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に黄橙色砂質土(10Y R%)が2%と炭化物を1%含む。
2	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)が小～大粒状に1%と黒褐色灰(7.5Y R%)が小塊状に1%含む。
3	黒褐色土(5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)が大粒状に5%と明赤褐色焼土(5Y R%)小～大粒状に1%含む。
4	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)が大塊状に30%含む。
5	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を大塊状に5%含む。
6	黒褐色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)が小～中粒状に1%と炭化物を少量含む。
7	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)

(2) ST249実測図

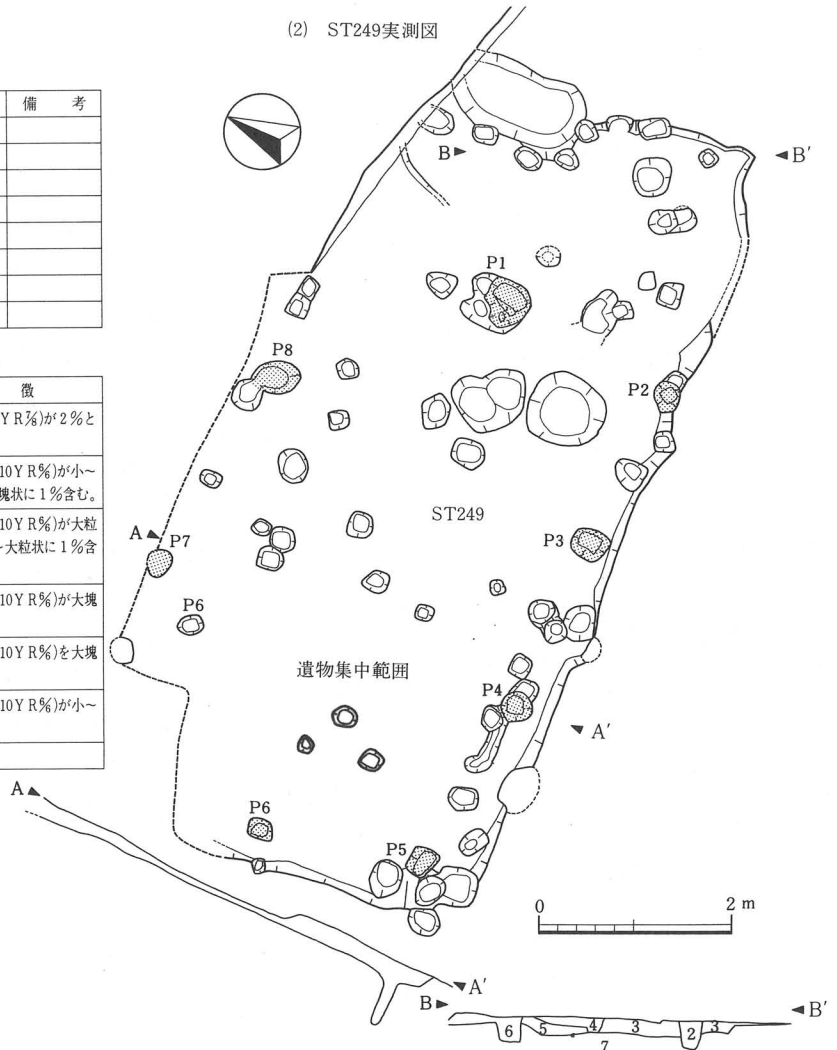
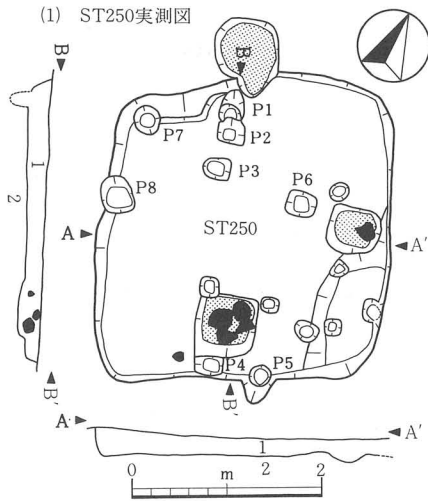


Fig.12 竪穴建物跡実測図 2



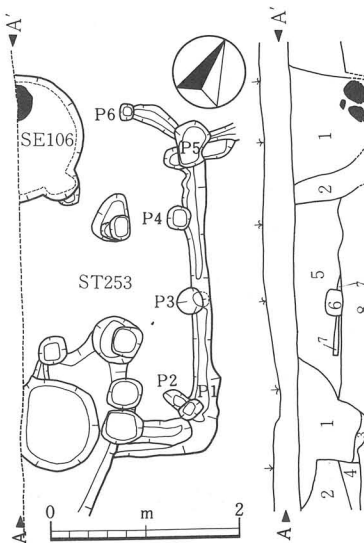
Ch.12 (a) ST250柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	23×18	24	抜き取り痕
2	方	29×27	47	
3	不	30×23	13	
4	方	30×20	59	
5	円	24×22	2	
6	方	32×27	8	
7	円	28×28	28	
8	円	40×34	10	

(b) ST250覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に極小~中塊状に明黄褐色砂質土(10Y R%)を15%、にぶい黄褐色粘土(10Y R%)と白色パミスと炭化物を1%づつ含む。
2	地山、明黄褐色砂質土(10Y R%)

(3) ST253・SE106実測図



Ch.14 (a) ST253柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(m)	深さ(m)	備考
1	方	25×13	51	
2	不	24×17	25	
3	円	28×27	52	
4	方	25×24	18	
5	不	48×37	48	
6	方	18×14	8	

(b) ST253覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を大粒状に1%含む。
2	暗褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を極小粒状に7%と極大粒状に3%とにぶい黄褐色粘土(10Y R%)を中粒状に1%含む。
3	黒褐色土(10Y R%)と黒色灰(10Y R1.7/1)の混層。
4	黒褐色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を大塊状に25%と大粒状に20%含む。
5	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を極小粒状に10%と極大粒状に5%と炭化物を1%含む。
6	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を小粒状に7%含む。しまりなし。
7	褐色砂質土(10Y R%)。しまりなし。
8	地山、褐色砂質土(10Y R%)

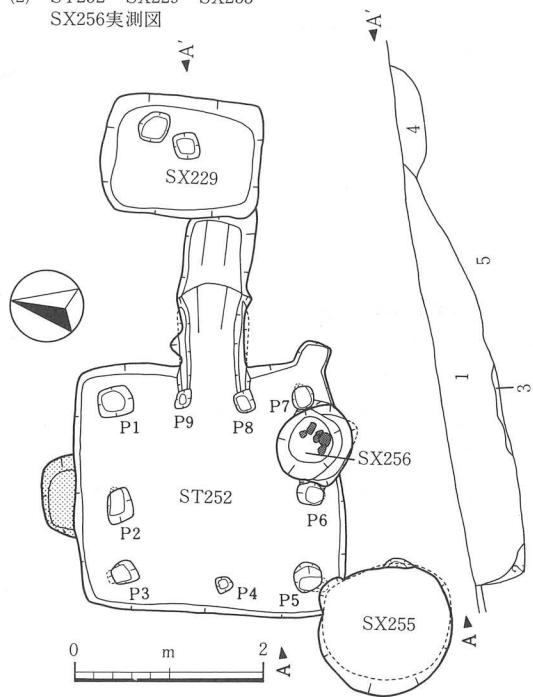
Ch.13 (a) ST252柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	38×31	57	
2	方	35×26	52	
3	方	25×25	55	
4	方	17×17	11	
5	不	30×26	57	抜き取り痕
6	不	28×25	60	
7	方	24×24	62	
8	方	23×20	16	
9	方	18×18	17	

(b) S T 252覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)が大ブロック状に15%と明褐色砂質土(7.5Y R%)が中ブロック状に30%混入。しまりなし。
2	黒色土(10Y R%)に灰黄褐色灰(10Y R%)を10%含む。
3	黒色灰(10Y R1.7/1)に灰黄褐色灰(10Y R%)を30%とにぶい褐色焼土(7.5Y R%)を1%含む。
4	黒褐色土(10Y R%)と褐灰色灰(10Y R%)の混層に炭化物を2%含む。
5	地山、明褐色砂質土(7.5Y R%)。

(2) ST252・SX229・SX255
SX256実測図



S B41の2×2間の部屋割り内部に内包されていることから馬屋的機能も考慮しなければならないであろう。

ST 252 (PL. 5-(3), Fig. 12-(2), Ch. 13) —— T47区検出。南北282cm、東西257cm、深さ56cmの規模を有し、東壁中央部に舌状スロープの張り出しがありその方向はN-86°-Eである。柱穴配置は基本的にPit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 5、Pit 6、Pit 7の6柱穴による1間×2間であるが、Pit 4、Pit 8、Pit 9は出入口等に付属する補助柱穴とみることができ。前者は深さ50cm以上であるのに対し、後者は10~20cmと浅い。出入口部分の両端には壁板を添えたと思われる細い溝があり床面中央部には薄い灰の分布が認められた。重複する遺構には、S B38 (旧)〔重複している柱穴の部分の礎石が抜き取られている〕、S X 229(旧)、S X 255 (旧)、S X 256 (旧)があり、覆土堆積は単純層である。覆土からの出土遺物としては、青磁碗、土師器坏、不明銅製品、不明鉄製品、鉄釘、天聖元宝、骨片等があり重複関係を考慮に入れても16世紀代の廃絶の可能性も高い。

ST 253 (Fig. 12-(3), Ch. 14) —— O45区検出。西側半分未調査のため全形は知り得ないが、南北 330cm、深さ62cmの規模を有する。柱穴配置は東壁側で2間確認され (Pit 1、Pit 3、Pit 5)、壁溝が廻っている。柱穴の掘り方は深さ50cm前後で壁面に入るような状態で掘られているものもある。重複する遺構にはS E 106 (新)とS D97 (新)があり層序関係から本遺構がもっとも古い。覆土からの出土遺物としては、端反白磁皿と青磁碗、鉄滓があり16世紀代には廃絶したと考えられる。

ST 254 (PL. 6-(1), Fig. 13, Ch. 15) —— T・U47・48区検出。一辺 290cmの正方形プランを呈し、深さ68cmの規模を有する。北壁中央に舌状スロープの張り出しを有しその方向はN-12.5°-Wである。柱穴配置は深さ60cm前後のPit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 5、Pit 6が主柱穴で2間×1間の配置、深さ23cm以下のPit 4、Pit 7、Pit 9は出入口等に付属する補助柱穴と考えられる。床面中央には薄い灰層の分布があり、張り出し部分には浅い壁溝が認められる。重複する遺構にはS T 262 (旧)とS E 128 (新旧不明)があり、覆土からの出土遺物として青磁碗、青磁稜花皿、染付碗、青白磁壺等の陶磁片、播鉢、瓦器、内耳土器(Fig. 48-281)の破片、鉄釘、祥符通宝がみられた。16世紀代の廃絶と考えられる。

ST 256 (PL. 6-(2), Fig.14-(1), Ch.16) —— T・U45区検出。掘り方プランは正方形を呈し、一辺490cm前後、深さ32cmの規模を有するが柱穴配置をみると若干縮小する可能性がある。つまり柱穴配置は、深さ30cm以上のPit 1、Pit 4、Pit 7、Pit 11が四隅に位置し主柱穴をなし、深さ24cm以下のPit 2・3・5・6・8・9・10・12・13・14を補助柱穴とみなすことができる。そのため、北壁3間、西壁3間、南壁4間、東壁4間という不整合な柱穴配置となっているらしく、北壁と西壁が柱穴列と離れて位置していることは、本遺構の構造的特徴となっている。

Ch. 15

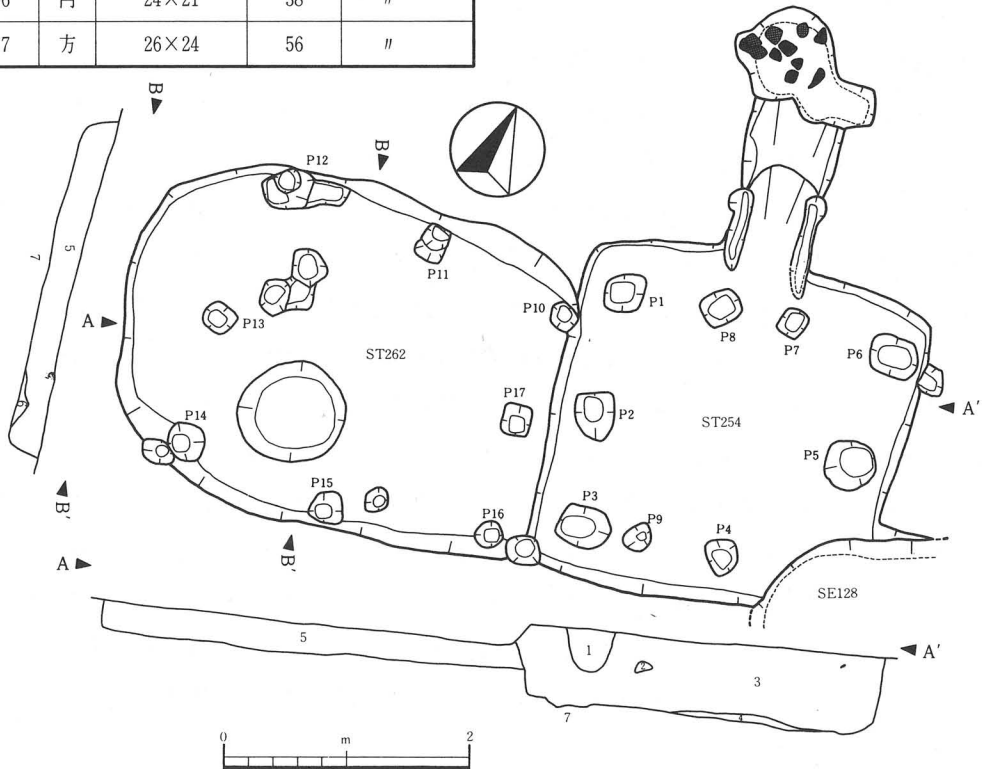
(a) ST254・ST262 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	32×30	60	S T 254
2	不	40×33	58	"
3	不	42×33	61	"
4	不	30×25	12	"
5	円	42×42	58	"
6	方	41×32	66	"
7	方	23×21	23	"
8	方	32×27	16	"
9	円	24×22	10	"
10	不	22×20	39	S T 262
11	不	22×20	52	抜き取り痕 S T 262
12	方	21×17	61	S T 262
13	方	26×24	53	"
14	円	31×31	50	"
15	不	29×26	47	"
16	円	24×21	38	"
17	方	26×24	56	"

(b) ST254・ST262 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{6}$)が大粒状に1%と明黄色砂質土(7.5Y R $\frac{5}{6}$)が大粒状に3%と灰白色パミス(7.5Y R $\frac{3}{1}$)が1%、炭化物を1%含む。
2	黒褐色灰(10Y R $\frac{3}{1}$)。しまりなし。
3	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{6}$)が大粒状に5%と明褐色砂質土(7.5Y R $\frac{5}{6}$)が大粒状に7%と炭化物を3%含む。
4	黒褐色灰(10Y R $\frac{3}{1}$)と灰色灰(5Y $\frac{5}{1}$)の混層。
5	黒褐色土(5Y R $\frac{2}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{6}$)が大粒状に3%と黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{6}$)が中粒状に2%含む。西側に炭化物を2%含む。
6	黒褐色土(5Y R $\frac{2}{2}$)と灰黄褐色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層。
7	地山、黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{6}$)。

Fig.13 竪穴建物跡実測図3



る。スクリーントーン部分の柱穴は本遺構と直接関連しない柱穴と考えられ、それらの重複によって覆土推積はかなり攪乱されている。覆土からの出土遺物として、不明鉄製品が1点だけみられ、廃絶時期は不明である。重複する遺構としてS T 257（新）とS D 81（旧）が認められる。

S T 257（Fig.14-(1)、Ch.16）——U45区検出。長軸380cm、短軸225cm、深さ16cmの規模を有し、隅丸に近い長方形プランを呈する。柱穴配置はPit 15・Pit 16の2コで棟通りをささえる位置にあり他の柱穴は形状・深さから本遺構には伴わないと考えられる。覆土推積は床面が軟弱なために若干攪乱状態を呈するが平均的に広がっている。覆土からの出土遺物として、不明鉄製品、鉄釘、開元通宝があり、廃絶時期はS T 256より新しいとしか言えない。

Ch. 16

(a) ST256・ST257 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	25×23	46	S T 256
2	方	25×21	20	"
3	方	23×21	15	"
4	方	28×26	34	"
5	方	18×16	20	"
6	円	23×23	23	"
7	方	30×29	36	"
8	方	23×22	24	"
9	方	24×22	15	"
10	方	27×25	15	"
11	円	40×30	42	"
12	方	34×29	19	"
13	方	27×20	28	"
14	方	23×17	17	"
15	方	32×27	39	S T 257
16	円	32×29	37	"

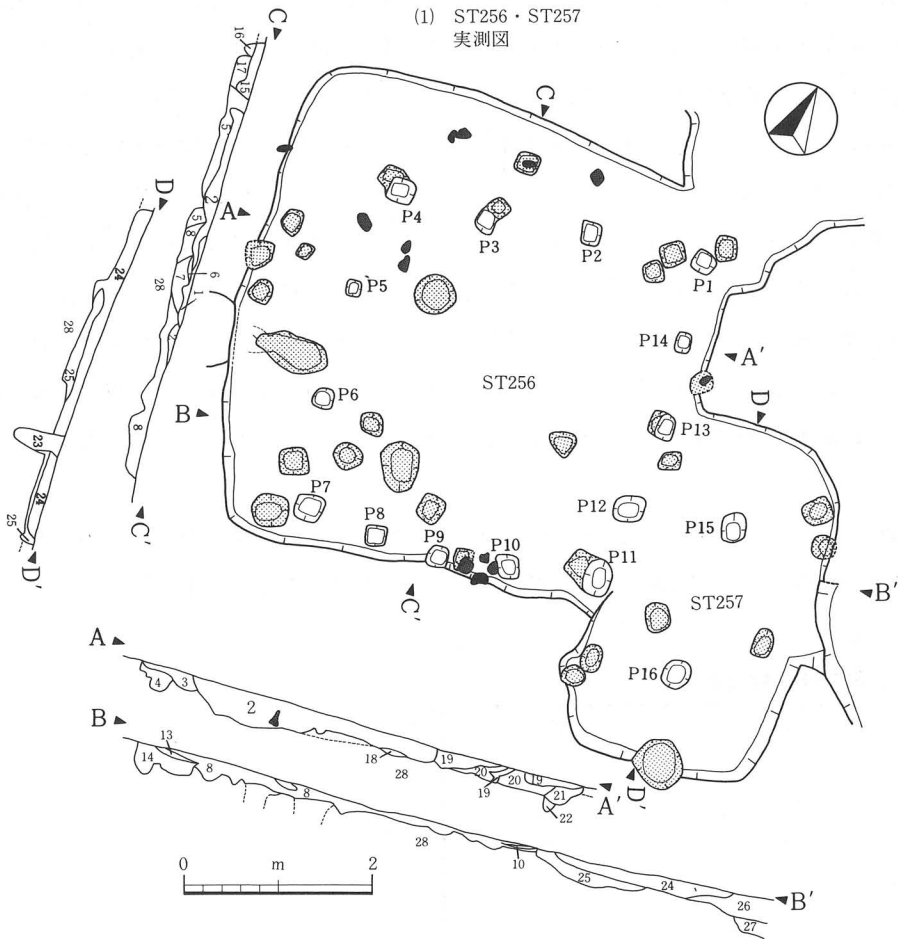
S T 260（P L. 6-(3)、Fig.14-(2)、Ch.17）——V46・47区検出。長軸444cm、短軸157cm、深さ18cmの規模を有し、東側隅がやや丸味をもつ長方形プランである。柱穴配置は明確ではないが、Pit 1、Pit 3が壁面隅柱、Pit 2、Pit 5、Pit 8等が棟通の柱と考えることもできる。床面直上からは、大小18個の川原石が検出されているが、廃棄状態の出土であり、S D 83（旧）とだけ重複している。覆土からの出土遺物としては青磁碗、瀬戸鉄釉香炉、不明銅製品、

(b) S T 256・S T 257 覆土層序注記表

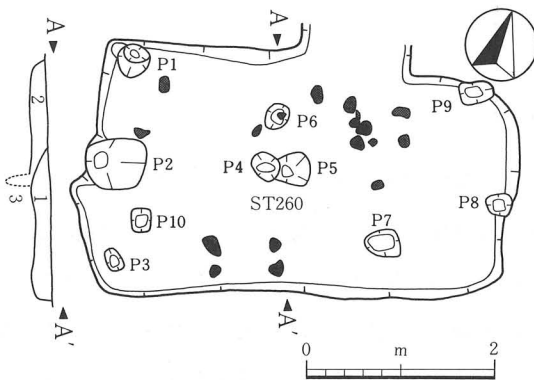
層序No.	特 徴
1	にぶい橙色焼土(5YR6/4)。
2	黒褐色土(7.5YR3/1)ににぶい黄橙色粘土(10YR6/4)を1%と明褐色土(7.5YR5/8)を1%と黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を7%と黒色灰(7.5YR1.7/1)を15%と灰白色灰(7.5YR8/2)を5%と礫を30%含む。
3	黒褐色土(5YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を20%含む。
4	黒褐色土(5YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を40%含む。
5	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を小ブロック状に40%含む。
6	黒色灰(7.5YR1.7/1)。
7	黒褐色土(7.5YR3/1)と黒色灰(7.5YR1.7/1)の混層ににぶい橙色焼土(5YR6/4)を3%含む。
8	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を小ブロック状に7%含む。
9	にぶい黄橙色粘土(10YR6/3)。
10	明黄褐色砂質土(10YR6/8)。
11	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(10YR7/8)が30%混入する。
12	黒褐色土(5YR3/1)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を1%含む。
13	明赤褐色焼土(5YR5/6)。
14	黒褐色土(5YR2/1)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を中ブロック状に30%と明赤褐色焼土(5YR5/6)を3%含む。
15	黒褐色土(7.5YR3/1)に灰白色灰(7.5YR8/2)を30%含む混層ににぶい黄橙色粘土(10YR6/3)を3%含む。
16	暗褐色土(10YR3/3)と褐色砂質土(10YR4/4)の混層。

層序No.	特 徴
17	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を15%含む。
18	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を70%含む混層に褐色砂質土(7.5YR4/3)を小ブロック状に10%含む。
19	黒褐色土(7.5YR3/1)ににぶい黄橙色粘土(10YR6/4)を1%と明褐色焼土(7.5YR5/8)を1%と黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を7%と黒色灰(7.5YR1.7/1)を15%と灰白色灰(7.5YR8/2)を5%と礫を30%含む。しまりなし。
20	黒褐色土(7.5YR3/1)に橙色砂質土(7.5YR6/8)を小ブロック状に30%と黄橙色砂質土(10YR7/8)を中ブロック状に10%含む。しまりあり。
21	黒褐色土(7.5YR3/1)に黒色灰(7.5YR2/1)を30%と黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を小ブロック状に20%含む。
22	黒色灰(7.5YR2/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を小ブロック状に20%含む。
23	黒褐色土(7.5YR3/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を10%含む。しまりなし。
24	黒色土(10YR2/1)に黄橙色砂質土(7.5YR7/8)を5%含む。
25	明黄褐色砂質土(10YR6/8)に黄橙色砂質土(10YR7/8)を20%と黒褐色土(7.5YR3/1)を部分的に30%含む。
26	黒褐色土(5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を小ブロック状に3%とにぶい黄橙色粘土(10YR7/3)を1%と黒褐色灰(2.5Y3/1)を10%含む。
27	黒褐色土(5YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を中ブロック状に95%含む。
28	地山、黄褐色砂質土(10YR6/8)。

Fig.14 竪穴建物跡実測図 4



(2) ST260実測図



Ch.17 (a) ST260柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	28×20	18	抜き取り痕
2	方	67×59	48	
3	方	25×16	12	
4	不	33×27	23	
5	不	40×37	25	
6	不	30×23	12	
7	不	37×31	23	
8	方	27×25	22	
9	不	37×23	18	
10	方	26×21	11	

(b) ST260覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒色土(10Y R1.7/1)に灰黄褐色灰(10Y R $\frac{5}{2}$)を10%と極小～小塊状の褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{2}$)と極小の炭化物を1%づつ含む。
2	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～小塊状の褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{2}$)を5%と灰黄褐色灰(10Y R $\frac{5}{2}$)を2%と炭化物を1%含む。
3	地山、黄褐色砂質土(10Y R $\frac{5}{2}$)。

銅滓があり、15世紀～16世紀の廃絶と推定される。

ST261 (PL. 7-(1), Fig.15, Ch. 18) ——U47区検出。東西長軸380cm、南北短軸305cm、深さ40cmの規模を有し、東壁南側に方形スロープの張り出しがありその方向はN-84°-Eである。柱穴配置は、各壁に添って2間×2間(Pit 1～Pit 8)であり、出入口部分にPit 9・Pit 10の2個が並んでいる。柱穴は隅の部分がやや深く60cm程度、辺中央が40～50cm、出入口部分が30～40cmを測り、しっかりした掘り込みを呈する。柱穴の検出時点ではすべての柱穴で外側に黄褐色砂質上で柱痕部分に暗褐色土が入っていることを確認している。また柱痕を確認できなかった柱穴(Pit 4からPit 8の間に並ぶ柱穴)も補助的に使用した可能性がある。覆土堆積は単一層であるが、床面直上に広く灰を含む層の分布がみられる。重複する遺構としてSE 103(新旧不明)、SX 259(新)、SF 63(新)、SX 240(旧)があり、覆土からの出土遺物として越前甕、越前播鉢、青磁碗、小札、鉄釘、不明鉄製品がある。廃絶年代は16世紀と推定される。

ST262 (PL. 7-(2), Fig.13, Ch.15) ——T47区検出。東西長軸(370)cm、南北短軸280cm、深さ30cmの規模を有し、西側がやや丸味をもつ不整形プランを呈する。柱穴配置は、南北が

Ch. 18

(a) ST216 柱穴計測表

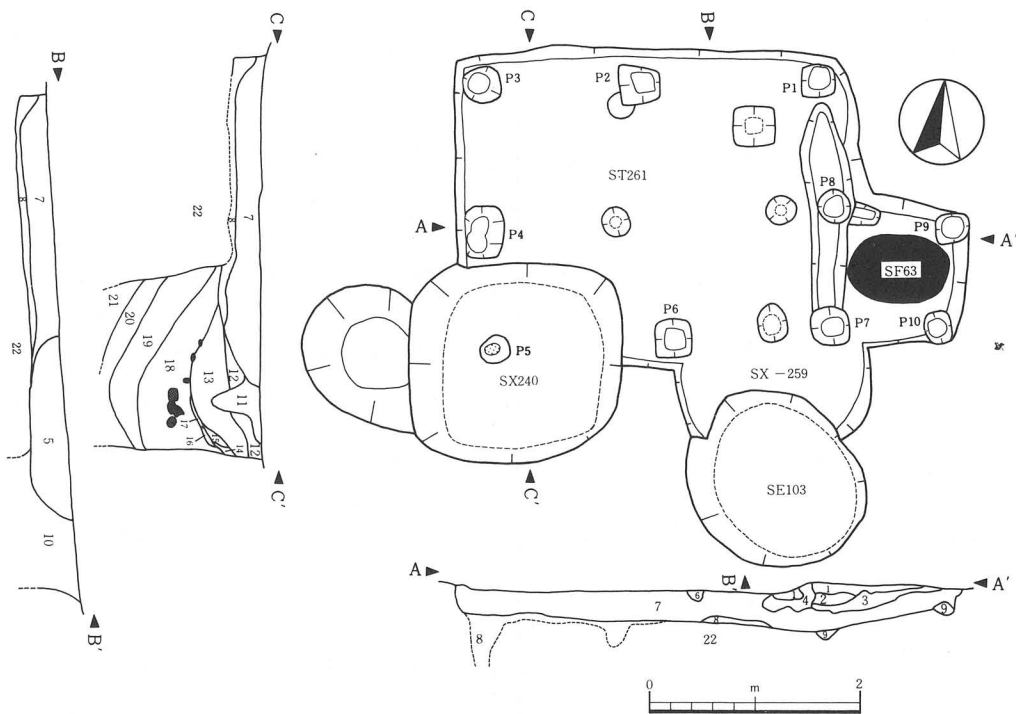
Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	方	33×31	63	
2	方	38×36	46	
3	円	36×35	64	
4	不	50×34	61	
5	円	29×26	—	柱痕あり
6	方	35×37	47	
7	方	37×37	53	
8	円	30×32	42	
9	方	33×28	41	
10	方	31×26	33	

壁に接してまた東西が壁からやや離れて2間×2間に位置しPit 10～Pit 17がそれである。柱穴の掘り方は、径20cm前後と小型であるが深さは約40～60cmと一定している。覆土堆積は単一層であり、床面直上の一部に灰の分布もみられる。出土遺物は金属製品以外なく、床面直上から鋏状鉄製品(Fig.50-313)、刀(Fig.49-303)、鉄釘および銭貨九枚が溶解状態になって付着したもの、覆土から環状鉄製品(Fig.50-311)、鉄釘、不明銅製品、聖宋元宝が出

(b) ST261(SX240・SF53・SE103)覆土層序注記表

層序No	特 徴	層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R2/2)に明黄褐色砂質土(10Y R7/6)と極小塊状の炭化物を1%づつ含む。	10	黒色土(10Y R2/1)に極小～小塊状の炭化物を1%含む。
2	褐色焼土(7.5Y R4/4)に橙色焼土(7.5Y R7/6)を3%と黒褐色土(10Y R2/2)を部分的に10%含む。	11	黒色土(10Y R2/1)に極小塊状の黄褐色砂質土(10Y R5/6)とにふい黄橙色灰(10Y R7/2)と褐色灰(10Y R4/1)と炭化物を1%含む。
3	橙色焼土(7.5Y R7/6)ににふい褐色焼土(7.5Y R5/4)を10%とにふい黄橙色灰(10Y R7/2)を3%と部分的に炭化物の塊を7%含む。	12	黒色土(10Y R2/1)ににふい黄橙色灰(10Y R7/2)を10%と褐色灰(10Y R4/1)を3%とにふい褐色焼土(10Y R5/4)と極小～小塊状の炭化物を1%づつ含む。
4	黒褐色土(10Y R3/2)に橙色焼土(7.5Y R7/6)を3%とにふい褐色焼土(7.5Y R5/4)を5%と極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R5/6)を2%と褐色灰(10Y R5/1)を1%含む。	13	褐色灰(10Y R4/1)に小粒状のにふい褐色焼土(10Y R5/4)を1%と小塊状の炭化物を2%含む。
5	黒褐色土(10Y R3/2)に極小～中塊状の黄褐色砂質土(10Y R5/6)を10%含む。	14	黒褐色土(7.5Y R2/2)。
6	にふい黄橙色粘土(10Y R6/3)と黒褐色土(10Y R2/2)の混層に小塊状の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を3%と小塊状の炭化物を1%含む。しまりあり。	15	黒色土(7.5Y R2/1)。
7	黒褐色土(10Y R2/2)に極小～中塊状の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を10%と褐色灰(10Y R5/1)を1%と極小～小塊状の炭化物を1%含む。	16	黒色土(7.5Y R2/1)に褐色灰(10Y R4/1)を2%含む。
8	黒色土(10Y R2/1)に褐色灰(10Y R6/1)を微粒子状に含み、極小～小塊状の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を2%と極小～小塊状の炭化物を1%含む。	17	にふい黄橙色灰(10Y R7/2)。
9	明黄褐色砂質土(10Y R6/6)に黒褐色土(10Y R2/2)を5%含む。	18	黒色土(7.5Y R1.7/1)。
		19	黒色土(7.5Y R1.7/1)に極大塊状のにふい黄橙色砂質土(10Y R7/3)を7%と黄褐色砂質土(10Y R5/6)を3%と浅黄色粘土(2.5Y 7/3)と極小～小塊状の炭化物を1%づつ含む。
		20	黒色土(7.5Y R1.7/1)とにふい黄褐色砂質土(10Y R5/4)の混層に炭化物を1%含む。
		21	黒色土(7.5Y R1.7/1)に小塊状のにふい黄橙色砂質土(10Y R7/3)を5%と黄褐色砂質土(10Y R5/6)を3%含む。
		22	地山、黄褐色砂質土(10Y R5/6)。

Fig. 15 竪穴建物跡実測図 5

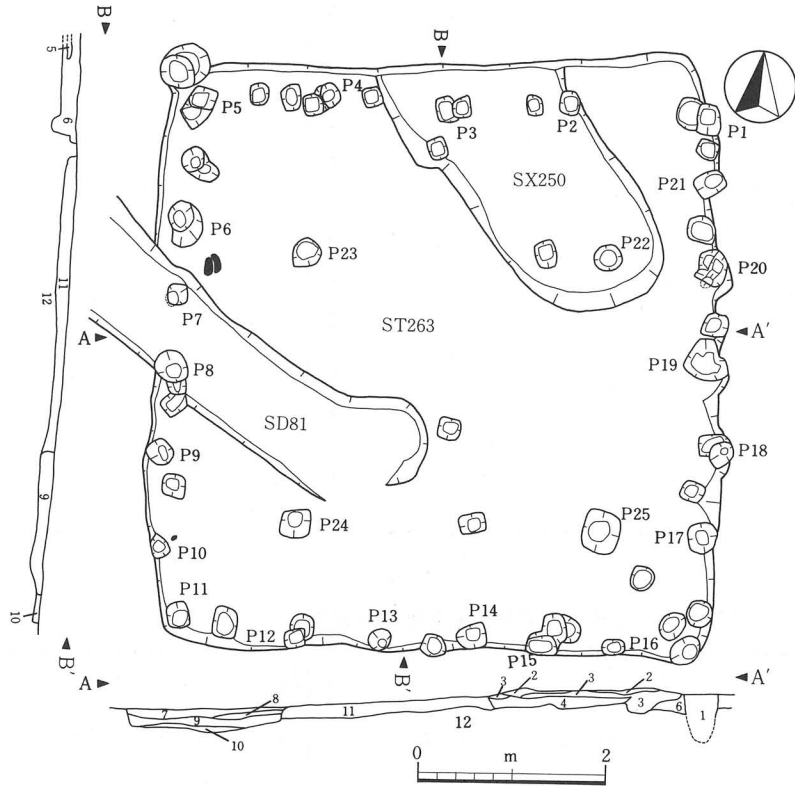


土している。床面に存在する径85cm深さ100cmの円形貯蔵穴状ピットも考慮すると工房的性格の強い遺構である。廃絶時期は重複するST 354より古いことから16世紀代以前と推定される。**ST 263** (PL. 7-(3), Fig. 16-(1), Ch. 19)——U46・47区検出。南北長軸626cm、東西短軸602cmのほぼ正方形プランを呈し、深さは15cmと浅い。柱穴配置は、ほぼ各隅の対角線上に位置するPit 22、Pit 23、Pit 24、Pit 25の四個が深さもすべて55cm以上あり支柱穴と考えられ、壁面に添って連なるPit 1～Pit 21が補助柱穴とみられる。Pit Noを付さなかった柱穴も補助柱穴となる可能性はあるが深さ20cm以下のものを切り捨てた結果であり、明確な根拠はない。重複する遺構としては、SD 81とSX 250があり、層序関係を見るといずれに対しても本遺構が古い。覆土からの出土遺物としては、鉄鍬、鉄滓、鉄釘、羽口等のみであり、重複関係を考慮すると城館期の遺構か、平安時代まで上る遺構であるか早断できない状況にある。

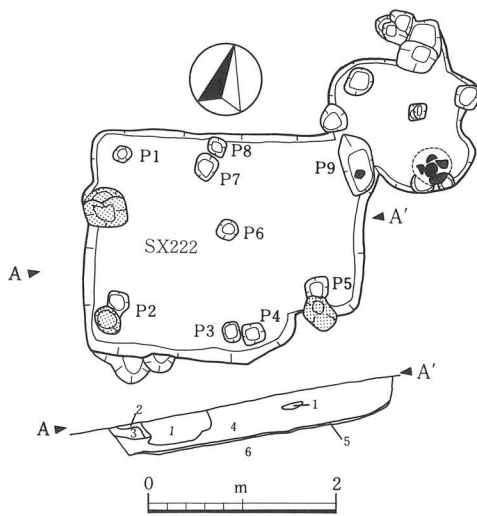
SX 206 (PL. 8-(1), Fig. 17-(1), Ch. 21)——PQ・47区検出。長軸(400)cm、短軸(340)cm、深さ35cmの不整形を呈する。柱穴配置は明確とはいえないがPit 1～Pit 10のうち壁際に2間×2間で並ぶとみられる。柱穴の掘り方も浅く、覆土全域に灰層がみられることから廃棄の場所とも考えたが、一応竪穴建物跡の項目述べておく。覆土からの出土遺物には、青磁篋描蓮弁文碗 (Fig. 41-157) 青磁盤、瀬戸灰釉浅鉢、白磁端反皿、同内湾皿、越前甕、美濃

Fig.16 竖穴建物跡実測図6

(1) ST263・SX250・SD81実測図



(2) SX222・SX258実測図



Ch.20 (a) SX222柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	20×17	13	
2	不	23×20	11	
3	方	21×18	15	
4	方	24×21	8	
5	不	26×21	13	
6	方	22×20	21	
7	方	31×25	9	
8	方	19×18	19	
9	不	65×34	12	

(b) SX222覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10Y R%)に褐灰色灰(7.5Y R%)が厚い板状に20%と黒褐色灰(10Y R%)が10%と黄褐色砂質土(10Y R%)が大粒状に3%とにふい橙色粘土(7.5Y R%)が極大粒状に1%と炭化物が中粒状に7%含まれる。しまりあり。
2	黒褐色土(5Y R%)に中粒状の炭化物が2%含まれる。
3	黒褐色土(5Y R%)に橙色焼土(5Y R%)が厚い板状に80%含む。しまりなし。
4	黒褐色土(5Y R%)に極大～極小の黄褐色砂質土(10Y R%)が10%と、にふい橙色粘土(7.5Y R%)が極大粒状に1%と中粒状の炭化物が7%含まれる。しまりあり。
5	褐灰色灰(7.5Y R%)。
6	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

Ch. 19

(a) ST263柱穴計測表

PitNO	形 状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	方	33×25	39	
2	方	25×22	22	
3	方	22×20	34	
4	不	25×19	34	
5	方	28×23	47	
6	円	28×27	35	抜き取り痕
7	方	23×23	56	
8	円	37×33	44	
9	不	29×26	35	
10	不	23×20	39	
11	方	28×24	40	
12	方	22×20	34	
13	円	29×23	30	

PitNO	形 状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
14	不	32×26	38	
15	不	34×22	36	
16	円	36×28	37	
17	方	34×31	31	
18	不	28×24	33	
19	不	47×45	29	
20	不	28×20	27	
21	方	33×26	32	
22	円	30×28	67	
23	不	30×30	56	
24	方	32×30	58	
25	方	45×40	60	

(b) ST263(S X 250・SD81)覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土(10Y R1.7/1)と黄褐色砂質土(10Y R5/6)の混層に小～中塊状のふい黄橙色粘土(10Y R7/4)を10%含む。
2	黒色土(10Y R1.7/1)に浅黄色灰(2.5Y7/3)と明褐色焼土(7.5Y R5/8)を7%含む。
3	にふい黄褐色焼土(10Y R5/4)と明褐色焼土(7.5Y R5/8)と暗褐色焼土(7.5Y R3/4)の混層に小～中塊状のふい黄橙色粘土(10Y R7/4)を10%と褐灰色灰(10Y R4/1)を2%含む。
4	黒色土(10Y R1.7/1)に小塊状の明褐色焼土(7.5Y R5/8)を3%と小塊状のふい黄橙色粘土(10Y R7/4)を2%と褐色砂質土(10Y R4/6)を1%含む。
5	灰黄褐色灰(10Y R4/2)。

層序No	特 徴
6	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～小塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)を3%と橙色焼土(7.5Y R6/8)と炭化物を1%づつ含む。
7	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～小塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)を5%含む。
8	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～中塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)を40%含む。
9	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～小塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)を1%含む。
10	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～中塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)の混層。
11	黒色土(10Y R1.7/1)に極小～中塊状の褐色砂質土(10Y R4/6)と暗褐色砂質土(10Y R3/3)の混層。
12	地山、褐色砂質土(10Y R4/6)。

瀬戸灰釉糸切底皿 (Fig. 45-220) 等の陶磁器、不明鉄製品、不明銅製品、鉄釘、鉄滓、永楽通宝、無文銭、硯、漆器被膜があり、15世紀～16世紀前半にて廃絶したと考えられる。

S X 212 (PL. 8-1, Fig. 17-1, Ch. 21) — 西側が S E 90・S X 211に切られているため規模は明確でないが一辺250cm前後の方形の掘り込みを呈すると考えられる。Pit 16、Pit 11 Pit 12等が本遺構に伴う柱穴と考えられるが配置は明確でない。覆土からの出土遺物には、青磁無文碗、白磁端反皿、染付碗、瀬戸灰釉香炉、小柄、小札、鉄釘、鉄滓、不明銅製品、元豊通宝等があり、16世紀代の廃絶と考えられる。よって重複する S X 206は本遺構より古い可能性が高い。

S X 213 (P L. 8-2, Fig. 17-2, Ch. 22) — R 46区検出。長軸300cm、短軸150cmの長方形プランを呈し、深さ40cmの小竪穴である。床面各隅に浅い柱穴を配し、南辺中央のPit 5も加え何らかの上部構造が存在したことを推測できる遺構である。Pit 6～Pit 9については本遺構に伴わない柱穴と考えられる。覆土は、炭化物と粘土を若干含む単一層であり、床面から覆土にかけて全域で遺物の出土がみられた。特に、銭貨、銅製品、鉄砲玉、漆器等に特色があり、極めて特殊な遺構と考えられる。出土遺物については、本章後半で詳述する。

Ch. 21

(b) S X 206・212覆土層序注記表

層序%	特 徴	層序%	特 徴
1	黒褐色土(10Y R3/2)に極小～中塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を約6%、小粒の灰白色の灰(N 8)を3%ほど極小塊の炭化物を2%ほど含む。	7	黒褐色土(Y R3/2)に極小～小塊の黄褐色砂質土(10Y R5/6)と明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を5%極小塊の炭化物と灰白色の灰(7.5Y R8/1)をそれぞれ1%褐灰色の灰(10Y R5/1)の小粒を2%含む。
2	黒褐色土(10Y R3/2)に小～大塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を40%ほど、小粒の灰白色の灰(N 8)を約1%含む。	8	褐灰色の灰(10Y R6/1)に炭化物を1%含む。
3	灰白色の灰(N 8)。	9	黒褐色土(10Y R2/2)に褐灰色の灰(10Y R6/1)を10%、極小塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を5%、極小塊の炭化物を1%くらい含む。
4	黒褐色土(10Y R3/2)に小～大塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を20%ほど、小粒の灰白色の灰(N 8)と極小塊の炭化物を1%含む。	10	黒褐色土(10Y R2/2)に褐灰色の灰(10Y R5/1)を7%、極小～小塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を8%、極小塊の炭化物を5%、白色パミス(White Pans)を2%ほど含む。
5	明黄褐色砂質土(10Y R6/6)	11	黒褐色土(10Y R3/2)と灰白色の灰(10Y R8/1)と褐灰色の灰(10Y R5/1)の互層になっている。
6	黒褐色土(10Y R3/2)に小塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を5%褐色の灰(10Y R6/1)を白色パミスと小塊の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。	12	黒褐色土(10Y R3/2)と灰色の灰(N 6)の混層に極小塊の炭化物を1%含む。

属序号	特 徴
13	黒褐色土(10Y R2/2)と灰白色の灰(10Y R8/1)と灰色の灰(N 6)の混層に極小塊の炭化物と黄褐色土(10Y R5/8)をそれぞれ1%ずつ含む。
14	灰白色の灰(10Y R7/1)と暗褐色土(10Y R3/3)の混層に極小塊の炭化物を1%含む。
15	灰白色の灰(10Y R7/1)と暗褐色土(10Y R3/3)と灰色の灰(N 6)が互層状態になっている特に灰色の灰の幅が広い。
16	灰白色の灰(10Y R8/1)。
17	黒褐色土(10Y R3/2)に小～中塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/8)を8%灰色の灰(N 6)を3%、極小塊の炭化物を1%、灰白色の灰(10Y R8/1)も1%含む。
18	黒色土(10Y R2/1)に褐灰色の灰(10Y R4/1)が帯状に混入し、極小の炭化物を1%ほど含む。
19	褐色砂質土(10Y R4/6)に黒色土(10Y R2/1)を10%ほど含む。
20	灰黄褐色土(10Y R4/2)に小粒の褐灰色の灰(10Y R4/1)を5%、灰白色の灰(10Y R7/1)を3%小塊の明黄褐色砂質土(10Y R7/6)を1%極小塊の炭化物も1%含む。
21	暗褐色土(10Y R3/3)に灰色の灰(N6)を25%ほど小塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/8)と炭化物を1%含む。
22	黒褐色土(10Y R3/2)と灰白色の灰(N6)の混層に灰白色の灰(10Y R8/1)を帯状に含み、極小の炭化物を1%含む。

属序号	特 徴
23	明黄褐色砂質土(10Y R7/6)と灰白色の灰(N 6)と暗褐色土(10Y R3/3)の混層。
24	灰黄褐色土(10Y R4/2)と灰白色の灰(N 6)と灰白色の灰(10Y R8/1)の混層に極小塊の炭化物を1%含む。
25	黒褐色土(10Y R3/2)に小塊の明黄褐色土(10Y R6/8)を5%、小～中塊の炭化物を3%ほど白色パミス1%くらい含む。
26	黒褐色土(10Y R3/2)と褐灰色の灰(10Y R5/1)と灰白色の灰(10Y R7/1)の互層に小粒の炭化物を1%ほど含む。
27	褐灰色の灰(10Y R6/1)。
28	明黄褐色焼土(10Y R7/6)に褐灰色の灰(10Y R5/1)を10%小塊の明黄褐色砂質土(10Y R7/6)を3%極小塊の炭化物を1%含む。
29	黒褐色土(10Y R2/2)に褐灰色の灰(10Y R5/1)を5%、灰白色の灰(10Y R7/1)を帯状に含み、小塊の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を3%、極小塊の炭化物を1%含む。
30	黒褐色土(10Y R3/2)に極小粒の明黄褐色砂質土(10Y R6/6)を2%極小塊の炭化物を2%、白色パミス1%含む。
31	灰白色の灰(10Y R8/1)。
32	黒色土(10Y R2/1)に小塊の明黄褐色砂質土(10Y R7/6)を5%褐灰色の灰(10Y R4/1)を5%、極小塊の炭化物を1%含む。
33	地山、黄褐色砂質土(10Y R6/8)。

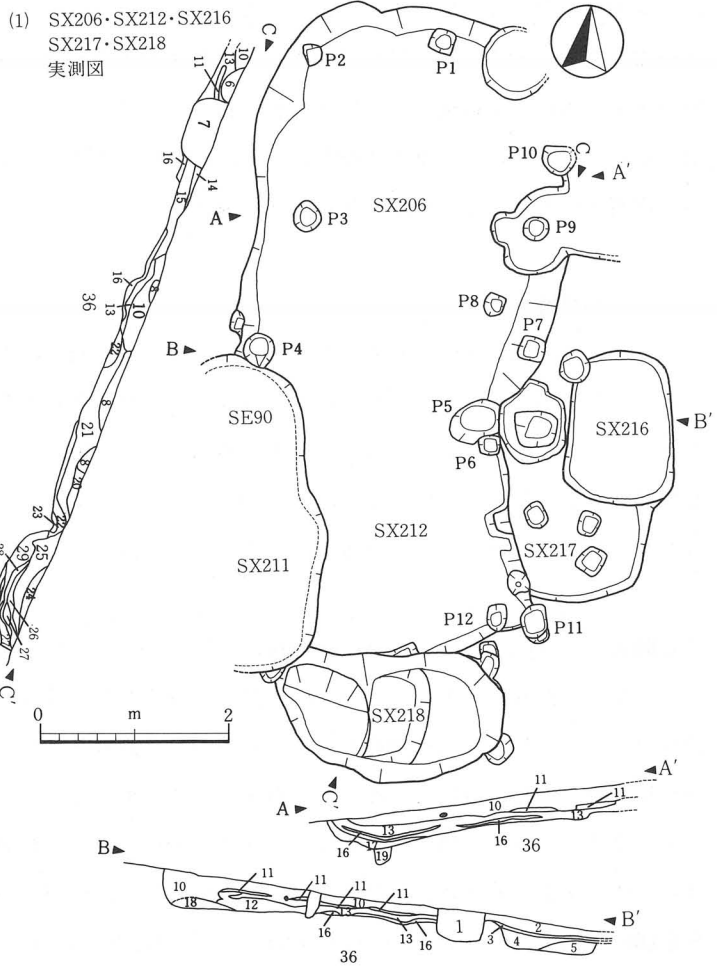
Fig.17 竪穴建物跡実測図 7

Ch.21 (a) SX206・212柱穴計測表

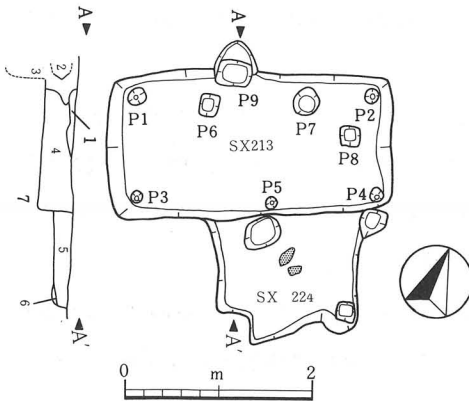
Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(m)	備考
1	方	26×24	18	
2	不	23×19	7	
3	方	31×30	20	
4	円	34×32	10	
5	不	50×39	9	
6	方	22×19	16	
7	方	28×26	17	
8	方	24×21	24	
9	円	29×26	9	
10	不	35×32	14	
11	方	34×27	10	
12	方	28×21	5	

Ch.22 (a) SX213・224柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(m)	備考
1	円	20×17	19	
2	円	14×12	9	
3	円	13×13	24	
4	円	15×14	20	
5	円	13×12	25	
6	方	23×21	20	
7	不	30×30	41	
8	方	22×21	22	
9	方	33×26	42	



(2) SX213・SX224実測図



Ch.22 (b) SX213・224覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R ₂)に小塊のふい黄橙色粘土(10Y R ₄)と明黄褐色砂質土(10Y R ₆)と炭化物をそれぞれ3%くらいずつ含む。
2	ふい黄橙色粘土(10Y R ₄)と褐色粘土(7.5Y R ₄)と橙色の焼土(7.5Y R ₆)と灰白色灰(10Y R ₈)の混層に小塊の炭化物を1%含む。しまりあり。
3	黒色土(10Y R ₂)に明黄褐色砂質土(10Y R ₆)の小粒を2%炭化物を1%含む。
4	黒褐色土(10Y R ₂)に明黄褐色砂質土(10Y R ₆)を極小～中塊状に30%ほどと小塊の炭化物を5%、部分的にふい黄橙色粘土(10Y R ₄)を含む。
5	黒褐色土(10Y R ₂)に極小～小塊状に明黄褐色砂質土(10Y R ₆)を15%くらいと極小塊の炭化物を1%含む。
6	黄褐色砂質土(10Y R ₆)。
7	地山、明黄褐色砂質土(10Y R ₆)。

S X 222 (P L. 8-(3)、Fig. 16-(2)、Ch. 20) —— Q 45・46区検出。東西長軸 303 cm、南北短軸 243 cm、深さ 42 cm の規模を有するが、東側については張り出し状の形態を呈する。柱穴配置は、間隔は一定しないものの壁に添って並び Pit 1～Pit 9 は Pit 6 を除いて深さ 20 cm 以下の浅い掘り方を呈する。覆土堆積は粘土と炭化物を若干含む単一層であり、床面直上に灰が広く分布する。重複する遺構としては S B 42 (新・スクリーントーンの柱穴)、S X 258 (新旧不明) があり、覆土からの出土遺物として青磁盤、見込にスタンプ文を有する青磁碗、鉄釘、鉄鏃、漆器等があり、15世紀から16世紀代の廃絶と考えられる。

D 井戸跡

井戸跡には内部に木杵を有するものと、素掘りの二形態がある。木杵を検出した井戸跡は S E 82 と S E 86 の二基だけであり、底まで掘り下げた井戸跡が少なかったため素掘りなのか木杵を有するものか不明なものも多い。以下、検出した井戸跡の概略を説明する。

S E 80 (P L. 10-(1)(2)(3)、Fig. 18-(1)、Ch. 23) —— 当初一基の井戸跡であると思い掘り下げたが、掘り下げ途中で二基の重複であることがわかり、S E 80 a と S E 80 b の二基に分けた。

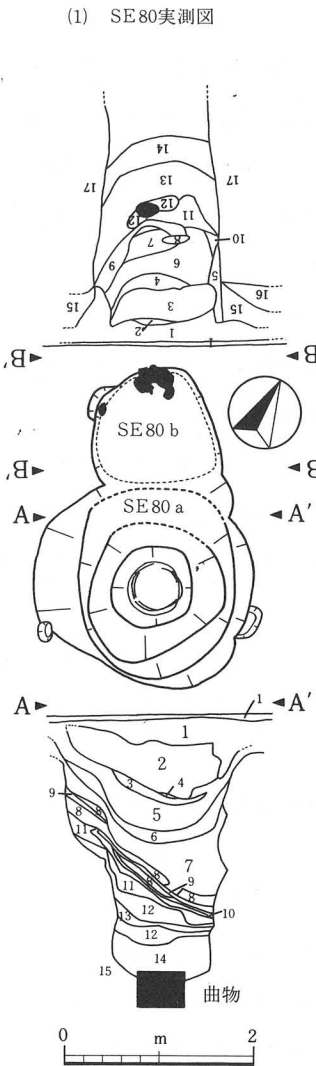
S E 80 a —— S 45区検出。径 260 cm 前後の円形プランを呈し、深さ 297 cm である。木杵は検出されなかったが底面中央部から径 52 cm、高さ 41 cm の曲物(井筒)が正立状態で出土した。曲物は底がないことから水溜め機能を有した井筒として設置された可能性が極めて高い。覆土は自然堆積状態を呈し、遺物は 1 層から 10 層までの間に集中している。主な出土遺物として、青磁碗・同稜花皿、白磁八角小坏、染付端反り皿、瀬戸天目碗、越前甕、かわらけ (Fig. 47-273)、鉄釘、咸淳元宝、無文銭、茶臼、漆器被膜等があり、16世紀代の廃絶と推定される。

S E 80 b —— R 45区検出。径 150 cm の円形プランで深さ 280 cm まで掘り下げた。素掘りと考えられる。覆土堆積は自然堆積の状況を呈し、遺物は覆土全域から出土している。主な出土遺物には、青磁碗、越前甕、珠洲系播鉢、唐津皿等があり、16世紀代の廃絶と考えられるが、S E 80 a との新旧関係は不明である。

S E 81 (Fig. 18-(2)、Ch. 24) —— 一辺 160 cm の方形プランを呈し、100 cm まで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、遺物は覆土全域から出土している。主な出土遺物には、絵唐津皿唐津小碗 (Fig. 45-239・240)、染付皿、美濃灰釉碗・同ヒダ皿 (Fig. 45-226)・同天目碗、青磁皿、鉄釘、銅管、小札等があり、16世紀後半以後の廃絶と推定される。

S E 82 (P L. 9-(1)(2)、Fig. 19-(1)、Ch. 25) —— P 47区検出。南北 274 cm、東西 230 cm の隅丸方形プランを呈し、深さ約 450 cm を測る。深さ 220 cm より下から隅柱横棧形の木杵が検出された。隅柱は底に礎石を置いて設置され、約 60 cm 間隔の横棧を杵・杵穴で組み立て、一辺の幅 120 cm 前

Fig.18 井戸跡実測図 1



Ch.23 SE80a覆土層序注記表

層序No.	特	徴
I	灰褐色土(7.5Y R $\frac{5}{2}$)。	
1	にぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{7}{4}$)と暗褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)の混層に炭化物を若干含む。	
2	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)と灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を1%含む。	
3	黒色土(10Y R $\frac{2}{1}$)と褐灰色粘土(10Y R $\frac{6}{4}$)の混層に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を1%含む。	
4	褐灰色灰(7.5Y R $\frac{4}{1}$)。	
5	暗褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を3%とにぶい黄褐色パミス(10Y R $\frac{7}{4}$)を上層で60%下層で10%と炭化物を含む。	
6	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を1%含む。	
7	暗褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を3%とにぶい黄褐色パミス(10Y R $\frac{7}{4}$)を2%と炭化物を含む。	
8	黒色灰(10Y R $\frac{2}{1}$)に炭化物を30%含む。	
9	褐灰色灰(7.5Y R $\frac{4}{1}$)と黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)の混層に炭化物を30%含む。	
10	灰黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)。	
11	黒色粘土(10Y R $\frac{1}{1}$)に褐灰色粘土(10Y R $\frac{6}{4}$)を20%と褐色粘土(7.5Y R $\frac{4}{1}$)を2%含む。	
12	黒色灰(10Y R1.7/1)に炭化物を含む。	
13	黒色粘土(7.5Y R1.7/1)と黒色灰(10Y R1.7/1)の混層に灰黄褐色パミス(10Y R $\frac{6}{8}$)を40%含む。	
14	明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)と褐色砂質土(7.5Y R $\frac{6}{8}$)の混層。	
15	地山、明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)。	

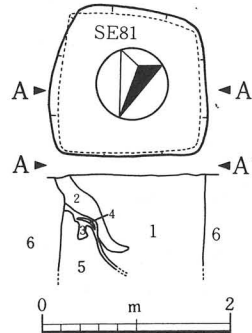
SE80b覆土層序注記表

層序No.	特	徴
I	灰褐色土(7.5Y R $\frac{5}{2}$)。	
1	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)と灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を1%づつと炭化物を含む。しまりあり。	
2	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に褐灰色灰(10Y R $\frac{6}{4}$)を30%と明褐色焼土(7.5Y R $\frac{7}{4}$)を1%と炭化物を含む。	
3	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を1%と灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を1%含む。	
4	黒色土(10Y R $\frac{2}{1}$)と褐灰色粘土(10Y R $\frac{6}{4}$)の混層に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を1%含む。	
5	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)と褐灰色灰(10Y R $\frac{6}{4}$)を1%と黄褐色砂質土(2.5Y R $\frac{5}{4}$)と灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)と炭化物を含む。	
6	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)。	
7	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に褐灰色灰(10Y R $\frac{6}{4}$)を5%含む。	
8	褐灰色灰(7.5Y R $\frac{4}{1}$)。	
9	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を2%と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を小ブロック状に含む。	
10	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に灰白色パミス(10Y R $\frac{9}{2}$)を2%含む。	
11	黒色土(10Y R $\frac{2}{1}$)に炭化物と大ブロック状のにぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{7}{4}$)を下層に含む。	
12	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に褐色粘土(10Y R $\frac{6}{4}$)を1%含む。	
13	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を西側に1%とにぶい黄褐色パミス(10Y R $\frac{7}{4}$)を東側に10%含む。	
14	黒色土(7.5Y R $\frac{2}{1}$)にブロック状のにぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を中央部に含む。	
15	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に明褐色砂質土(7.5Y R $\frac{6}{8}$)とにぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{7}{4}$)を5%と灰黄褐色灰(10Y R $\frac{6}{4}$)を3%含む。	
16	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{2}$)に赤褐色焼土(5Y R $\frac{7}{4}$)を1%含む。	
17	地山、明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)。	

Ch.24 SE81覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	暗褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に極小粒状の赤褐色焼土(5Y R $\frac{7}{4}$)と極小~小塊状の炭化物1%づつ含む。	
2	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)を2%と極小~小塊状の炭化物を1%と極小~中ブロック状の小石を20%含む。	
3	黒色土(10Y R $\frac{2}{1}$)。	
4	明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)。	
5	明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)と灰白色砂質土(10Y R $\frac{9}{2}$)の混層。	
6	地山、明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{6}{8}$)。	

(2) SE81実測図



後で方形に造られている。これら隅柱・横棧の外側には一辺3枚の側板を土圧によって固定し、下方の礎石部分は削りを入れて整形・構築している。隅柱・横棧・側板ともにチョウナによる調整痕が明瞭に認められ、その素材はアスナロヒバを使用していることがわかった。覆土は自然堆積状況を示すが、中層に灰がブロック状にみられることから一時埋没の可能性もある。出土遺物は覆土全域から出土しており、主なものに、青磁線描蓮弁文碗・同無文碗・同稜花皿、白磁端反皿・同内湾皿、瀬戸瓶子・同天目碗、珠洲系播鉢、産地不詳系播鉢(Fig. 46-258)、雁股鏝(Fig. 49-297)、鉄槍、鉄釘、小刀、鉄滓、天禧通宝、元豊通宝、太平通宝、漆器被膜、加工木製品等があり、16世紀前半頃の廃絶と推定される。

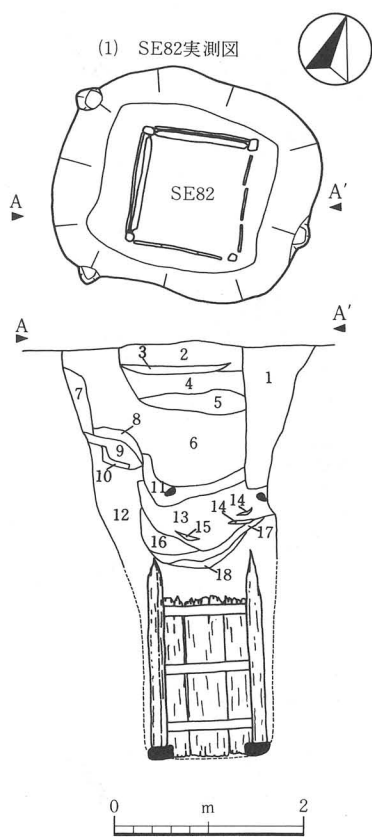
SE83——昭和60年度にて報告予定。

SE84 (PL. 11-(1), Fig. 19-(2), Ch. 26) ——P46区検出。径206cmの円形プランを呈し、深さ120cmまで掘り下げた。覆土上層には全般的に川原石が大量に廃棄されており、覆土埋没時点で同時に廃棄したものと考えられる。遺物もこれら川原石とともに伴出し、主なものをあげると、白磁端反皿、青磁皿、染付皿、美濃灰釉皿・同天目碗、産地不詳播鉢、(Fig. 46-258) 絵唐津皿等の城館期の陶磁とともに明治以降の陶磁器も混在し、他に鉄鍋・鉄釘・ガラス等があるため、近代以降の廃絶と考えられる。

SE85 (Fig. 19-(3), Ch. 27) ——R46区検出。径220cm前後の円形プランを呈し、壁面の崩壊が激しかったため深さ150cmまでしか掘り下げていない。覆土には灰が大量に混入しており、一時埋没の可能性が高く、遺物も全域から散発的に出土している。主な出土遺物には、白磁端反皿、土師器坏、溶解物、羽口、須恵器壺、鉄釘等があり、16世紀代の廃絶と考えられる。

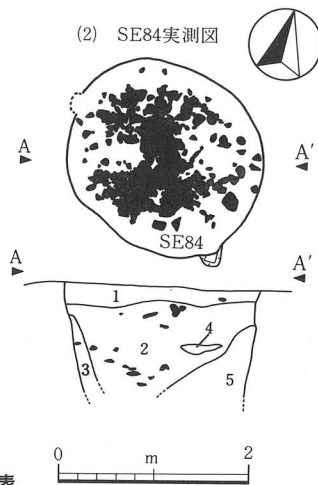
SE86 (PL. 9-(3), Fig. 20-(1), Ch. 28) ——O46区検出。上面でのプラン確認は、径330cm前後の円形プランであったが、深さ120cmから一辺200cmの方形プランの掘り方を呈した。深さ240cmの所から幅100cmの隅柱が三本(西南隅・東南隅・北東隅)検出されたが腐蝕が激しかったため南側の側板の一部ほか横棧等は確認されなかった。また、深さ300cmの所から幅70cm弱の隅柱横棧型の木柱が側板とともに明瞭に検出された。この下部に存在した木柱は高さ200cmほどで横棧が上下二段でみられた他、側板は各面に二板ずつ土圧で固定されている。このような検出結果から本井戸跡の木柱は上部に幅100cmの木柱、下部に上部よりやや小さい幅70cmの木柱を二段で構築していた可能性が高く、井戸木柱構築を考える上で貴重な検出例である。覆土には、全域に炭化物や焼土がみられ、上層に粘土層が堅くしまった状態になっていたこと、さらに木柱内に川原石が廃棄されていたことから一時埋没の可能性が高い。遺物も覆土全域に分布し、主なものとしては、青磁碗・同菊皿(Fig. 42-180)、白磁端反皿、染付碗・同端反皿、中国製褐釉壺、美濃灰釉皿・同鉄釉天目碗、越前甕(Fig. 46-248) 珠洲系播鉢、坩堝、かすがい、環状鉄製品、小札、鉄釘、開元通宝、無文銭、天聖元宝、火箸、

Fig.19 井戸跡実測図 2



Ch.25 SE82覆土層序注記表

層序No.	特 徴	層序No.	特 徴
1	埋土。	11	黒褐色土(5Y R _{7/1})に黒褐色灰(2.5Y _{7/1})を2%含む。
2	にぶい黄褐色粘土(5Y R _{7/1})。	12	黒褐色土(10Y R _{7/1})に明褐色砂質土(7.5Y R _{7/1})を1%とにぶい黄褐色パミス(10Y R _{7/1})と明黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})を若干含む。
3	にぶい黄褐色粘土(10Y R _{7/1})と灰黄褐色粘土(10Y R _{7/1})と灰褐色粘土(7.5Y R _{7/1})の混層。	13	黒色土(10Y R _{1.7/1})と黒褐色土(5Y R _{7/1})の混層。
4	黒褐色土(7.5Y R _{7/1})に黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})を1%と明褐色パミス(7.5Y R _{7/1})を1%含む。	14	黒色灰(10Y R _{1.7/1})。しまりなし。
5	黒褐色土(10Y R _{7/1})に明黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})と明褐色砂質土(7.5Y R _{7/1})を30%含む。	15	黒色土(7.5Y R _{7/1})と灰白色灰(5Y R _{7/1})の混層。
6	黒褐色土(7.5Y R _{7/1})に炭化物を1%含む。しまり弱い。	16	黒褐色土(5Y R _{7/1})ににぶい黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})とにぶい黄褐色粘土(10Y R _{7/1})を1%づつと炭化物を2%含む。しまりなし。
7	黒褐色土(7.5Y R _{7/1})に灰白色パミス(7.5Y R _{7/1})を若干含む。	17	黒褐色土(10Y R _{7/1})と暗赤褐色粘土(5Y R _{7/1})の混層に炭化物を3%含む。
8	黒色土(10Y R _{7/1})。しまりなし。	18	黒褐色土(7.5Y R _{7/1})と灰白色灰(10Y R _{7/1})と黒色灰(10Y R _{1.7/1})の混層。しまりなし。
9	暗褐色土(7.5Y R _{7/1})に明褐色砂質土(7.5Y R _{7/1})を若干含む。		
10	黒色灰(5Y R _{1.7/1})と灰白色灰(10Y R _{7/1})の混層。しまりなし。		



Ch.27 SE85覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土(10Y R _{7/1})に極小～小粒状に褐色砂質土(10Y R _{7/1})とにぶい黄褐色焼土(10Y R _{7/1})と白色パミスと炭化物を1%づつ含む。
2	黒色土(10Y R _{7/1})に灰白色灰(10Y R _{7/1})を20%と黒色土(10Y R _{1.7/1})を5%と黄褐色焼土(10Y R _{7/1})を小粒状に1%と炭化物を2%含む。
3	黒褐色土(10Y R _{7/1})に褐色砂質土(10Y R _{7/1})を小塊状に10%と褐色灰(10Y R _{7/1})を5%と極小塊状の炭化物を2%含む。
4	黒色土(10Y R _{7/1})に灰黄褐色灰(10Y R _{7/1})を30%と炭化物を1%含む。
5	黒色土(10Y R _{7/1})に小粒状の褐色砂質土(10Y R _{7/1})と褐色灰(10Y R _{7/1})と炭化物を1%含む。
6	黒色土(10Y R _{7/1})に小～中塊状の褐色砂質土(10Y R _{7/1})を5%と小粒状の浅黄色砂質土(2.5Y _{7/1})2%と小塊状の炭化物を1%含む。

Ch.26 SE84覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	暗褐色土(10Y R _{7/1})。しまり強い。
2	黒褐色土(10Y R _{7/1})に黄褐色土(10Y R _{7/1})と炭化物と焼土を若干含む。
3	黒褐色土(10Y R _{7/1})に黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})をブロック状に5%含む。
4	暗褐色砂質土(10Y R _{7/1})に淡褐色パミス(5Y R _{7/1})と淡黄色パミス(2.5Y _{7/1})と褐色パミス(7.5Y R _{7/1})を小～中粒状に含む。
5	黄褐色砂質土(10Y R _{7/1})に中塊状の礫を7%と淡黄色パミス(2.5Y _{7/1})を若干、黒褐色土(10Y R _{7/1})と炭化物を層状に含む。

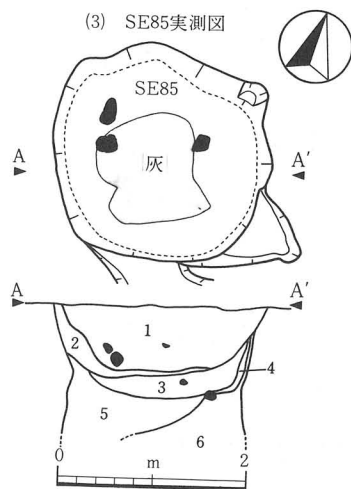
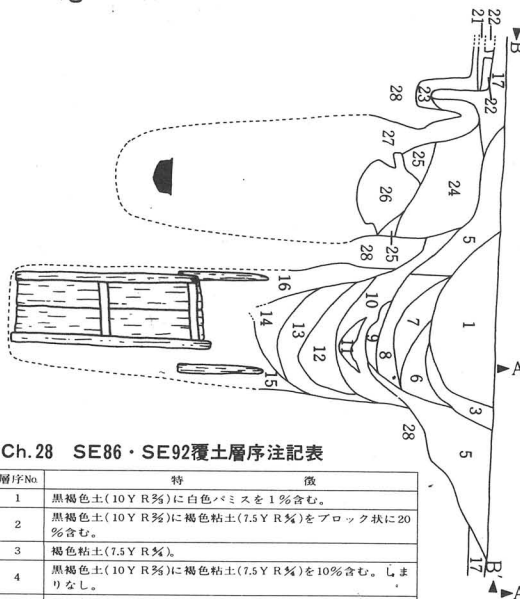
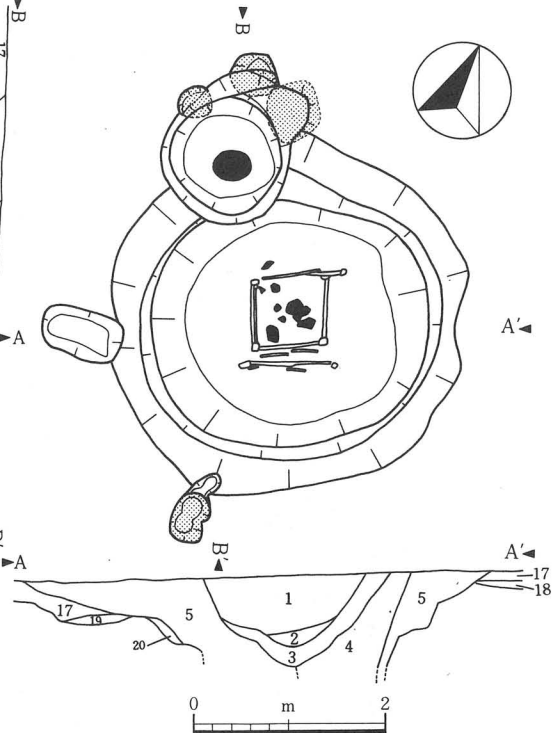


Fig.20 井戸跡実測図 3



(1) SE86・SE92実測図



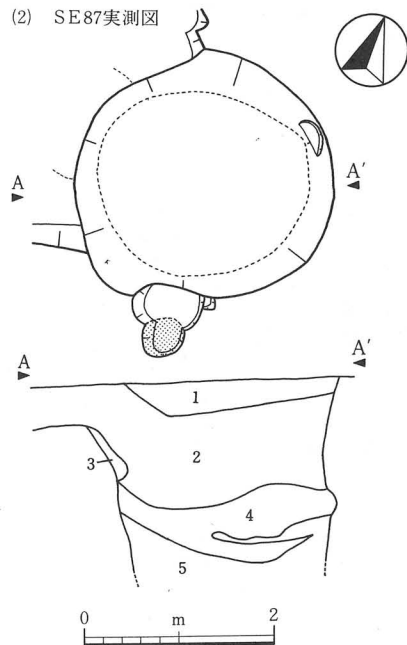
Ch.28 SE86・SE92覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に白色パミスを1%含む。
2	黒褐色土(10Y R%)に褐色粘土(7.5Y R%)をブロック状に20%含む。
3	褐色粘土(7.5Y R%)。
4	黒褐色土(10Y R%)に褐色粘土(7.5Y R%)を10%含む。しまりなし。
5	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を3%と炭化物を5%と白色パミスを1%含む。
6	黒褐色土(10Y R%)に褐色粘土(7.5Y R%)を5%と炭化物を1%含む。
7	褐色粘土(7.5Y R%)に褐色粘土(10Y R%)を3%と炭化物を2%含む。
8	黒褐色土(10Y R%)に炭化物を1%含む。
9	褐色粘土(7.5Y R%)に炭化物を1%含む。
10	黒色土(10Y R%)にふい黄褐色粘土(10Y R%)を3%と炭化物を1%と中塊状の石を2%含む。
11	褐色粘土(7.5Y R%)に明赤褐色粘土(5Y R%)を1%と炭化物を2%含む。
12	黒褐色土(10Y R%)と暗褐色粘土(10Y R%)が6:4の混層に明赤褐色粘土(5Y R%)と炭化物を1%つつ含む。
13	黒色土(7.5Y R%)に部分的に褐色粘土(10Y R%)が混層し極小一小塊状のふい黄色砂質土(2.5Y%)を1%含む。
14	黒色粘土(10Y R%)に小塊状のふい黄褐色砂質土(10Y R%)を部分的に若干含む。
15	黒色土(7.5Y R%)に暗褐色粘土(10Y R%)を小一中塊状に小塊状の明褐色砂質土(7.5Y R%)を部分的に含み下層で混層。
16	黒色土(7.5Y R%)に灰白色砂質土(2.5Y%)を5%と明褐色砂質土(2.5Y%)を若干含む。
17	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を5%含む。
18	黒褐色土(10Y R%)にふい赤褐色焼土(5Y R%)を3%と褐灰色灰(7.5Y R%)を1%と炭化物を3%含む。
19	暗褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を40%含む。
20	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を10%と白色パミスを10%含む。
21	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を3%含む。
22	明黄褐色砂質土(10Y R%)と黒褐色土(10Y R%)の混層。
23	黄褐色砂質土(10Y R%)と黒褐色土(10Y R%)の混層。部分的に砂質土の単層。
24	黒色土(10Y R%)に炭化物を1%含む。
25	黒色土(10Y R%)とふい黄褐色灰(10Y R%)と黄褐色砂質土(10Y R%)と明黄褐色砂質土(10Y R%)の互層。
26	黒色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を5%とふい黄褐色灰(10Y R%)を3%と炭化物を1%含む。
27	黒色土(10Y R%)と明黄褐色砂質土(10Y R%)とふい黄褐色砂質土(10Y R%)と褐色砂質土(10Y R%)と明黄褐色砂質土(2.5Y%)の混層。
28	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

Ch.29 SE87覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を2%と灰白色パミス(10Y R%)を1%と炭化物を若干含む。しまり強い。
2	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を中央部で5%、東側で25%、西側では部分的に点在し中塊状の小石を中央部に若干含む。
3	褐色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を50%含む。
4	黒褐色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を1%含む。
5	黄褐色砂質土(10Y R%)と明黄褐色砂質土(10Y R%)の混層。

(2) SE87実測図



穀臼、加工木製品、木箸等があり、16世紀代の廃絶と考えられる。重複する井戸跡にSE92(旧)がある。

SE87 (Fig. 20-(2)、Ch.29)——Q45区検出。径270cmの円形プランを呈し、深さ200cmまで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、遺物も全域から出土している。主な出土遺物として、端反染付皿、白磁内湾皿、青磁割花文碗、美濃灰釉皿、鉄釘、銅滓、砥石、漆器等の城館期の遺物も出土したが、馬骨に伴ってガラス・セルロイド製品が出土したため現代に廃絶された井戸であることがわかった。

SE89 (Fig. 21-(1)、Ch. 30) ——P45区検出。径175cmの円形プランを呈し、深さ160cmまで掘り下げた。覆土には、灰・炭化物・焼土が全域に分布することから一時埋没と推定される。主な出土遺物として、青磁碗、瀬戸灰釉浅鉢、珠洲系播鉢、切羽 (Fig. 51-322)、永楽通宝、鉄釘、火打石 (Fig. 52-349)、漆器被膜等があり、15~16世紀の廃絶と考えられる。

SE90 (Fig. 21-(2)、Ch. 31) ——Q47区検出。径160cmの円形プランと考えられるが、南側はSX211と重複しているため明確でなく、深さ255cmまで掘り下げた。覆土は自然堆積状況を示すが部分的に炭化物・灰の混入する層もみられる。遺物は覆土全域でみられ、主なものに、青磁碗・同皿、同大皿、瀬戸灰釉皿、同瓶子、珠洲系播鉢、染付端反皿、羽口、鉄鏝、小刀、砥石等があり16世紀前半頃の廃絶と推定される。重複するSX211は層序関係から本遺構より古い。

SE91——P46区検出。径130cmの不整円形プランを呈し、深さ265cmまで掘り下げた。覆土は単純層で一時埋没を呈し、出土遺物には不明土器片と鉄釘があるのみで廃絶年代は不明である。

SE92 (PL. 10-(4)(5)、Fig. 20-(1)、Ch. 28) ——O46区検出。径130cmの円形プランで、深さ400cmまで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、掘り方も直線の落ち込みを呈する。出土遺物には、青磁稜花皿、白磁内湾皿、鉄釘、鉄滓、漆器碗の他、底面近くから正立状態で内部に麻布をまいた用途不明の鉄製品 (Fig. 50-306・307)を入れた内耳二耳鉄鍋 (Fig.49-305)が出土している。廃絶年代は重複関係からSE86より古くなることがわかり、陶磁器と内耳鉄鍋の年代観より15世紀から16世紀前半に位置づけられると考えられる。

SE93 (Fig.21-(3)、Ch.32) ——P46区検出。長軸225cm・短軸165cmの長方形プランを呈し、深さ160cmまで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、出土遺物には珠洲系播鉢、内耳土器、天目碗、鉄釘、砥石、鉄滓、無文銭がある。廃絶年代は15世紀~16世紀前半と推定される。

SE94——昭和60年度報告書にて報告予定。

SE95 (Fig.22-(1)、Ch.33) ——S47区検出。一辺200cmの不整形プランを呈し、深さ

Fig. 21 井戸跡実測図 4

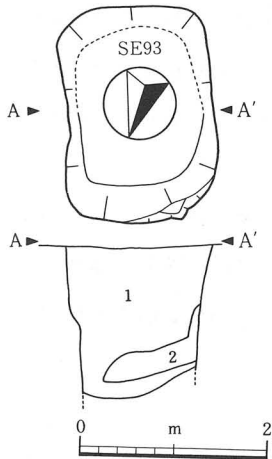
Ch.30 SE89覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R 5%)に灰白色灰(10Y R 5%)を1%と炭化物を3%含む。
2	黒褐色土(10Y R 5%)に灰黄褐色灰(10Y R 5%)を部分的に10%、下層に明黄褐色砂質土(10Y R 5%)を10%と炭化物を3%含む。
3	褐灰色灰(7.5Y R 5%)
4	黒褐色土(10Y R 5%)に浅黄色砂質土(2.5Y 5%)を中〜大塊状に30%と明褐色砂質土(7.5Y R 5%)を5%含む。
5	黒褐色土(10Y R 5%)に黄褐色砂質土(10Y R 5%)を40%と明褐色砂質土(7.5Y R 5%)を5%含む。
6	黒褐色土(10Y R 5%)に明褐色焼土(7.5Y R 5%)を5%と浅黄色パミス(2.5Y 5%)を1%と炭化物を2%含む。
7	黒褐色土(10Y R 5%)に明褐色焼土(7.5Y R 5%)を7%と黄褐色砂質土(10Y R 5%)を15%含む。

Ch.31 SE90・SX211覆土層序注記表

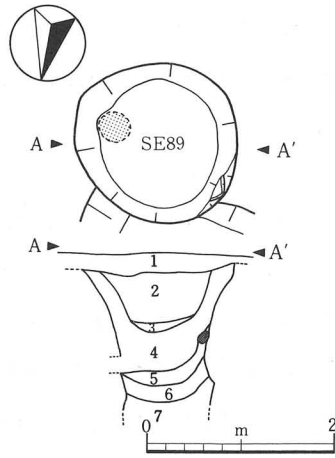
層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R 5%)に灰白色灰(N6)を5%と黄褐色砂質土(10Y R 5%)を3%と灰白色灰(10Y R 5%)を3%と炭化物を2%含む。
2	黒褐色土(10Y R 5%)に灰白色灰(N6)を2%と黄褐色砂質土(10Y R 5%)と灰白色灰(10Y R 5%)と炭化物を1%ずつ含む。
3	黒褐色土(10Y R 5%)と灰白色灰(N6)の混層に灰白色灰(10Y R 5%)を帯状に含む炭化物を1%含む。
4	褐灰色灰(10Y R 5%)
5	黒褐色土(10Y R 5%)に明褐色灰(7.5Y R 5%)を1%と褐色粘土(10Y R 5%)を1%含む。
6	褐灰色土(7.5Y R 5%)に極小塊状の黄褐色土(7.5Y R 5%)と黄褐色土(10Y R 5%)と炭化物を若干含む。しまり強い。
7	黄褐色土(10Y R 5%)に灰白色パミス(10Y R 5%)を小塊状に1%と明黄褐色砂質土(10Y R 5%)を若干含む。
8	灰白色パミス(10Y R 5%)と暗褐色土(10Y R 5%)が6:4で混層。
9	黒褐色土(10Y R 5%)に黒色灰(7.5Y R 5%)を10%と部分的に黄褐色土(10Y R 5%)を2%と白色パミスを若干含む。
10	黒褐色土(10Y R 5%)に極小〜小塊状の黄褐色土(7.5Y R 5%)と炭化物を1%ずつ含む。
11	黒褐色土(10Y R 5%)に明黄褐色砂質土(10Y R 5%)を1%含む。
12	灰白色土(10Y R 5%)と黄褐色土(10Y R 5%)と褐灰色灰(7.5Y R 5%)の混層。

(3) SE93実測図

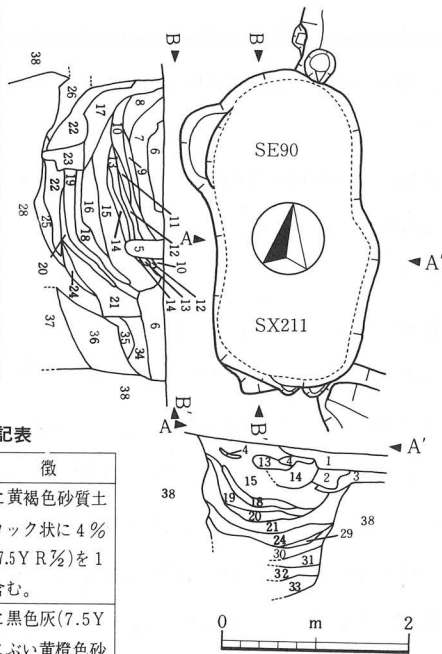


(1) SE89実測図

層序No.	特 徴
13	黄褐色砂質土(10Y R 5%)と黒褐色土(10Y R 5%)が6:4で混層。
14	黒色土(7.5Y R 5%)
15	黒褐色土(10Y R 5%)に黄褐色土(10Y R 5%)と褐灰色灰(10Y R 5%)を小塊状に1%ずつと黒色土(7.5Y R 5%)を部分的に若干含む。
16	黒褐色土(10Y R 5%)に浅黄色砂質土(2.5Y 5%)を極小〜小塊状に1%含む。
17	灰白色(5Y 5%)と黒色土(10Y R 5%)の混層に炭化物を若干含む。
18	黄褐色砂質土(10Y R 5%)に黒色土(10Y R 5%)を5%含む。
19	黒色土(10Y R 1.7/1)に黄褐色砂質土(2.5Y 5%)を上層に帯状に5%と炭化物を若干含む。
20	黒色土(10Y R 5%)に褐灰色粘土(10Y R 5%)を上層に帯状に5%含む。
21	黒褐色土(10Y R 5%)に極小塊状の炭化物を1%含む。
22	浅黄色砂質土(2.5Y 5%)に黄褐色砂質土(2.5Y 5%)を若干含む。
23	黒褐色土(10Y R 5%)に小塊状の黄褐色砂質土(10Y R 5%)と灰白色パミス(10Y R 5%)と炭化物を1%含む。
24	黒色土(7.5Y R 1.7/1)
25	黒色土(10Y R 5%)と暗褐色粘土(2.5Y 5%)が8:2の混層に小〜中塊状の明黄褐色砂質土(2.5Y 5%)を2%含む。
26	明黄褐色砂質土(10Y R 5%)と褐色土(10Y R 5%)の混層。
27	黒色土(2.5Y 5%)
28	黒色土(10Y R 5%)に中〜大塊状に黄褐色砂質土(10Y R 5%)を上層に3%と灰白色パミス(10Y R 5%)を上層に1%含む。
29	黒色土(7.5Y R 1.7/1)と褐灰色灰(10Y R 5%)の互層。
30	黒色土(10Y R 5%)に黄褐色砂質土(10Y R 5%)を大塊状に1%含む。
31	黒色土(10Y R 5%)に灰黄褐色砂質土(10Y R 5%)を小粒状に10%含む。
32	黄褐色土(10Y R 5%)に黄褐色砂質土(2.5Y 5%)
33	黒色土(10Y R 1.7/1)に黄褐色砂質土(2.5Y 5%)を10%含む。
34	黒褐色土(10Y R 5%)に黄褐色土(10Y R 5%)を小粒状に5%と褐灰色灰(10Y R 5%)を3%含む。
35	黒色土(10Y R 5%)に黄褐色土(10Y R 5%)を20%と褐灰色灰(10Y R 5%)を5%と極小塊状の炭化物を1%含む。
36	黒色土(10Y R 5%)に明黄褐色砂質土を極小〜中塊状に10%と極小塊状の炭化物を1%含む。
37	黒褐色土(10Y R 5%)と小粒状の明黄褐色砂質土(10Y R 5%)の混層。
38	地山、黄褐色土(10Y R 5%)



(2) SE90・SX211実測図



Ch.32 SE93覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土(7.5Y R 5%)に黄褐色砂質土(10Y R 5%)を小ブロック状に4%と明褐色灰パミス(7.5Y R 5%)を1%と炭化物を1%含む。
2	黒色土(7.5Y R 5%)に黒色灰(7.5Y R 1.7/1)を5%と黄褐色砂質土(10Y R 5%)を小ブロック状に2%と黄褐色土(10Y R 5%)を20%含む。

230cmまで掘り下げた。覆土は、川原石とともに一時埋没の状況を呈し、上層には灰層、下層には砂質土層を主体とした層位が認められる。遺物は覆土全域からの出土がみられ、主なものに青磁線描蓮弁文碗、美濃灰釉皿、羽口、不明鉄製品、鉄釘、鉄滓があり下層になり次第土師器片が多く出土している。廃絶時期は重複するS B 38（新）との関連から、16世紀前半頃と推定される。

S E 97——O 45区において南側半分だけの検出である。径130cmの円形プランを呈すると考えられ深さは60cmまで掘り下げた。重複する遺構にS X 232（新）があり、出土遺物は産地不詳播鉢片2点があるだけである。

S E 98——P・Q 46区検出。径175cmの円形プランを呈し、深さ40cmまで掘り下げた。出土遺物に鉄釘2点があり、S B 39・S B 42と重複しているが新旧関係は不明である。

S E 99——Q 45区検出。径225cmの円形プランを呈し、西側半分だけ約90cm掘り下げた。出土遺物には、口縁端反染付碗、鉄釘、紹聖元宝、至大通宝、漆器被膜があり16世紀代の廃絶と考えられる。

S E 102 (Fig. 22-(2), Ch. 34) ——O 47・48区検出。径140cmの円形プランを呈し、深さ52cmまで掘り下げた。覆土は全体に炭化物を含み一時埋没の状況を呈する。出土遺物には、瀬戸灰釉鉦皿、美濃灰釉端反皿、唐津皿、鉄釘、鉄滓、無文銭があり16世紀後半以降の廃絶と考えられる。

S E 103 (Fig. 15, Ch. 18) ——U 47区検出。長軸180cm、短軸150cmの長円形プランを呈し、深さ60cmまで掘り下げた。S X 259（新）と重複しており、出土遺物はなかった。

S E 105——O 46・47区検出。径130cmの円形プランを呈し、深さ30cmまで掘り下げた。出土遺物はなかった。

S E 106 (Fig. 12-(3), Ch. 14) ——O 44・45区において東側だけ検出。径140cmの円形プランを呈すると思われ、深さ65cmまで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、S T 253（旧）と重複していたが出土遺物はみられなかった。

S E 108——R 45区検出。径150cmの円形プランを呈し、深さ50cmまで掘り下げた。出土遺物には白磁内湾皿、同端反皿、染付皿、鉄釘がある。廃絶時期は16世紀代と考えられる。

S X 205——P 47区検出。径140cmの円形プランを呈し、深さ210cmまで掘り下げた。セクションベルトは崩壊したため層序の詳細はわからないが、一時埋没の状況と考えられた。出土遺物には二次加熱のみられる青磁碗、青磁皿、底に梵字の墨書がある白磁内湾皿 (Fig. 43-188)、不明鉄製品、鉄鏃、鉄釘等があり、15世紀から16世紀の廃絶と考えられる。

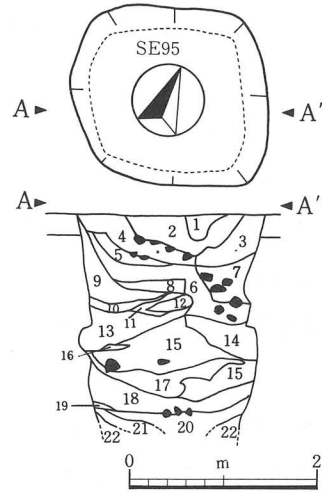
S X 211 (Fig. 21-(2), Ch. 31) ——Q 47区検出。北側がS E 90（新）と重複していたため明確なプランは確認できなかったが、おそらく一辺175cmの方形プランを呈すると考えられ、深

Fig.22 井戸跡実測図 5

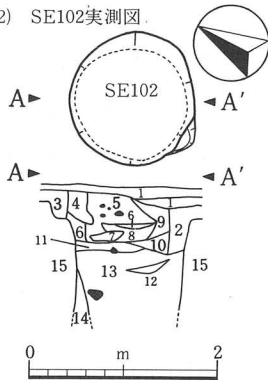
Ch.33 SE95覆土層序注記表

層序No	特 徴	層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)。	11	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
2	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に褐灰色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)を20%とにぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)をブロック状に5%と炭化物2%含む。	12	暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に浅黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を10%と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%と黒色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を3%含む。
3	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%とにぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)をブロック状に1%と炭化物を1%含む。	13	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に黄褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を20%と炭化物を1%含む。
4	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%とにぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%とにぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%含む。	14	暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を30%と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)と明黄褐色土(2.5Y $\frac{2}{2}$)と浅黄砂質土(2.5Y $\frac{2}{2}$)を1%ずつ含む。
5	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を40%と炭化物1%含む。	15	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を7%と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%と明赤色砂質土(5Y R $\frac{2}{2}$)を1%と薄黄色パミス大塊状を含む。
6	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)ににぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を15%と炭化物を7%含む。	16	黒色灰(10Y R1.7/1)。
7	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%と炭化物を1%含む。	17	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に明褐色砂質土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を5%とにぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を15%含む。
8	暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)ににぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を7%と黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%とにぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%含む。	18	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を20%含む。
9	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%と灰黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を5%と明褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を5%と炭化物を2%含む。	19	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
10	灰褐色粘土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に橙色粘土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を7%と褐色粘土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を2%と黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を30%含む。	20	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)ににぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)と黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%ずつ含む。
		21	浅黄色砂質土(2.5Y $\frac{2}{2}$)の上層に1cmの幅で黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)を含む。
		22	灰黄色砂質土(2.5Y $\frac{2}{2}$)の上層に5cm幅で黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を含む。

(1) SE95実測図



(2) SE102実測図



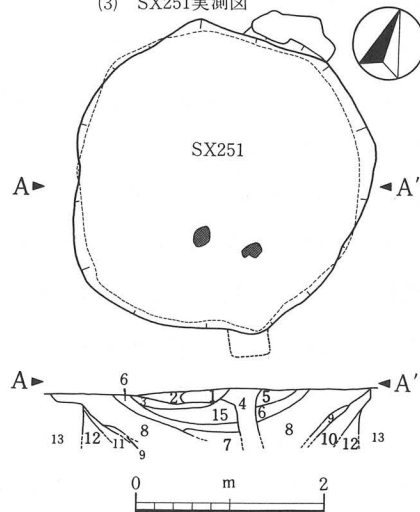
Ch.34 SE102覆土層序注記表

層序No	特 徴	層序No	特 徴
I	表土、黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)。しまり強い。	8	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層ににぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%と炭化物を1%含む。
1	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に小粒上の白色パミス5%と極小塊状の黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を5%と極小塊状の炭化物を1%含む。しまり強い。	9	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層に炭化物を1%含む。
2	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%とにぶい黄褐色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)を1%と炭化物を1%含む。しまりなし。	10	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層に極小塊状の炭化物を3%含む。
3	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%と小塊状の白色パミス3%含む。しまりあり。	11	にぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
4	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に炭化物を1%含む。	12	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層に大塊状の炭化物を1%含む。
5	暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に炭化物を1%含む。しまり強い。	13	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%と褐灰色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)を5%と中一丈塊状の岩化物を2%含む。下層はど湿度有り。
6	にぶい黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。	14	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層。湿度有り。
7	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に暗褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)を10%含む。	15	地山、褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。

Ch.35 SX251覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)ににぶい黄褐色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を15%と炭化物と鉄分と白色パミス1%含む。
2	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に炭化物と白色パミス1%ずつ含む。
3	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色灰(10Y R1.7/1)と炭化物を2%ずつ含む。
4	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
5	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色灰(10Y R1.7/1)を3%と炭化物を1%含む。
6	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色灰(10Y R1.7/1)を15%と灰黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)を3%と炭化物を1%含む。
7	灰黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
8	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色灰(10Y R1.7/1)を10%とにぶい黄褐色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)を2%と炭化物を1%含む。
9	にぶい黄褐色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)。
10	暗褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)に黒色灰(10Y R1.7/1)を3%含む。
11	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)。
12	黒色土(10Y R $\frac{2}{2}$)。
13	褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。

(3) SX251実測図



さ 115 cm まで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、出土遺物には青磁線描蓮弁文碗、同皿、同盤、底に圖銘のある白磁端反皿、染付吉祥文碁筭底皿 (Fig. 43-200)、瀬戸灰釉壺、越前甕、鉄釘、鉄鍋、鉄滓、元豊通宝、無文銭、珠数玉 (Fig. 53-354)、砥石等があり 16 世紀前半の廃絶と推定される。

S X 230——P 45 区検出。径 140 cm の不整円形プランを呈し、南に土壇状の遺構と重複している。深さ 50 cm 前後まで掘り下げ、播鉢片 1 点の出土遺物があった。

S X 234——R・S 46 区検出。径 140 cm の円形プランを呈し、深さ 30 cm まで掘り下げた。深さ 30 cm の部分で S B 38 北辺の軸に合致する礎石状の石が検出されたが、対応する礎石等が見あたらないため礎石と確定できなかった。出土遺物には、染付皿、白磁端反皿、鋳型、鉄釘、不明鉄製品、砥石、判読不能銭があり、16 世紀代の廃絶と考えられる。

S X 235 (Fig. 25-(2)、Ch. 43) ——T 46 区検出。径 160 cm の円形プランを呈し、西側だけ 140 cm まで掘り下げた。覆土には全域に灰が混在し、一時埋没の状態を呈するが上層に小石の集中する部分が見られ、埋没後に石を集めた可能性がある。出土遺物として、S X 244 出土の染付花卉文端反皿と接合する染付皿片、美濃灰釉皿、越前甕、産地不詳播鉢、羽口、小札、皇宋通宝があり、16 世紀代の廃絶と考えられる。重複する S X 247 より新しい遺構である。

S X 240 (Fig. 15、Ch. 18) ——U 47 区検出。一辺 190 cm の方形プランを呈し深さ 150 cm まで掘り下げた。重複する S T 261 の床面と同レベルで S T 261 の柱痕が検出されたため、本遺構は S T 261 より古い構築であり、覆土も自然堆積の状況を呈する。深さ 70 cm 前後の所から多量の川原石が出土している。出土遺物は、土師器坏 (Fig. 48-282・283) と羽口、鉄鏃、溶解物だけであり、城館期以前に廃絶された可能性が高い。

S X 245 (P L. 11-(3)(4)) ——T 46 区検出。径 150 cm の円形プランを呈し、深さ 66 cm まで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、出土遺物には鎧の胸板 (P L. 11-(4)、Fig. 49-302) の他、青磁碗、白磁皿、染付玉取獅子文端反皿、美濃天目碗、越前甕、珠洲系播鉢、火箸、鉄釘、判読不能銭があり 16 世紀代の廃絶と考えられる。

S X 251 (P L. 11-(2)、Fig. 22-(3)、Ch. 35) ——V 47 区検出。径 320 cm の円形プランを呈し、深さ 55 cm まで掘り下げた。覆土の中央部に灰層が薄く円形に落ち込む以外は自然堆積の状況を呈するが、深さが足りないため一時埋没かどうかは明確でない。出土遺物は、灰層上面からの出土が多く、青磁碗、同稜花皿、白磁小碗、染付碗、美濃灰釉菊皿、同天目碗、瀬戸灰釉香炉、産地不詳播鉢、瓦器火舎、鉄釘、かすがい、鉄鍋、小札、環状鉄製品、鉄滓、皇宋通宝、砥石がある。16 世紀代の廃絶と考えられる。

S X 255 (Fig. 12) ——47 区検出。径 135 cm の円形プランを呈し、深さ 75 cm まで掘り下げた。出土遺物には、産地不詳播鉢、鉄釘、永楽通宝がある。

S X 257——T 46区検出。長軸170cm、短軸140cmの不整円形プランを呈し、深さ45cmまで掘り下げた。上層にS X 235と同様に小石が集中していたが、出土遺物はみられなかった。

E 竪穴遺構

竪穴遺構として報告するものは、使用目的が明確でなく竪穴を形成する遺構であり、覆土および床面から遺物を出土して明らかに廃棄行為が行われているものである。

S X 200 (P L. 12-(1)、Fig. 23-(1)、Ch. 36) ——P 45・46区検出。北側に長軸170cm、短軸80cm、深さ53cmの長方形プランを呈する掘り込みがあり、それを覆うように南側へ東西300cm、南北320cmの不整形を呈する深さ50cmの播鉢状の掘り込みがみられる。覆土中層には厚い灰層の分布が認められ、遺物も灰層を中心に覆土全域から出土している。主な出土遺物には、青磁線描蓮弁文碗・同見込に「劔川」のスタンプ文のある碗・同盤、白磁皿 (Fig. 43-191)、染付玉取獅子文皿・同碗、越前甕 (Fig. 46-247)、産地不詳播鉢、かわらけ、溶解物、埴塙、小札、小刀、不明鉄製品、鎧の縁金具、鉄釘、大観通宝、硯 (Fig. 53-345・346) 漆器被膜等があり、16世紀代の廃絶と考えられる。重複するS E 89は本遺構より古い。

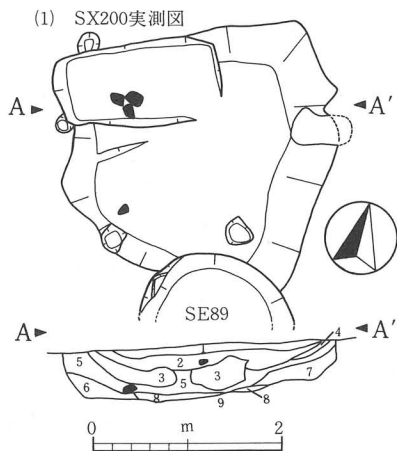
S X 203——O・P 45・46区検出。S B 37・S B 46・S B 47が占地する地域で広範囲な落ち込みがあり、規模は不明確であるが一応S X 203と総略しておいた。柱穴・井戸跡等の重複が激しいためと覆土層が平均20cm前後と浅いため出土遺物も新旧入り乱れて出土していた。主な出土遺物には、青磁無文端反碗・同稜花皿、白磁内湾皿・同端反皿、染付皿、瀬戸灰釉糸切底皿・同卸皿、黄瀬戸手大皿、瀬戸鉄釉壺、越前甕、産地不詳播鉢、鉄釘、鉄鍋、小札、鉄鏃、不明鉄製品、鉄滓、鋳型、羽口、埴塙、銅滓、鎧の縁金具、不明銅製品 (Fig. 51-328)、洪武通宝、皇宋通宝、唐國通宝、永樂通宝、祥符元宝、無文銭、漆器被膜があり、16世紀代の廃絶と推定される。

S X 204 (Fig. 23-(2)、Ch. 37) ——Q・R 45区検出。長軸184cm、短軸150cmの方形プランを呈し、深さ80cmであり中央部に径50cm深さ100cmのピットが存在する。覆土は上層にしまりの強い層がみられ一時埋没の状況を呈している。出土遺物には、瀬戸灰釉皿、青磁碗・同皿、白磁端反皿、美濃灰釉皿、鉄鏃 (Fig. 49-298)、不明鉄製品、鉄釘、茶臼、穀臼等がある。

S X 207——R 46区検出。長軸167cm、短軸125cmの方形プランを呈し深さ60cmまで掘り下げた。覆土は一時埋没の状況を呈し、出土遺物はみられなかった。

S X 208 (Fig. 23-(3)、Ch. 38) ——R 46区検出。長軸200cm、短軸125cmの不整形方形プラン

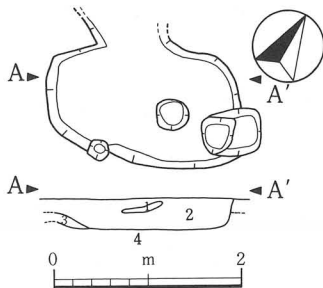
Fig.23 竖穴遺構実測図 1



Ch.37 SX204覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒褐色土(10Y R%)に小~中塊状の明黄褐色砂質土(10Y R%)と小塊状の淡黄色砂質土(2.5Y%)を30%含む。しまり強い。	
2	黒褐色土(10Y R%)。しまり強い。	
3	黒褐色土(10Y R%)に極小~極大塊状の浅黄色砂質土(2.5Y%)を15%含む。しまり強い。	
4	浅黄色砂質土(2.5Y%)に中~大塊状の明褐色砂質土(10Y R%)を5%含む。しまり強い。	
5	黒褐色土(10Y R%)と小~中塊状の浅黄色砂質土(2.5Y%)と小塊状の明褐色砂質土(10Y R%)の混層。	
6	にぶい黄色砂質土(2.5Y%)。	
7	黒色土(10Y 1.7/1)に小塊状のにぶい黄色砂質土(2.5Y%)を3%含む。しまりなし。	
8	地山、明黄褐色砂質土(10Y R%)。	

(3) SX208実測図



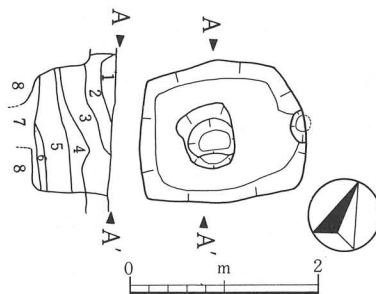
Ch.39 SX219覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	暗褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を1%と炭化物を1%と礫を2%含む。	
2	黒褐色土(10Y R%)。湿性あり。	
3	明黄褐色砂質土(10Y R%)。しまりなし。	
4	暗褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)と褐色粘土(10Y R%)と炭化物を1%づつと礫を2%含む。	
5	黒褐色土(10Y R%)に褐灰色灰(10Y R%)を10%含む混層。	
6	褐灰色灰(10Y R%)。	
7	暗褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を2%含む。	
8	暗褐色土(10Y R%)と褐灰色灰(10Y R%)の混層に黄褐色砂質土(10Y R%)を数個含む。	
9	にぶい黄褐色砂質土(10Y R%)。しまりなし。	
10	地山、にぶい黄褐色砂質土(10Y R%)。	

Ch.36 SX200覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒褐色土(10Y R%)に明褐色砂質土(10Y R%)を15%ぐらい、にぶい黄褐色粘土(10Y R%)と白色バミスと炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。	
2	黒褐色土(10Y R%)に明褐色砂質土(10Y R%)が1%と炭化物が5%と灰白色灰(N%)を部分的に含む。	
3	灰白色灰(N%)に灰白色灰(N%)を30%含む。	
4	黒褐色土(10Y R%)と灰白色灰(N%)との50%の混層。	
5	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を30%と灰白色灰(N%)を30%と灰白色灰(N%)をしま状(2~3mm幅)に3%と炭化物を3%含む。	
6	暗褐色土(7.5Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)と黄褐色砂質土(10Y R%)をブロック状に40%含む。	
7	灰白色灰(7.5Y R%)に灰白色灰(7.5Y R%)を40%と炭化物を5%含む。	
8	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を小ブロック状に20%と炭化物を1%含む。	
9	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。	

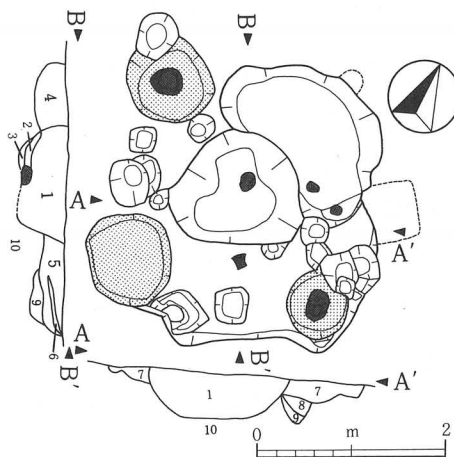
(2) SX204実測図



Ch.38 SX208覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒色土(10Y R%)と灰白色灰(10Y R%)の混層。	
2	黒色土(10Y R%)に極小~大塊状の褐色砂質土(10Y R%)を部分的に7%と炭化物を1%含む。	
3	黒色土(10Y R%)に中塊状の褐色砂質土(10Y R%)を50%含む。	
4	地山、褐色砂質土(10Y R%)。	

(4) SX219実測図



を呈し、深さ25cmで一時埋没の覆土堆積を示す。出土遺物には、美濃灰釉皿、白磁端反皿、鉄釘、無文銭、鉄砲玉、不明銅製品、桃種、骨片等があり、土坑的機能のものであろうか。

S X 214——Q 45区検出。S E 87、S E 99と重複しているため明確な規模は不明であり、白磁端反皿、無文銭、鉄滓の出土があった。

S X 216 (Fig. 17-(1)、Ch. 21) ——Q 47区検出。長軸163cm、短軸113cmの隅丸方形プランを呈し、深さ34cm、覆土上層に薄い灰層が認められる。鉄滓が1点出土している。

S X 217 (Fig. 17-(1)、Ch. 21) ——Q 47区検出。明確な規模は不明で産地不詳褐釉壺と開元通宝が出土している。

S X 218 (Fig. 17-(1)、Ch. 21) ——Q 47区検出。長軸250cm、短軸140cmの楕円形プランを呈し、深さ43cm、覆土は灰が互層状態になり、重複するS X 211より新しい。覆土からの出土遺物として、青磁盤・同碗、瀬戸灰釉皿、産地不詳播鉢、須恵器壺、鉄釘、鏝、洪武通宝、縄文時代磨製石斧 (Fig. 52-351) がある。

S X 219 (Fig. 23-(4)、Ch. 39) ——S 46・47区検出。S B 38礎石建物跡と重複する遺構であり、3箇所の不整形掘り込みがみられる。覆土には炭化物・灰等が認められることから一時埋没の状況を呈し、いずれもS B 38より新しい掘り込みである。出土遺物としては、青磁碗・同皿、白磁端反皿、染付皿、美濃灰釉皿・同天目碗、鋳状鉄製品 (Fig. 50-310)、鉄釘、小札、柄頭 (Fig. 51-318)、硯、砥石等があり16世紀代の廃絶と考えられる。

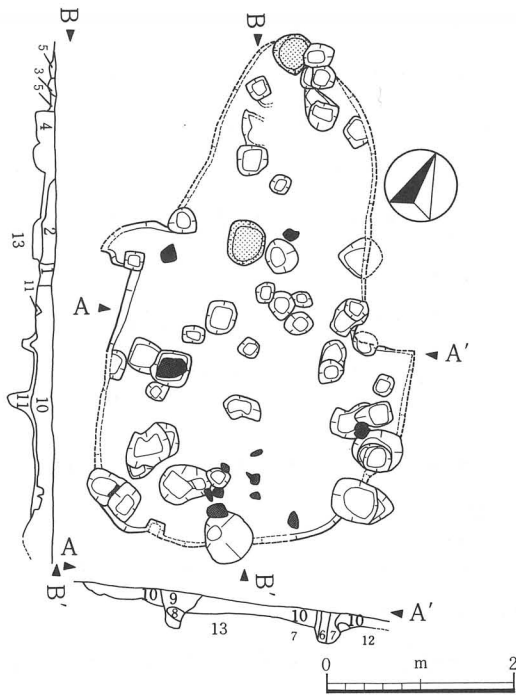
S X 224 (Fig. 17-(2)、Ch. 22) ——R 46区検出。東西150cm、南北(120)cmの不整形プランを呈し、深さ20cmである。重複するS X 213より古く、出土遺物に瓦器火舎、鉄釘、無文銭がある。

S X 225 (Fig. 24-(1)、Ch. 40) ——Q 46・47区検出。現状で明確な掘り込み線を確認することは困難であったが、およそ南北550cm、東西320cm、深さ23cmの規模を有する。覆土は灰を包含する単純層であるが、柱穴との切り合いがあり部分的に攪乱がみられる。出土遺物には、青磁盤・同碗、白磁皿、染付玉取獅子文皿、瀬戸灰釉皿、瓦器火舎、美濃天目碗、産地不詳播鉢、小札、鉄釘、鉄鏝 (Fig. 49-301)、火箸 (Fig. 50-308)、銅滓、革札、漆器被膜があり、16世紀代の廃絶と考えられる。

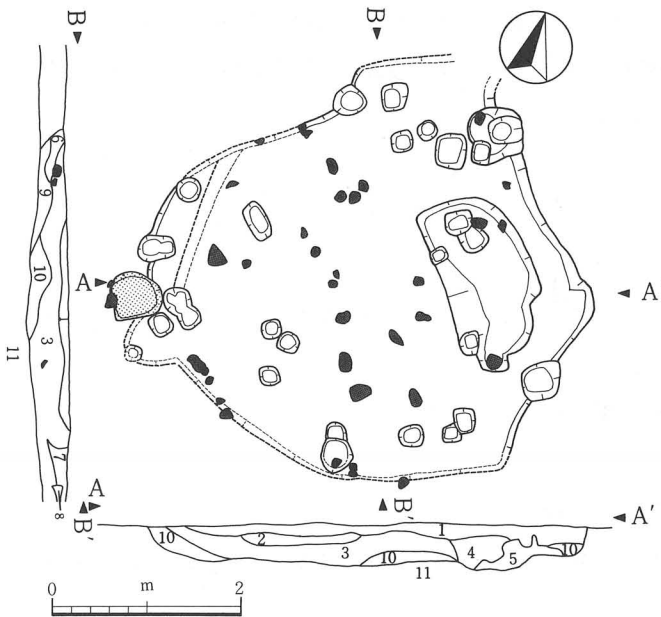
S X 226 (P L. 12-(2)、Fig. 24-(2)、Ch. 41) ——P・Q 45区検出。現状で明確な掘り込みは確認できないが、南北400cm、東西450cmの不整形プランを呈し深さは32cmである。覆土は灰・炭化物を含む一時埋没の状況を呈し、出土遺物としては青磁稜花皿・同線描蓮弁文碗、白磁内湾皿、染付碗・同皿、瀬戸灰釉浅鉢、美濃鉄釉壺、越前甕、産地不詳播鉢、小柄、鉄釘、永樂通宝・治平元宝・無文銭、砥石、石製人形頭部 (Fig. 53-353)、骨片等があり16世紀代の廃絶と考えられる。

Fig.24 竪穴遺構実測図 2

(1) SX225実測図



(2) SX226実測図



Ch.40 SX225覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に黄灰色灰(2.5Y R%)を10%と炭化物を1%含む。
2	黒色土(10Y R%)に極小～小塊状の炭化物を1%含む。
3	黒褐色土(10Y R%)に極小～小塊状の炭化物を1%含む。
4	黒色土(10Y R%)に極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)を7%と褐灰色灰(10Y R%)を3%と炭化物を1%含む。
5	黒褐色土(10Y R%)に極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)を2%含む。
6	にぶい黄褐色粘土(10Y R%)に黒褐色土(10Y R%)を10%含む。
7	にぶい黄褐色粘土(10Y R%)と黒褐色土(10Y R%)の混層に極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)を3%と炭化物を1%含む。
8	黒色土(10Y R%)と極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)の混層。
9	黒色土(10Y R%)に灰黄褐色灰(10Y R%)と3%と炭化物を2%含む。
10	黒色土(10Y R%)に灰黄褐色灰(10Y R%)と黒色灰(N%)と極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)と炭化物を1%づつ含む。
11	黒色土(10Y R%)に極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)を30%含む。
12	明黄褐色砂質土(10Y R%)。しまりなし。
13	地山、明黄褐色砂質土(10Y R%)。

Ch.41 SX226覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に小粒状の橙色粘土(7.5Y R%)と灰白色バミス(7.5Y R%)と炭化物を1%づつ含む。しまりあり。
2	黒褐色土(10Y R%)に赤褐色焼土(2.5Y R%)を10%と褐灰色灰(7.5Y R%)を薄い板状に3%と炭化物を中粒状に5%含む。
3	黒褐色土(10Y R%)と褐灰色灰(10Y R%)の混層ににぶい黄褐色砂質土(10Y R%)を小粒状に2%とにぶい黄褐色粘土(10Y R%)を極大粒状に1%と炭化物を極大粒状に7%含む。しまりあり。
4	黒褐色土(10Y R%)に褐灰色灰(10Y R%)を10%と橙色粘土(7.5Y R%)を小粒状に1%とにぶい黄褐色砂質土(10Y R%)を小粒状に1%と炭化物を5%含む。しまりあり。
5	灰白色灰(7.5Y R%)と黒色土(10Y R%)が7:3の混層。しまりなし。
6	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を極小粒状に3%と橙色粘土(7.5Y R%)を小粒状に1%と灰白色バミス(7.5Y R%)を10%と炭化物を1%含む。
7	黒褐色土(10Y R%)と褐灰色灰(10Y R%)が7:3の混層に灰白色バミス(7.5Y R%)と小粒状の黄褐色砂質土(10Y R%)と炭化物を1%づつ含む。
8	にぶい黄褐色粘土(10Y R%)。しまりあり。
9	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を小粒状に5%と炭化物を3%含む。しまりあり。
10	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を極大粒状に40%と炭化物を小粒状に1%含む。しまりあり。
11	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

S X 227——P 46区検出。一辺130cm前後の不整形プランを呈し、深さ28cm、青磁碗と瀬戸灰釉小皿の2片が出土している。

S X 228 (Fig. 28-(2)、Ch. 49)——R 46区検出。東西200cm、南北105cmの不整形プランを呈し深さ20cm。覆土は灰・炭化物を多く含む混層で東側に存するS F 55 (焼土遺構)と密接な関連を有すると考えられる。出土遺物には青磁皿、判読不能銭、石鉢があった。

S X 229 (Fig. 12-(2)、Ch. 13)——長軸182cm、短軸120cmの方形プランを呈し、深さ29cmの舟底形を呈する。覆土には灰が多量に含まれ、埴埴、不明鉄製品、判読不能銭が出土している。

S X 231——O 45区検出。長軸348cm、短軸125cmの不整形プランを呈し深さは約10cmである。重複するS B 40、S X 203によって覆土は攪乱ぎみで、鉄滓状の出土遺物が1点だけあった。

S X 232——O 45区検出。南辺だけの検出であり、明確な規模はわからない。白磁端反皿が1点だけ出土しており、重複するS E 97より新しい構築である。

S X 236——S 46区検出。南北122cm、東西100cm、深さ20cmの方形プランを呈する。覆土には灰を多量に含み、美濃灰釉皿、鉄釘、判読不能銭、骨片等が出土している。

S X 237 (Fig. 25-(1)、Ch. 42)——T 45区検出。明確なプランを確認することはできず、東西430cm、南北390cm、深さ30cm程度の規模で掘り込みがみられた。覆土全域に灰が分布し焼土・炭化物も部分的にみられる。出土遺物も覆土全域に分布し、青磁稜花皿・同碗、白磁端反皿、染付玉取獅子文皿・同羯磨文皿 (Fig. 43-198)、美濃灰釉皿、越前甕、瓦器火舎、鉄鏃、火箸、小札、鉄釘、鉄針 (Fig. 51-330)、銅鋌 (Fig. 51-232)、洪武通宝・太平通宝・開元通宝、埴埴、茶臼等があり、16世紀代の廃絶と推定される。

S X 238——T 45区検出。南北250cm、東西230cmの不整形プランを呈し、深さ36cmである。なお南側に一辺100cm弱の隅丸方形プランを呈する掘り込みがあり本遺構を切っている。出土遺物に不明鉄製品、搗鉢、青磁碗、白磁皿がある。

S X 239——U 44・45区検出。東側だけの検出であり、深さ37cmの不整形プランを呈し遺物はない。

S X 241——S・T 45・46区検出。明確な規模を確認できず。

S X 242・243——欠番。

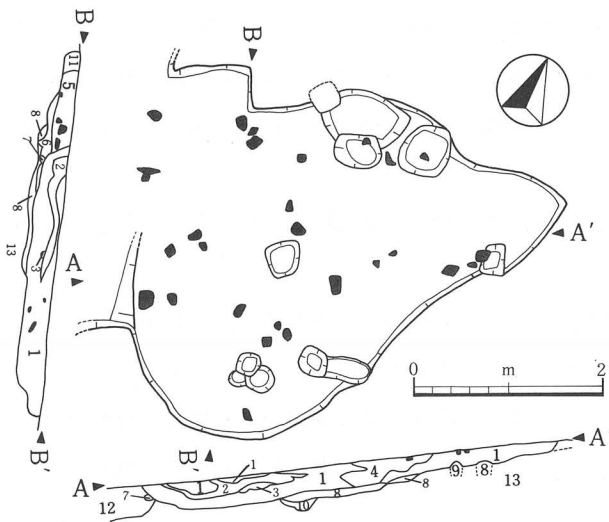
S X 244——特殊な遺物を出土する遺構として後述。

S X 246——T 45・46区検出。南北205cm、東西168cm、深さ10cmの不整形プランで出土遺物はない。

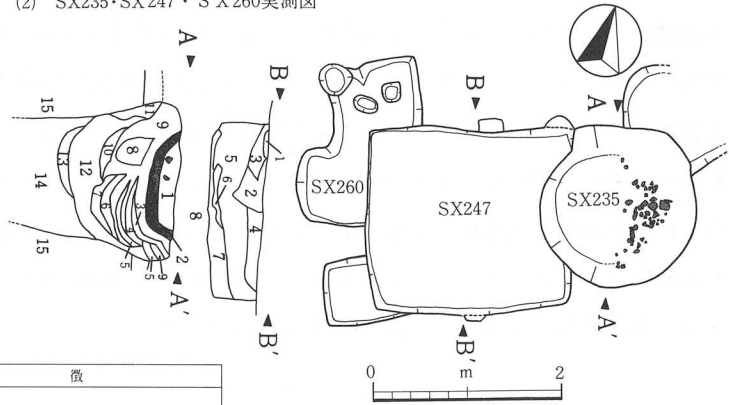
S X 247 (P L. 12-(3)、Fig. 25-(2)、Ch. 44)——T 46区検出。長軸215cm、短軸190cmの長

Fig.25 竪穴遺構実測図 3

(1) SX237実測図



(2) SX235・SX247・SX260実測図



Ch.42 SX237覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色灰(10Y R _{3/2})に黄褐色焼土(10Y R _{5/2})と炭化物を1%含む。
2	黒褐色灰(10Y R _{3/2})にふい黄褐色粘土(10Y R _{5/2})を50%と明黄褐色粘土(10Y R _{7/2})を30%含む。
3	黒褐色灰(10Y R _{3/2})にふい黄褐色粘土(10Y R _{5/2})を50%と橙色焼土(5Y R _{5/2})を20%含む。
4	黒褐色灰(10Y R _{3/2})と灰色白灰(10Y R _{7/2})の混層。
5	黒褐色灰(10Y R _{3/2})と灰白色灰(10Y R _{7/2})の混層に炭化物を1%含む。しまりなし。
6	黒褐色灰(10Y R _{3/2})に黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を小アロック状に30%含む。
7	黒褐色灰(10Y R _{3/2})。
8	黒褐色灰(10Y R _{3/2})に黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を中アロック状に60%含む。
9	黒褐色灰(10Y R _{3/2})に黄褐色粘土(10Y R _{5/2})を3%含む。
10	黒色灰(10Y R _{3/2})。
11	黒褐色土(10Y R _{3/2})に暗褐色土(10Y R _{3/2})を30%と灰白色パミス(10Y R _{7/2})を1%含む。
12	黒褐色土(10Y R _{3/2})に黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を小アロック状に10%と灰白色灰(10Y R _{7/2})を3%と炭化物を1%含む。
13	地山、黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})。

Ch.43 SX235覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R _{3/2})。
2	極小～中塊状の小石群。
3	黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})。
4	黒褐色土(10Y R _{3/2})と褐灰色灰(10Y R _{7/2})の混層に極小塊状の炭化物を1%含む。
5	黒褐色土(10Y R _{3/2})と灰黄褐色灰(10Y R _{7/2})の混層に部分的に褐色砂質土(7.5Y R _{3/2})を5%と炭化物を1%含む。
6	黒褐色土(10Y R _{3/2})に灰黄褐色灰(10Y R _{7/2})を30%と小塊状の炭化物を1%含む。
7	黒褐色土(10Y R _{3/2})と褐灰色灰(10Y R _{7/2})の混層に極小～小塊状の炭化物を1%含む。
8	黒褐色土(10Y R _{3/2})に褐灰色灰(10Y R _{7/2})を小塊状に7%と極小～小塊状の炭化物を2%含む。
9	黒褐色土(10Y R _{3/2})に炭化物を2%含む。
10	黒褐色土(10Y R _{3/2})にふい黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を8%含む。
11	黒褐色土(10Y R _{3/2})と灰白色灰(10Y R _{7/2})の混層に炭化物を1%含む。
12	黒色土(10Y R _{3/2})に褐灰色灰(10Y R _{7/2})を5%とふい黄褐色灰(10Y R _{7/2})を極小～小塊状に2%と極小塊状の黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})と炭化物を1%含む。
13	黒色土(10Y R _{3/2})にふい黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を8%とふい黄褐色灰(10Y R _{7/2})と褐灰色灰(10Y R _{7/2})を5%づつ含む。
14	黒色土(10Y R _{1.7/1})に褐灰色灰(10Y R _{7/2})を10%とふい黄褐色灰(10Y R _{7/2})を8%と極小塊状の炭化物を1%含む。
15	地山、明黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})。

Ch.44 SX247覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R _{3/2})にふい黄褐色粘土(10Y R _{5/2})を中粒状に50%含む。
2	黒褐色土(10Y R _{3/2})に暗褐色砂質土(10Y R _{3/2})を30%と暗褐色灰(7.5Y R _{3/2})を20%と炭化物を含む。
3	黒褐色土(10Y R _{3/2})に黄褐色粘土(10Y R _{5/2})を中板状に5%含む。
4	黒褐色土(10Y R _{3/2})にふい褐色粘土(7.5Y R _{5/2})を中粒状に10%と黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を1%含む。
5	黒色土(10Y R _{3/2})に黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を小粒状に3%と褐色粘土(10Y R _{5/2})を中粒状に1%と炭化物を7%含む。
6	黒色土(10Y R _{3/2})と黒色灰(2.5Y _{3/2})の混層。
7	黒褐色土(7.5Y R _{3/2})に黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})を大粒状に4%含む。
8	地山、黄褐色砂質土(10Y R _{5/2})。

方形プランを呈し、深さ50cmである。覆土には炭化物・灰・粘質土が混在して一時埋没の状況を呈し、S X 235（井戸跡）の方が新しい構築である。出土遺物には、青磁無文碗・同皿、白磁皿、美濃灰釉皿・同天目碗、越前甕、不明鉄製品、鉄釘、小札、不明銅製品（Fig. 51-333）、開元通宝・政和通宝・無文銭、革札、硯等がある。近接するS X 244とほぼ同形・同規模の遺構であることから、S X 244に類似した機能のもとに構築されたのかもしれない。廃絶年代は16世紀代と考えられる。

S X 248—U 47区検出。長軸204cm、短軸152cm、深さ33cmの楕円形プラン播鉢状を呈し、遺物の出土はみられなかった。

S X 253—T 46区検出。S X 241と重複しているため規模は不明確で、深さ10cmの浅い掘り込みを呈している。内面を黒色処理したかわらけ状の土器片が床面直上から出土している。

S X 256（Fig. 12-(2)）—T 47区検出。S T 252の精査段階で床面から検出し、径90cmの円形プランで深さ93cm（S T 252床面から）のフラスコ状ピットである。底面から川原石が8個検出され、出土遺物にかかわりが1点あった。

S X 258（Fig. 16-(2)）—Q 46区検出。東西140cm南北128cmの不整形プランを呈し、深さ23cmである。S B 42・S X 222と重複しているが新旧関係は不明で出土遺物はない。

S X 259（Fig. 15、Ch. 18）—U 47区検出。径180cmの円形プランを呈し、深さ50cmの播鉢状掘り込みを呈するがS T 261床面と同レベルなため明確な掘り込みは認められない。出土遺物には天禧通宝が1点存在する。重複するS T 261・S E 103より新しい構築である。

S X 260（Fig. 25-(2)）—T 46区検出。南北164cm、東西95cmの不整形プランを呈し、深さ20cm。重複するS X 247より古い構築で鉄釘が1点出土している。

F 溝 跡

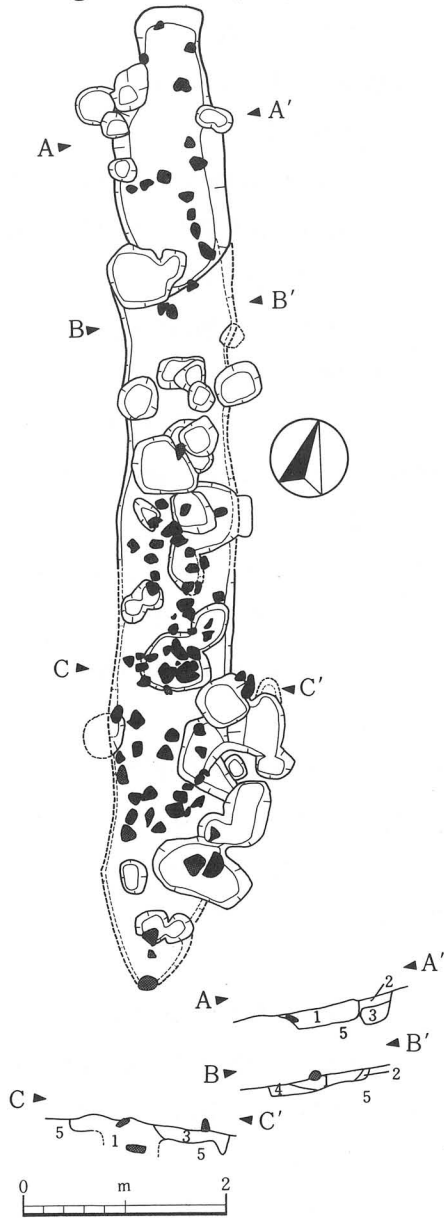
溝跡には、城館期のもつそれ以前の二時期の構築がみられ、機能的には雨落溝、建物を区画する溝、排水溝等が考えられるけれども、現実的には機能不明のことが多い。

S D 80—U 45区検出。幅165cm、深さ55cmで東西に走ると思われるがS T 256と重複しているため明確でなく、S D 82に引き続く可能性もある。出土遺物はない。

S D 81—U 45・46区検出。南側へV字状に開きながら東西に走るもので東側はS T 263、西側はS T 256の部分で不鮮明に消滅する。幅134cm、深さ28cmで出土遺物に鉄滓と砥石および須恵器・土師器片があった。

S D 82—U・V 45・46区検出。S T 256・S T 257と重複しながら南北に走るもので最大幅260cm、深さ20cmである。重複するS T 257より古い構築であることは確認されており、出土遺物として砥石が1点と土師器・須恵器片があった。

Fig.26 SX202実測図



Ch.45 SX202覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	褐灰色灰(10Y R $\frac{2}{2}$)と黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層で下層ほど灰が多い。
2	黒褐色土(10Y R $\frac{2}{2}$)と明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)の混層。
3	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)が粒状に3%混入。
4	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)が粒状に3%混入しにふい黄橙色粘土(10Y R $\frac{2}{2}$)を極大粒状に含む。
5	地山、明黄褐色砂質土(10Y R $\frac{2}{2}$)。

S B83——U・V47区検出。S T260(新)と重複しているため南側の範囲は確認できず、最大幅120cm、深さ13cmで南北に走る溝と考えられる。出土遺物には須恵器・土師器片しかない。

S D84(P L. 13-(2))——T46・47区検出。最大幅112cm、深さ20cmで東西に走り、西側はS X235と重複して消滅している。出土遺物には、染付碗、青磁碗、土師器坏、不明鉄製品、須恵器・土師器片がある。

S X202(PL. 13-(1), Fig. 26, Ch. 45)——Q・R47区検出。S B41(新)や他の柱穴と重複しているが、覆土には灰と多くの川原石が廃棄された状態で内包され一見した感じは雨落ち溝のような印象を受けた。しかし軸を同じくする建物跡が検出されなかったことから、他の機能も考慮しなければならない。覆土からの出土遺物として、白磁皿、越前甕、産地不詳播鉢、溶解物、鉄釘、鉄鏃、不明鉄製品、筭、銅線、銅鋸(Fig. 51-331)、判読不能銭、漆器被膜の他、重複する柱穴底から茶臼(Fig. 52-339)が出土している。

S X249——T46・47区検出。S X244の北側に存在し、最大幅114cm、深さ25cmで南北に伸びると思われる。S X244より古い構築であり、無釉陶器が1点出土している。

S X250——T・U46区検出。S X247から南側に伸びS T263に重複する部分まで確認している。最大幅180cm、深さ18cmであり出土遺物は須恵器、土師器片だけである。

S X252——T45・46区検出。S X241から南側へ伸びS X245(新)と重複している。出土遺物には須恵器・土師器片だけである。

G. 焼土遺構

焼土遺構として報告するものは、焼土・炭化物・灰の分布範囲の下に掘り込みがみられ、かまどや炉の機能を推定せしめる遺構である。ただし、上部構造が明確でないため、全体のイメージはつかみにくく機能論については今後さらに検討すべき課題である。

SF50 (PL.13-(3)、Fig.27-(1)、Ch.46) —— S45区検出。南側に長軸 175cm 短軸 110cm の長方形プランを呈し、深さ28cmの掘り込みがあり焼土・粘質土・炭化物を含む混層(1層)が充填してしまりもある。北側には周囲の灰の分布と共に中央に大小30個以上の川原石が火を受けた状態で立っており、近接して焼土(17層)・炭化物が分布する。下層の掘り込みは、北側にやや突き出し気味の部分があり灰が多く含まれて(19層)煙道に連なる箇所とも考えられる。出土遺物はすべて灰か焼土を含む層からの出土であり、本遺構が形成・廃絶される前後に埋没したと考えられ、主なものに、染付碗、美濃灰釉折縁皿、瓦器火舎、鉄釘、銅鋌、骨片、くるみ堅果、木材の表皮があり、16世紀後半の廃絶と考えられる。

SF52 (Fig.27-(2)、Ch.47) —— R46区検出。南北 117cmでL字形を呈する深さ18cmの掘り込みの覆土と西側に焼土・灰の分布がみられる。覆土内の焼土は、小ブロックになって点在于しており、この掘り込みを使用して燃焼したとは考えにくく、燃焼後の廃棄行為の所産と推定される。出土遺物としては鉄釘が3点ある。

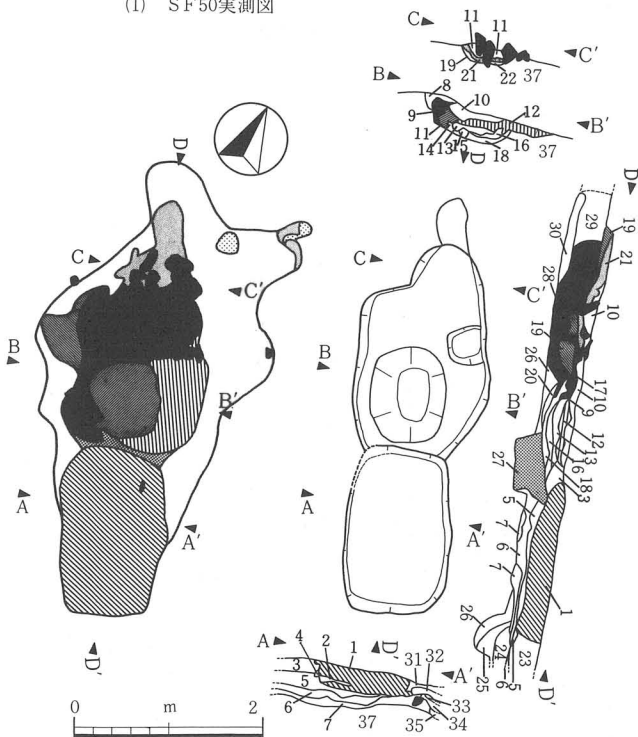
SF53 (Fig.28-(1)、Ch.48) —— S46区検出。長軸 140cm、短軸95cmの楕円形プランを呈し、深さ20cmの掘り込み底面上焼土がみられ、灰はその周囲 400cmに亘って認められた。おそらく、楕円形プランの掘り込みの中で燃焼行為をしたものと考えられ、覆土から白磁内湾皿、瀬戸灰釉浅鉢 (Fig.44-216)、青磁皿、鉄釘、不明鉄製品、小札、銅鋌が出土している。廃絶時期は15~16世紀と考えられる。

SF55 (Fig.28-(2)、Ch.49) —— R46区検出。SX 228の東側、覆土上面に存在し径 100cmほどの長円形に焼土・灰・粘土炭化物の分布がみられる。SX 228の覆土にも灰や炭化物がみられることから、本遺構と関連するものと考えられ、出土遺物に不明鉄製品、永楽通宝がある。

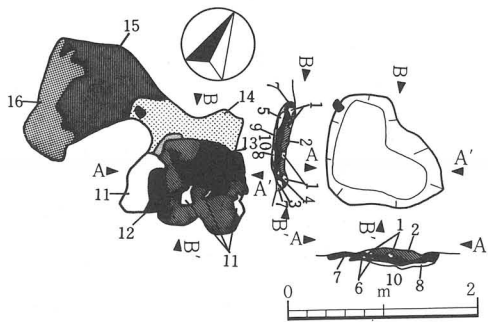
以上の他に、掘り込みを有せず単に焼土の分布がみられるものも多く、SF51 (R45区)、SF57 (T46区)、SF58 (T46区)、SF59 (U45区)、SF56 (T・U46区)、SF61 (T47区)、SF62 (T45区)、SF63 (U47区)、SF65 (S47区) などがあり、発掘区南半に集中していることを指摘できる。これらの痕跡が、落城に伴う焼失痕なのか、かまど・炉・囲炉裏などの痕跡なのか、鑄銅作業等の工房的所産なのか、現在の所明確な根拠がなく今後に残された問題点である。

Fig.27 焼土遺構実測図

(1) SF50実測図



(2) SF52実測図



Ch.47 SF52覆土層序注記表

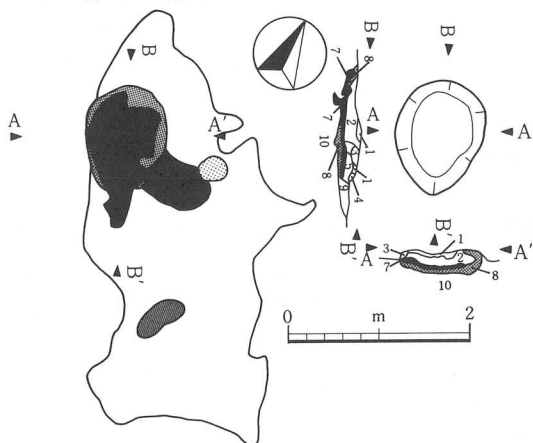
層序No.	特 徴	層序No.	特 徴
1	浅黄橙色焼土(7.5Y R%)。	8	黒色土(10Y R1.7/1)炭化物の混層。
2	褐灰色灰(10Y R%)と黒褐色土(10Y R%)の混層に浅黄橙色焼土(7.5Y R%)と小一平粒状の灰白色灰(10Y R%)と小塊状の炭化物を2%づつ含む。	9	褐灰色灰(10Y R%)。
3	にぶい黄橙色焼土(7.5Y R%)。	10	暗褐色土(10Y R%)。
4	にぶい橙色焼土(7.5Y R%)と灰白色灰(10Y R%)の互層。	11	灰色灰に炭化物が混入。
5	にぶい橙色焼土(7.5Y R%)と浅黄橙色焼土(7.5Y R%)の混層に褐灰色灰(10Y R%)を5%と中粒上の白色パミス(1%)を含む。	12	褐灰色の灰。
6	橙色焼土(7.5Y R%)。	13	炭化物。
7	灰白色灰(10Y R%)と灰白色灰(10Y R%)と黒褐色土(10Y R%)の混層に小塊状の炭化物を3%と橙色焼土(7.5Y R%)を10%含む。	14	黒褐色土に焼土と灰が混入。
		15	褐色土に灰が混入。
		16	灰色の灰。

Ch.46 SF50覆土層序注記表

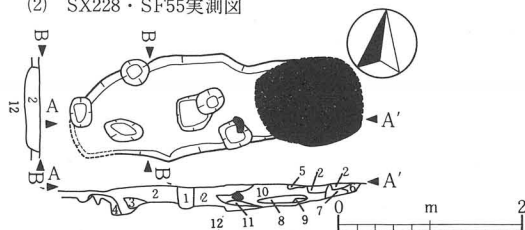
層序No.	特 徴
1	暗褐色土(10Y R%)に橙色焼土(7.5Y R%)を40%と橙色焼土(7.5Y R%)を10%とブロック状のにぶい黄褐色粘土(10Y R%)を3%と炭化物を1%含む。
2	暗褐色土(10Y R%)に炭化物を50%含む。
3	暗褐色土(10Y R%)に黄橙色砂質土(10Y R%)と橙色焼土(7.5Y R%)を1%づつ含む。
4	黒色土(10Y R%)。
5	黒褐色灰(2.5Y%)。
6	灰白色灰(2.5Y%)。
7	黒褐色土(5Y R%)と黒褐色灰(2.5Y%)と明褐色砂質土(10Y R%)の混層。
8	にぶい赤褐色粘土(5Y R%)に黒褐色粘土(5Y R%)を1%含む。
9	明褐色焼土(7.5Y R%)。
10	暗褐色土(10Y R%)ににぶい黄褐色粘土(10Y R%)を30%と炭化物を1%と灰色灰(10Y%)を%含む。
11	暗褐色土(10Y R%)に明褐色焼土(7.5Y R%)をブロック状に30%含む。
12	暗褐色土(10Y R%)に炭化物を40%と灰色灰(10Y%)を30%と明赤褐色焼土(5Y R%)を1%と明褐色焼土(7.5Y R%)を1%含む。
13	暗褐色粘土(7.5Y R%)に明赤褐色焼土(5Y R%)を3%と明褐色焼土(5Y R%)を1%と炭化物を1%含む。
14	暗褐色土(10Y R%)を50%と明赤褐色焼土(5Y R%)を50%との混層。しまりなし。
15	灰白色粘土(5Y%)。
16	にぶい黄色砂質土(2.5Y%)に明褐色灰(5Y R%)を50%含む混層。しまりなし。
17	橙色焼土(7.5Y R%)。
18	明赤褐色焼土(5Y R%)と明褐色灰(5Y R%)が10%との混層。
19	暗褐色土(10Y R%)に明褐色灰(5Y R%)を30%と橙色焼土(7.5Y R%)を3%含む。
20	褐色土(7.5Y R%)に明褐色灰(5Y R%)を20%と明赤褐色焼土(5Y R%)を5%との混層。
21	明赤褐色焼土(5Y R%)。
22	炭化物。
23	暗褐色土(10Y R%)に黄橙色砂質土(10Y R%)を3%含む。しまりあり。
24	暗褐色土(10Y R%)黄橙色砂質土(10Y R%)を3%と灰白色灰(2.5Y%)と黒褐色灰(2.5Y%)をそれぞれ20%づつ含む。
25	暗褐色土(10Y R%)に黒褐色灰(2.5Y%)を30%と灰白色灰(2.5Y%)を7%含む。しまりあり。
26	暗褐色土(10Y R%)と黄褐色砂質土(10Y R%)が50%との混層。しまりなし。
27	黒褐色灰(2.5Y%)に明褐色灰(5Y R%)を15%と黄褐色砂質土(10Y R%)を3%含む。
28	暗褐色土(10Y R%)に黒褐色灰(2.5Y%)を30%と明褐色灰(5Y R%)を10%と炭化物を1%と黄褐色砂質土(10Y R%)を5%含む。
29	暗褐色土(10Y R%)明褐色灰(5Y R%)を30%と黒褐色灰(2.5Y%)を10%と黄褐色砂質土(10Y R%)を5%と炭化物を1%含む。
30	暗褐色土(10Y R%)に褐灰色灰(5Y R%)を30%と黒褐色灰(2.5Y%)を10%と黄褐色砂質土(10Y R%)を10%含む。
31	黒褐色土(10Y R%)。
32	黒褐色土(10Y R%)に灰白色灰(2.5Y%)を10%含む。
33	黒褐色土(10Y R%)に黒褐色灰(2.5Y%)を30%と明黄褐色粘土(10Y R%)を1%含む。
34	黒褐色灰(2.5Y%)。
35	黒褐色灰(2.5Y%)に灰白色灰(2.5Y%)を15%と黄褐色砂質土(10Y R%)を20%含む。
36	褐色砂質土(10Y R%)。
37	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

Fig.28 焼土遺構実測図 2

(1) SF53実測図



(2) SX228・SF55実測図



H. 特殊な遺物出土状況を呈する遺構

1). SX213 (P.L. 8-(2), Fig. 17-(2), Fig. 29)

本遺構についてはすでに竪穴建物跡の項目で遺構の特徴は述べた。よって出土遺物の特徴を述べると、以下のようになる。

出土遺物の最も大きな特徴は銭貨にある。出土銭貨は覆土および床面から散在した状態で総数44枚が出土している。銭名のわかるものとして洪武通宝（3枚）、紹聖元宝（1枚）、開元通宝（3枚）、元豊通宝（1枚）、淳祐元宝（1枚）、皇宋通宝（1枚）があり、判読不能銭（10枚）と無文銭（24枚）も多い。無文銭の比率は57%にも達し、平均的出土率と比較しても高く、本遺構に意図的に廃棄されたものと考えられる。銭名のわかるものでも（Fig.29-2・9・11・12・33）質的には磨耗したり腐蝕が著しかったり粗悪な銭貨だけであり、無文銭にしても径1.2cm（Fig.29-19）の極小のものまで私鑄銭とみた場合でも粗悪な製品が多い。

金属製品としては、長さ19cmの槍状鉄製品（Fig.29-37）、小札2点（Fig.29-38・39）、長さ4.6cmの小型錠前（Fig.29-40）、2寸～1寸の長さの鉄釘（Fig.29-41～51）、銅製鋸ないしは釘の類（Fig.29-52・53）、径1.2cm前後の変形した鉄砲玉2点（Fig.29-54・55）があり、錠前は浪岡城で初めての出土である。

Ch.48 SF53覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に褐灰色灰(10Y R%)を30%と炭化物を15%含む。しまり強い。
2	黒褐色土(10Y R%)にふい橙色焼土(7.5Y R%)と炭化物を1%と鉄分を含む。
3	ふい橙色焼土(7.5Y R%)。
4	ふい黄褐色粘土(10Y R%)に黒褐色土(10Y R%)を10%含む。しまり強い。
5	黒褐色土(10Y R%)にふい橙色焼土(7.5Y R%)を25%含む。
6	黒褐色土(10Y R%)とふい黄褐色粘土(10Y R%)の混層。
7	炭化物にふい黄褐色粘土(10Y R%)が3%混入。
8	中央がふい黄褐色焼土(10Y R%)端部がふい橙色焼土(7.5Y R%)。
9	黒褐色土(10Y R%)に明褐色灰(7.5Y R%)が25%の混層に炭化物を5%含む。
10	地山、明黄褐色砂質土(10Y R%)。

Ch.49 SX228・SF55覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土(10Y R%)に黒色灰(N%)を3%と極小塊状の炭化物を1%と下層に明黄褐色砂質土(10Y R%)を10%含む。
2	黒色土(10Y R%)を極小～小塊状の黄褐色砂質土(10Y R%)の混層に黒色灰(N%)を5%と炭化物を2%含む。
3	黒色土(10Y R%)。
4	黄褐色砂質土(10Y R%)。
5	ふい黄褐色粘土(2.5Y%)。しまりあり。
6	黒色土(10Y R%)と橙色焼土(7.5Y R%)とふい黄色粘土(2.5Y%)と灰褐色灰(10Y R%)と炭化物の混層。
7	橙色焼土(7.5Y R%)。下層に層状に炭化物を含む。
8	橙色焼土(7.5Y R%)。下層に層状に炭化物を含む。
9	暗灰黄色灰(2.5Y%)に炭化物を下層に層状に10%含む。
10	黒色土(10Y R%)にふい黄色粘土(2.5Y%)と暗灰黄色灰(2.5Y%)と橙色焼土(7.5Y%)と黒褐色灰(10Y R%)を2%づつ含む。
11	黒色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を30%含む。
12	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

漆器としては径20.5cmの大型盤状の製品がある。木質部は腐蝕のためほとんど残っていなかったが、漆器被膜は $\frac{2}{3}$ ほどほぼ原形に近い状態で残存していた。Fig. 29-56はその被膜を基に推定復原したものであり木質の厚さは誤差があるかもしれないが高台の高さや口径はほぼ原形に近いと考えている。色彩は、高台内（底も含む）が黒色漆であり、他の内外面は朱漆によって塗彩されている。出土状態（P.L. 2-(6)）は、床面直上において斜行しているものの正立の状況で検出され、全形がみられなかった所をみると廃棄されたものと考えられる。

陶磁器類には図示はできなかったが、青磁稜花皿、白磁皿、染付牡丹唐草文端反皿、美濃灰釉皿・同天目碗、産地不詳黒褐釉壺、産地不詳播鉢、溶解物、羽口等が出土しており、16世紀代の廃絶と考えられる。

この他の出土遺物として若干の骨片も出土していたため、本遺構を当初は土塚墓的な機能を有すると考えていたが、床面精査の段階で柱穴が検出され本遺構には何らかの上部構造が存在した可能性を否定できず、祭祀・儀礼的な施設と考えるのが妥当であろうか。遺構の構造としてはS X 31（昭和55年度調査、浪岡城跡Ⅳ）やS X 89（昭和57年度調査、浪岡城跡Ⅵ）に類似しており、出土遺物が意図的に廃棄（あるいは埋設かもしれない）されている所に特徴がある。宗教儀礼の中で、簡易な基壇等を造る中でこのような竪穴構築し、埋没にあたって上記に類似した遺物を包含したという考え方はできないであろうか。類例があったら御教示願いたい。

2) S X 244 (P.L. 14, P.L. 15, P.L. 16, Fig. 30~36, Ch. 50, Ch. 51)

本遺構から出土した遺物の総数（破片数）は740点であり、通常検出している遺構の10倍以上に達し、しかも陶磁器・鉄製品・銅製品・革製品・自然遺物他が一括廃棄の状態ですべて出土したことは遺構の構築と出土遺物の関連を考える上で貴重な例と思われる。

〔遺構の特徴〕（Fig. 30）

T46区検出。長軸（東西）208cm、短軸（南北）176cmの方形プランを呈し、深さは77cmである。覆土は、厚い灰層（5層）が出土遺物の面からも一つの指標として存在し、播鉢状の落ち込みを呈し、東南側で上端まで厚く西北端に薄く堆積している。この灰層の下には砂質土と灰層が互層状態になってみられ、遺物も層間から出土することが多いことを考えると一時埋没と思われる。また、掘り込み面はほぼ平均的で床面構築も竪穴建物跡と同様に地山そのものを床構築とするもので、柱穴痕等は検出されなかった。

〔遺物の出土状態〕

本遺構から出土した遺物のうち、完形に復元可能な陶磁もすべて破片の状態で出土し、破碎

Fig.29 SX213出土遺物

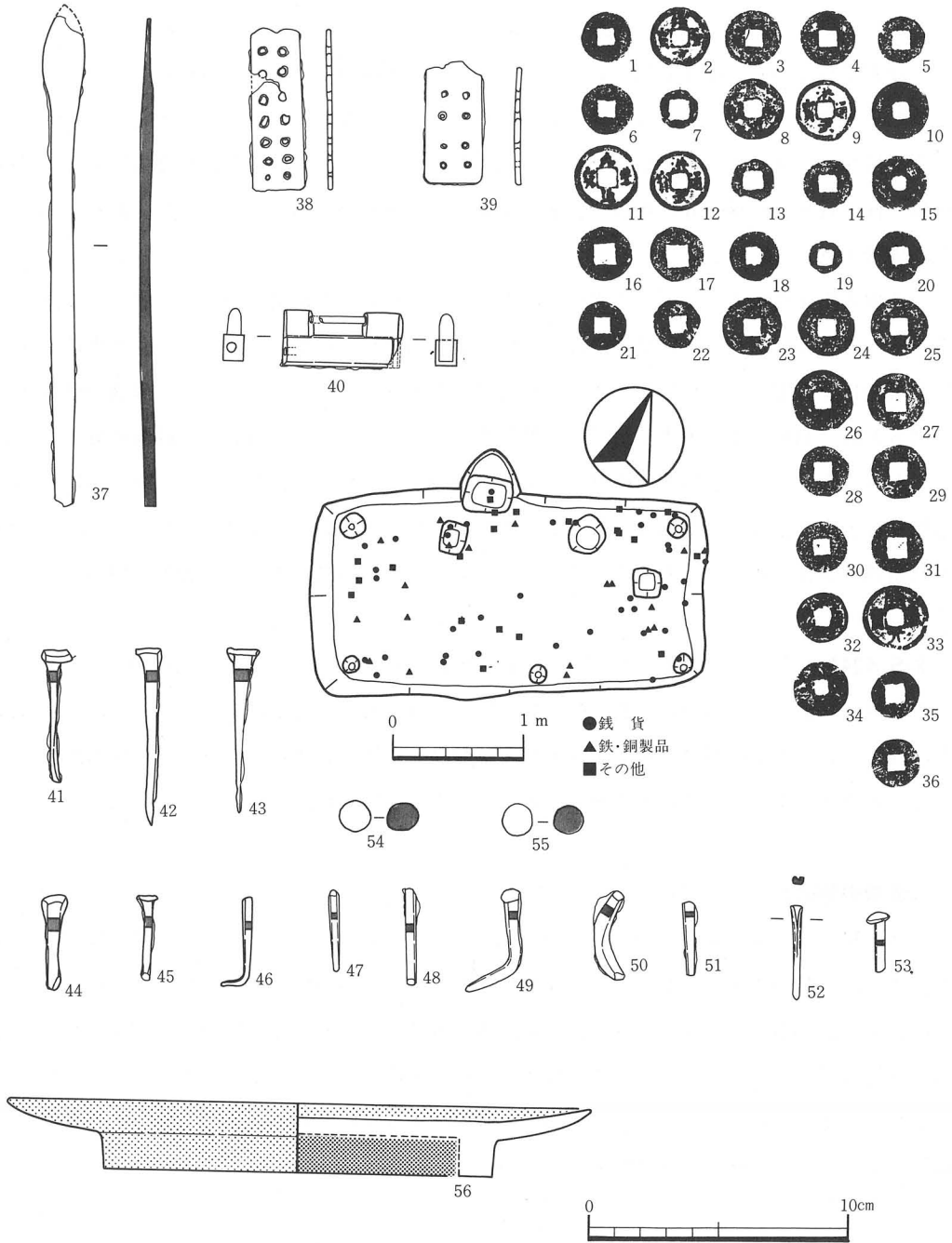
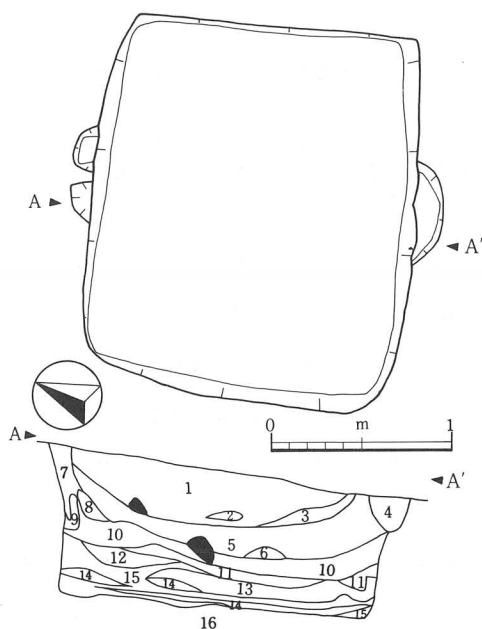


Fig.30 SX244実測図



Ch.50 SX244覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を1%と褐色灰(10Y R%)を5%と礫を7%含む。
2	にぶい黄褐色砂質土(10Y R%)。
3	黒褐色土(10Y R%)と明黄褐色砂質土(10Y R%)との50%つつの混層。
4	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を20%含む。
5	黒色灰(2.5Y%)に黄灰色灰(2.5Y%)が30%の混層に炭化物を3%含む。しまりなし。
6	黒色灰(2.5Y%)に黄灰色灰(2.5Y%)が30%の混層に黒褐色土(10Y R%)を10%と炭化物を3%を含む。
7	黒褐色土(10Y R%)に明黄褐色砂質土(10Y R%)を25%含む。
8	明赤褐色焼土(2.5Y R%)と黄灰色灰(2.5Y%)が50%の混層。しまりなし。
9	明褐色砂質土(7.5Y R%)。
10	黒色灰(2.5Y%)に黄灰色灰(2.5Y%)を40%と明黄褐色砂質土(10Y R%)を部分的に5%含む。
11	黒色灰(2.5Y%)に黄灰色灰(2.5Y%)を10%と炭化物を20%含む。
12	黄褐色砂質土(10Y R%)に黒褐色土(10Y R%)を10%と木炭を部分的に5%含む。
13	黄褐色砂質土(10Y R%)に黒褐色土(10Y R%)を10%含む。
14	黄褐色砂質土(10Y R%)。
15	黒褐色土(10Y R%)に黄褐色砂質土(10Y R%)を5%と黒色灰(2.5Y%)を3%と炭化物を3%含む。
16	地山、黄褐色砂質土(10Y R%)。

もかなり意図的である。それは出土分布をそれぞれの個体別にみても、場所の変化が明確に認められることから理解できる所である。それぞれについて述べよう。

青磁A (Fig. 31-(1)) ——青磁無文碗(57)であり、すべて灰層下の砂質土から出土しその分布は北東側に偏在している。

青磁B (Fig. 31-(2)) ——青磁小鉢(58)であり、すべて灰層下の砂質土から出土しその分布は南東側に偏在している。

青磁C (Fig. 31-(3)) ——青磁雷文帯人形手碗(59)であり、灰層直下で出土するものが多く、その分布は西側に偏在している。

白磁A (Fig. 31-(4)) ——底部から口縁にかけて一気に外反する白磁皿(60)であり、2片の出土で灰層直下から、南東に偏在して出土している。

白磁B (Fig. 31-(5)) ——硬質端反皿(61)であり、灰層の上下で出土し東側に偏在する。

白磁C (Fig. 31-(6)) ——歪みの激しい硬質端反皿(62)であり、すべて灰層下から南東に偏在して出土している。

染付A (Fig. 31-(7)) ——染付梵字文端反皿(64)であり、灰層直下からの出土数が最も多く南辺西側に出土分布が偏在している。

染付B (Fig. 31-(8)) ——染付玉取獅子文端反皿(65)であり、すべて灰層下からの出土

で南辺東側に偏在している。

染付C (Fig. 31-(9)) ——染付花卉文端反皿(66)であり、灰層に内包される状況で出土し南東側に分布が偏在している。

溶解物 (Fig. 32-(1)) —— 鑄銅・鑄鉄に際して出てくる溶解物であり、ほぼ灰層の中を中心に出土し揺鉢状を呈する灰層の中央部に多く分布している。

鉄釘 (Fig. 32-(2)) —— 総数 192点の出土があり、灰層等に関係なく覆土全域から出土しており南東隅に偏在している。

銅製品 (Fig. 32-(3)) —— 銅製品には武具の類が多く、鞋・鎧の縁金具・目貫などがあり、灰層から出土しているものが多くほぼ全域に分布がみられる。

小札 (Fig. 32-(4)) —— 総数131点の出土があり、長さや形状によって数類に分類できる。出土は灰層および灰層直下で出土するものが多く、南東側に多く分布している。

革札 (Fig. 32-(5)) —— 灰層および灰層直下からの出土が多く、分布も小札の範囲に類似している。

革製品 (Fig. 32-(6)) —— 使用目的は明確でないが皮革を加工し、漆を塗ったりする製品であり、ほとんどが灰層下および床面に近い位置からの出土で、偏在傾向はない。

銭貨 (Fig. 32-(7)) —— 10点の出土で灰層および灰層下から出土するものが多く、特に偏在する傾向もみられない。

自然遺物 (Fig. 32-(8)) —— 自然遺物としては堅果・炭化米・木皮などがあり、灰層下からの出土が多く、分布も特に偏在していない。

以上の出土遺物について出土状態を検討し、廃棄のあり方を考えると、陶磁器は各個体ごとに破碎してそれぞれの位置から投げ捨てていると思われる行為の足跡が推定される。つまり、青磁Aは北辺東側から、青磁Bは南辺中央から東側寄り、青磁Cは西辺中央部から、白磁A・B・Cは南辺東側から、染付Aは南辺西側から、染付B・Cは南辺東側から投げ捨てているらしい痕跡が認められる。これらの陶磁器は灰層下に位置するものが多いのに対して、金属器は灰層の中を中心に全域に分布する傾向を有し、皮革製品等は陶磁器のさらに下層から出土することが多い。このように、出土遺物の廃棄状態をみると、副葬やそれらに類似したものではなく、不用になったかあるいは意図して遺物を投げ込んだものと考えるのが妥当な所であろう。

〔出土遺物〕

本遺構から出土した遺物は数量・種類ともに多く、遺物の全体像を失わない程度で主なものを報告したいと思う。

Fig. 31 SX244出土遺物分布図(1)

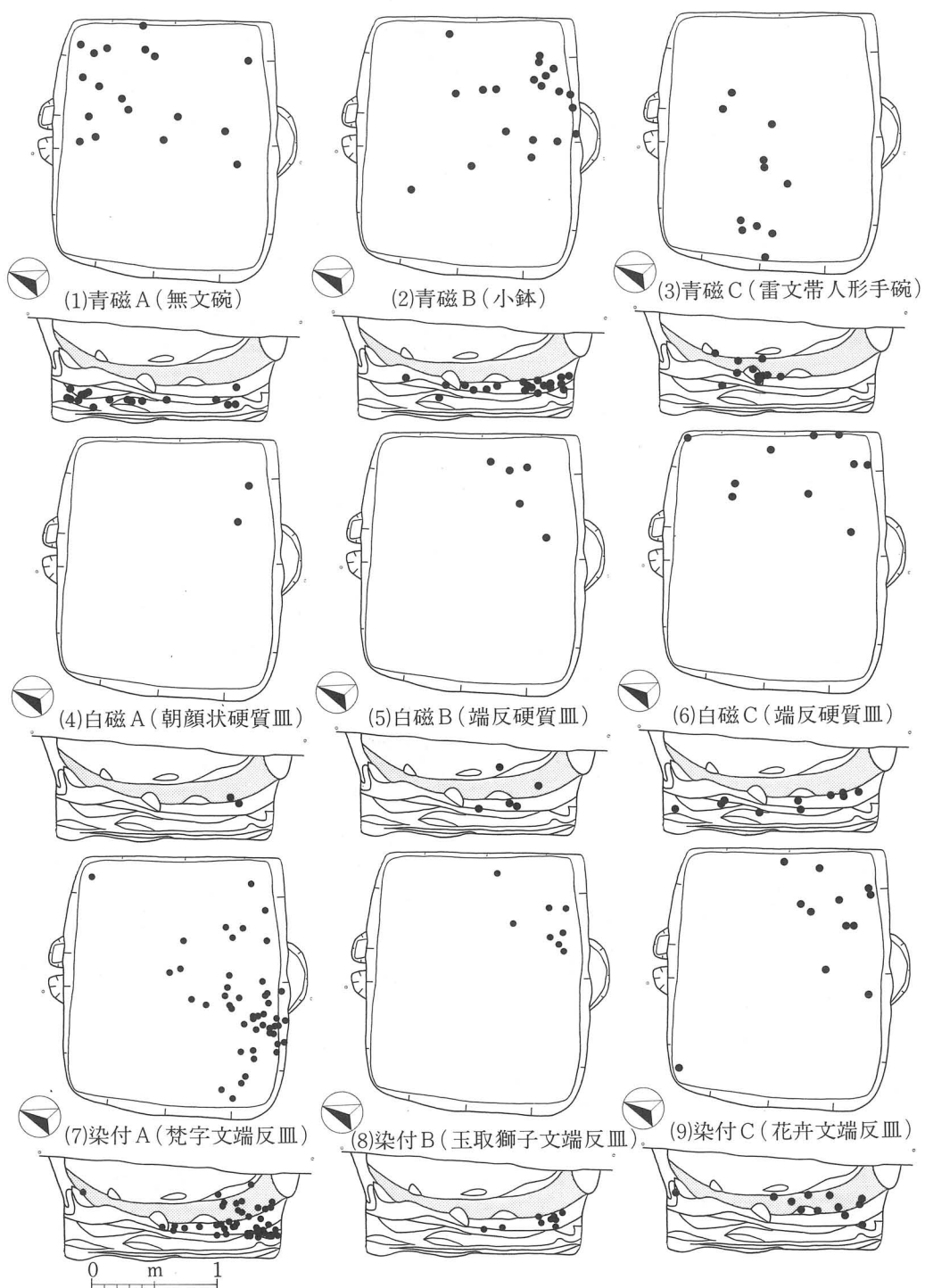
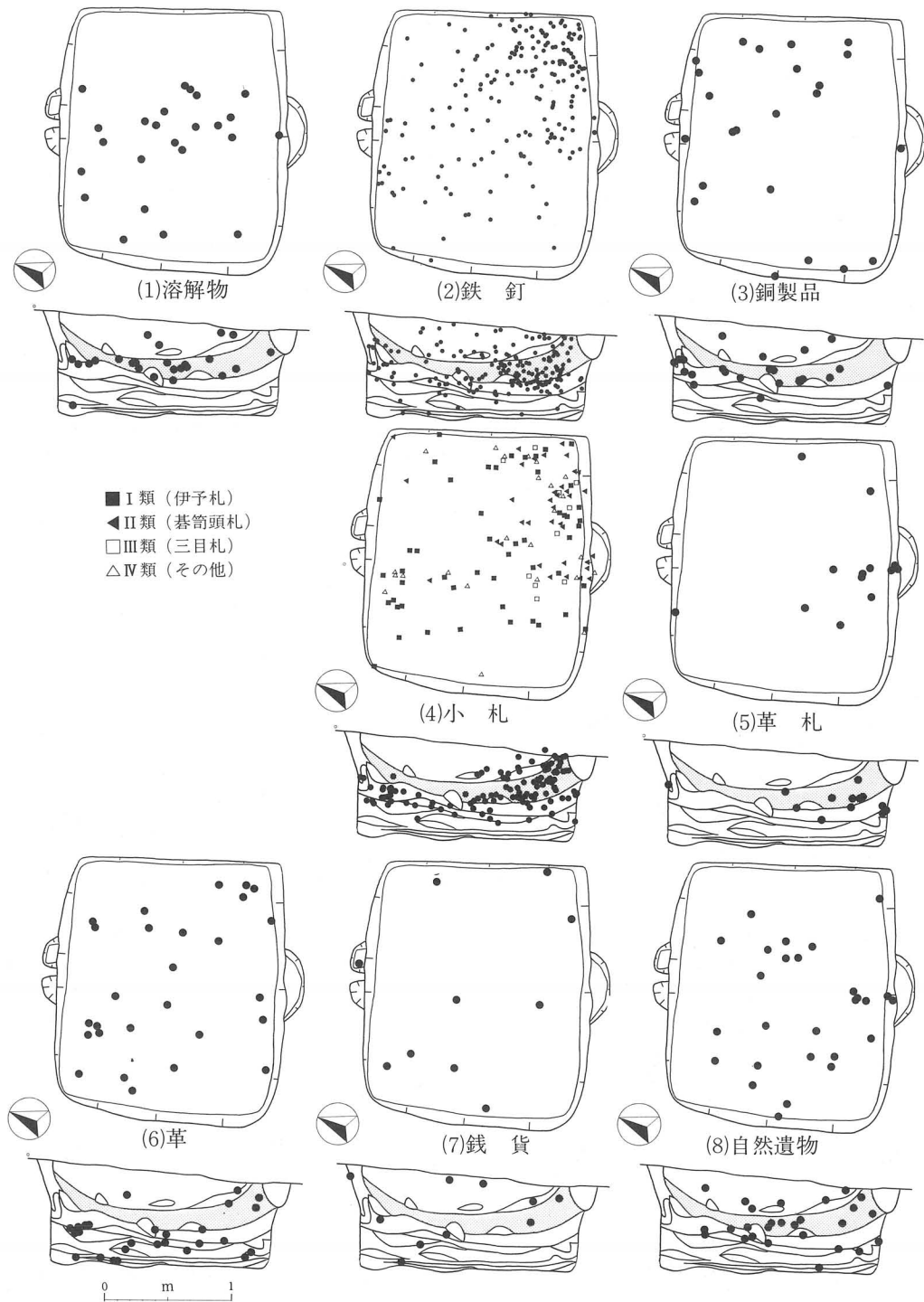


Fig. 32 SX244出土遺物分布図(2)



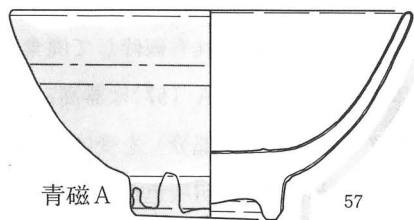
1. 陶磁器

a. 舶載品

舶載品として出土したものは、青磁・白磁・染付の三種がある。いずれも破碎して廃棄されていたものであり、全形を復元推定できるものが9個体存在する。青磁A（57）は器高7.3cm、口径14.1cmの無文碗であり、外面は全体に二次加熱（スクリーントーン部分）を受け表面の釉は細かく気泡状になっている。胎土は暗灰色で二次加熱を受けた部分は明灰色から黒灰色気味に変化し、釉調は暗黄灰色で全体に貫入が細かく入っている。口縁は直行気味の立ち上がりを呈し胴の張りは顕著でない。高台部は底を工具で回転しながら削り取り、畳付部までは施釉がおよんでいない。見込にはロクロ挽きの痕跡が残っているものの文様等はまったく施されていない。青磁B（58）は器高5.6cm、口径8.1cmの小鉢であり、胎土は青灰色の硬質精選土、釉調は透明度の強い青緑色を呈している。口縁は玉縁状に外反し胴部は張りを有せず肉厚な高台部に至る。底径は3.5cmで底を除いた畳付および立ち上がり部分まですべて施釉している。底には重ね焼きの痕跡と思われる粘土塊が付着している。外面は胴部中央に一条の劃線を巡らし、その上下に二本一對の劃線を縦位に交互に施し、内面は胴部に縦位の劃線および先丸の工具によるケズリを密に施し、見込には二本一對のケズリを櫛状に施している。全国的にも類例の少ない製品である。青磁C（59）は、推定器高10cm、推定口径17.6cmの大振りの碗であり、胎土は灰白色、釉調は明青緑色であり全体に大きい貫入が認められる。外面は全体に二次加熱を受け釉が気泡状を呈している。口縁は直行気味の立ち上がりを呈し、胴部下半の張りが顕著に認められ、高台は外側に開く状態で成形され畳付から立ち上がり部分まで釉がおよび、底が蛇の目状に施釉されている。外面口縁直下と内面口縁下2cmの部分にスタンプによる雷文帯が巡り、内面雷文帯下には人形手といわれる人物画スタンプ文がみられる。見込には「金玉満堂」の銘が施されている。

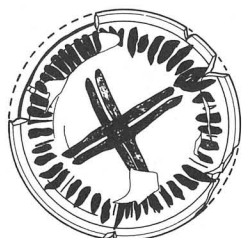
白磁A（60）は、器高2.5cm、口径12.0cmで高台から口縁にかけて一気に外反する朝顔状の皿である。胎土は硬質感のある灰白色、釉調は肉厚で暗灰色を呈し畳付部だけ施釉されていない。見込には重ね焼きのトチ痕が一箇所みられ、畳付には砂の付着がある。白磁B（61）は、器高2.9cm、口径11.2cmの端反皿であり、口縁外面に墨痕が認められる。胎土は白色、釉調はややくすんだ灰白色を呈し、畳付部だけ施釉がなされず高台部立ち上がりには釉ムラが認められる。高台内側には砂の付着がある。白磁C（62）は器高3.3~3.0cm、口径11.7~11.3cmとかなり歪んだ端反皿である。胎土は灰白色、釉調は斑らな暗灰色を呈し、畳付部だけ釉がハギ取られている。（63）は口径10cmの内湾気味に立ち上がる白磁小皿であり、胎土は硬質感のある灰白色、釉調は緑がかった白色釉が内面および外面胴部下半まで施されている。

Fig.33 SX244出土遺物実測図(1)



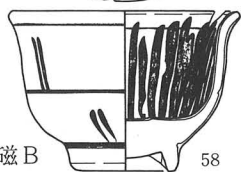
青磁 A

57



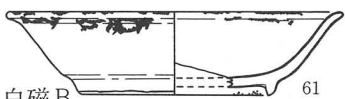
青磁 B

58



白磁 A

60



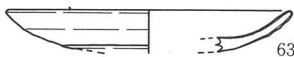
白磁 B

61

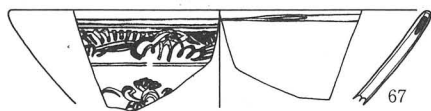


白磁 C

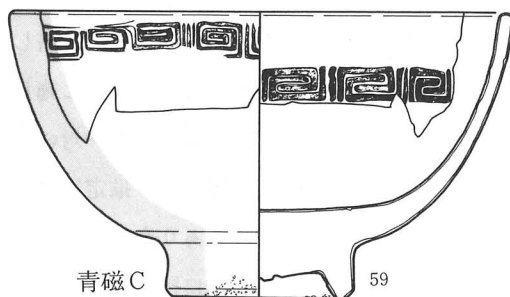
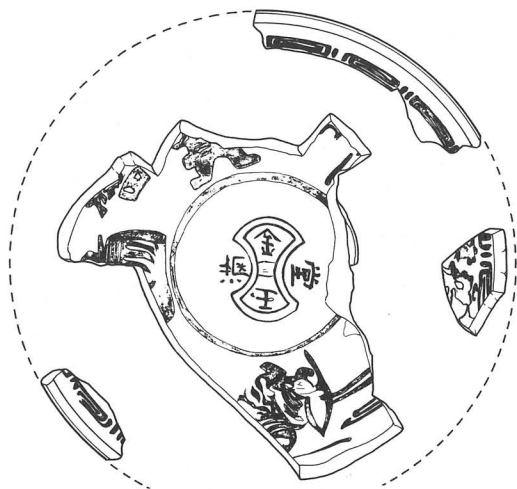
62



63



67



青磁 C

59



染付 A

64



染付A(64)は、口縁が端反りする皿であり器高3.1cm、口径12.6cmを測る。内外面ともに二次加熱を受けた痕跡があり破碎した破片数も出土陶磁器の中で最も多い。胎土は白色、呉須の発色は彩かな濃紺色を呈しており、高台畳付部だけ素地が露出している。外面は口縁部および高台部における圏線に狭まれた胴部に巴状の渦巻文を基本にした密集した文様がみられ、内面には胴部に六分割されたアラベスク風の文様と見込に四分割された中に梵字(あるいは吉祥)文をあしらった文様を配している。染付B(65)は、器高2.9cm、口径13.6cmの口縁端反りの皿である。胎土は白色、釉調は気泡の多い透明釉で呉須の発色はややくすんだ濃紺色を呈する。高台畳付部だけ素地が露出し、砂の付着が顕著に認められる。外面胴部にはややぼやけた状態の牡丹唐草文があり、内面見込に圏線にかこまれて玉取獅子文が描かれている。染付C(66)は全面に二次加熱がみられる口縁端反りの皿である。胎土は白色、釉調は青味のある青灰色で呉須の発色は彩かな濃紺色を呈するものの二次加熱を受けた部分は表面の気泡のためくすんだ発色である。高台畳付はやや幅広の成形であり、素地が露出して若干の砂が付着している。底にはロクロ成形による同心円状の調整痕がみられる。外面にはまったく文様を施さず、内面見込に圏線に囲まれて花卉文が描かれている。その他、染付碗としては外面口縁部に簡略化された波濤文帯、胴部にアラベスク文を有し漆による接合痕がみられる推定口径14.8cmのもの(67)と胴部外面に飛馬文のみられる蓮子碗(68)があり、どちらも破片による出土であり全形は明確でない。

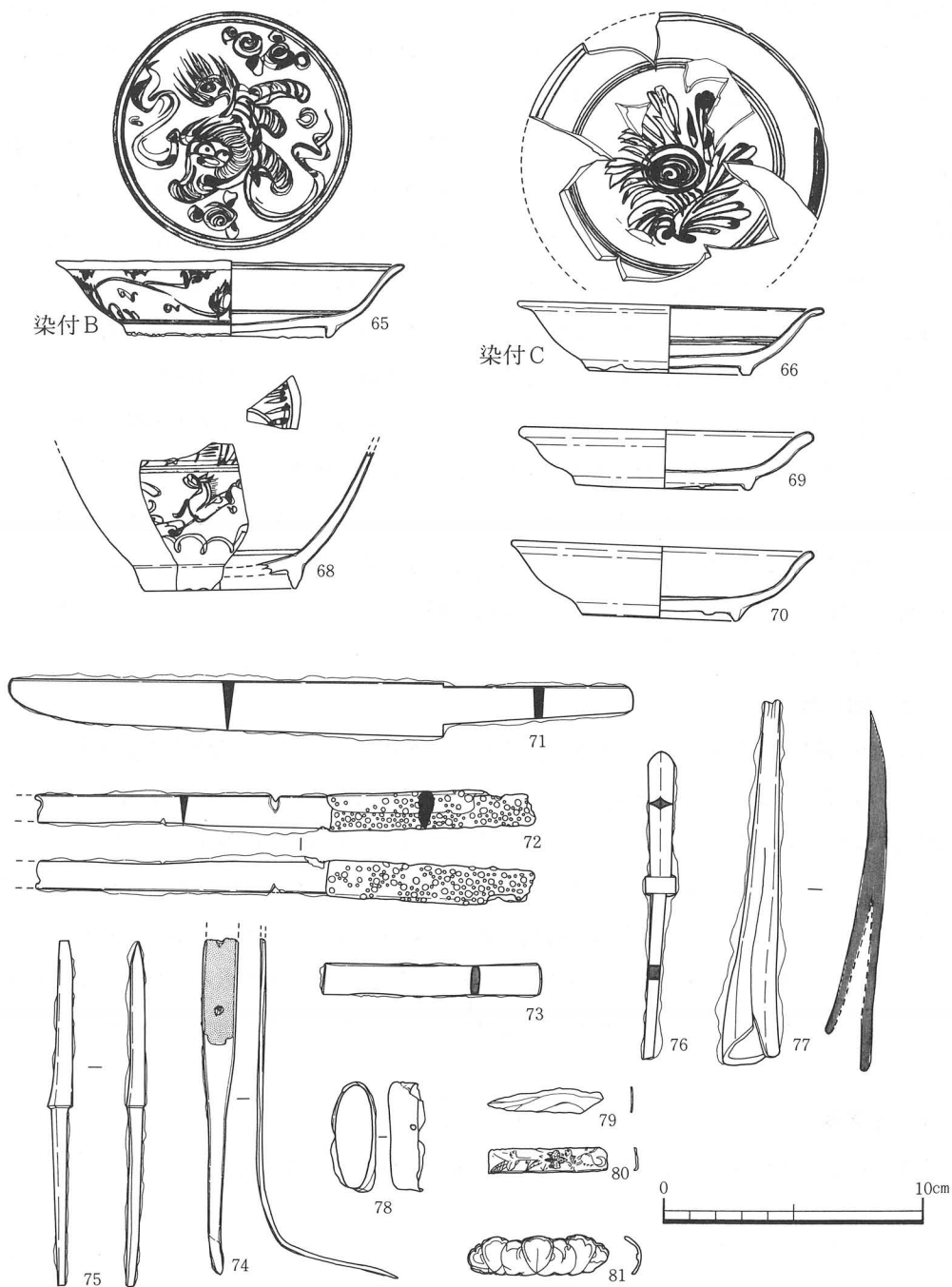
b. 国産品

国産陶磁器には、美濃灰釉皿、越前甕、産地不詳播鉢、瓦器があり美濃灰釉皿以外は小破片のため図示できなかった。(69)は口縁が端反する美濃灰釉皿であり、胎土は灰黄色、釉調は黄緑色で全面に貫入が認められる。底に輪ドチ痕が残り、高台畳付は使用による磨耗のためか釉が剥落して素地が露出する部分もある。(70)は前者よりやや薄手に成形された美濃灰釉端反皿であり、胎土は灰白色、釉調は黄緑色であるが見込と高台立ち上がり部分に釉溜りがみられガラス質の状態を呈する。全面に貫入がみられ、底には輪ドチ痕がある。越前甕はいわゆる大甕の胴部片が多く13片の出土、産地不詳播鉢は2片、瓦器は3片の出土があった。

2. 金属器

金属器の中には属性として鉄製品・銅製品があり、機能的には武器、生活用具、工具等があり今回は機能・用途から記述してゆく。

Fig.34 SX244出土遺物実測図(2)



a. 武具

武具には、小刀、小柄、鉄鏃、打根、小札、筭、目貫金具、鎧、鞘、胸板等の縁金具等があり、特に小札は総数131点の出土があり鎧の一部を廃棄したとも考えられる。

小刀(71)は、長さ24.2cm(刃部16.8cm、茎7.4cm)、刃先はやや丸味を有し茎に目貫孔はみられない。背の反りもほとんどみられないことから、簡易な腰刀として使用したのであろうか。

小柄は2点あり、刃部長11.2cm、柄長8.0cmの先端が折れているもの(72)があり、銅製柄は銅板を茎にまいて表面を凹凸に成形したものである。また、長さ8.6cmの柄部(73)があり、前者とちがい茎を差し込む形の成形がなされている。

筭(74)は、頭部が欠損し現長17.2cmである。地は七七五をまき紋は二箇所を孔をあけて止めていたと思われるが欠落している。地板下の木瓜形は明瞭に認められる。

鉄鏃は2点あり、長さ13.3cmの根が鑿状を呈し箆被が四角の断面形であるもの(75)と根が剣先状を呈し、箆被が四角ないしは丸形の断面形になる長さ11.9cmのもの(76)がある。

打根(77)は、円錐形の形状に内側が中空になって棒状のものを差し込む武器と考えられるもので、長さ14.2cm、幅2.3cmで中空になる部分は両側から折れ曲げ接合の痕跡がみられる。

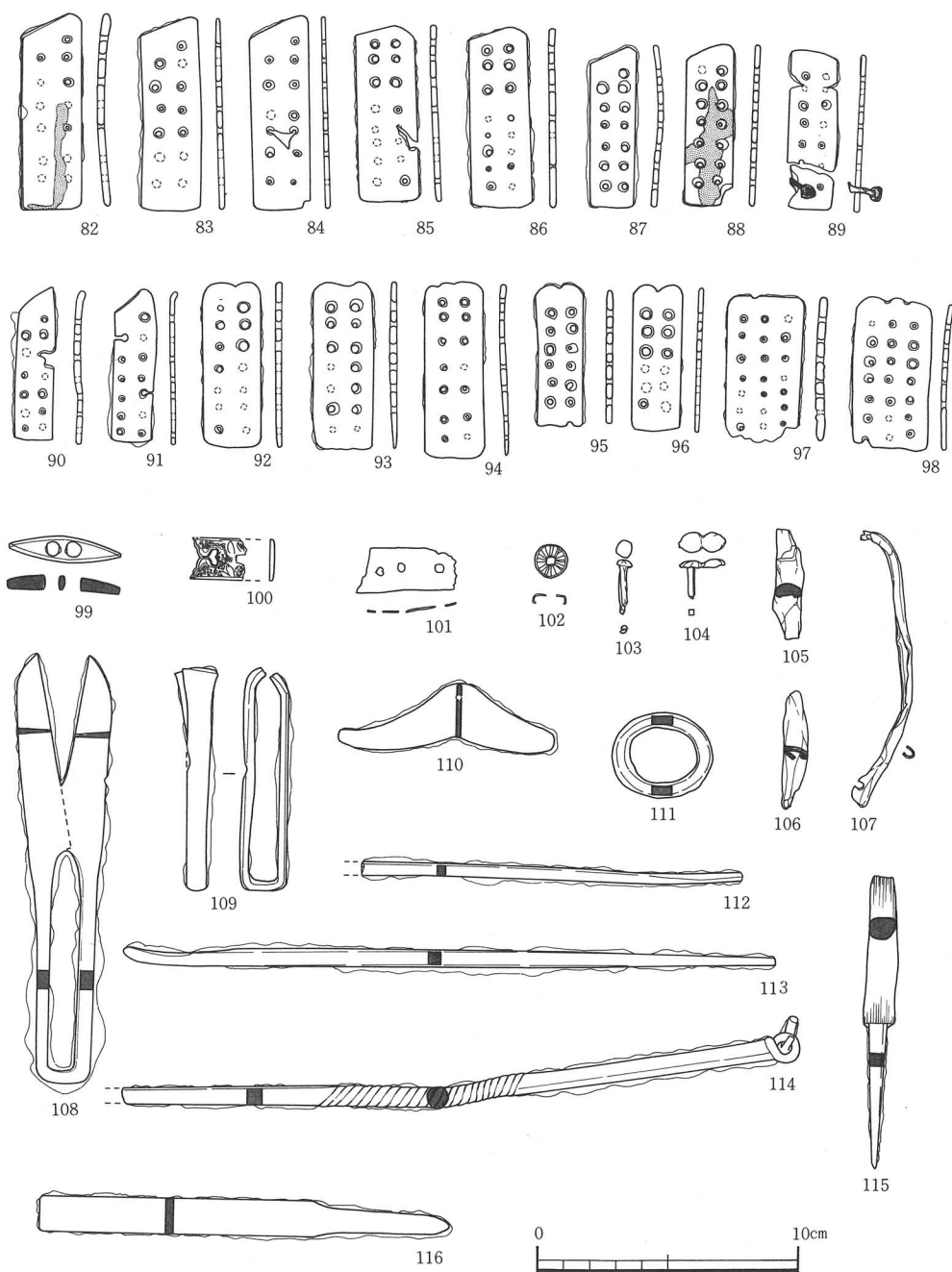
鎧(78)は長径4.3cm、短径1.6cmの楕円形を呈し高さ1.2cm、厚さ0.1cmで長辺中央に二孔が穿たれている。文様等は施されていない。

目貫金具と考えられるものは長さ5.3cmで多葉状の製品(81)があり、銅板を単に加工したもの(79)、長さ4.6cm幅0.9cmの方形を呈し地に木葉状の刻文を入れたもの(80)も類似した用途に使われたと思われる。

鎧の部品としては、小札、鞘、八双金具、飾り金具、縁金具等がみられ、数量の多い小札から述べたいと思う。小札は131個の出土があり、その形態と大きさがわかる126個を分類すると以下のようなになる。

- I (伊予札) I a 長さ7.6~7.0cm幅2.3~2.1cm、右側7孔左側6孔のもの (Fig 35-82・83・84)
- I b 長さ6.8~6.4cm幅2.3~2.0cm、左右8孔のもの (Fig、35-85・86)
- I c 長さ6.3~6.2cm幅2.2~1.9cm、右側7孔左側6孔のもの (Fig 35-87)
- I d 長さ6.1~5.9cm幅1.8~1.7cm、左右7孔のもの (Fig 35-88・89)
- I e 長さ5.8~5.1cm幅1.9~1.6cm、右側7孔左側6孔のもの (Fig 35-90・91)

Fig.35 SX244出土遺物実測図(3)



II (碁笥頭札) II a 長さ7.4~6.0cm幅2.3~2.1cm、左右7孔のもの (Fig 35-92・93・94)

II b 長さ5.8~5.1cm幅2.5~1.8cm、左右6孔のもの (Fig 35-95・96)

III (三目札) 長さ6.2~5.6cm幅3.2~2.8cm、三列7孔のもの (Fig 35-97・98)

IV その他不明のもの

それぞれ分類した小札の枚数は、I a 類15枚、I b 類12枚、I c 類10枚、I d 類5枚、I e 類11枚、II a 類13枚、II b 類26枚、III 類10枚、IV 類24枚であり、伊予札53枚、碁笥頭札39枚、三目札10枚となる。これら類別に分類した小札の出土状況を見ると (Fig 32-(4)) 各類ごとに集中したり、近接したりして出土する状況はみられず、陶磁器と同様に破壊してから投げ入れたということが考えられる。また、小札の中には黒漆を付着しているもの (82・88) も多く、接合関係 (革札か小札かは不明であるが) を有する製品もみられ、そのほとんどは伊予札にあたる。さらに銅鉾を最下端の一孔に打ち込んでいるもの (89) もあり注意を要する。以下、出土小札の計測表を載せておく。

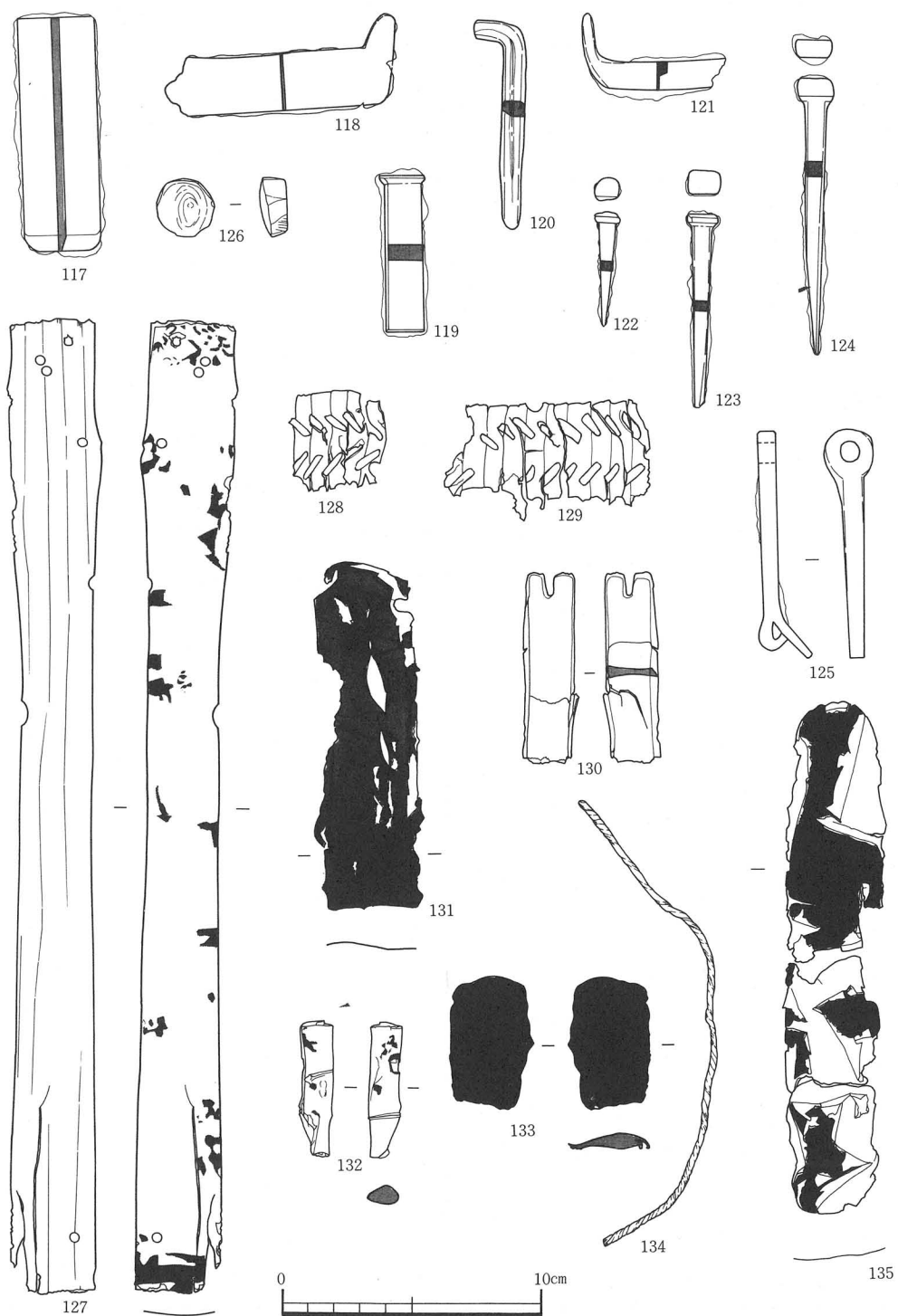
C h .51 S X 244出土小札計測表

FNo.	類別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔幅(cm)	接合痕	FNo.	類別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔幅(cm)	接合痕
2085	I a 伊予札	7.6	2.3	0.3	孔幅計測不可能	無	2139	I a 伊予札	7.0	2.1	0.3	孔幅計測不可能	無
2233	"	7.5	2.3	0.3	0.3-0.7-0.5	有							
2030	"	7.4	2.3	0.3	0.6-0.7-0.5	無	2143	I b 伊予札	(6.9)	2.0	0.2	0.6-0.5-0.4	無
2067	"	7.4	2.2	0.3	0.5-0.6-0.6	"	1743	"	6.8	2.3	0.2	孔幅計測不可能	"
2029	"	7.4	2.2	0.2	0.5-.7-0.4	"	2074	"	6.8	2.1	0.1	0.4-0.6-0.5	"
2027	"	7.4	2.3	0.2	0.5-0.6-0.5	"	1903	"	6.8	2.0	0.2	0.4-0.6-0.5	"
2031	"	7.4	2.2	0.2	0.5-0.7-0.5	"	2234	"	6.8	2.3	0.2	0.6-0.5-0.6	"
1963	"	7.4	2.3	0.2	孔幅計測不可能	"	2076	"	6.8	2.3	0.3	0.6-0.7-0.7	"
1845	"	7.3	2.3	0.2	"	"	967	"	6.7	2.3	0.1	0.5-0.7-0.6	"
2083	"	7.3	2.3	0.3	0.6-0.6-0.5	"	2028	"	6.7	2.3	0.2	0.6-.6-0.6	"
2175	"	(7.3)	2.2	0.2	0.6-0.5-0.5	"	1864	"	6.7	2.8	0.2	0.5-.6-0.6	"
2219	"	7.3	2.3	0.2	0.4-0.7-0.5	"	2023	"	6.7	2.0	0.2	.5-0.5-0.4	"
2142	"	7.2	2.2	0.2	0.5-0.6-0.5	"	2075	"	6.4	2.0	0.2	孔幅計測不可能	"
2144	"	(7.1)	2.3	0.2	0.5-0.6-0.5	"	2110	"	6.8	2.2	0.2	0.6-0.5-.6	"

FNo.	類別	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	孔幅(m)	接合痕	FNo.	類別	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	孔幅(m)	接合痕
2109	I c 伊子札	6.3	1.9	0.3	孔幅計測不可能	無	2077	II a 碁笥頭札	6.7	2.2	0.2	0.5-0.5-0.5	無
2198	"	6.3	1.9	0.3	0.4-0.6-0.4	"	2120	"	6.6	2.3	0.3	(0.6)- (0.6)-(0.6)	"
1904	"	6.3	2.2	0.2	0.6-0.6-0.6	有	1841	"	6.4	2.2	0.2	孔幅計測不可能	"
1862	"	6.3	1.9	0.2	0.3-0.5-0.5	無	1840	"	6.3	2.3	0.2	0.5-0.7-0.5	"
1863	"	6.2	1.9	0.3	0.2-0.6-0.5	有	1831	"	6.3	2.3	0.3	0.5-0.6-0.5	"
1901	"	6.2	2.1	0.3	0.4-0.9-0.5	無	1859	"	6.3	2.1	0.2	孔幅計測不可能	"
1981	"	6.2	1.9	0.2	0.4-0.5-0.5	"	2263	"	6.3	2.2	0.3	0.5-0.6-0.4	"
2073	"	6.2	1.9	0.2	0.3-0.5-0.6	"	1858	"	6.2	2.3	0.2	孔幅計測不可能	"
2104	"	6.2	1.9	0.2	0.3-0.4-0.3	"	2020	"	6.2	2.2	0.2	0.4-0.9-0.3	"
1964	"	6.2	1.9	0.3	0.4-0.5-0.6	無	1837	"	6.2	2.2	0.3	孔幅計測不可能	"
							2269	"	6.1	2.1	0.2	0.6-0.5-0.5	"
2124	I d 伊子札	6.1	1.8	0.2	0.4-0.4-0.4	無	1835	"	6.0	2.1	0.3	0.3-0.6-0.6	"
2108	"	6.1	1.8	0.3	0.4-0.5-0.3	"							
2176	"	6.0	1.8	0.2	0.4-0.5-0.3	"	1968	II b 碁笥頭札	(5.9)	2.2	0.2	0.6-0.6-0.4	無
2239	"	6.0	1.7	0.2	孔幅計測不可能	"	1900	"	5.8	1.9	0.2	0.5-0.5-0.3	"
1839	"	5.9	1.7	0.3	"	"	1902	"	5.8	2.0	0.2	0.4-0.6-0.3	"
							2068	"	5.7	2.1	0.2	孔幅計測不可能	"
2213	I e 伊子札	5.8	1.6	0.2	0.3-0.5-0.5	無	1728	"	5.7	2.2	0.3	0.4-0.6-0.6	"
1898	"	5.8	1.5	0.2	0.3-0.4-0.2	"	1746	"	5.7	2.2	0.3	0.5-0.6-0.5	"
1966	"	5.8	1.6	0.2	0.3-0.5-0.3	"	2246	"	5.7	2.0	0.2	0.5-0.4-0.6	"
2241	"	5.8	1.6	0.2	0.3-0.4-0.4	"	1740	"	5.7	2.2	0.2	0.4-0.6-0.5	"
2217	"	(5.4)	(2.2)	0.2	0.6-0.6-0.4	"	1861	"	5.7	2.3	0.2	0.6-0.6-0.5	"
2111	"	5.1	1.7	0.2	孔幅計測不可能	"	2133	"	5.7	2.5	0.3	孔幅計測不可能	"
2238	"	(4.7)	(2.3)	0.2	"	"	2218	"	(5.7)	2.1	0.2	0.5-0.7-0.4	"
2113	"	(4.2)	(2.3)	0.2	"	"	2247	"	5.7	2.1	0.2	孔幅計測不可能	"
2070	"	(4.0)	1.9	0.3	0.5-0.5-0.5	"	1860	"	5.6	2.2	0.2	0.4-0.7-0.5	"
2086	"	(3.3)	(2.3)	0.3	孔幅計測不可能	"	2022	"	5.6	2.2	0.2	孔幅計測不可能	"
2237	"	(2.1)	(2.0)	0.2	"	"	1969	"	(5.6)	2.2	0.2	"	"
							2072	"	5.6	1.8	0.2	0.3-0.4-0.4	"
2240	II a 碁笥頭札	7.4	2.1	0.2	0.5-0.6-0.5	無	1833	"	5.6	2.5	0.3	孔幅計測不可能	"

FNo.	類別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔幅(cm)	接合痕	FNo.	類別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	孔幅(cm)	接合痕
1844	II b 幕笏頭札	5.6	2.0	0.3	0.5-0.8-0.4	無	2123	IV 不明その他	A 2.5 B 3.2	1.9 2.2	0.2 0.2	0.3-0.5-0.6 孔幅計測不可能	無
2145	"	5.6	2.0	0.2	0.5-0.6-0.4	"	2107	"	(3.1)	2.2	0.2	孔幅計測不可能	"
2248	"	5.5	2.1	0.2	0.5-0.4-0.6	"	1834	"	(3.1)	2.2	0.2	0.6-0.6-0.5	"
2121	"	5.5	2.0	0.2	0.5-0.5-0.5	"	2080	"	(2.5)	1.9	0.3	孔幅計測不可能	"
1962	"	5.5	2.0	0.1	孔幅計測不可能	"	1829	"	(2.4)	1.9	0.2	"	"
2032	"	5.4	2.0	0.2	0.4-0.5-0.5	"	2069	"	(2.3)	2.0	0.2	"	"
1838	"	5.1	1.9	0.2	0.3-0.5-0.4	"	2112	"	(2.0)	2.3	0.3	"	"
2197	"	(2.3)	2.3	0.2	0.5-0.5-0.5	"	2254	"	(2.0)	2.7	0.2	"	"
1843	"	(2.0)	2.3	0.2	0.4-0.7-0.4	"	2228	"	(1.9)	2.2	0.2	"	"
1980	III 三目札	6.2	3.2	0.3	0.6-0.5- _	"	2252	"	(1.9)	2.2	0.2	"	"
2243	"	6.0	2.8	0.2	0.3-0.4- 0.5-0.6	"	2245	"	(1.9)	2.3	0.3	"	"
1747	"	6.0	2.9	0.2	孔幅計測不可能	"	2264	"	(1.8)	2.7	0.2	"	"
2244	"	5.8	2.8	0.2	0.6-0.3- 0.5-0.6	"	1830	"	(1.2)	計測	不可能	"	"
1739	"	5.7	3.0	0.4	0.6-0.5- 0.6-0.5	"	1836	"	計測	不可能	(0.2)	"	"
1842	"	5.7	3.0	0.2	0.4-0.5- _	"						"	"
2125	"	5.7	2.8	0.2	0.4-0.4- 0.4-0.4	"						"	"
1899	"	5.6	3.0	0.3	0.6-0.3- 0.7-0.6	"						"	"
1741	"	5.6	3.2	0.3	孔幅計測不可能	"						"	"
1979	"	(5.6)	3.0	0.2	0.5-0.6- 0.7-0.4	"						"	"
2174	IV 不明その他	(5.9)	2.3	0.2	孔幅計測不可能	無						"	"
2216	"	(5.9)	2.0	0.2	"	"						"	"
2084	"	(5.6)	2.0	0.2	0.4-0.5-0.4	"						"	"
1742	"	(5.5)	2.1	0.3	0.4-0.8-0.4	"						"	"
2214	"	(5.3)	1.7	0.2	0.2-0.7-0.4	"						"	"
1832	"	(4.7)	2.3	0.1	0.5-0.6-0.4	"						"	"
2242	"	4.6	2.3	0.2	孔幅計測不可能	"						"	"
2220	"	4.6	2.3	0.2	"	"						"	"
2071	"	(4.1)	1.9	0.2	"	"						"	"
2021	"	(3.9)	1.9	0.2	"	"						"	"

Fig.36 SX244出土遺物実測図(4)



鎧の付属品として、長さ 4.3cmの鞋（99）、表面に七七五をまき猪目の透かしを有する八双金具（100）、三孔が存在する幅 1.5 cmの銅板（101）、菊花状の刻線を有し径 1.2 cm高さ 0.3 cm、中央に一辺 0.3 cmの四角い孔がある円形飾り金具（102）、長さ 2.0 cmの銅鋸（103）、双子頭の銅釘（104）、胸板等の縁金具（107）などがある。以上が武具関係の製品である。

b. 生活用具

生活用具としては、鋏、毛抜鋏、火箸、火打金、鍋等があり城跡内で出土する一般的なものである。

鋏（108）は、長さ16.8cmで握りの部分は角の断面形を呈し刃先の部分は腐蝕のため根元の部分が接合している。刃の長さは 7.6cmを測る比較的大振りの製品である。

毛抜鋏（109）は、長さ 8.4cmで刃先がバチ状に広がる形状である。握り部分の幅は 1.5cmとやや広がっており成形は粗雑である。

火打金（110）は、長さ 8.3cm、高さ 2.1cm、幅 0.4cmの山形を呈し、上部中央に一孔が穿たれている。辺の返えり等はみられず、火打石を敲く底辺の中央部分が 0.5cm凹んだ状態になっている。

火箸は 3 点の出土があり、欠損し角の断面形を呈する長さ14.5cmのもの（112）、同じく断面角形を呈し両端がやや細くなる長さ25cmのもの（113）、一端に輪をつくり中央にねじりを入れた厚さ 0.9cm、長さ25.7cmの肉厚な製品（114）がある。

鍋は細片が 1 点出土しているだけで図示できなかった。

c. 工具

工具としては、鉄釘、錐、苧引金、鉋刃？、環状鉄製品などがあり、用途不明のものも多い。

鉄釘は総数192点の出土があり、長さ 1 寸 5 分程度のもの（122）、2 寸 5 分程度のもの（123）3 寸 5 分程度のもの（124）まで各種の長さが存在し頭部は大部分が打ち込まれた後のものが多い。出土状態は前述したように覆土全域から出土している。

錐（115）は、上部の本部が残っており全長11.1cm、金属先の長さ 5.6cmで断面は角状を呈する。柄の径は 1.3cmほどで、金属先は鋭角に先細となっている。

苧引金（118）は、片側が欠損しているが幅 9.0cm、厚さ 0.2cmを測り刃先の使用痕は明確でない。

鉋刃（117）に類似したものは、長さ 9.0cm、幅 3.0cmで一端に片刃が存在し、よく鍛えられた鉄を使用している。

環状鉄製品（111）は、長径 3.9cm、短径3.3cmの楕円形で断面は四角を呈するものであり、柄の留め具として使用された可能性が高い。

この他用途不明のものとして、長さ15.7cmの長方形鉄篋状製品（116）、長さ 6.0cmで頭部を叩くような状態に成形した鋼状鉄製品（119）、頭部をL字形にした長さ8.0cmの製品（120）、中央部の厚さを違えたL字形鉄製品（121）、頭部に径 0.6cmの一孔があり下端が二股に割れた長さ 8.8cmの製品（125）などがあり、銅製のものでも銅板をまるめたようなもの（105・106）があり用途は不明である。

3. 革製品

革製品として明確にわかるものは、革札だけであるが他のものについても鎧やそれに類似した部品と考えられるものがある。

革札は取り上げ単位は10個体分あったが図示したのは2点だけである。（128・129）残存部から推定して長さ 5.0cm、幅 1.5cmの革札を幅 0.9~0.7 cm前後で重ねてゆき「八」字状に革紐でとじていると考えられる。その上で表面には黒漆を塗って補強し、裏側は地のままでとじている。（134）は革札に残る革紐と同類のものであり、図のように撚りをつけて革札に差し込んでいったものと考えられる。まだ詳細な鑑定を受けていないため、製作技法・形態については稿を改ためて報告する予定である。

（127）は長さ37.5cm、幅 3.0cm前後の製品であり、片側に四孔、一方に一孔がみられ、表面には黒漆の付着が残存し、裏面には革のなめし痕が認められる。鎧の部品としてはやや大型のものであるため、他の用途も考慮しなければならない。

（130）は内側に木部があったらしく中空状態になっており、上端に 1.0cmほどの切り込みがみられる。本来であれば、長さ 7.0cm + a、幅 1.6cm、厚さ 0.4cmの製品で全面に黒漆を塗っていたと推定される。

（131）と（135）は革に黒漆を塗ったもので、乾燥のため漆が剥落した部分は白っぽく表現されている。このような革に漆を塗った製品も取り上げ単位で18個ほどあり、朱漆を塗ったもの1個、金箔を塗ったもの（138）もみられた。

4. その他の出土遺物

その他の出土遺物としては次のものがある。

銭貨として開元通宝2枚、天禧通宝、聖宋通宝、洪武通宝各1枚、無文銭2枚、判読不能3枚の計10枚が出土している。

炭化状態になった紙ではないかと思われるもの（132・133）が2点ある。

石製品としては径 2.2cmの円形に加工した石核（ 126 ）と硯片 2 点、砥石片 2 点がみられる。銅製品の鑄銅に使われたと思われる溶解物が17片出土している。

堅果類として李・桃の種子（ 139・140 ）と考えられるものとクルミ・トチの堅果（ 141・142・143・144 ）が出土しており、炭化状態になったものも多い。

炭化米は少量で2ヶ所から、稗等の炭化物（ 136 ）が5箇所から出土している。

漆器被膜が7片と、木皮、酸化鉄も一塊ずつ出土している。

〔遺物の資料的価値〕

本遺構から出土した遺物はこれまで述べたように多種多数にわたり、一概に資料価値を述べることは専門的鑑定を受けていない現在、時期早尚の感もあるがあまりにも特殊に遺物出土状況ゆえ、簡単な説明を試みたい。

まず第一に陶磁器については、青磁碗・同小鉢、白磁皿、染付碗・同皿、美濃灰釉皿が一時期の廃棄によるものと考えられる点で一括資料としての価値を有している。この場合、青磁は無文碗と雷文帯および人形手のスタンプ文をもつ碗、それに龍泉窯と考えられる良質な小鉢があり、篋描文による碗などはみられない。白磁は硬質端反皿を主体に高台から口縁にかけて朝顔状に開く皿および内湾する小皿片があり、あくまでも端反皿が中心的である。染付は皿が口縁端反りのものだけで、内湾するものは一点もなく、碗も蓮子碗が主体である。美濃灰釉皿は口縁が端反り、編年的には美濃大窯Ⅰ期に比定されるものである。このような組み合わせは、15世紀代まで上らせにくく、16世紀後半まで下げにくいと考えられ16世紀前半（1500～1550年）の中に包括してよいように思われる。とすれば、本遺構の廃棄は浪岡城北畠氏の最盛期とされる時期に廃絶されたことになり、精神的な廃棄行為とも推測される。

第二に、武具と鎧の部分の出土数の多さである。小札・草札の出土数からすれば、小鎧一領分にも相当すると考えられ、16世紀前半の比較的平和時にこのような武具を一括廃棄することは城内において尋常でない事体がおこったための所産と考えられないだろうか。浪岡城において武具が出土する事例はかならずしも少ないとは言わないまでも、落城期に近い時点で出土するのが通例であるのに対し、本遺構はその面でも普通でない。

第三に、上記以外の出土遺物の中で、生活用具・工具等のまだ使用に耐え得る製品をおしげもなく捨てていることである。中には破損しているものもあるが、陶磁器については故意に破碎してそれぞれの位置から投げ込んでいる点、鋏・毛抜・火打金・苧引金等の製品をそれぞれ1点ずつ捨てている点、食用に供したと思われる堅果類や米・稗等の穀物も内包している点などから、日常生活における一括資料として位置づけられる。

第四に、本遺構の位置が内館で最初に検出された礎石建物跡（S B 38）から南へ7 mの所に

存在し、構築の軸方向も類似している点と周囲に焼土痕が多数存在することを考慮すれば、内館の建物群に強い規制を受けて構築されていることを指摘できる。

以上の観点から、本遺構は内館内において16世紀前半に起きた何らかの異変の結果構築されそれらの事象を鎮めるため、隣接した地点で焼成行為をおこない本遺構に使用品を一括廃棄したものと考えることができるのではないだろうか。

3). SP11 (P.L.17, Fig.37, Ch.52)

本遺構はO45区から検出され、長軸46cm、短軸34cmの東西に長い不整形プランを呈し深さ15cm以上(スコップの攪乱によって明確な掘り込み面を検出することができず、最上部にある銭貨から底面までの比高である)のピットから縉になった銭貨が5,971枚出土した備蓄銭遺構である。O45区では、本遺構の北側に隣接して竪穴建物跡(ST253)と竪穴遺構(SX231)が存在し、南側には井戸跡(SX230)と考えられる遺構も近接している。また周囲には多くの柱穴が検出されているにもかかわらず、建物跡と認定できたのはSB40だけであり、本遺構はSB40西側の2間×3間の部屋の北西隅に位置している。もし本遺構が単独で存在した遺構でないとすればSB40の床面に掘り込まれた可能性は高いが、それぞれの遺構掘り下げ面を明確に把握できなかつた点は悔まれる所である。

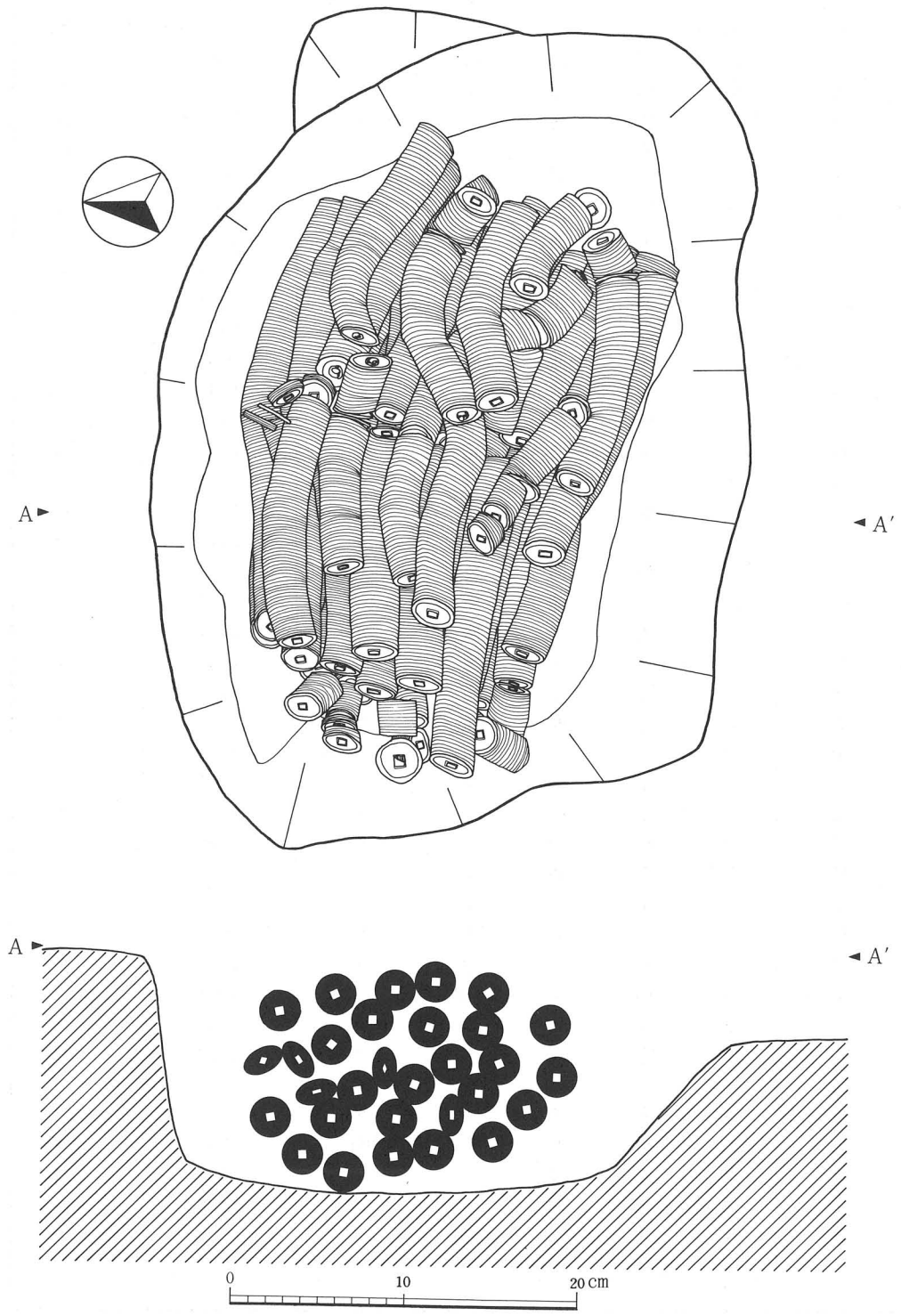
出土銭貨は唐代の開元通宝から明代の永楽通宝までであり56種が確認され、近世以降の銭貨が認められない点から埋設時期は16世紀以前と考えられる。出土状況、出土銭貨の概要は、「第VI章浪岡城跡内館出土の備蓄銭貨について」において説明するため参照願いたい。なお出土銭貨の種別枚数は下表の通りである。

Ch.52 SP11銭貨種別個体表

NO	銭貨名	初 年	枚数
1	開元通宝	唐 621	367
2	乾元重宝	唐 759	23
3	唐国通宝	南唐 959	6
4	光天元宝	五代十国 918	1
5	乾徳元宝	前蜀 919	1
6	宋通元宝	北宋 960	15
7	太平通宝	北宋 976	39
8	淳化元宝	北宋 990	33
9	至道元宝	北宋 995	67
10	咸平元宝	北宋 998	71
11	景德元宝	北宋 1004	93
12	祥符元宝	北宋 1008	107
13	祥符通宝	北宋 1008	52
14	天禧通宝	北宋 1017	91

NO	錢	貨	名	初	錢	年	枚	數
15	天	聖	元	宝	北	宋	1023	225
16	明	道	元	宝	"		1032	28
17	景	祐	元	宝	"		1034	71
18	皇	祐	通	宝	"		1039	546
19	至	和	通	宝	"		1054	11
20	至	和	元	宝	"		"	45
21	嘉	祐	通	宝	"		1056	107
22	嘉	祐	元	宝	"		"	51
23	治	平	通	宝	"		1064	18
24	治	平	元	宝	"		1064	79
25	熙	寧	元	宝	"		1068	407
26	元	豐	通	宝	"		1078	500
27	元	祐	通	宝	"		1086	401
28	紹	聖	通	宝	"		1094	1
29	紹	聖	元	宝	"		"	194
30	元	符	通	宝	"		1098	73
31	聖	宋	元	宝	"		1101	200
32	大	觀	通	宝	"		1107	50
33	政	和	通	宝	"		1111	179
34	宣	和	通	宝	"		1119	22
35	建	炎	通	宝	南	宋	1127	1
36	紹	興	元	宝	"		1131	1
37	正	隆	元	宝	南	金	1158	7
38	淳	熙	元	宝	南	宋	1174	21
39	大	定	通	宝	南	金	1178	4
40	紹	熙	元	宝	南	宋	1190	7
41	慶	元	通	宝	"		1195	9
42	嘉	泰	通	宝	"		1201	8
43	開	禧	通	宝	"		1205	4
44	嘉	定	通	宝	"		1208	11
45	大	宋	元	宝	"		1225	2
46	紹	定	通	宝	"		1228	7
47	嘉	熙	通	宝	"		1237	6
48	淳	祐	元	宝	"		1241	9
49	皇	祐	元	宝	"		1253	4
50	景	宋	元	宝	"		1260	9
51	咸	定	元	宝	"		1265	5
52	至	淳	通	宝	元		1310	8
53	大	中	通	宝	明		1361	4
54	洪	武	通	宝	"		1367	533
55	永	樂	通	宝	"		1408	483
56	無			錢			?	378
	判	讀	文	能			?	276
								5971

Fig.37 SP11実測図



4). SP12 (PL.18、PL.19、Fig.38、Fig.39)

Q45区検出。径60cm、深さ23cmの円形掘り方を呈するピットに内耳鉄鍋を伏せ、その中に鍬
 芋引金、刀、轡、鉄釘、鉄鍋からはみ出していたものの鎌の鉄製品および左廻い縄が検出され
 た。埋設にあたっての埋土は、黄褐色砂質土の単純層であったことから、意識的埋設は明らか
 であり、掘り込み面も域館期の遺構掘り込み面と同レベルであったことから城館期に埋設され
 たと考えられる。

出土状態は、内耳鉄鍋が床面にピッタリと伏せられ、鎌は鍋の北側に接する状態で置かれ
 ている。内部には土砂の流入はまったくみられず、いわゆる真空パックないしはタイムカプセ
 ルを開けるような気持ちで鉄鍋を取り上げた。内部底面には鍬が刃先をほぼ北西方向に向け中
 心に存在し、左側に刃先を西に向けた刀、鍬の刃先上に木質部の明瞭に残る芋引金、鍬の柄取
 り付け部左側にもう一つの芋引金、そして鍬の右側には轡と鉄釘がそれぞれ二本ずつ置かれて
 いた。さらに轡部分から鍬の右側刃先と鍬を横断して刀の茎部分、鍬の左側柄取り付け部分ま
 で左廻いの縄が連なった状態で検出された。縄は出土時に灰白色気味の色調を呈し、触れると
 粉状に散らばりそうであったため、早急にバインダーによる固定処理をおこなったが取り上げ
 に際して一部壊れた部分もあった。また、この縄の切れ口をみるとまだ続いていたと考えられ、
 ちょうど鉄製品と重なっていた部分だけが明瞭に残ったものと思われる。

Fig.38 SP12実測図

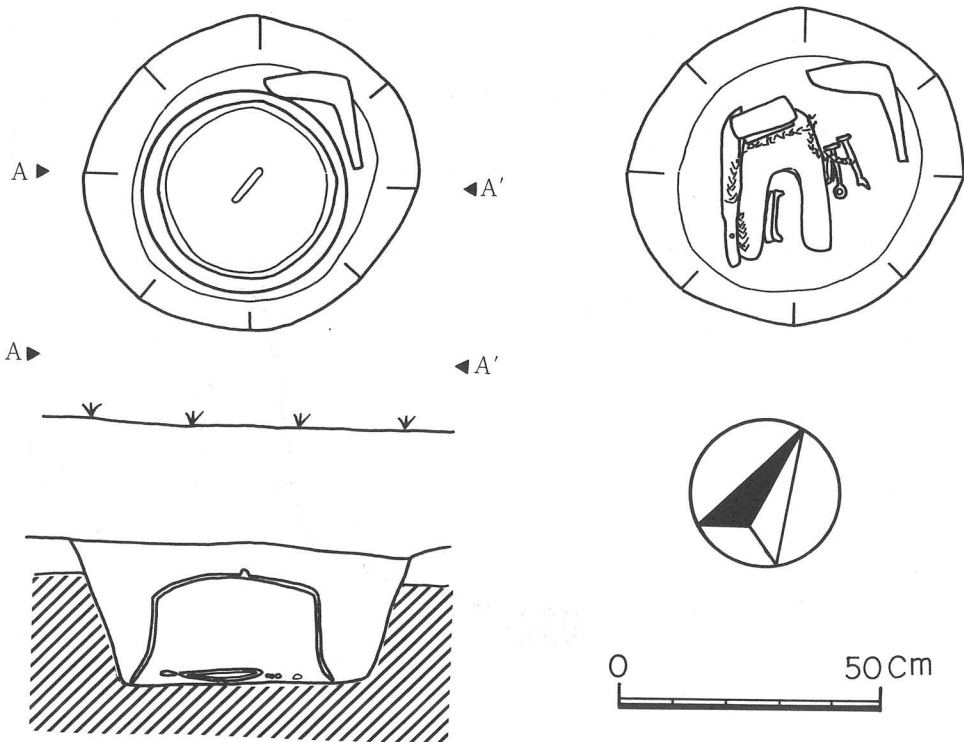
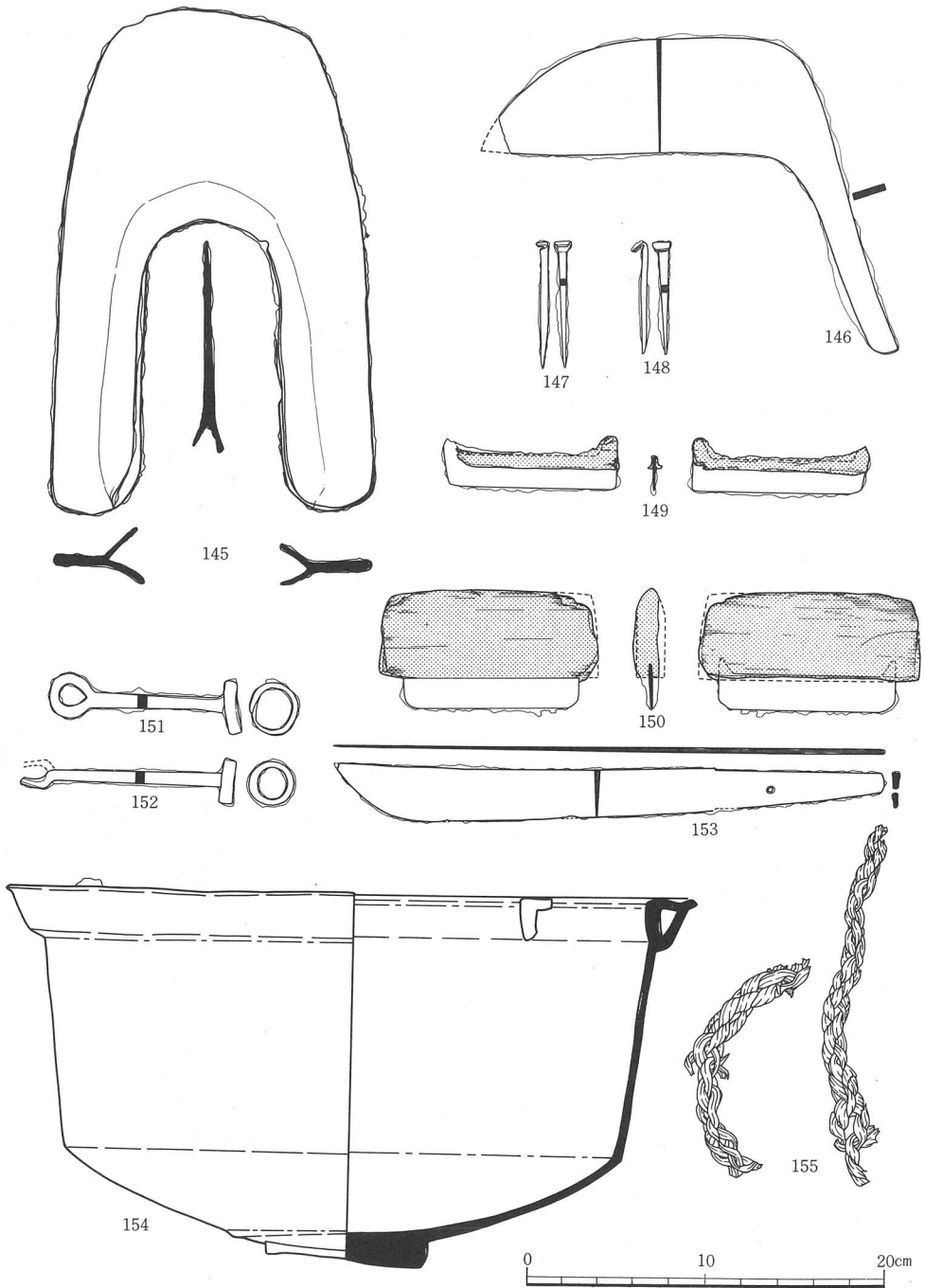


Fig.39 SP12出土遺物実測図



出土遺物としては伏せ鉄鍋に伴うものと、覆土から出土しているものがあり、後者は長さ14.5cmの鉄鏃状の鉄製品と三個に折れた火箸状の鉄製品が二点あり、陶磁器等はまったくない。

伏せ鉄鍋に伴うものとして以下のものがある。

鋏（145）は、長さ27.6cm、刃先幅約10.5cm、柄取付基部幅18.0cm、柄取付長約18.0cmを測り、基部から刃先に向って厚味がなくなり刃先はやや丸味を有するフクロ鋏の鋏先である。

鎌（146）は、刃長約16.0cm、刃部幅6.5cm、柄長約12.0cmの反りを有しない平鎌であり刃先が欠損している。柄に目釘痕は見あたらない。

鉄釘（147・148）はどちらも頭部の銀杏葉が叩かれ使用後のものと考えられ、0.5cm角で2寸の長さを有する釘である。

苧引金は二点あり、刃部長9.3cm、幅2.0cmで木質部が若干残存しているもの（149）と、刃部長9.7cm、幅2.1cm、木質部の高さ5.0cm幅12.0cm厚さ1.5cmのもの（150）があり、どちらも刃部厚は0.2cm前後で中央部が擦り減っていない事から多く使用したものでないことが推定される。

轡は立聞の部分と考えられるものが二点あり、長さ10.8cmのもの（151）と長さ12.0cm（152）のものがある。どちらも断面形は長方形を呈し（151）は輪の部分に接合した痕跡がみられる。

刀は、長さ30.6cm、茎長9.4cm、刃部長21.2cm、刃部最大幅3.0cm、背の反りは0.2cm前後である。茎には目釘穴が一孔あり刃部の一部には刃こぼれの痕跡も認められる。

鉄鍋（154）は、口縁外径39.0cm、高さ20.8cm、厚さは0.5cm以上である。口縁部は口縁から3cm前後の所で内湾して段状の立ち上がり呈し、その部分に対峙する形で三耳が付いている。一端の二耳の間は17cm離れておりその中央と一端の耳が対応する形態である。胴部は口縁から14.5cmの所まで直線的に落ち込み、その部分から丸味を有して底に至る。底には一文字湯口の痕跡が9.0cmの長さで認められる。

縄（155）は、現存長約50cmが残っており、藁を一度右に撚りものを左撚りに絞ったものであり平均的太さは1.5cm程度である。この縄は単に置いたものでなく、金属器を結んであった可能性があり、現在でも神事には左絞りの縄を使用する民俗事例から考えると精神的意味の強い使用方法であったと思われる。

本遺構の民俗事例との比較考察は、「第V章浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について」を参照願いたい。特に、出土遺物がすべて鉄製工具（縄を除くと）であり、それらの工具を鉄鍋に内包して安置している点は宗教儀礼ないしは信仰儀礼の一種と理解してさしつかえないと考えられる。鉄製工具が釘を除けば農耕生産と関連づけられ、苧引金は麻の繊維を取るための工具で轡の立聞、鉄釘とともに二個一対の状態出土していることにも注目しなければならないであろう。いずれにしても、人骨に被せる内耳鉄鍋や住居跡に伴う内耳鉄鍋との出土状態の相違は

明確であり、今後民俗的事例・他の出土例を参考にして比較検討してみたい。

5). 北館と西館間の堀跡 (P L.20、Fig.40、Ch.53)

G39・40区を中心に幅7mのトレンチを北館にて昭和58年度・同59年度に検出した樹形遺構下端から北館と西館間の中土塁まで入れた。

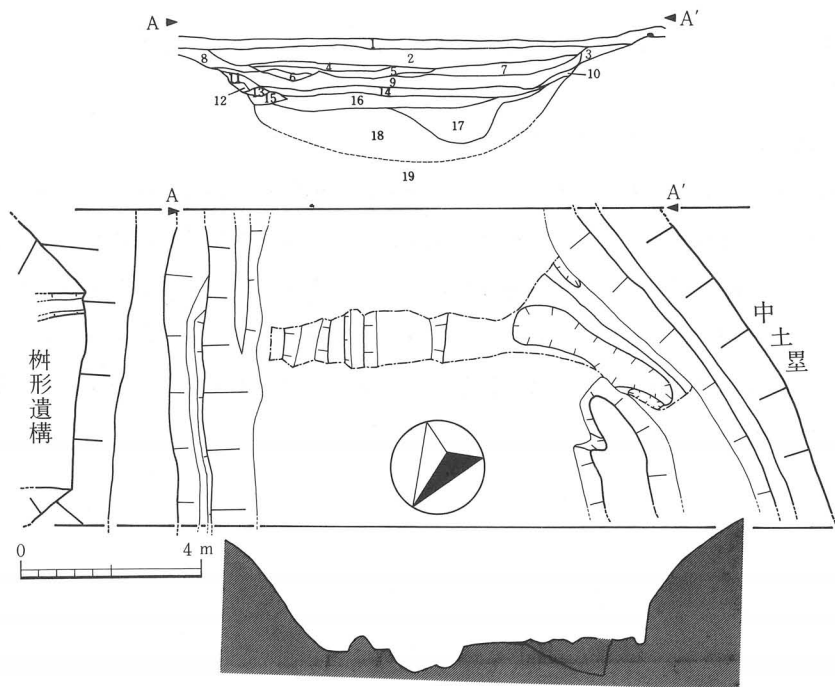
その結果、上端幅10m、下端幅6m、深さ2.5m(中土塁からの深さであり北館平場面からは約4.5mとなる)の堀跡が検出され、構築の基本は箱葉研形であることがわかった。覆土は砂質土を混入する層と植物質遺物を含む泥土が互層状態になり有機質遺物も多く出土した。また、従来中土塁は一本となって北館の周囲を巡ると推定していたが調査区北西側から中土塁を斜行して走る溝状の遺構が検出され、水堀として活用するための複雑な流路を考慮しなければならなくなった。

調査区の中央を地山まで完掘した時点では(スクリーントーンによるエレベーション図参照)、

Ch.53 堀跡覆土層序注記表

層序No.	特	徴
1	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に砂質土をブロック状に1%含む。	
2	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)に砂質土を1%含む。	
3	暗褐色土(10Y R $\frac{3}{3}$)に砂質土を1%含む。	
4	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{1}$)。	
5	黒色土(7.5Y R $\frac{1}{1}$)に礫を2~3%含む。	
6	黒褐色土(7.5Y R $\frac{3}{1}$)に礫を2~3%含む。	
7	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)とパミスの混層しまりあり。	
8	黒色土(10Y R $\frac{2}{1}$)。	
9	黒色土(5Y R $\frac{2}{1}$)と黒褐色土(5Y R $\frac{3}{1}$)の混層にパミス1%砂質土20%含む。	
10	暗褐色土(10Y R $\frac{3}{3}$)と砂質土の混層。	
11	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)にパミスを50%含む。	
12	褐灰色土(5Y R $\frac{4}{1}$)とパミスの混層に明赤褐色土(5Y R $\frac{5}{8}$)を1%含む。	
13	黒色土(7.5Y R $\frac{1}{1}$)にパミスを2~3%含む、しまりあり。	
14	黒褐色土(7.5Y R $\frac{2}{2}$)にパミスを1%未満含む。	
15	黒褐色土(10Y R $\frac{3}{1}$)にパミスを10%含む。	
16	黒色土(7.5Y R $\frac{1}{1}$)と砂質土の混層。	
17	黒褐色泥土(7.5Y R $\frac{3}{1}$)に砂質土を1%未満含む。植物繊維を多量に含む。	
18	黒褐色土(5Y R $\frac{2}{1}$)と砂質土の混層。	
19	軽石質凝灰岩層(明灰色凝灰質浮石層)。	

Fig.40 堀跡実測図



地山自体もかなり流水によってえぐられたりしており、本堀跡の構築から廃絶までの期間が長期に亘ったと考えられる。

出土遺物としては、陶磁器類、木製品、骨類、石製品、鉄製品、銭貨、自然遺存体があり、その概路を述べる。第1層とした表土層からは、伊万里系統の染付および現代磁器の出土があり、水田面として使用された年代の符合がみられた。第2層は表土下に広く分布する層であるが、唐津鉢 (Fig.45-242) とともに青磁・白磁・染付等もみられるようになり、第4層以下は城館期以前のもの以外出土しなくなる。

陶磁器類としては、青磁碗3片・同皿1片・同盤1片、白磁皿3片、染付皿5片・同碗2片、美濃灰釉皿2片・同天目碗 (Fig.45-227) 1片、朝鮮系碗1片、唐津鉢1片、越前甕20片、瓦器火舎1片、珠州甕1片、産地不詳播鉢2片、その他産地不詳陶器2片、須恵器壺1片、土師器坏1片がある。

木製品としては、遺物の項目で詳述する光明真言の書かれた柿経 (PL.20-(5)、Fig.54-358)、下駄 (Fig.54-359)、中央に円孔を穿ち炭化状態を呈する円盤状木製品 (Fig.54-360)、折敷 (Fig.54-361)、篋 (Fig.56-368)、箸、柿経に類似した木製品 (Fig.53-357)、杭状木製品 (Fig.56-370)、板状木製品 (Fig.56-372)、漆器等がある。

骨類は調査区西側の第17層の周辺に多くみられ、馬骨・馬歯・牛角等が散乱した状態で検出された。

鉄製品としては、内耳鉄鍋の口縁部片が2点出土しているだけである。

石製品としては、砥石1点、石鉢片1点が出土している。

銭貨は無文銭が1点出土している。

自然遺存体として、堅果類、虫の羽根等がみられ、植物質遺存体の中に包含されていた。

以上が出土遺物の概要であるが、柿経の鑑定によれば墓域と密接な関連を有する遺物であると言われ、本堀跡の周辺（北館・西館・無名の館）を丁寧に精査する必要性を痛感している。柿経の出土状態（PL.20-4）については、特殊な出土状況というふうにもみられず、堀に投げ込まれた、あるいは投げ込まれた後に流れてきた状況での出土であり、堀跡自体と柿経自体の関連は薄いと推測される。

IV 出土遺物

出土遺物は、陶磁器類約3,200点、鉄・銅製品約2,300点、石製品約150点、木製品約160点、銭貨約6,400点、自然遺物約290点、土師器・須恵器片平箱で5箱を数える。ここではその中から城館期における代表的な遺物を主体に述べてゆくことにする。

1. 陶磁器類

陶磁器類を大きく舶載陶磁器と国産陶磁器類に分け、舶載品として青磁、白磁、染付、中国黒褐釉（鉄釉、褐釉）、朝鮮、緑釉陶器、赤絵とし、国産品は美濃・瀬戸灰釉、美濃・瀬戸鉄釉、唐津、越前、珠洲、信楽、備前、伊万里、産地不詳陶器とした。また、土器類として、瓦質土器、かわらけ、埴塙、羽口、鋳型、土師器・須恵器もこの項で触れてゆきたい。

A. 舶載陶磁器

(1)青磁 (PL. 14・21・22、Fig. 33・41・42)

青磁は破片数786片で、その器形から碗、小鉢、皿、大皿（盤）、承台、瓶子に分類した。

(a) 碗

青磁の破片中7割以上を占める。以下主文様により細分してゆく。

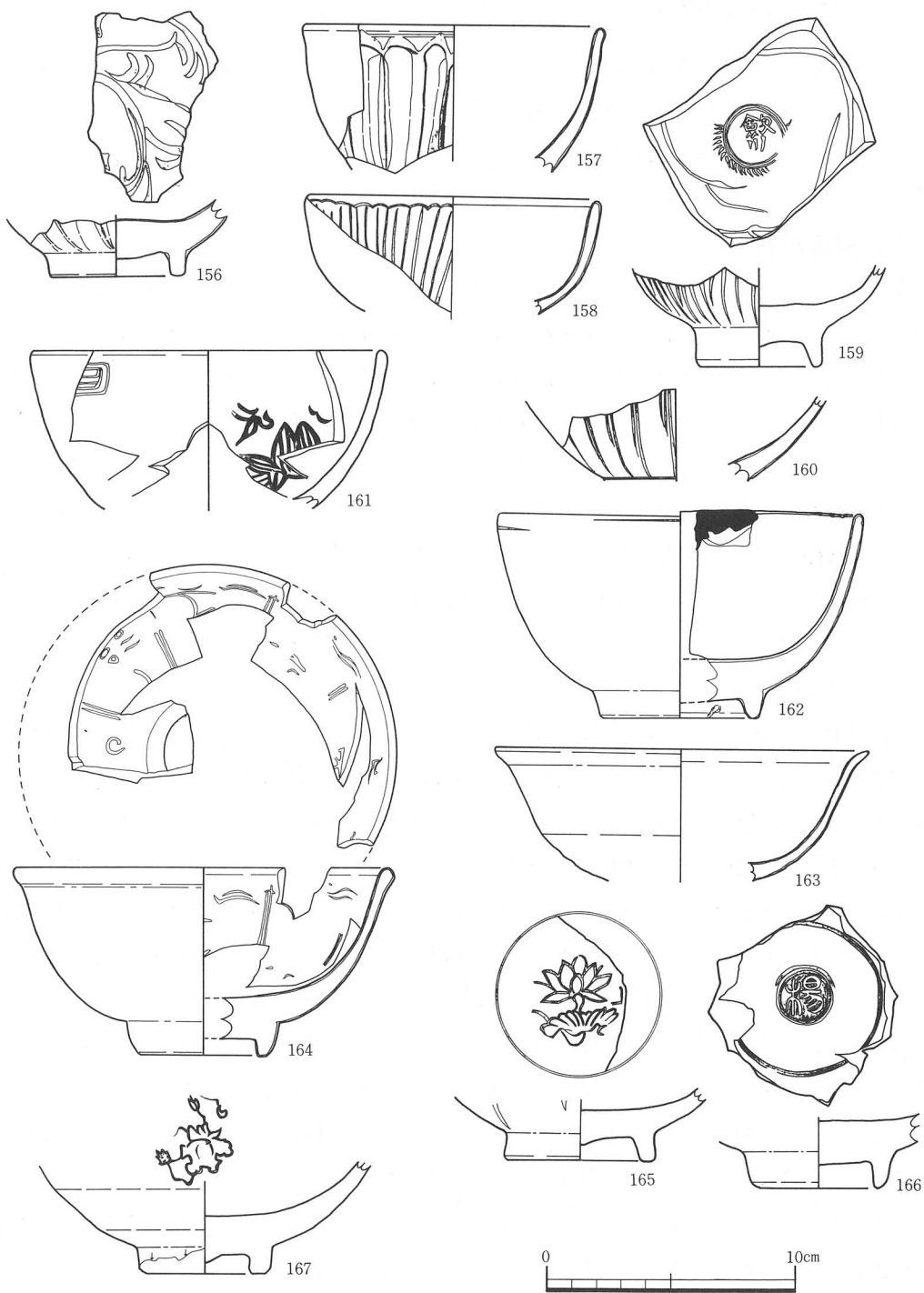
胴部外面に蓮弁文を有するものは、口縁形が内湾するものになる。鎬蓮弁文を有するもの(156)は、灰白色で良質な胎土に透明感の高い釉がかかる。篋描きの蓮弁文を有するもの(157)は、胎土灰白色から灰色で釉調は暗い青緑色や暗い黄緑色を呈する。細線による蓮弁文を有するもの(158・159・160)には蓮弁の幅が広いものと狭いものとがみられる。幅の広いものには胎土の色調が暗いものが多く釉調も全般に暗くなり、不透明釉が雑にかかるものも目立つ。また、幅の狭いものには、蓮弁の先が剣先状にとがるものと、丸い山形になるものともがある。その他、見込に「劔川」の文字スタンプが施されるもの(159)もみられる。

口縁部に雷文帯を有するもの(59・161)は、高台上が外に開いた後、口縁まで直行ぎみに立ち上がる器形を呈する。この類には、胴部内面人形手の文様で見込に「金玉満堂」のスタンプが施されるもの(59)や、胴部内面に劃花文を有するもの(161)がある。胎土は青灰色から灰色と一般に良質で、明るい青緑色釉のかかるものが多い。

一条の劃線が口縁部外面に巡るもの(162)は、胎土の色に灰白色から暗灰色と幅がみられ、青緑色、黄緑色釉がかかるものが多い。口縁は直行的な立ち上がりをする。

胴部内外面とも無文のものは大別すると、口縁部が直行ぎみの立ち上がりを呈するもの、端

Fig.41 青磁实测图



反りになるもの（163）、玉縁状を呈するものの3種類になる。まず、直行ぎみの立ち上がり
を呈するものは、胎土灰白色から暗灰色で釉調は青緑色、黄緑色、黄褐色を呈する。端反りの
ものは、胎土灰白色から暗灰色で、透明感のある釉と不透明釉が雑にかかるものがある。それ
ぞれ釉色は青緑色、青白色、黄緑色、灰緑色を呈する。透明釉のもの和不透明釉のものとの差異
は明確ではないが、透明釉のかかるものの方が胎土・釉調ともに色調・彩度に幅がみられるよ
うである。また、不透明釉の施されるものの中には、見込が釉ハギになるものもみられる。

口縁が玉縁状を呈するものには、胎土灰白色から灰色で釉調は黄緑色を主体とする透明釉の
かかるものと、胎土灰色から暗灰色と暗く、釉調が黄緑色・青緑色・灰色と幅のある不透明釉
が施されるものがある。胴部外面無文で、内面に印花八宝文が施されているもの（164）は、
青灰色で良質な胎土に、外面青緑色・内面黄緑色の不透明釉がかかるもので、見込は釉ハギと
なる。他にこの類では、胎土灰色で深緑色釉が施されるものもみられる。

その他特徴のある破片としては、見込に「楊」字のスタンプが施されるもの（166）、見込
に印花蓮花文が施され、胴部外面に片刃の篋削りが縦位に入るもの（165）、見込に印花スタ
ンプが施されるもの（167）がある。

(b) 小鉢 (58)

S X 244 で出土している1点のみである。胴部が直行して立ち上がり、口縁が端反りになる
ものである。詳細はS X 244 の項を参照されたい。

(c) 皿 (168~173)

皿は、いわゆる稜花皿の破片が大半を占める。その他の破片には口縁部が直行ぎみの立ち上
がりを呈するもの、玉縁状をなすもの、内湾するものなどがみられる。

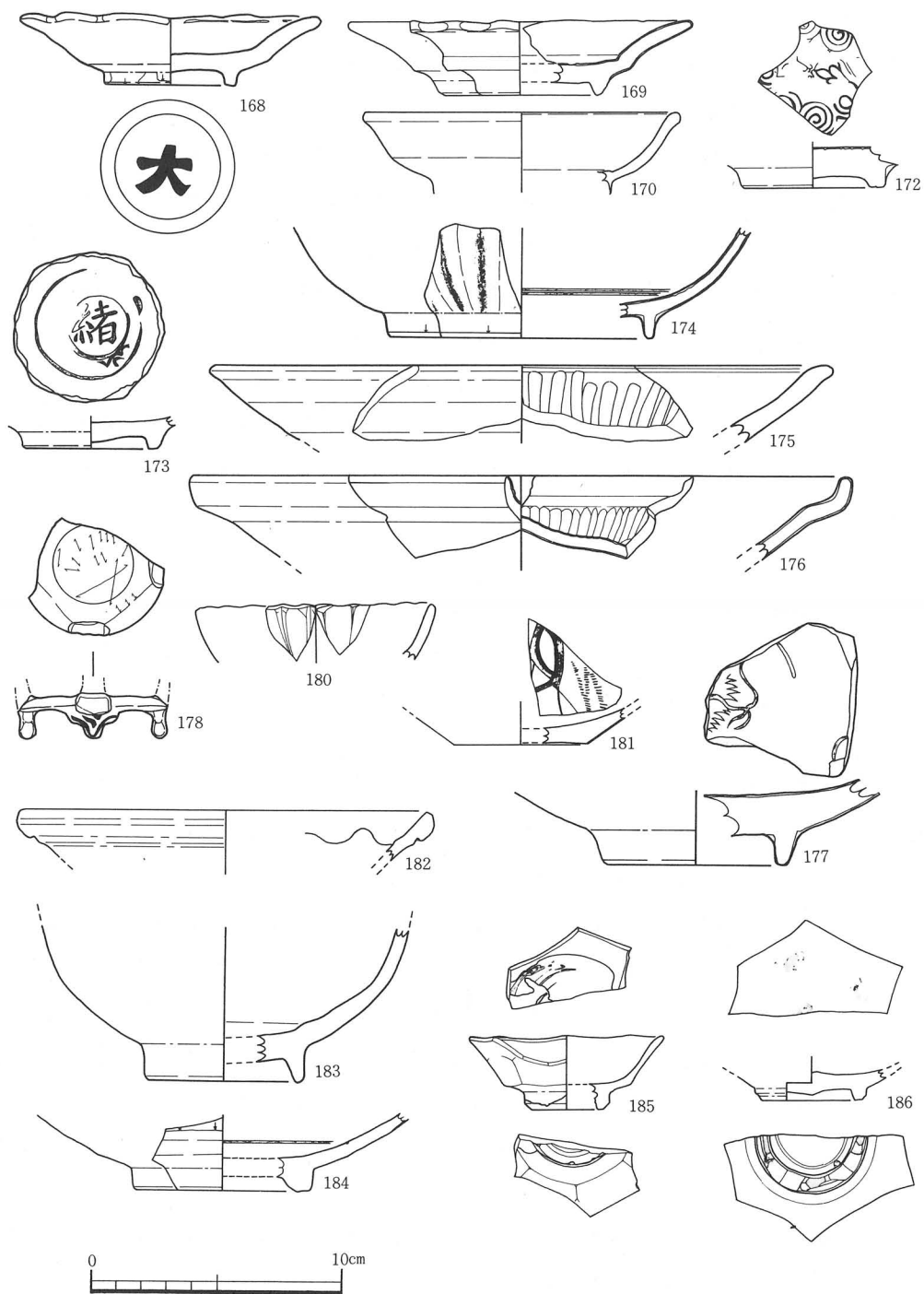
稜花皿には、口縁部内面にのみ流水状の櫛目文を有するもの（168）、胴部内面にも劃花文
を有するもの、無文のもの（169）がみられ、それぞれ透明釉と不透明釉の施されるものがある。
透明釉の施されるものは、胎土明灰色から灰色が主で釉調は青緑色を呈するものが多い。
一方、不透明釉の施されるものは、胎土灰色で青緑色や灰緑色の釉がかかることが多い。また、
無文で不透明釉のかかるものの中には、見込釉ハギで釉の一部が白濁するものもみられる。

口縁部が直行気味の立ち上がりを呈し、無文のものは、胎土灰白色から灰色で青灰色の透明
釉か不透明釉がかかるものである。小振りな皿であろう。

口縁が玉縁状で無文のもの（170）は、青灰色で良質な胎土に青白色不透明釉がかかるもの
で、口縁部及び口縁部下で釉が白濁する箇所がある。

口縁部が内湾する皿には、無文のものと蓮弁文を有するものがみられる。無文のものは、胎

Fig.42 青磁・白磁実測図



土灰白色や暗灰色で青緑色釉、明黄緑色釉がかかる。蓮弁文を有するもの（171）は胴部外面に片刃の劃線による蓮弁文が施され、内面口縁部から胴部に縦位の劃線が施される小振りの皿で、灰白色の胎土に明青緑色の釉がかかるものである。

その他特徴のある破片には、見込に「緒」の字スタンプ文を有するもの（173）や印花文の施されるものがみられる。

(d) 大皿（盤）

大皿には、胴部外面に鎬蓮弁文を有するもの、胴部内面に篔削りによるヒダを有するもの、破片内外面に篔による劃花文が施されるものがみられる。

鎬蓮弁文を有するもの（174）は、いわゆる砧青磁といわれるもので、胎土灰白色で深みのある青緑色釉がかかる。もう1個体鎬蓮弁を有すると思われるものは、二次焼成にあっているため文様・釉調は不明確だが、断面の状態から胴外面に鎬蓮弁文、内面に劃花文が施されていると思われる。胎土明灰色で釉は黄褐色を呈し、口縁部は折縁状となり、口縁が稜花状をなす。

胴部内面にヒダを有するものには、口縁が平縁になるもの（175）と折縁状を呈するもの（176）がある。口縁が平縁となるものには透明感のある青緑色釉がかかり、ヒダの幅が広い。一方、口縁部が折縁状になるものは青緑色不透明釉がかかり、ヒダの幅も狭くなる。その他には、底部が碁笥底状を呈するものもみられる。

内外面に劃花文を有するもの（177）は、灰白色で良質の胎土に深みのある青緑色釉が施してある。

(e) 承台（178）

承台と思われる脚付のものである。脚は4本で脚の上部に突起がつくものと考えられる。脚の外面には劃線文が施され、台上面には使用痕と思われる擦痕が多数つく。胎土は良質の青白色を呈し、明青緑色釉がかかる。

(f) 瓶子・その他の破片

瓶子と思われる破片（179）は、縦方向に篔削りによりヒダ状の文様を施した頸部と思われるものである。

他に、口縁菊皿状を呈するもの（180）があるが、皿であるか合子状になるものかは不明。

また、皿の破片で内面に片刃による劃花文と、いわゆる猫搔き手といわれる文様が施されているもの（181）がある。

(2)白磁 (PL. 23、Fig. 42・43)

白磁は碗、小坏、皿に分類した。破片数 575片、内訳は碗が66片 (11.5%)、皿が493片 (86%弱) である。

(a)碗 (182・183)

碗は外反ぎみに直行し口縁が玉縁状を呈するもの (182) と腰部に張りがあり、口縁が外反すると思われる碗 (183) がある。前者は胎土がやや荒く、透明釉がかかるが、後者は青灰色の胎土に青白色釉がごく薄くかかり、高台内白濁し砂が付着する。

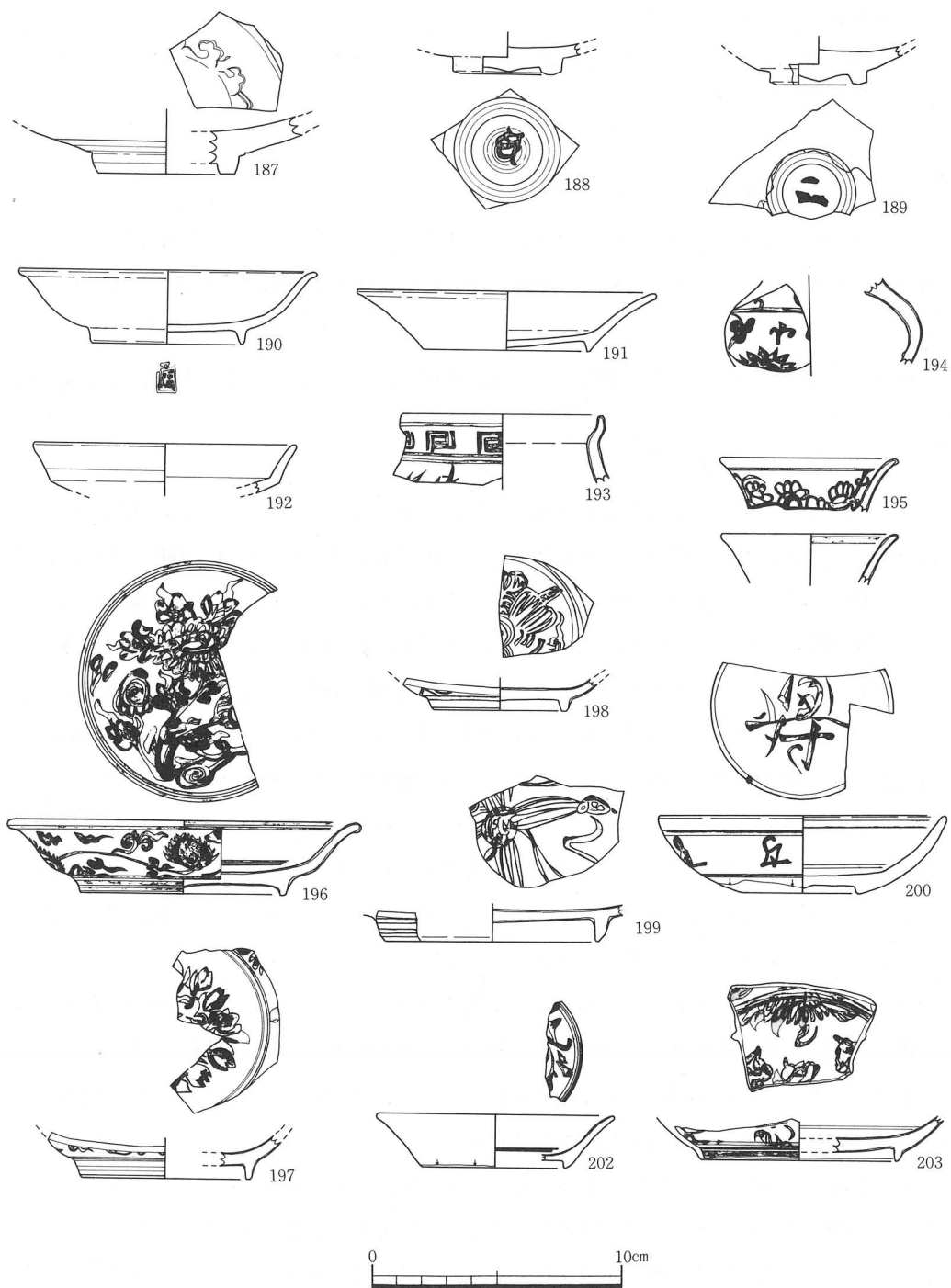
(b)小坏 (八角小坏) (186)

八角小碗といってもいいもので、腰部に段がつき口縁までほぼ直行し、胴部が八角形に成形される。胎土は灰白色で黒色粒が微量混ざり荒く軟質な印象を受ける。釉調は白色、不透明で貫入が目立ち胴部まで施釉されるものと、一部高台にまでかかるものとがみられる、また内面見込にも釉がかからないものもある。

(c)皿 (184・186~192)

皿は端反りの皿が最も多く、他に口縁内湾するもの、直行するものがみられる。まず、皿のなかで古手の部類に入るとされるもので、胴部上半まで釉がかかり以下露胎となって、内面に一条の劃線が巡るもの (184) がある。高台部が削りをもち四脚状になるもの (186) は、壘付と内面見込に重ね焼きの痕跡が残る。胎土灰白色で灰白色釉が高台内まで全面にかかる。口縁が内湾する皿には、胎土の緻密なものと同く荒く軟質な印象を受けるものがある。胎土の緻密なものは灰白色の胎土に灰白色の透明釉がかかり、軟質な胎土は黄白色を呈し、釉調も黄白色や青白色、灰色で一部不透明釉となるものもある。両者とも大部分が外面胴部以下露胎となり、胎土軟質なものの中には、高台に削りが入り、四脚状を呈するもの、底に「𠄎 (パン)」と思われる梵字が墨書されているもの (188)、同じく底に「ニ」の文字が墨書されているもの (189) などがある。胎土が緻密なものには胎土色が灰色~暗灰色で釉調が灰色、不透明で貫入の目立つ一群もある。これらは壘付のみ釉ハギで、口縁は内湾ぎみに直行するものである。端反りの皿は腰部で張りがつき、口縁が外反するもの (190) が最も多く、胎土は灰白色で釉調には白色~暗灰色と幅がある。底に「圖」銘のあるものや、外面胴部にスガが付着し見込に多数の擦痕のあるものもみられる。他には、壘付から斜めに直行し口縁がやや外反する朝顔状の皿 (191) や、壘付から外反してゆく皿 (63) 等もみられる。口縁まで直行するものとしては、胴部で段状に一度張り、口縁部までほぼ直行するもの (192) がある。その他特徴のある破片として、見

Fig.43 白磁・染付実測図



見込に印花スタンプの押されているもの(187)もある。

(3) 染付 (PL.24、Fig.43・44)

染付は壺、皿、碗、小碗に大別した。破片数は541片で、うち皿が383片(約86%)碗が146片(12%)となる。

(a) 壺 (193~195)

壺形と思われる破片で、口縁外面に雷文帯を有するもの(193)は全体の器形は不明である。壺または花瓶の胴部と思われる破片(194)は、外面に唐草文が施され内面には成形時の接合痕残る。

花瓶等の口縁と思われるもの(195)は口縁が外反し頸部外面に花樹文と思われる文様が施される。

(b) 皿 (196~207)

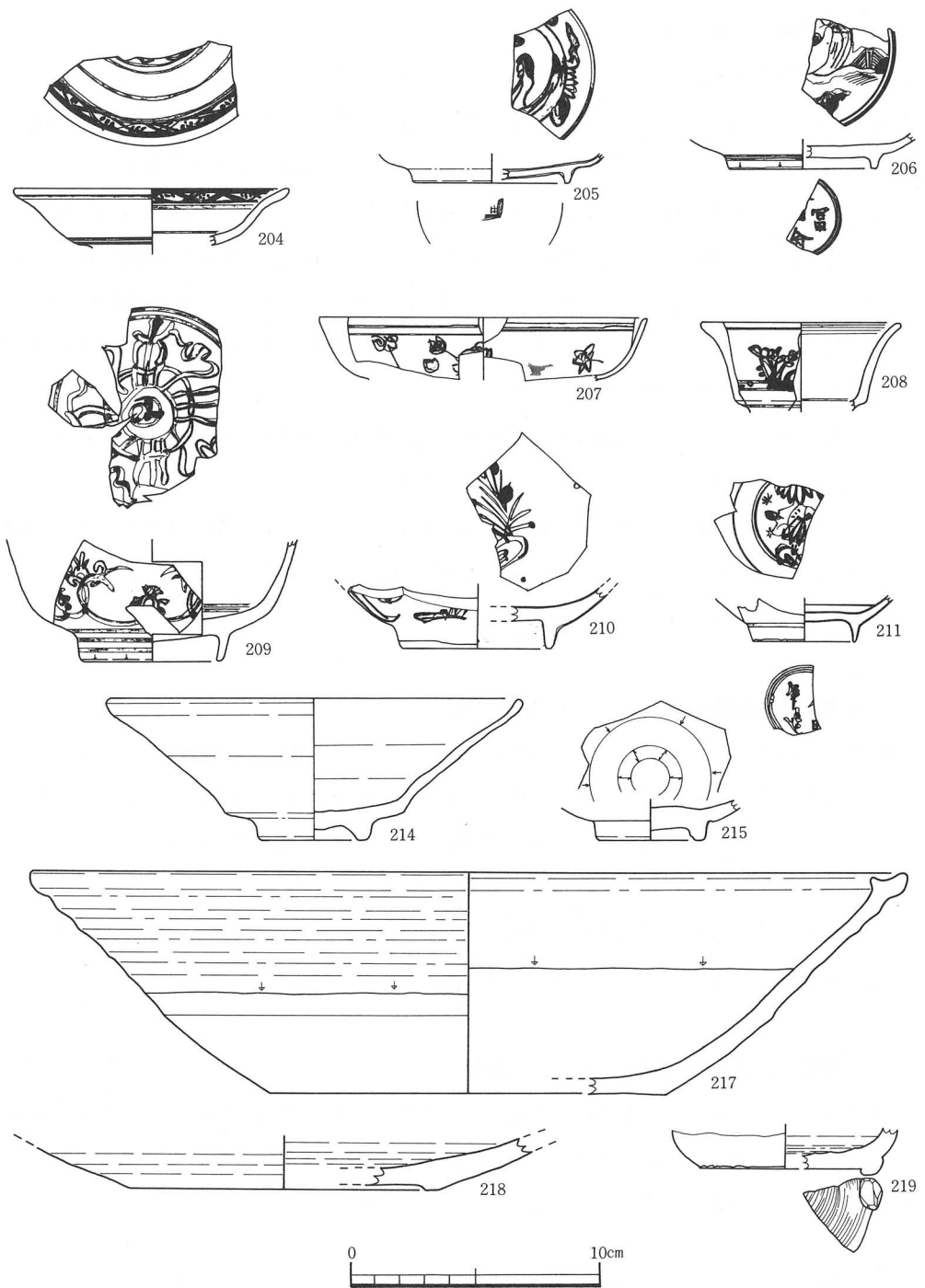
皿には端反りのもの、口縁内湾し碁笥底のもの、口縁内湾し高台のつくものに大別される。端反りの皿には、見込に花樹文、胴部外面に牡丹唐草文が施されるもの(196)さらに胴部内面に折枝文の施されるもの(197)、見込に花卉文、胴部外面に牡丹唐草文の施されるもの(Fig. 34-66)見込に玉取獅子文、胴部外面に牡丹唐草文の施されるもの(Fig. 34-65)、見込に羯磨文、胴部外面に牡丹唐草文の施されるもの(198・199)、内面胴部にアラベスク、見込にアラベスクと梵字文、胴部外面に渦状の密な唐草文の施されるもの(Fig. 33-64)、口縁内面に四方擲文、胴内外面に界線を有するもの(204)などがある。

口縁内湾し碁笥底を呈するものには、見込に吉祥文、胴部外面に梵字文を有するもの(200)、口縁縁部外面に波濤文帯が巡り、胴部外面に芭蕉葉文を有するもの、胴部内外面梵字文を有するものなどがある。なお碁笥底を呈する皿には、胎土が硬質で灰白色のものと軟質で黄白色のものがあるが、胎土による文様の差異はみられない。

内湾する皿で高台付と思われるものには、見込に蛟龍文、高台内に「圖」銘のみられるもの(205)、見込が山水人物文で、高台内「㊦命富㊧」銘を有するもの(206)、胴部内外面ともに折枝文を有するもの(207)などがみられる。また、壘付から外反ぎみに直行し朝顔状に開く皿(202)があるが、見込文様は不明である。

その他特徴のある破片としては、見込、胴部外面に皿の文様と異なった文様を赤絵付しているもの(203)がみられる。これは見込に花樹文、胴部外面に牡丹唐草文が施されていると思われるものに、赤色・緑色の顔料で見込に花樹文、胴部外面に界線と何らかの文様が施されている。低火度で焼きつけているものであろうか。また、製作年代は不明であるが、胴部外面に

Fig.44 染付・朝鮮・美濃瀬戸灰釉実測図



割線による暗文の認められる内湾する口縁部もある。

(c) 碗 (208~211)

碗は口縁が内湾ぎみになるものと端反ぎみになるもの、小碗等がみられる。

口縁が内湾するものには、見込に羯磨文、胴部外面にアラベスク文がみられるもの(209)、見込、胴部外面に丸を三つ組み合わせた文様を有するもの、胴部外面に梵字文を有するものがみられ、内湾すると思われるものには、胴部外面に芭蕉葉文をもつものや胴部外面に飛馬文をもつもの (Fig. 34-68)、見込に花卉文を有するもの (210) などがある。胴部外面に飛馬文の施されているものは、マントーシン碗のタイプに、丸を三つ組み合わせた文様や芭蕉葉文、梵字文の施されているものはレンツー碗型になるものと思われ、見込に羯磨文の施されている碗 (209) はその中間型で見込が平らになる。

口縁が端反りになる碗には、口縁内面に四方禳文、胴部外面に牡丹唐草文を有するものがあり、見込に捻花文、胴部外面に唐草文を有するものがある。

小碗は、腰部で張りをもち口縁へ外反して開く器形で、胴部外面に花樹文をもつもの(208)、見込に折菊、高台内に「 $\text{\textcircled{天}}\text{\textcircled{年}}\text{\textcircled{造}}$ 」銘のあるもの (211) で、いずれも胎土は良質である。これらの他にもう一点破片があるが、器形、文様は不明である。

(4) 中国黒褐釉陶磁器 (PL. 24-212・213)

中国鉄釉陶磁器としてはいわゆる天目茶碗がみられる。(212) 口縁は内湾又はくびれを持ち、胎土は灰白色から暗灰色を呈し黒色砂粒が混入し硬質・良好であり、露胎部が黄褐色になるものもみられる。釉調は黒色で口縁部茶褐色になるもの、茶褐色釉が施されるものなどがあり、胴部中ほどまで施釉され、それ以下は露胎となる。

中国褐釉陶磁器 (213) は、壺形の胴部片と思われる破片で、黄褐色～褐色の透明感の低い釉が薄くかかるものである。いわゆる呂宋壺と呼んでいる一群である。

(5) 朝鮮 (Fig. 44-214、PL. 24-214)

朝鮮陶器と思われる碗で器形はほぼ直行し、胎土灰色一部暗灰色で白色砂粒が混入するもので、器面全体に淡緑灰色の色調を呈する釉がかかる。釉表面は凸凹している。他に同様の胎土で明灰色の透明感の低い釉のかかる高台部もある。

(6) 緑釉陶器 (Fig. 44-215、PL. 24-215)

中国南方窯産と思われるもので、皿の高台部である。見込が蛇ノ目釉ハギで、外面腰部以下

露胎となる。胎土は灰色で硬質であるがきめが荒く、釉調は青緑色で透明感が高い。高台外面には縦位と横位にへら削りによる整形がみられる。

(7)赤絵 (PL. 24-216)

出土点数5点で、すべて内湾する皿の口縁から胴上半片である。(216)は乳白色の胎土に乳白色透明釉がかかり、内外面口縁部に褐色の界線、外面胴部に唐草文が赤色で施されている。

B、国産陶磁器類

(1)美濃・瀬戸灰釉陶器 (PL. 25, Fig. 44・45)

美濃と瀬戸は同じ項目で報告する。灰釉のかかるものは、鉢、皿(卸皿・大皿を含む)、碗、壺、香炉などがあり、陶磁器類の出土破片数中10%程度、国産品中では28.5%を占める。またその内訳では80%強が皿となる。

(a)鉢 (217)

口縁が折縁状になる浅鉢で、斜めにほぼ直線的に立ち上がる。外面には轆轤目が残り、内外面とも胴部中ほどまで釉がかかる。胎土は灰色で釉調は青緑色を呈し、一部白濁するものもみられる。また露胎部が黄褐色になるものもある。

(b)皿

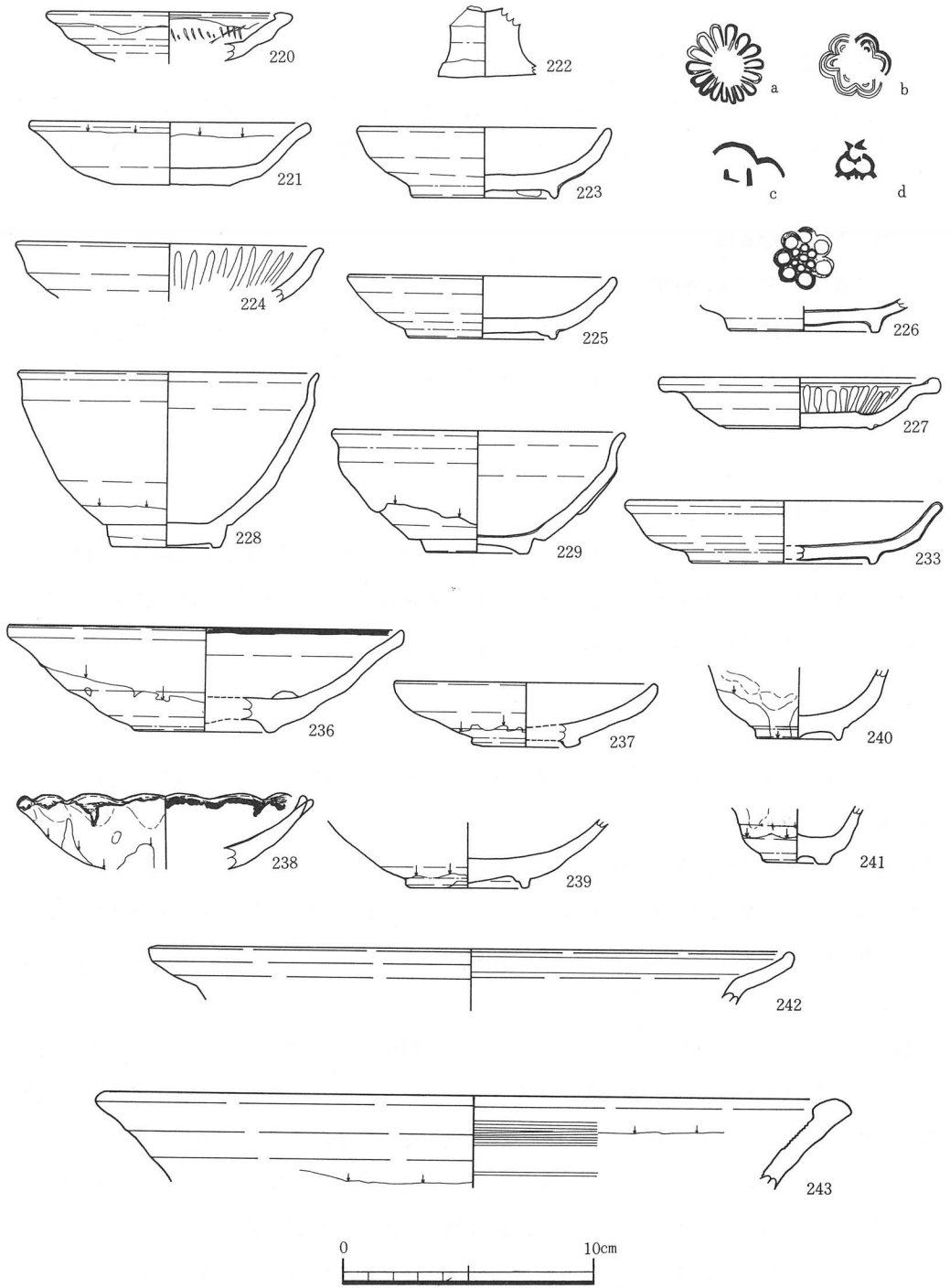
皿は、口縁部が直線的に開くもの、端反りになるもの、内湾するもの、卸皿、大皿、折縁口縁の皿に分類した。

直線的に開く皿には、釉が全体にかからず口縁内外面のみか、胴部までしかかからない底部回転糸切りの皿(221)がある。胎土は灰白色から灰色を呈し青緑色や黄緑色の釉がかかる。また、内面に篋削りによるヒダを持つ皿(224)もある。胎土白灰色で、黄色がかった青緑色の釉がかかる。

端反りの皿には見込にスタンプ文を有するもの(226)と見込無文のもの(Fig. 34-69・70)がある。いずれも胎土が灰白色で青緑色又は黄緑色釉がかかり、器全面に施釉されて高台内に輪ドチ痕がみられ、貫入が目立つものが一般的である。見込にスタンプ文の有るもの(Fig. 45-a・b・c・d)には胎土明黄褐色のものや、高台内露胎となるものもみられる。

口縁内湾する皿は、高台がつくもの(223・225)が主であるが、碁笥底になるものもみられる。高台がつくものは、端反りの皿と胎土・釉調がほぼ同じであるが、碁笥底になるものは灰

Fig.45 美濃瀬戸灰釉・美濃瀬戸鉄釉・志野・唐津実測図



白色の胎土に黄緑色釉がかかり、器面全面に白濁した点が認められる。

卸皿は口縁が折縁状になるもので、内湾ぎみに立ち上がるもの(220)と直線的に立ち上がるものがある。まず前者は細かい卸し目が内面胴部から見込に施されるが、井枠状に交差せずほぼ同一方向に施される。胎土は灰白色で青緑色釉が口縁部内外面と胴部の一部にかかる。それに比して直線的に立ち上がるものは卸し目が荒くなり、器形も前述の鉢を小形にしたようなものと思われる。胎土は灰色で青緑色釉が口縁部内外面にかかり一部は卸し目にもかかっている。

大皿としたものには、いわゆる黄瀬戸手と思われる皿(218)で碁笥底状に底部を削り出し、底裏は釉ハギとなっているものと、黄灰色の胎土に青緑色一部白濁する釉が内面全体と外面胴部にかかる平底のものがある。後者については立ち上がりやや内湾ぎみのため、鉢になる可能性もある。

折縁の皿には、胴部内面にヒダのつくものとつかないものがある。胴部内面にへら削りによりヒダのつくもの(227)は高台が削り出され、胎土灰白色で青緑色、黄緑色の透明釉か不透明釉がかかり、見込は一段高くなり釉ハギとなる。内面にヒダを有しないものは、高台の付くもの、碁笥底のもの、底部回転糸切りのものがある。高台付きのものと碁笥底になるものは、ヒダを有するものとはほぼ同じ様相を呈するが、底部回転糸切りのものは、暗緑色で透明感の低い釉が内面全面と外面は口縁部にのみ施されるものである。(201)

(c) 碗

碗は青磁を模した細線による蓮弁文を胴部外面に有し、口縁部が内湾するものがある。胎土は灰白色、黄白色で荒く、青緑色釉がかかる。蓮弁の先は剣先状になる。また無文で口縁が内湾するものもみられる。

(d) 壺

壺形には劃花文が描かれている瓶子胴部と思われる破片、同じく瓶子の胴部下半と思われる破片がある。これらは13~14世紀の瀬戸産と思われる。その他、水滴と思われる手のついていた痕跡のある破片や、仏花瓶の底部と思われるもの(222)がある。

(e) 香炉

香炉の口縁部には折縁状になるものと肥厚するものがある。

折縁状になるものは、口縁外面に一条の劃線が巡り青緑色釉がかかるものである。

肥厚するものは口縁上部が平らになり、淡黄緑色一部白濁する釉が外面と口縁内面にかかる。

その他回転糸切り底の底部にトチン状の脚がつくものがあるが釉は内外面とも施されない。

鉄釉のかかっていた可能性もある。

(2)美濃・瀬戸鉄釉陶器 (P L. 25、Fig.45)

美濃・瀬戸鉄釉には、碗、壺、皿、香炉があり、そのうち碗は3分の2を占める。国産陶磁器類の中で7.8%の出土比率がある。

(a)碗

碗はその口縁が端反するものと内湾するものがあるがいずれも釉は内面全体と外面胴部上半に比較的厚くかかり、外面胴部以下は露胎となるものである。

まず、口縁が端反するものには一度くびれた後薄くなった口縁が外反するもの(228、229)とくびれが少なく端反するものがみられる。また、他にくびれを有せず内湾するもの(P L. 25-230)と、口縁内面が折り返えしたように厚くなり、段をつくるものがみられる。胎土は全体的に明灰色のものが主体となり、黄灰色のものもみられるが、露胎部では黒色、黒褐色、灰色、淡黄色などになる。釉調は、黒色のものと茶褐色のものに大別でき、黒色のものには口縁部のみ褐色になるものもある。

(b)壺 (P L. 25)

壺形には瓶子と思われるもの(P L. 25-231)があり二次焼成にあっているため文様は明確ではないが、三ッ巴のスタンプが押されているものと思われる。また、底部付近の破片で、緑がかった黒色の釉が雑にかかっているものもこの類と考えられる。その他、小ぶりな壺形で、水滴か茶入れの破片と思われるものもある。

(c)皿 (P L. 25-232)

菊皿状になるもの一点のみである。胎土は黄灰白色で黒色と灰褐色の釉が濁ったように混在し、口縁の弁花状の形態は幅3mm程度の棒状工具で外側へ押し作っている。

(d)香炉

香炉は、美濃・瀬戸灰釉の項で述べたものとほぼ同様のもので、胴部外面に鉄釉のかかるものである。

(3)志野 (Fig.45-233、P L. 25-234・235)

志野は皿のみの出土である。すべて胎土は黄白色を呈し、釉調は白色、灰白色を呈する。

口縁部が直行気味に立ち上がるもの(233)は、胴部に厚く釉がかかり、口縁・畳付など釉が薄く、肌色となる。

その他、口縁部内湾するもの、菊皿(234)、内面に明るさの異なる赤褐色で絵付けをしたもの(235)などがみられる。

(4)唐津 (Fig. 45— 236～ 243、PL. 26)

唐津は、皿、小碗、鉢が出土しており、皿が全体の90%以上を占めている。

(a)皿

皿には、胎土白色砂粒が含まれ赤褐色で灰色の不透明釉が外面胴部までかかり口縁内面に口錆の施されるもの(236)、胎土灰色で黒色、白色砂粒が含まれ透明感のある青緑色灰釉がかかっているもの(239)、口縁菊皿状を呈し、胎土灰色で黒色、白色砂粒が含まれ、内面と外面胴部に青白色、灰白色の不透明釉、口縁内外面に鉄釉が施されるもの(238)がある。

いずれも、高台は削り出しとなり、見込に粘土によるトチンの残るいわゆる胎土目のものが多い。

砂目のものについては確認できなかった。また、胎土黄褐色で釉調は黄色がかかった灰色を呈し、焼成温度が上がらなかったためか、内外面とも釉に皺がよった状態になっているもの(237)もみられる。

(b)小碗

小碗は2個体出土している。一つは胎土赤褐色で白色粒が混入し、灰色で一部白濁した釉がかかるもの(241)で削り出し高台となっている。もう一方は暗灰色の胎土に白色粒がやや多く混ざり、暗緑色釉一部白濁するものが内面と外面胴部に施され、一部高台まで流れるもの(237)で、削り出しの高台は幅が狭くなっている。

(c)鉢

口縁が折縁状に外反するもの(242)、口縁が肥厚し段がつき円面に横位の櫛目をもつもの(243)がある。

以上の他に、口縁が折縁状になり口縁と口縁内面に鉄絵の施されるものがあるが、器形は鉢か皿か判然としない。

(5)越前 (PL. 27、Fig. 46)

越前は擂鉢と甕が出土しているが、擂鉢では越前の技法を用いて作られた産地不詳のものが

多い、これらは後述することにする。

(a) 播鉢 (244・245)

昭和58年度の浪岡城跡発掘調査報告書(浪岡城跡Ⅶ)で播鉢について分類しており、播鉢については、この分類表を基にする。

口縁内面に一条の窪みを有するもの(244)はⅣ bに分類されるものである。口縁の内面に一条の段を有するもの(245)はⅣ eに分類されているものである。

(b) 甕 (246～249)

甕の口縁部には、外面に一段の段がつき内面に一条のくぼみを有するもの(246)と外面に一段の段を有するもの(247)がみられ、胴部には「本」字と井枠のスタンプが施されるもの(248)、底部には内面に釉が飛んでかかっているもの(249)などがみられる。

(6) 珠洲 (Fig. 46, PL. 27)

珠洲産と思われる陶器で、播鉢と甕の胴部が出土している。

(a) 播鉢 (250～252)

播鉢については、越前の播鉢と同様に分類表を用いることとする。口縁外面が内湾状にきれ、内面に幅2mmほどの櫛目が縦位に入るもの(250)はⅢ cになり、珠洲でも第1段階の古手のものと思われる。珠洲の第2段階にはいる播鉢は口縁内面に波状櫛目文を有するもの(251)でⅢ aに分類され、珠洲の第Ⅴ期に比定されるものと思う。口縁内面に波状櫛目文を有し目立った段をもたない播鉢(252)は、胎土灰色～赤褐色で、胎土と櫛目の入りもあまり良好ではない。珠洲の第Ⅶ期に比定されるものであろうか。

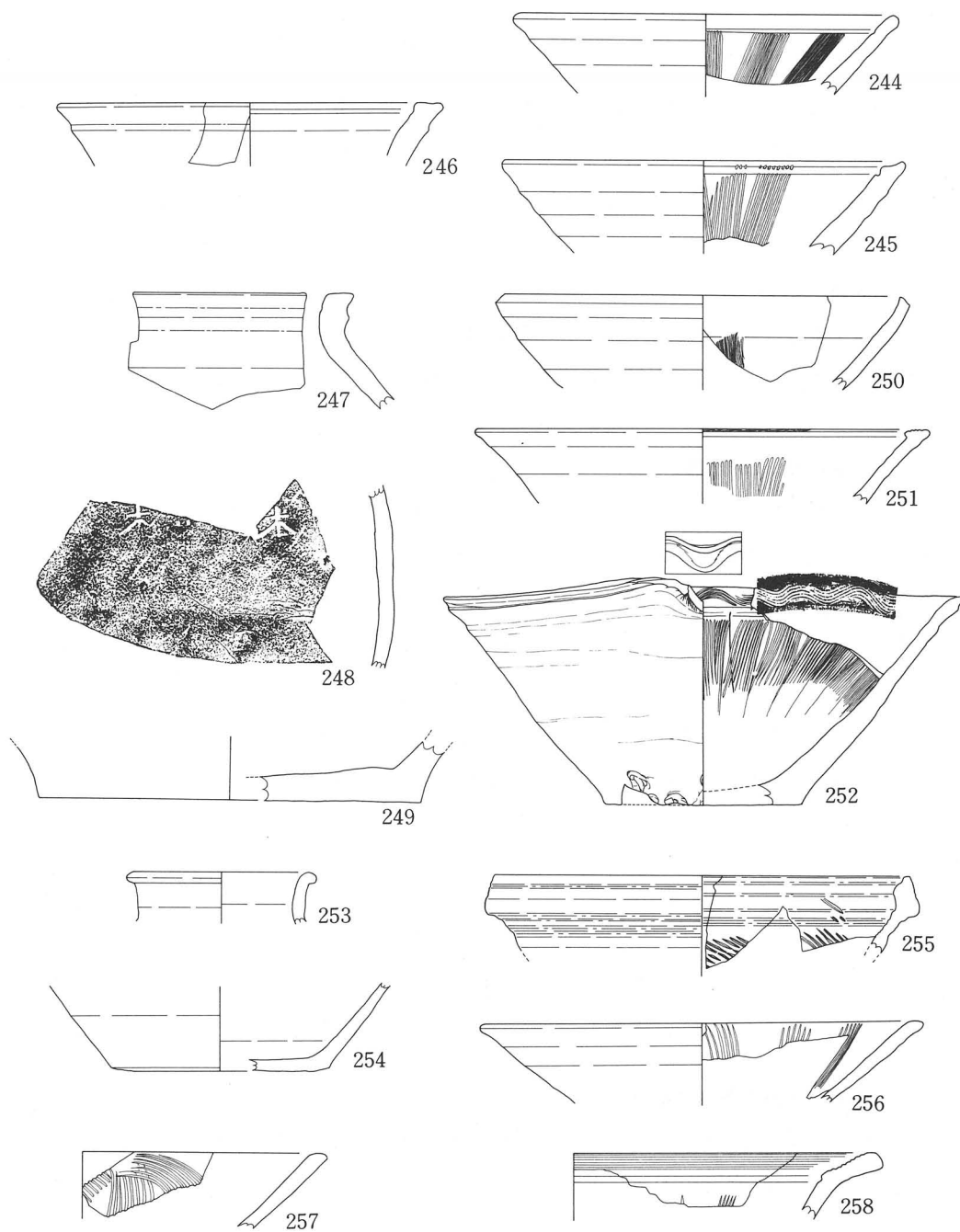
(b) 甕・壺

甕の胴部と思われる破片には、外面に叩き目のあるもの、叩き目が内外面にみられるもの、外面に沈線文のみられるものなどがある。また、耳のついていたと思われる破片もあり、四耳壺の可能性はある。

(7) 備前 (Fig. 46— 255)

備前と思われる播鉢が1点出土している。口縁外面が肉厚な段状を呈し、あずき色の色調から黄灰色の色調まで部分によって相違がある。胎土は赤褐色を呈し硬質感に富む。

Fig. 46 越前・珠洲実測図



0 20 40cm

(8)産地不明の陶磁器 (Fig・46、PL.24)

産地が不明な播鉢と信楽の可能性のある壺がある。播鉢は越前の技法を用いた例(256～258)が多く、櫛目は比較的荒く胎土も中心が黒色で表面が灰色とサンドイッチ状になるものが目立つ。分類ではV類に入る。

信楽の可能性のある壺は頸部が直立し口縁が玉縁状になるもので、胎土は灰色の中に黒色砂粒、長石粒を多量に含み、器表面に長石の吹き出しがみられる(253・254)。信楽の14C後半～15Cにみられる肩の張る壺に近いと思われる。

(9)瓦器 (Fig・47)

本来瓦質土器と呼ぶべきもので、一般的な意味での瓦器ではない。器形は手焙り、壺等が主にみられる。表面はほとんどが黒色処理をされている。

(a)手焙り (259～263)

肩の張る壺形状の器形で、肩部分には窓があくと思われ口縁部はほぼ直立する。底部の形状は脚がつく可能性もあるが不明。頸部外側には数種のスタンプが押される。笹りんどう(259)、半菊花状(260)、多重菱形(261)、八菱(262)、流水状(263)等である。

小型の手焙り又は火鉢と思われるもの(264)は、行火の可能性も考えられる。黒色処理はしていない。

火鉢・手焙り等のものと思われる脚は、L字型で本体との接合面に刻みをもたせたもの(265)と、湾曲して中央を木葉状にえぐり取っているもの(266)がある。それぞれ多角形や円形の本体につけられたものであろうか。

(b)壺 (267)

小型の壺の胴下半と思われるもので、三ツ巴文帯と雷文帯が胴部外面を巡っている。黒色処理は施されていない。

(c)不明瓦質土器 (268)

瓦器であるが、製造時代が不明である。器形から五徳的な使用をしたと思われる。内面2箇所以上に瘤状の突起があり、また一部口縁が削られ低くなっている。

(10)かわらけ (269～275)

かわらけには、底部が回転糸切りのもの(269～272)と、手捏ねによる成形(273～275)が

みられる。

(11)土製品 (Fig.47、PL.28)

主に鑄造関係の遺物で、鑄型、坩堝、羽口がある。

(a)鑄型 (276)

木瓜形鐔の雄型と思われる。胎土は黒色で植物質が炭化状になり残る。砂粒は目立つほどではないが含まれる。内面は灰色に焼けただれる。縁は鋸歯状に凹凸がみられ、雌型と噛み合せの際に利用したと思われる。また、縁が狭い範囲で深くえぐられた部分は湯口の可能性もあるが溶解物等の付着は特別みられない。

(b)坩堝 (277・373・374)

口径9cm程度のものが大半を占めるが、6～7cmの小型のものもみられる。胎土は鑄型と同様であるが、砂粒はやや多く含まれる。口縁部と内面は銅滓が付着し、特に口縁は溶けてガラス状になるものが大半であるが、未使用と思われる破片もみられる。

(c)羽口 (278・375・376)

羽口は20片以上出土しているが、内径をみると、2.4cm、3cm、3.6cm、4cmの4種に大別される。このうち3.6cmのもの3cmのものがそれぞれ $\frac{1}{2}$ ずつとなる。これが単に同一の棒を芯にして作ったものか、規格があったものかは今後の出土状態と統計によりたい。また、穴が角形になるものがあり芯棒に角材も用いたことが推定できる。

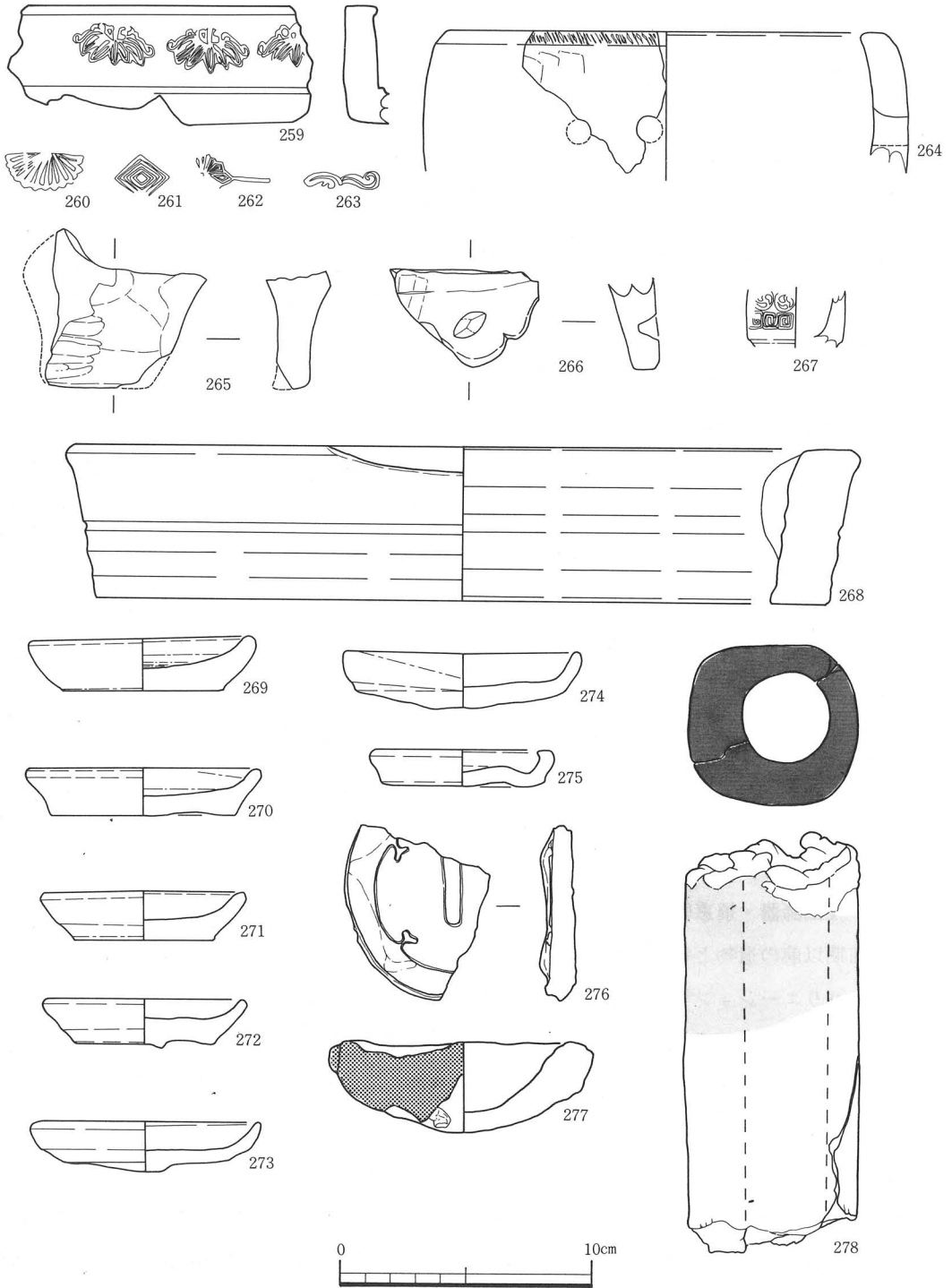
(12)土師器・須恵器 (Fig.48)

城館期以前の遺物と考えられるもので、遺物の大半が未整理である。したがって、破片数・器形のバリエーション等不明な点が多い。ここでは一部を紹介するに留める。

取手付鉢の取手部分 (280)。内耳土鍋の口縁部 (281) 片は2個体出土している。内耳土鍋については、通常耳が縦方向につくものであるがこれは横方向についており持異な形態を示している (もう1個体も耳は横方向である)。

土師器・須恵器の碗・皿については、浪岡城跡Ⅶ (昭和58年度分) に器形のバリエーションの一部が紹介されている、それを参照されたい。なお、図版のものは、耳皿 (279)、積み上げの碗 (283)、内黒の碗 (284)、ロクロ使用の碗 (285)、ロクロ使用の皿 (286)、時代不詳でロクロ使用の小碗 (282)、以上が土師器であり、須恵器は、表面赤褐色で酸化須恵器と

Fig.47 瓦器・かわらけ・鑄型・羽口・埴塼実測図



器という名称で呼んでいる碗（287）である。

(13)伊万里（PL. 26-288~296）

伊万里は、碗、皿、壺の出土があるが、城館期以後の遺物であるため、資料を呈示するに留める。研究者諸氏の参考の一端になれば幸いである。まず、渦巻状の文様が内面にある菊皿状の破片（288）、見込に梅花状の文様を施したもの（291）、見込にねじ花状の文様を施した大皿と思われるもの（292）、見込にくすんだ青緑色で草花葉が描かれるもの（293）、外面に二重の網目文様が施される碗（295）、外面唐子文様の描かれる壺（296）など17世紀~19世紀、現代までの破片が出土している。なお、遺構に伴う破片はほとんどなく、表土、I、II層上面からの出土が大多数で、他に（289）・（290）・（294）の破片がある。

〔陶磁器類小結〕

昭和59年度、内館より出土した陶磁器はそれまでの北館出土品と比較して、伝世品的な傾向を持つものが多く、良質で器種もバラエティーに富むようである。また、北館と最も異なる点は、舶載品と国産品の出土比率である。北館においては51：49とほぼ同率で出土していたが、内館では60：36と舶載品が倍近くなる。さらに日常雑器である播鉢、瓦器を除いた、碗、皿類で比較すると北館が100：48と約半分の割合で国産品が混るのに対し、内館では100：28と国産品は $\frac{1}{3}$ にも満たなくなる。この原因については生活年代の差、階層差など、さまざまな要素が考えられよう。

C h. 54出土陶磁器類種別出土率表

青磁		白磁		染付		赤絵		黒褐釉		朝鮮		緑釉陶器		美濃・瀬戸(灰釉)		美濃・瀬戸(褐釉)		志野		唐津		播鉢		瓦器		珠洲		越前		備前		信楽		かわらけ		伊万里系		計																			
碗	皿	他	皿	碗	他	皿	碗	他	碗	壺	碗	皿	皿	碗	他	碗	他	皿	皿	他	火舎	他	珠洲	越前	備前	信楽	かわらけ	碗	皿	他	計																										
570	165	51	493	66	16	383	146	12	5	10	7	5	1	266	18	46	60	30	22	85	7	327	84	15	190	3	4	29	36	27	1																										
786		575		541		5		17		5		1		330		90		22		92		327		84		15		190		3		4		29		64		3,180																			
24.7		18.1		17.0		0.2		0.5		0.2		0.03		10.4		2.8		0.7		2.9		10.3		2.6		0.5		6.0		0.09		0.1		0.9		2.0		≒100%																			
1930												534						623																																							
60.7												16.8						19.6																																							
100 : 27.7																																																									

舶載品														計						
青磁			白磁					染付			赤絵	黒褐釉			朝鮮	緑釉陶器				
碗	皿	他	皿・I	皿・II	碗・I	碗・II	他	皿	碗	他		碗	壺							
570	165	51	400	93	61	5	16	383	146	12	5	10	7	5	1					
786			576					541			5		17		5		1		1,930	
40.7			29.8					28.0			0.26		0.9		0.26		0.05		≒100%	

国産品																	計				
美濃・瀬戸(灰釉)			美濃・瀬戸(褐釉)		志野	唐津		播鉢	瓦器	珠洲		越前		備前		信楽		かわけ	伊万里糸		
皿	碗	他	碗	他	皿	皿	他		火舎 他	播鉢	甕他	播鉢	甕他	播鉢	甕他	甕他			碗	皿	他
266	18	46	60	30	22	85	7	190	84	92	15	43	190	2	3	4		29	36	27	1
330			90		22	92		190	84	107		233		5		4	29	64			1,250
28.5			7.8		1.9	8.0		16.4	7.3	9.2		20.1		0.4		0.3					≒100%

※数値は破片数(1157)

2. 鉄製品 (PL.28・29、Fig.29・34・35・39・40・50)

鉄製品は武具、農工具、生活用具に大別した。まだ未整理なものもあり、ここでは概要を述べるに留めておく。

A. 武具

小刀は3点出土している(71・153・303)、いずれも平造りで、(71)と(303)は切先が幅広がりになる形から工具としての用途も考えられる。

小柄小刀(72)は小刀の茎に魚々子をまいた銅板を巻きつけているものである。

鎧の部品としては胸板(302)、小札がある。

小札には頭部が斜めに切れるもの(82~92)やいわゆる碁石頭状のもの(92~96)、三ツ目札(97・98)もみられる。打根(77)は中空で木製の柄をつけ、槍状に用いたと思われる。

鉄鏃には、鑿根(37、301)、木葉型(299)、平根(298)、鯖尾(297)などの形態の他、出土数の多いものに、先端が楔状(鑿状)のもの(75)がある。

B. 農工具

農具として鋏・鋤類(145・312)、平造りの鎌(146・304)がみられる。工具には苧引金(148・149・150)、鑿と思われるもの(117)、鋲と思われるもの(310)、錐と思われるもの(115)がある。また、手斧や鉋的な用途の考えられる布で巻いた小刀(306・307)や、紡錘車の軸と思われる角釘状のもの(309)、その他山刀等の柄に補強に使ったと思われる環状製品(311)等がある。

C. 生活用品

生活用品としては、錠(40)、鋏(108)、毛抜き鋏(109)、針(330)、火打金(110)、内耳鉄鍋で三耳のもの(154)二耳のもの(305)、火箸(100~102、308)等がみられる。

また、建築用具をみると、鉄製品中最も出土量の多い角釘(41~49・122~124・147・188)

Fig.48 土師器・須恵器実測図

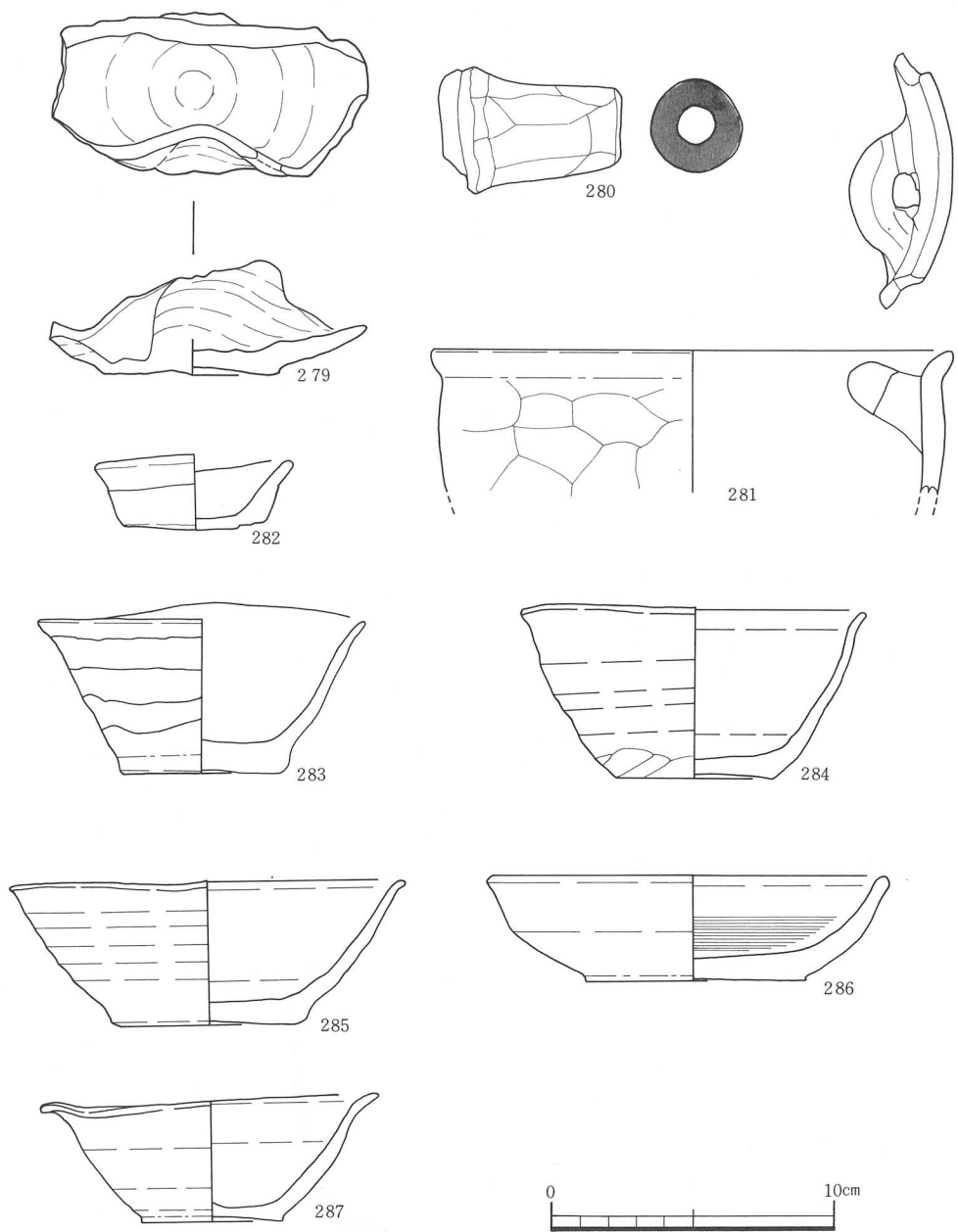


Fig.49 鉄製品実測図

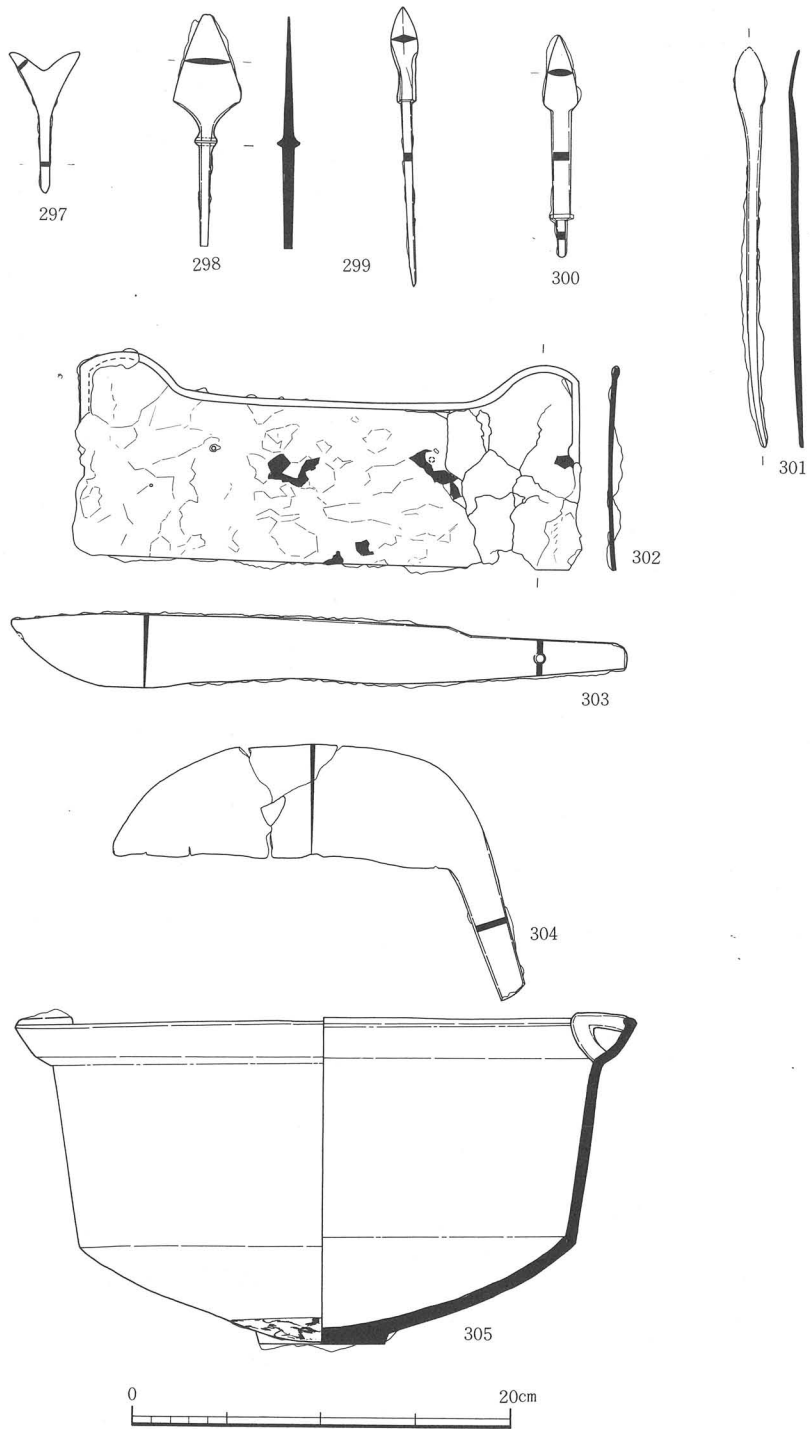


Fig.50 鉄製品実測図

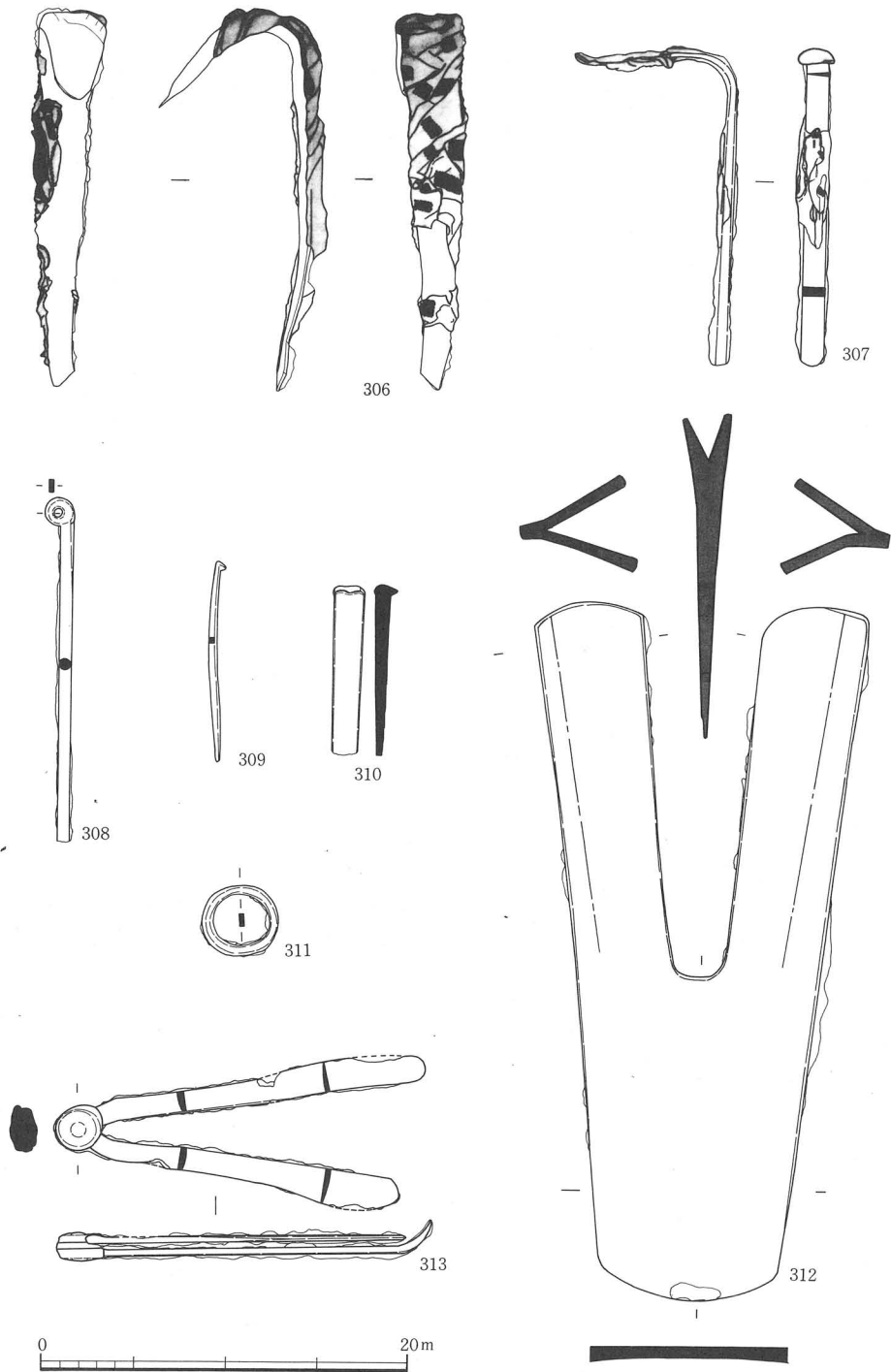
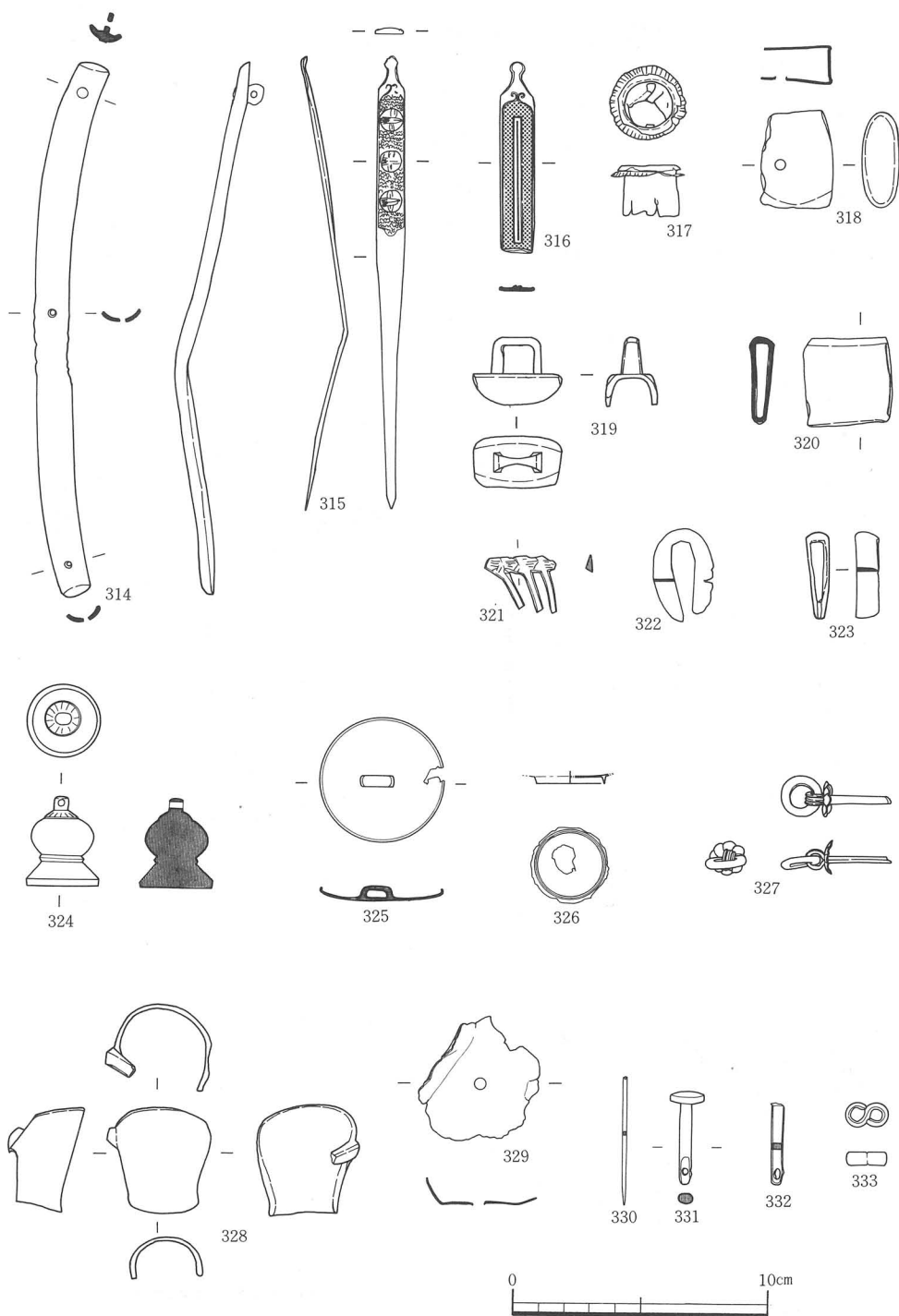


Fig.51 銅製品実測図



やかすがいなどが出土している。他に、用途不明鉄製品として、平造りの刃を先に持つ2本の刃物を、元で回転するように繋いだ鋏状のもの(313)がある。製品ではないが、鉄滓(377・378)の出土もみられる。

3. 銅製品 (Fig.29・34・35・51、PL.28・29)

銅製品は武具・装飾具と生活用具に分けた。銅製品も整理作業が進んでおらず、本来分けるべき仏具等も未整理の状態であるため、項目を設けず、生活用具に含めてゆく。

A. 武具・装飾具

武具の内、刀装具として^{つば}鑑(320・323)、切羽(322)太刀の足金具(319)、柄頭(318)鑑(78)、目貫と思われるもの(80・81)等がみられ、鎧の金具と思われるものには、鞆(99)、緒などを通した環と思われるもの(327)、八双金具と思われるもの(100・101)、化粧板と思われるもの(314)、兜の八幡座(天辺座)(317)、鋌(53・103・104)などがみられる。他には筭(74・315・316)や座金と思われるもの(Fig. 35-102、329)や鞆の可能性のあるもの(333)、小柄小刀の柄などが出土している。装飾具の一部と思われる表面に金箔の付着したもの(321)もある。

B. 生活用具

宝珠形分銅(324)、内面に金箔の張られた蓋と思われるもの(325)、仏具として、高台の一部(326)仏花瓶の口縁などの他に用途不明銅製品(328)、鋌(331・332)等が出土している。宝珠形分銅については、従来他遺跡での出土がみられたが、本遺跡では初めての出土である。形態は青森県尻八館で出土した「権」に相似しているが、重量では90.52gと、宮城県御所館から出土した六角堂形の「仏塔を模した青銅製品」とほぼ同じ値を量る。

Ch. 55鉄・銅製品観察表

P LNo.	FigNo.	遺物No.	名 称	出土区・遺構名	層 位	計測値(長×幅×厚)cm	特 徴	備 考
49-297	F 574	F 574	雁 股 鎌	P47 SE82	フ ク 土	7.47×3.61×0.31		
49-298	F1438	F1438	鉄 鎌	Q45 SX204	"	(12.40)×3.52×0.70		
49-299	F 574	"	"	T45	II	14.80×1.37×0.86		
49-300	F 496	"	"	T46	"	(11.70)×2.04×0.76		
49-301	F1652	"	"	Q46 SX225	セクション内フク土	21.0×1.68×0.50		
49-302	F1777	F1777	鎧 の 胸 板	T46 SX245	フ ク 土	26.0×10.84×0.45	銅製の縁金具付	
49-303	F1886	F1886	刀	T47 SX262	セクション内床面直上	30.0×3.89×0.36		
49-304	F 716	F 716	鎌	P47	VI 上	20.02×5.99×0.33		
49-305	F1229	F1229	鉄 鍋	O46 SE92	フ ク 土	33.0×17.5×0.60		
50-306	F1230	F1230	不明鉄製品	" "	"	(20.57)×3.25×0.46	麻布を巻きつけている	
50-307	F1231	F1231	"	" "	"	(16.60)×1.87×0.65	"	
50-308	F1489	F1489	火 箸	Q46 SX225	床 面 直 上	(18.70)×0.77		
50-309	F 848	F 848	不明鉄製品	Q47 SX212	フ ク 土	10.90×0.40		
50-310	F1280	F1280	鏃	S47 SX219	"	6.32×(1.30)×(0.89)		
50-311	F1725	F1725	環状鉄製品	T47 ST262	"	4.19×3.79×0.40		
50-312	F 255	F 255	鋤 先	R46	II	37.0×14.0×1.15		
50-313	F1885	F1885	不明鉄製品	T47 ST262	セクション内床面直上	(20.26)×1.58×0.34		
51-314	F 236	F 236	鎧 金 具	Q46	I	21.6×1.92×0.15	三孔有	
51-315	F 196	F 196	筭	S45	II 上	18.5×1.1×0.215		
51-316	F 187	F 187	"	R45	II	(7.55)×1.29×0.2		
51-317	F 53	F 53	天辺座(八幡座)	O45	"	1.93×2.85×0.03		
51-318	F1389	F1389	柄 頭	S46、47 SX219	セクション内フク土	(2.72)×3.78×1.53	径0.4cmの孔有	
51-319	F1386	F1386	不明銅製品	S48 SB38	フ ク 土	2.63×3.40×1.98		
51-320	F 830	F 830	鍾	Q45 SE87	"	(3.50)×(3.41)×0.97		
51-321	F 381	F 381	不明銅製品	S46	II	(2.41)×(2.40)×0.28	金付着	
51-322	F1168	F1168	切 羽	P45 SE89	フ ク 土	3.50×2.85×0.09		
51-323	F 461	F 461	鍾	S48	I	3.38×0.88×0.8		
51-324	F1343	F1343	宝珠形分銅	Q46 Pit内	フ ク 土	2.88×3.50	重さ90.52g	
51-325	F1602	F1602	銅製の蓋	T47	IV 上	4.79×0.05		
51-326	F 329	F 329	六器の高台	R46	IV 上(焼土)	2.69×0.36×0.03		
51-327	F 312	F 312	飾り金具	P47	II (灰層)	4.38×0.43		
51-328	F1409	F1409	不明銅製品	P45, SX203Pit内	フ ク 土	4.18×3.94×0.18		
51-329	F 326	F 326	飾り金具	P47	II	(5.07)×(4.23)×0.08	中央に径0.51cmの孔有	
51-330	F1921	F1921	鉄 針	T45 SX237	フ ク 土	(5.04)×0.19×0.16		
51-331	F 754	F 754	銅 鋌	Q47 SX202	"	3.64×0.50	径0.25cmの孔有	
51-332	F2136	F2136	"	T45 SX237	セクション内フク土	(3.26)×0.5×0.31		
51-333	F1856	F1856	不明銅製品	T46 SX247	床 面	1.69×0.54×0.19	0.44×0.23cmの孔有	

4. 銭貨 (Ch.56)

銭貨については、S P11からの 5,971枚を除くと、427枚が出土した。ここでは城館期以後の銭貨である寛永通宝等28枚を除く 399枚について以下で述べてゆく。Ch.56の項目は、出土銭貨の名称・個体数・出土銭貨全体からみた出土率・初鑄年が城館期以前である銭貨の中での出土率の順で編成されている。以下での「出土率」は後者を用いる。なお、判読不能銭については統計上含めたが、その種別の内訳が不明のため年代別比率では扱わないこととする。

高い出土率を示すものは、無文銭（89枚22.3%）、洪武通宝（26枚6.51%）、開元通宝（18枚4.51%）、永樂通宝（16枚4.01%）、皇宋通宝（13枚3.25%）等である。銭貨名がわかるもののみで年代別の比率を出すと、唐銭：北宋銭：金銭：南宋銭：元銭：明銭：朝鮮銭：無文銭が8：36：1：2：1：16：1：34となり、北宋銭が3分の1以上、無文銭が3分の1強を占める。以上の数値を北館出土銭貨の傾向（5：37：1：1：1：24：1：31）と比較してみると、内館では明銭の出土率が低くなる傾向がみられるようである。

Ch.56銭貨名称別出土表

	名 称	個体数(枚)	出土率 (%)			名 称	個体数(枚)	出土率 (%)	
1	開元通宝	18	4.21	4.51	24	聖宋元宝	7	1.63	1.75
2	乾元重宝	1	0.23	0.25	25	大観通宝	3	0.70	0.75
3	唐国通宝	2	0.46	0.50	26	政和通宝	4	0.93	1.00
4	太平通宝	2	0.46	0.50	27	正隆元宝	1	0.23	0.25
5	淳化元宝	1	0.23	0.25	28	紹熙元宝	1	0.23	0.25
6	至道元宝	1	0.23	0.25	29	大宋元宝	1	0.23	0.25
7	咸平元宝	2	0.46	0.50	30	淳祐元宝	2	0.46	0.50
8	景德元宝	2	0.46	0.50	31	皇宋元宝	1	0.23	0.25
9	祥符元宝	2	0.46	0.50	32	咸淳元宝	1	0.23	0.25
10	祥符通宝	2	0.46	0.50	33	至大通宝	1	0.23	0.25
11	天禧通宝	5	1.17	1.25	34	洪武通宝	26	6.08	6.51
12	天聖元宝	4	0.93	1.00	35	永樂通宝	16	3.74	4.01
13	皇宋通宝	13	3.04	3.25	36	朝鮮通宝	1	0.23	0.25
14	至和元宝	1	0.23	0.25	37	鉄 銭	5	1.17	1.25
15	嘉祐元宝	1	0.23	0.25	38	無文銭	89	20.84	22.30
16	嘉祐通宝	4	0.93	1.00	39	判読不能	138	32.31	34.58
17	治平元宝	1	0.23	0.25	40	寛永通宝	4	0.93	
18	治平通宝	1	0.23	0.25	41	一 銭	18	4.21	
19	熙寧元宝	7	1.63	1.75	42	五 銭	4	0.93	
20	元豊通宝	12	2.81	3.00	43	十 銭	1	0.23	
21	元祐通宝	11	2.57	2.75	44	一 円	1	0.23	
22	紹聖元宝	8	1.87	2.00					
23	元符通宝	1	0.23	0.25		総 計	427(399)	= 100	= 100

5. 石製品 (Fig. 52・53、PL. 29・30)

石製品は、臼、石鉢、砥石、硯、火打石、石製人形、縄文時代の石器の出土がある。

A. 臼 (Fig. 52)

臼は茶臼と粉挽き臼に分けた。両者とも上臼、下臼が出土している。点数は整理中のため明確ではない。

(1)茶臼

上臼の内4個体はひきぎ孔を持ち (334・335・336・337)、主溝で8分割し副溝は任意に入れているようである。逆目は見られない。下臼 (339) も主溝で8分割し副溝は任意に入れており、正常目である。上臼の溝の切られた面と下臼の外表面はよく磨かれている。他に(338)もある。

(2)粉挽き臼

上臼では主溝8分割し副溝を任意に入れるもの (340)、主溝による分割をせず放射状に溝を切るもの (341) がみられる。下臼は、主溝8分割し副溝3本と考えられるもの (342・343) がある。逆目を切る例はみられない。磨かれた痕跡はみられない。

B. 石鉢 (344)

外面は底部上を縦に削るが整形は雑である。内面は磨かれているが、茶臼ほどではない。

、C. 砥石

四面を用いている例 (347) と五面以上を用いている例 (348) がみられる。後者は個体数が少なく、また四面使用している砥石の角部を使用している例がほとんどである。

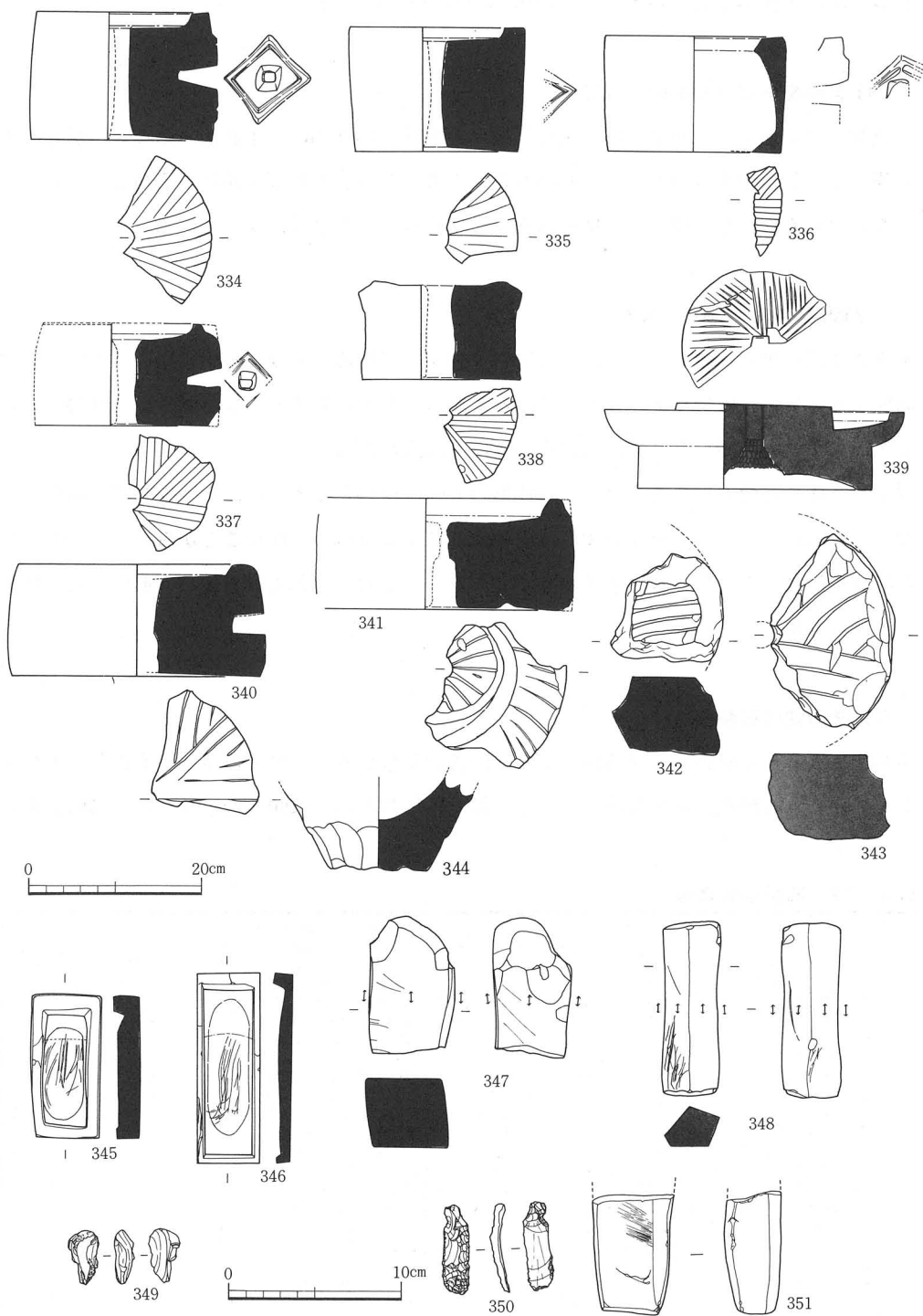
D. 硯 (345・346)

硯は破片が多く全形をつかめないものが大半を占める。今回出土した硯は小型のものがほとんどで、海部分もそれほど容量がない。

E. 火打石 (349)

石英質の石片で、エッジの部分に打撃痕がみられることから、火打石として用いたものと思われる。同様の石片には大きなものはなく、3cm前後のものが多いようである。

Fig.52 石製品実測図



F. 石製人形

石製人形は2体出土しているが一方は頭部のみのものである。

(1)女性を形どったもの (352)

白色凝灰岩を加工して頭部を削り出し、顔・手を浮き彫りの、下腹部・頭髪を細劃線により表現している。手を合わせた姿のため石仏とも考えたが、下腹部・頭髪の表現など、仏像らしくないため人形として扱った。底面は水平に切られ、立つようになっている。

(2)頭部のみのもの (353)

男性の頭部と思われるもので、白色凝灰岩を加工して顔部と頭髪部を削り出し、表情・頭髪の状態などをV字状に切り込み表わしている。眉の上がった表情や頭髪が鬢を結う状態を表わすことから男性と判断した。首にあたる部分にくぼみがある。

以上、2体の石製人形を考えると、女性形のは玩具とは考えがたく、安産等の祈願に用いたものであろうか。一方男性形頭部は首相当部にくぼみがみられることから、あやつり人形等の玩具色の強いものである可能性が高いであろう。なお、白色凝灰岩製の人形は、岩手県長瀬C遺跡でも出土している。

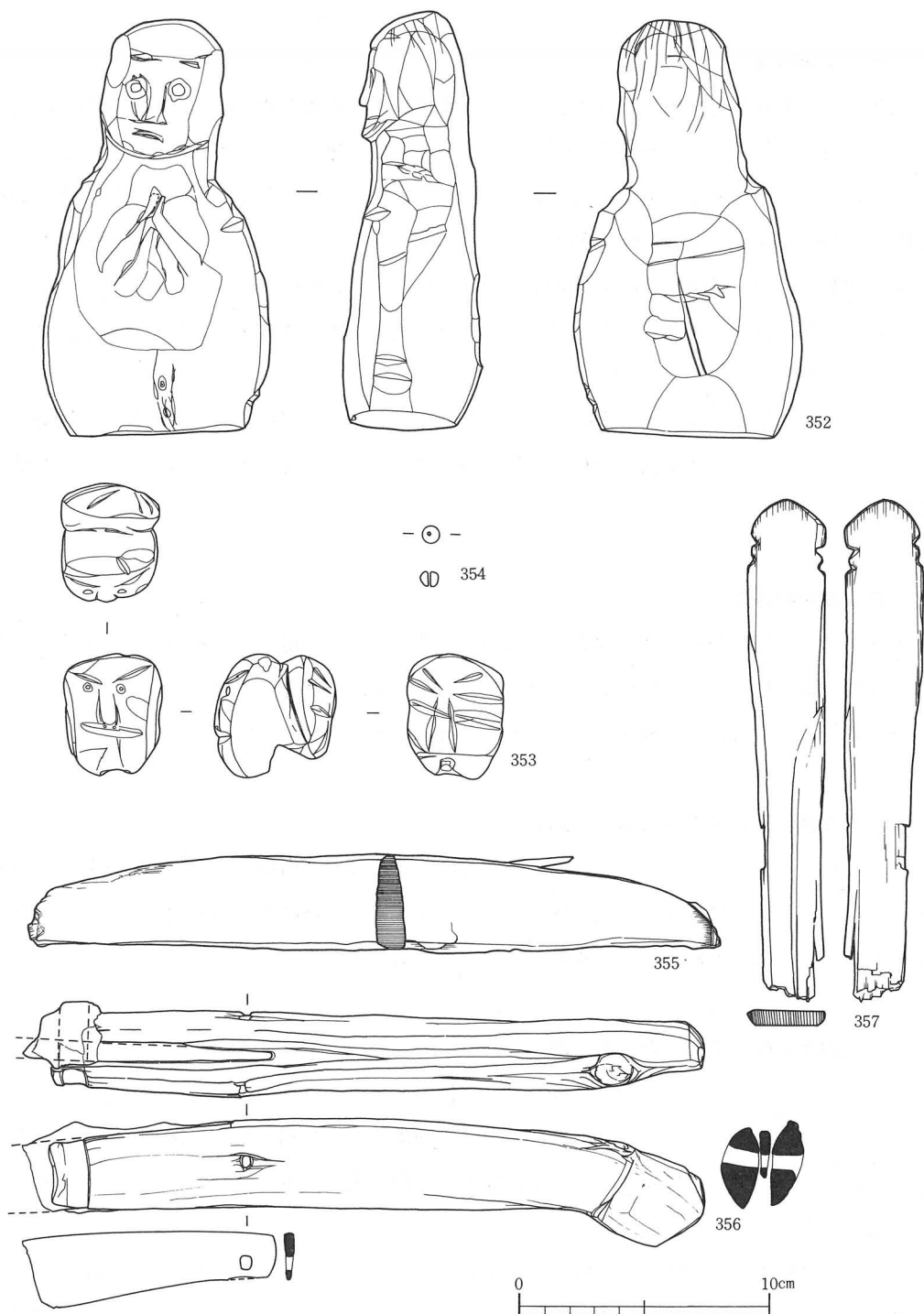
G. その他の石製品

装飾用と思われる緑色の玉 (354) は表面に光沢を帯びる。この種の玉は、青白色のものも出土している。城館期以前の遺物としては、縄文時代の石匙 (350) や磨製石斧 (351) が出土している。

C h. 57 石製品観察表

PL.No.	Fig No.	遺物No.	名 称	出土区・遺構名	層 位	計測値(長×幅×厚) cm	特 徴	備 考
52-334	S 121	石 白	R47 S T250	フ ク 土	(18.7)×(12.94)×13.36	推定径 約28.5cm	上 白	
52-335	S 27	" "	S 47	I	(11.84)×(9.95)×14.95	" 約19.0cm	"	
52-336	S 91	茶 白	R47 Pit内	フ ク 土	(20.36)×(5.5)×14.9	" 約20.0cm	"	
52-337	S 44	石 白	S 47	II (灰 層)	(17.44)×(9.77)×12.23	" 約21.0cm	"	
52-338	S 39	茶 白	V 46	II	(12.7)×(8.43)×12.25	" 約18.0cm	"	
52-339	S 60	" "	R47 Pit内	フ ク 土	35.0×(17.5)×10.0	" 約35.0cm	下 白	
52-340	S 126	石 白	" ST250	"	(18.7)×(12.94)×13.36	" 約28.5cm	上 白	
52-341	S 119	" "	T 45	II	(18.23)×(14.0)×13.22	" 約30.0cm	"	
52-342	S 20	" "	P 47	II 下	(12.2)×(12.57)×9.54	" 約27.0cm	下 白	
52-343	S 100	" "	O 45	IV 上	(22.2)×(13.94)×9.9	" 約30.0cm	"	
52-344	S 21	石 鉢	P 46	II	(19.14)×(15.46)×(13.03)	"	底 部	
52-345	S 59	硯	P 45 SX200	フ ク 土	8.36×3.93×1.49	"	"	
52-346	S 80	" "	P 45, 46 "	セクション内フク土	11.06×3.64×1.06	"	"	
52-347	S 145	砥 石	W 46 SE101	フ ク 土	(7.78)×5.50×4.58	"	"	
52-348	S 32	" "	S 47	II (灰 層)	(9.9)×3.35×2.8	"	"	
52-349	S 74	火 打 石	P 45, 46 SE89	フ ク 土	3.09×1.65×0.89	石 英	"	
52-350	S 30	石 匙	S 47	II	5.07×1.43×0.59	"	"	
52-351	S 65	石 斧	Q 47 SX218	フ ク 土	(7.06)×0.68×3.24	"	"	
53-352	S 148	石 製 人 形	S 46 Pit内	"	16.6×8.79×5.39	"	"	
53-353	S 109	人 形 の 頭 部	PQ 45 SX226	"	5.48×3.79×4.67	櫛をさしこむようなくぼみがある	"	
53-354	S 64	数 珠 玉	Q 47 SX211	"	径1.89×幅0.74	孔の径 0.17cm	"	

Fig.53 石製人形・木製品実測図



6. 木製品 (Fig. 53・54・55・56)

木製品では生活用具、曲物の井筒、祭祀・信仰具が出土したが、未整理品も多い。

A. 生活用具

ここでは、饗膳具を含めた生活用具とする。饗膳具では漆器が井戸跡、竪穴建物跡から出土するが、被膜のみ残るものが大半で取り上げも不可能な状態である。内面黒色で外面朱色であるものが多いようである。他に折敷(361)、切込を入れた木片(365)、小型の曲物の底(369・371)、焼いて穿孔した曲物底(360)、篋(368)等がみられる。その他生活用具として、下駄(359)、刀又は山刀等の柄(356)がみられる。(356)は、木製の柄に割込む形で茎が挟んであり、目釘穴がみられる。饗膳具の材質はすべてアスナロヒバと思われるが、柄と下駄の材質は不明。

用途不詳の木製品には、柄(356)と共伴した片側が曲線に切れる板(355)、火箸等でつけたと思われる焼跡の残る板(366)、井戸出土の長方形の板(372)、杭状のもの(367・370)がある。

B. 曲物の井筒

SE80では井筒が曲物により構成されていた。日常生活で使用した曲物の転用も考えられたが、底板を結合した孔がみられないことから、転用の可能性は薄いと思われる。

確認できたものは側板3個体分で、いずれも材質はアスナロヒバである。

(1)外側に配してあったもの(363)

順目の板材を用いており、綴じ合わせた際に重なる部分の内面のみ縦位のケビキがみられる。綴じ方は樺皮により1列上下内4段綴じを呈するが、外に重なる側の上下端が先細りに削られているため、外側の板からみると1列上下外綴じとなる。

(2)内側に配してあったもの(364)

板目材を用いている。内面全体に等間隔に縦位のケビキを入れ、外面には10cm幅の中に斜行するケビキが入るため、ケビキは数段になる。樺皮を途中で継ぎ足して綴じており、綴じ方としては1列下内で下の樺皮で3段、上の樺皮で3段以上になるとと思われるが、上部は腐蝕しているため上が1段しか確認できない。

出土した時点では(363)の内側に(364)が落ちていたが、使用時には(363)の上に(364)が乗る形をとっていたものであろう。また、これとは別個体の曲物の綴じ部分(362)(順

目、1列内綴じ、ケビキは（363）と同じ箇所）が1点出土している。

C. 祭祀・信仰具

祭祀・信仰具としては、柿経・斎串状木製品が出土している。

(1) 斎串状木製品（357）

アスナロヒバの順目材を用いている。頭は山形に削られ、その下両側面に2つずつV字状の切り込みが入る、いわゆる板碑形態になる。墨書等の痕跡は認められない。

(2) 柿経（358、PL. 20-(4)）

堀跡から出土した塔婆状木製品は長さ48.8cm、幅5.8cm、厚さ0.25cmのアスナロヒバの順目板で造作されている。頭部を山形に整形しその下側面に二つの対峙する片刃状の切り込みを入れる。下端は緩いカーブを持って先細りにして先端部を横位に切り取っているものである。出土当初一部に墨痕が認められたため、東北歴史資料館の小井川和夫氏を介して同館の吉沢幹夫氏に赤外線撮影を依頼したが、墨の残りが非常に悪く頭部と二箇所に梵字らしい墨痕が認められただけにすぎなかった。その後特に注意を要していなかったが報告書用の実測図作製にあたり乾燥させたところ、0.2～0.3mmの文字の高まりが認められた。そこで報告者である木村がライティングを操作し写真撮影を行い、その拡大等により梵字が配されているらしいことが確認された。その後、県立郷土館及び県埋蔵文化財調査センターに鑑定を依頼した。その結果、埋蔵文化財調査センター主事白鳥文雄氏が「光明真言」にあたる梵字ではないかとしてFig・54-358に示した実測図を作成した。そこで、調査顧問の村越潔弘前大学教授に相談し、坂詰秀一立正大学教授の紹介で大正大学名誉教授の石村喜英氏の所見をいただくことができた。以下にその内容の概略を説明してゆく。

(a) 表面の文面について




文面に見える梵字は光明真言を交互に配して書いているものである。



以上、光明真言は平安末あたりから仏教祭儀などに実際に用いられ普及して行ったものであり、恐らく平安中期あたりから光明真言を用いた葬所などでの土砂加持などが行なわれていたものと思われる。

(b) 塔婆状木製品の名称について

この塔形の板片の頭部は山形と2条の切り込みがあり、板碑形になっているが、塔の表示を意味している。この種のものには「笹塔婆」「五輪卒塔婆」「柿経」がある。

笹塔婆…高さ30cm以下のものが多く、本来20本を一括して下方を結いているものだが、バラバラに発見されることが多い。表面に「南無地藏菩薩」「地藏菩薩」「…」とか書き、裏面に造立年月日、造立者名を書くことが多い。

五輪卒塔婆…頭部を山形、2条の切り込みと五輪の切り込みのあるもの。他は笹塔婆と大同小異である。






























柿 経…頭部が山形若しくは山形と2条の切り込みがあるものに経文を記したものをいう。

経文には、法華経・無量義経・観普賢経・阿弥陀経・大日経・光明真言・般若心経・金光明経その他多くがみられる。裏面には何も書かないものが多く、高さ30cm前後、幅1.5cm前後のものが多いが、高さ44.5cmを計るものもみられる。






























以上の中では、この塔形板片は「柿経」ということになる。

(c) 柿経について (補足)

柿経も20枚を1組として一括する場合が多かったようであり、最初の1枚には一例として・

「                            」

と記しこの裏面には、

「                            」

などのように柿経供養の目的や年月日を記するものもある。これは数量が少なく前出のように、20枚のうち1枚の割合となる。この点では「笹塔婆」と同様であり、その差は単に柿経が笹塔婆よりも大きくなるだけである。このため「笹塔婆」と「柿経」を区別しない場合もでてくる。しかし、「笹塔婆」が塔婆としての要素を持つものであるのに対して、「柿経」は經典の文面を記し、その功德と思恵にあずかろうとするものであり、基本的には全く違うものである。

「柿経」に経文を書く場合、20枚一括であれば20枚に少しづつ続けて書き、20枚一括に裏返して裏面に書き続ける場合もあるが、「光明真言」のような場合は経文が短かいため、一枚で完結するため、表と裏に書き分けることはあっても20枚一括にするようなことはなかったと思われる。また、記年銘等を書くとするれば光明真言の下方か、裏面であろうと思われる。

(d)柿經の使用法とその目的について

- ①海に納め流したものは、海で死した人々への供養か四海泰平か
- ②俵につめて靈窟に納めた（立石寺例）
- ③竹の籬をはめて靈所に奉納した（奈良元興寺極楽坊例）
- ④櫃に納め内陣（寺の本堂）に奉納した（東京国立博物館に保管）
- ⑤墓上に納めた（鎌倉覚園寺開山塔例）
- ⑥墳墓上に挿し立てる（絵巻物などから推測）

等があり、海の安穩、靈窟・靈所の安穩、本尊への供養、死者への供養菩提などの目的のあったことが經典納置などから考えられる。

(e)柿經の遺例について

- ①鎌倉覚園寺例
- ②奈良大御輪寺例……光明真言出土例あり
- ③立石寺例
- ④奈良松尾寺例
- ⑤中尊寺例
- ⑥美濃安八郡、墨股廃寺出土例
- ⑦大坂市西城区浜口町出土例……光明真言出土例あり
- ⑧奈良元興寺極楽坊出土例……光明真言出土例あり

その他数例あり

(f)浪岡城跡出土の柿經について

詳細が不明のため断言はできないが、城跡に墳墓等が営まれたかして、そこに供養のため立てられたものではないかと思われる。かなり大形の柿經のため或いは身分のある人のためだったかとも考えられる。

以上である。

この柿經は堀からの出土である。堀がどのような流れを有していたのか（又は淀むものか）は不明であるが、流れ自体はそれほど速いものとは思われない。これは昭和60年度調査した（県道青森－浪岡線拡幅に伴う緊急発掘調査）堀と思われた箇所が堀への給水路であり、しがらみ状遺構がみられたことから推察される。であれば、柿經は出土地点からあまり離れていない場所で用いられた可能性が高いと思われる。しかしそれが城内に墳墓を設けたものか、堀で死ん

だ人への供養のものなのかは断言できない。なお、城跡出土の人骨は1体のみ（昭和58年度浪岡城跡Ⅶ参照）であり、また柿経出土地点は、柵形遺構直下の地点であり、当時橋のかかっていた可能性も考えられるものである。

浪岡城跡出土の銅製仏具には、金剛盤や六器等の密教系の仏具がみられた。しかし、今回の柿経の出土が密教と直結するものとは考え難く、依然として顕密両教の可能性が残されている。ともあれ、従来板碑から考えられていた青森県内中世の信仰形態が、今後発掘資料の増加に伴い解明されてゆくことが期待されよう。

7. 自然遺物

未整理なものが多いが、ここでは、木製品以外の有機遺物をまとめて扱うこととする。

自然遺物には、炭化米等・堅果類・種子、縄・紙、皮革製品・骨に大別した。以下、整理済の出土品を列挙してゆく。

A. 炭化米等・堅果類・種子

炭化した米・粟（稗?）、くるみ、桃の種、（李の種?）などである。

B. 縄・紙

縄はS P 12で出土した菓縄である（詳細はS P 12の項参照）。紙は、何枚か重なったもの、こより状のもの、漆付着のものがあるが、漆付着のものについては、木の皮の可能性もある。

C. 皮革製品

皮革製品は、すべてS P 244から出土したもので、詳細はS P 244の項を参照されたいが、概略を述べると、革札が9点、革紐が4点、漆・金付着の皮革が2点、皮革・皮革製品が18点となっている。

D. 骨

堀から馬骨、馬の歯が出土しているのみである。

〔IV章参考文献〕

「長瀬C遺跡」二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書（昭和50年度）

（財）岩手県埋蔵文化財センター

建設省岩手工事事務所

「尻八館調査報告書」 （昭和56年3月）

青森県立郷土館

「青森県の板碑」 （昭和58年3月）

青森県立郷土館

※なお柿経についての項で、光明真言を掲げたが、これは雄山閣「梵語辞典」によった。

Fig.55 木製品(SE80出土曲物)実測図

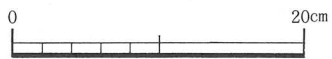
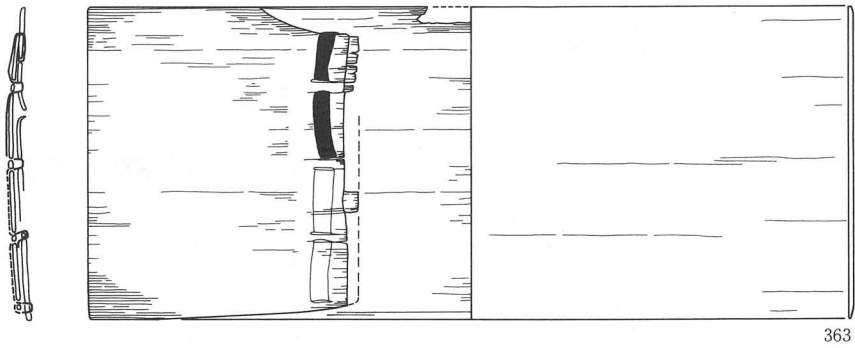
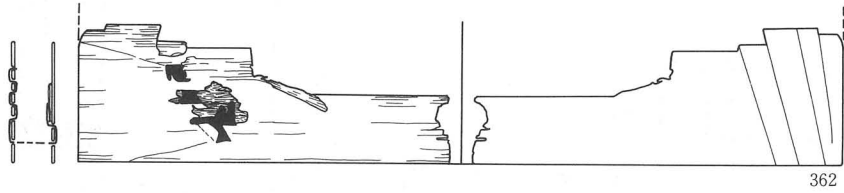
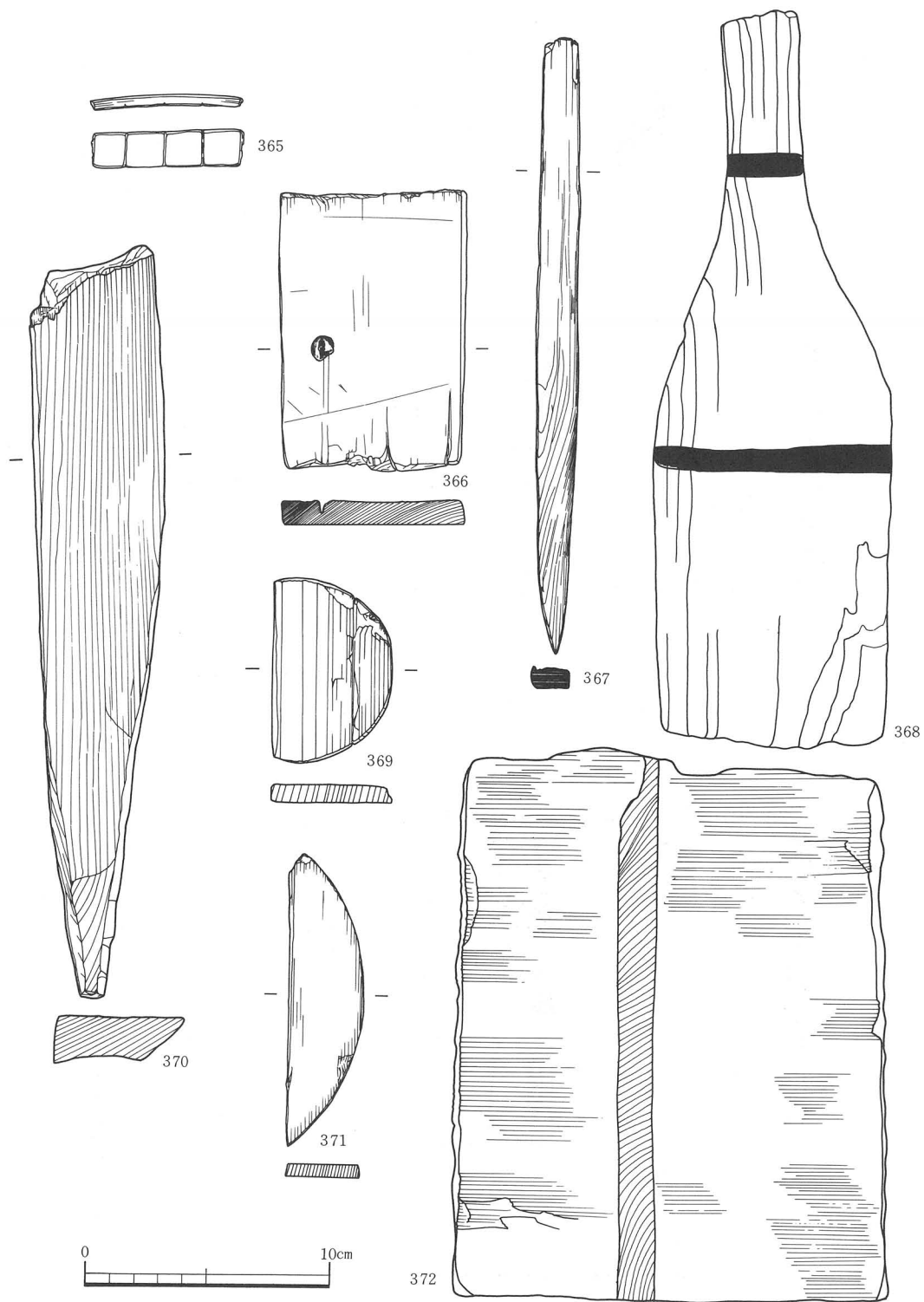


Fig.56 木製品実測図



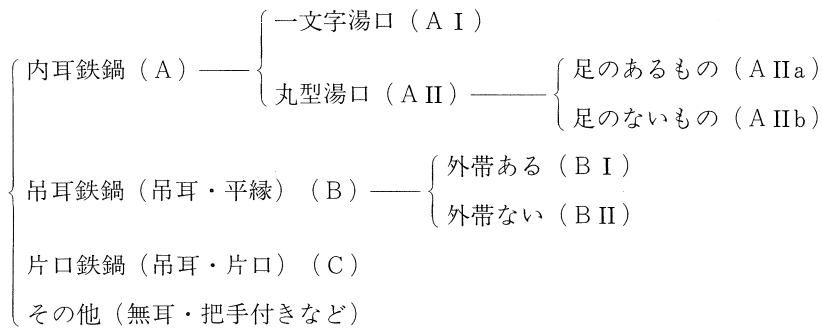
V 浪岡城跡内館出土の伏せ鉄鍋について

三浦 貞栄治

1. 鉄鍋

浪岡城跡の発掘調査が進められているが、現在までに全形に近い鉄鍋や数個の鉄鍋の破片が出土している。その形は内耳あり、吊耳ありで、しかも底に足のないもの、三足のあるものなど様々なので、分類に従って整理して見る必要がある。

鉄鍋の形態は「鉄鍋考」（宇田川洋・1969）を参考にして次のように分けてみる。



鉄鍋は上面から口縁部、胴部、底部と区分できる。底部の真ん中あたりに鑄造の際、湯（熱して溶かした金属）を鑄型へ注ぐための最初の流路即ち湯口の跡がある。長さ7～8cmの一文字状の細長いものと、径3～4cmの丸型のものがある。

内耳鉄鍋（A）は、口縁部の内側に耳がついたもので、吊耳鉄鍋（B）は、口縁部に山形の耳が一对ついたものである。

2. 青森県内の鉄鍋の出土状況

県内の発掘調査による人骨に被せた内耳鉄鍋が相当数出土している。

地名	場所	形態	引用文献
五戸町石仏	墓(人骨を伴う)	丸型湯口内耳	「内耳の鍋」小井川潤次郎
五戸町鳥沢	〃	内耳	〃 〃
八戸市櫛引常安寺	〃	内耳	〃 〃
八戸市白銀	〃	内耳	〃 〃
八戸市白銀字中平	〃	片口鍋	〃 〃
八戸市根城	墓(土壙墓)	一文字湯口内耳	「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ」(58年)
三戸郡島守字五輪		一文字湯口内耳	
八戸市・南郷村郷土館		丸型	「北海道の鉄鍋について」
上北郡洞北村	墓(人骨を伴う)	内耳	「内耳鍋の話」神田孝平（東京人類学会報告第14号）
碓ヶ関村古館		内耳	「古館遺跡発掘調査報告書」(54年)
浪岡町浪岡城跡		一文字湯口内耳 吊耳	「浪岡城跡Ⅰ～Ⅳ」
青森市尻八館		吊耳	「尻八館第1～第2次発掘調査概報」

発掘調査による鉄鍋の遺物の多くは、人骨に被せた状態で出土していて、しかも内耳鉄鍋を用いている。ところが湯口や足付底の状態が不明なので、その点の分類ができない。

北海道では吊耳鉄鍋が墓から人骨と共に出土しているから、人骨に被せる鉄鍋は内耳、吊耳、片口鍋など多くの形態にわたることが知れる。

ここで注目されるのは、青森県の場合、人骨を伴う鉄鍋は南部地方に分布し、津軽地方の遺物には人骨と一緒に出土していないことである。このことは南部地方ではハンセン氏病で死んだ者へ鍋を頭に被せて埋葬してやるという風習があることを示すものである。

3. 鉄鍋使用の時期

北海道における一文字湯口内耳鉄鍋の使用は、15世紀から17世紀前半であるといわれ、丸型湯口内耳鉄鍋は16世紀後半から17世紀の頃といわれている。（「北海道の鉄鍋について」越田賢一郎）

青森県内では浪岡城跡から出土した一文字湯口内耳鉄鍋と一緒に出土した陶磁器や城の歴史から15世紀～16世紀末頃と考えられる。八戸市根城のものは16世紀末から17世紀初め頃といわれている。

吊耳鉄鍋は本州の福井県一乗谷朝倉氏遺跡では16世紀代に使われていたであろうという。（朝倉氏遺跡調査研究所他1978）浪岡城跡からも吊耳の鉄鍋が出土しているが、近くで内耳鉄鍋の破片も出土していることから、一時期並行して使用されていたことが考えられる。また、一緒に出土している陶磁器などは16世紀前後から江戸時代にわたっているが、その遺構などをみると覆土の攪乱などがあるので、時代の推定が難しい。

4. 浪岡城跡の鉄鍋

(1)北館

〔54年度の調査〕

鉄鍋の足付底の破片が出土しているが（S E 10）、人為的に埋められたと思われる覆土に含まれた遺物である。

〔55年度の調査〕

S X 10 方形遺物の床面から外帯のない三足付の吊耳鉄鍋（口径25.0cm、高さ11.5cm）が2つに割れた状態で出土している。吊耳は2段山形で鉉孔が2つある。その上層の覆土から青磁碗、白磁皿が出ているし、床面には須恵器甕の破片が出土している。

〔56年度の調査〕

竪穴遺構（S T 132a）から内耳鉄鍋の内耳の部分が1点出土している。同じ遺構から青磁碗8点、白磁皿2点、染付皿4点その他が出土している。

〔57年度の調査〕

S X 95遺構から内耳鉄鍋が出土している。またS T 184から鉄鍋の破片が出ているが、青磁器や越前焼などの遺物から16世紀前半と推定されている。S E 67から1本の足が付いた鍋底の破片が出土している。青磁碗、青磁皿などが同じ所から出ている。

〔58年度の調査〕

S T 210の炭化物、焼土の分布する中から鍋の鉉が床面から出土している。他に鋏、小刀、火箸などの遺物がある。

(2)内館

〔59年度の調査〕

内館から出土の内耳鉄鍋は口縁部、胴部、底部と区分できるA I型のものである。また、一文字湯口内耳鉄鍋でもある。この鉄鍋の中には、フクロ鋏の鋏先と左ないの繩、苧引金などがあり、少し離れて鎌の金属部分が埋められてあった。鉄製の刃物が一緒に埋められてあるが、人骨らしいものが見当たらないのがこの遺構の特色である。今回、問題点として取り上げたいのは、人骨を伴わない伏せ鍋がどのような民俗的背景のもとに埋められたものかを推測してみることである。

5. 鉄鍋の民俗

(1)人骨と鉄鍋

北海道や青森県南部地方では鉄鍋や片口鍋を被った人骨のうち、ハンセン氏病の症状が認められるという報告がある。南部地方ではハンセン氏病を患って死んだ者は、頭に鍋を被せて葬る習慣がある。ただし、岩手の二戸地方では納棺の際、鉢とか甕を頭に被せる風習がある。それは病気が子孫に継ぐのを防ぐのだという。また、北海道では被葬者がすべて女性だという報告があるが、青森県の場合は必ずしもそうではない。北海道の場合、副葬されている内耳鉄鍋はA I型のものでなく、A IIの丸型湯口内耳鉄鍋で16世紀末のものであろうといわれている。また、吊耳鉄鍋も出土しているが、17世紀後頃からという考え方がある。（「北海道の鉄鍋に

ついて」越田賢一郎)

(2)女性と鉄鍋

北海道のように女性の人骨に鉄鍋を被せてあるというのは、炉の火を守り、台所で働く女性の立場を表わすものと考えられる。滋賀県の筑摩祭では、女の人たちが鍋をかぶって神輿の渡御に参加するという。神供を頭上に乗せて運ぶという作法から来ているというが、女性と鉄鍋のつながりを示す一つの例である。他に花嫁の入嫁式に鉄鍋を頭に被せる地方もあるという。

(3)鍋伏せ

年中行事のなかで鍋を伏せる「ウス(ナベ)伏せ」の風習が処々に見うけられる。いずれも正月行事への籠りの儀礼の一つと考えられる。

①「ウスナベ餅」

年取りの晩、ウスにトシナを張って、それに幣束をつける。ウスの中には重箱に米を入れ、その上に5枚の四角な切り餅を入れる。その上にナベを伏せる。朝早く主人がそのナベを取って餅をひっくり返す。餅につく米の多少で今年の豊作を占う。(「有畑・鶏沢・浜田の民俗」県立郷土館・54年)

②「ナノカビ」

正月7日をナノカビという。年取りの晩に臼、鍋を伏せておく。大きな臼、小さい臼、大きい鍋、小さい鍋の4つを、切り餅7枚、米少々をのせたお盆の上に伏せておく。(「むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書第二次」県立郷土館・48年)

③「ウス(ナベ)伏せ」

正月14日の年取りの晩、ニヤに臼、鍋、箕などのうちどれか一つを伏せて、お神酒をあげて拝む。その中に若水の餅を入れておく。普段、臼、鍋をやたらに伏せるものではないといわれている。(「泊・出戸地区民俗資料調査報告書」六ヶ所村教育委員会・51年)

④「ヨネフセ」

ヨネフセは「よねうす」「なべふせ」ともいった。八戸の売市では「よめふせ」と呼ぶようだという。ある家の嫁が火をとめることができなくて追い出されてしまった。ちょうど道を提灯が通ったので、その火を貰おうとした。ところが、その火は死人の火で、その死人を貰えば

火をやろうというので死人を貰い受けて臼をこれに伏せておいた。若しもこの臼をおこすと正月から不浄なものが現われるので、嫁は臼の方を見い見泣いていた。その後、不思議に思っ
てその臼をおこしてみたら、死人がじゃんぐと金に変わっていたという。（「館村記」小井川潤
次郎・9年）

⑤「のろい地」と鍋

岩手の種市地方では凶作等で土地を逃れるとき、自分の住んでいた処に生きた鶏を埋め、そ
れに鍋を被せて出て行くことがあり、そこを「ただれ地」「のろい地」という。その土地が呪
われたところとして、後に入植して来る者に利用されることを防いだもので、一旦は逃散した
ものが、また、いつか帰って来て住まおうとしたものである。（「岩手県九戸村内鍋鉄鍋と人
骨」）

(4)墓地と刃物

墓地の土盛りの上に目釘をとった鎌をさしたり、下げておいたりする。その目釘の穴に死霊
が休むとか、悪霊に追われた時に隠れる所などといっている。他に平鎌を置いたりする。

①埋葬した晩は、草刈り鎌（目釘を抜いたもの）と提灯、刀を持って墓へ行く。鎌を墓
の上に立て、刀をグルグル回して斬る真似をして戻って来る。（「下北半島山村振興町
村民俗資料緊急調査報告書第一次」青森県教育委員会・45年）

②墓地には必ず鎌を下げて魔よけにしておく。お参りするものは刀を持参して魔よけの
作法をする（刀をふり回す）。また、人が死ぬと北枕、西向きにしおき、枕もとにサカ
サ屏風をたて、刃物を枕もとにおく。（「津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査
報告書」・44年）

③本人が使っていた鎌の目釘を抜いて、柄を真直に突きたてておく。その目釘穴に死ん
だ人のたましいが入って休むのだという。（「むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告」
青森県教育委員会・47年）

④目釘を抜いた鎌をぶらさげる。これはむかし死んだ人の「タマシ（靈魂）」が鬼に追
われた時、鎌の目釘の穴に隠れてその難を逃れたといわれている。（「むつ小川原地区
民俗資料緊急調査報告書」青森県教育委員会・47年）

6. 浪岡城跡の伏せ鍋

(1)浪岡城跡内館の鉄鍋はAⅠ型一文字湯口内耳鉄鍋であり、越田賢一郎氏の北海道的な観点から見ると、人骨に被せるAⅡ型以前のものである。浪岡城跡の場合、人骨が出土していないので今までのものと異なるねらいの伏せ鍋の使い方なのであろう。

(2)鍋を伏せてあるのは、何か事変があったのであろうこの土地の地霊を刃物で祓いしずめようとする儀礼的なものと考えられる。岩手県の種市地方のように呪われた土地と見せる方法としての伏せ鍋、即ち異常なことを鍋に籠らしめて伏せたというように浪岡城跡の伏せ鍋を考えてみたい。

(3)人骨を伴わない伏せ鍋は、忌み嫌う事変の要因または場所や方角等の悪霊を刃物で祓って穴に埋め、それに鍋を伏せることによって鎮魂せしめる呪術の一つと思われる。それによって病魔や忌避したい事変が、生活に影響を及ぼさないように埋め鎮めて生活の安泰を願ったものとする。

〔参考文献〕

1. 神田孝平 「内耳鍋の話」(東京人類学会報告14)
2. 桐原健 「鍋を被せる葬風」(信濃26-8)
3. 工藤清泰他 「浪岡城跡Ⅰ～Ⅳ」(浪岡町教育委員会)
4. 森本岩太郎他 「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅲ・Ⅴ」(八戸市教育委員会)
5. 小井川潤次郎 「内耳の鍋」(八戸市教育委員会)
6. 坪井正五郎 「内側に耳ある鍋の事に付き神田孝平先生に申す」(東京人類学会報告16)
7. 斉藤建二 「近文アイヌの送り場」(旭川郷土博物館研究報告6)
8. 越田賢一郎 「北海道の鉄鍋について」(物質文化42)
9. 青森県立郷土館 「有畑・鶏沢・浜田の民俗」(総合民俗調査54年)
10. 青森県教育委員会 「むつ小川原地区民俗資料緊急調査報告書第二次」48年
11. 「下北半島山村振興町村民俗資料緊急調査報告書第一次」45年
12. 「津軽半島北部山村振興町村民俗資料緊急調査報告書」44年
13. 六ヶ所村教育委員会 「泊・出戸地区民俗資料調査報告書」51年
14. 上田英吉 「内耳鍋の事に付きて」(東京人類学会報告22)

15. 小井川潤次郎 「館村記（年中行事編）」
16. 十和田市史編纂委員会 「十和田市史」（下巻）
17. 青森県教育委員会 「碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書」（54年）
18. 亀ヶ岡文化研究会 「青森県の遺跡めぐり」（56年）

VI 浪岡城跡内館出土の備蓄銭貨について

県内における備蓄銭の研究は成田末五郎氏^(注1)ら各先学の業績があり、津軽地方を中心に全国的にも遜色のない状況でおこなわれてきた。今回浪岡城跡内館から出土した備蓄銭貨は、出土状況や銭種・枚数が明確なことから、特別に詳報するものである。

1. 出土状況の概要

すでに検出遺構と主な出土遺物の項目で述べたように、O45区にて出土した備蓄銭は、総数5,971枚で方形に近いピットの中に埋設されていたものである。その出土状況を詳述すると以下ようになる。

昭和59年9月10日午後、O45区西側の層序確認のためスコップにて地山までの掘り下げを行っていたところ、作業員のスコップにガチッという手ごたえがあり、一緒に縊状になった銭貨の一部が出土した。後に集計した段階ではスコップによる取り上げ分は145枚であり、ちょうど南西隅の部分から取り除かれたことが判明した。そのため、銭貨がどのような状況で埋蔵されているのか丁寧に土砂を除去していったところP.L. 17およびFig. 37でみられたように、縊状になった銭貨群が東西に長く二縊一対に配置された状況でみられたのである。さらに写真撮影、実測作業をしているうちに、縊の端々には繩紐による「止め」および表面に藁状の植物繊維の付着を確認することができた。このことは、銭貨群が藁状のもので覆われていたことを推測させたが、全体を露出する段階ですべての部分に付着していた形跡はなく、部分的なものであったことから基本的には銭貨群を容器・袋等に入れることなく土砂を被せる状態で埋納したと認識するに至った。

銭貨の取り上げに際しては、あくまでも縊になった単位を重点に実施した。その過程で、上部については縊の形がかなりくずれた状態のものもみられたが中央部から下部に従って縊の形が明確に露出することが多くなった。その段階で、二縊を一行として5～6列に順次積み重ねて埋設しており、何らかの規則性あるいは意図的な埋設を感知できた。銭貨群の取り上げは、当初の予想を大幅に上回る数量となったため、実測・取り上げ時の注記作業に手間取り、午後10時過ぎまで遠く投光器を使用しての作業となった。

取り上げ後、ただちに銭貨数を集計することにし、取り上げ単位（縊から剥落している部分も多かったため総数で63単位）ごとに数と銭貨名の集計を実施した。その結果、縊の残存状態が良好なものは53縊であり各縊の枚数は以下の通りとなった。

- ① 1縊 100枚のもの36縊 ② 1縊 99枚のもの5縊 ③ 1縊 101枚のもの3縊 ④ 1縊 87枚・89枚・91枚・93枚・94枚・97枚・98枚・102枚・119枚のもの1縊ずつ。

このように1緡の枚数が100枚のものが36緡と最も多く(全体の67.9%)、99枚、101枚がそれに続き、89枚から119枚という任意的枚数が各1緡ずつ存在する。しかしながら、1緡ずつ順次積み上げず2緡を一単位とするような状態の埋設に注意すると、一列に連なる緡の枚数が片方で99枚の場合、もう一方が100枚のもの5列、101枚と100枚のもの2列、100枚と98枚のもの1列というように、100枚より若干少ない数で2緡が1単位(つまり200枚弱)を基準として緡にしている印象を受けた。総出土数5,971枚は、60緡に100を乗じ、その半分の30緡に対して1緡1枚を引いた数に極めて近似しており、単純に100枚1緡を基準とした考え方ばかりではなかったようである。ちなみに、草戸千軒町遺跡第29次調査で出土した古銭塊は91枚~97枚と1緡は100枚以下のものが多いようで50緡検出され、葛西城址第83号井戸跡から出土した古銭塊は1本の紐に通されて折れ重なって出土し、4,771枚という5,000枚を(注3) 枚と報告されている。

2. 出土銭貨の概要

出土した銭貨は、銭名の明らかなものは開元通宝(唐・621年初鑄)を上限に永樂通宝(明・1408年初鑄)を下限とするもので、すべて舶載品である。また無文銭とした銭名のみられないもの、または銭名はあっても粗雑な鑄造技術による私鑄銭的なものも多数みられることから、図示を多くして識者の御教示を願うものである。

年代別にみた場合の出土数量は以下の通りとなる。

S P 11銭貨種別個体数表

No.	銭貨名	初	銭	年	枚数	No.	銭貨名	初	銭	年	枚数	No.	銭貨名	初	銭	年	枚数
1	開元通宝	唐		621	367	21	嘉祐通宝	北	宋	1056	107	41	慶元通宝	南	宋	1195	9
2	乾元重宝	"		759	23	22	嘉祐元宝	"	"	"	51	32	嘉泰通宝	"	"	1201	8
3	唐国通宝	南	唐	959	6	23	治平通宝	"	"	1064	18	43	開禧通宝	"	"	1205	4
4	光天通宝	五代十国		918	1	24	治平元宝	"	"	1064	79	44	嘉定通宝	"	"	1208	11
5	乾德元宝	前	蜀	919	1	25	熙寧元宝	"	"	1068	407	45	大宋元宝	"	"	1225	2
6	宋通元宝	北	宋	960	15	26	元豐通宝	"	"	1078	500	46	紹定通宝	"	"	1228	7
7	太平通宝	"		976	39	27	元祐通宝	"	"	1086	401	47	嘉熙通宝	"	"	1237	6
8	淳化元宝	"		990	33	28	紹聖通宝	"	"	1094	1	48	淳祐元宝	"	"	1241	9
9	至道元宝	"		995	67	29	紹聖元宝	"	"	"	194	49	皇宋元宝	"	"	1253	4
10	咸平元宝	"		998	71	30	元符通宝	"	"	1098	73	50	景定元宝	"	"	1260	9
11	景德元宝	"		1004	93	31	聖宋元宝	"	"	1101	200	51	咸淳元宝	"	"	1265	5
12	祥符元宝	"		1008	107	32	大觀通宝	"	"	1107	50	52	至大通宝	元		1310	8
13	祥符通宝	"		1008	52	33	政和通宝	"	"	1111	179	53	大中通宝	明		1361	4
14	天禧通宝	"		1017	91	34	宜和通宝	"	"	1119	22	54	洪武通宝	"	"	1367	533
15	天聖元宝	"		1023	225	35	建炎通宝	南	宋	1127	1	55	永樂通宝	"	"	1408	483
16	明道元宝	"		1032	28	36	紹興元宝	"	"	1131	1	56	無文銭			?	378
17	景祐元宝	"		1034	71	37	正隆元宝	金		1158	7		判読不能銭			?	276
18	皇宋通宝	"		1039	546	38	淳熙元宝	南	宋	1174	21						
19	至和通宝	"		1054	11	39	大定通宝	金		1178	4		計				5971
20	至和元宝	"		"	45	40	紹熙元宝	南	宋	1190	7						

唐 390 枚、南唐 6 枚、五代十国 1 枚、前蜀 1 枚、北宋 3,776 枚、南宋 104 枚、金 11 枚、元 8 枚、明 1,020 枚、不明 654 枚。

このように、北宋が銭名のわかるものの中では71.0%と最も多く、明が19.2%、唐 7.3%、南宋 1.9%の比率で出土する。また、無文銭としたものも出土総数の 5.8%と一定の数値で存在する。この数値を北館出土の銭貨と比較すると、北宋の銭貨が20%ほどふえ、明および無文銭がそのパーセンテージを下げていることがわかる。

出土した銭貨の観察では、北宋以前の銭貨に内郭部分を十字に傷を付けて加工したものが多く（1 O、17 E、18 A、19 C、20 D、21 D、22 E、25 K、26 K、29 H、33 E）意図的に施されていることから何らかの基準ないしは選択品と考えていたらしい。また、北宋以前の銭貨には鑄造不良なもの（1 H、1 P、9 E、24 D、26 C、26 E）もみられ、模鑄銭が相当数混在していると考えられる。また、外縁の加工を施しているもの（5、38 D、52 B）および外郭が潤縁、広縁、細縁になったものなど、同一銭種でありながらその形態の相違には目をみはるものがあり、字体の相違・鑄造技術の優劣まで波及し、それから模鑄銭の基本形が推測されるのであろう。

以下図版に則した観察表を載せておく。

銭貨観察表

No.	分類No.	銭貨名	初 鑄 年	書 体	背 文	特 徴	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	外 縁 厚 (cm)	重量 (g)	備 考
1	1 A	開元通宝	唐 621	—	—		2.39	0.77	1.99	0.68	0.14	3.64	
2	1 B	"	" "	—	半月文		2.57	0.79	2.14	0.68	0.15	4.08	
3	1 C	"	" "	—	"		2.49	0.81	2.17	0.70	0.12	3.01	
4	1 D	"	" "	—	"		2.40	0.78	1.93	0.66	0.12	3.33	
5	1 E	"	" "	—	"		2.46	0.81	2.06	0.70	0.13	3.29	
6	1 F	"	" "	—	—	広 縁	2.50	0.78	1.82	0.67	0.11	3.09	
7	1 G	"	" "	—	—	狭 縁	2.30	0.83	2.00	0.67	0.115	2.77	
8	1 H	"	唐 845	—	京 洛	鑄造不良	2.35	0.80	1.84	0.63	0.14	3.67	
9	1 I	"	" "	—	梓 昌		2.37	0.81	2.02	0.675	0.12	3.21	
10	1 J	"	" "	—	鄂 潤		2.45	0.775	1.94	0.62	0.13	3.81	
11	1 K	"	" "	—	—		2.34	0.80	1.97	0.70	0.125	3.52	
12	1 L	"	" "	—	—		2.38	0.78	1.975	0.62	0.14	3.90	
13	1 M	"	" "	—	—		2.35	0.81	1.97	0.68	0.13	3.69	
14	1 N	"	唐 621	—	—		2.26	0.76	1.74	0.65	0.08	1.73	
15	1 O	"	" "	—	半月文	内郭加工	2.48	0.92	2.04	0.84	0.135	3.35	
16	1 P	"	" "	—	—	鑄造不良	2.51	0.80	2.10	0.70	0.12	2.65	
17	1 Q	"	南唐 966	篆	—		2.51	0.76	1.82	0.63	0.10	2.71	
18	2 A	乾元重宝	唐 758	—	—		2.56	0.81	2.22	0.67	0.105	3.36	
19	2 B	"	" "	—	—		2.48	0.79	2.06	0.67	0.135	3.73	
20	2 C	"	" "	—	—		2.38	0.77	1.93	0.59	0.11	3.17	
21	3 A	唐国通宝	南唐 985	真 篆	—		2.44	0.72	1.96	0.64	0.10	2.75	
22	3 B	"	" "	—	—		2.46	0.715	1.86	0.59	0.11	3.54	
23	4	光天元宝	王建 918	—	—		2.34	0.83	1.86	0.67	0.11	3.54	

No	分類No	銭貨名	初 鑄 年	書 体	背 文	特 徴	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	外 縁 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
24	5	軋徳元宝	前蜀 920			外縁変形	2.35	0.80	1.86	0.65	0.14	3.81	
25	6 A	宋通元宝	北宋 960	—	—		2.42	0.79	2.00	0.62	0.12	3.13	
26	6 B	"	"	—	—	背面外郭・内郭なし	2.47	0.73	1.84	0.62	0.11	3.55	
27	7	太平通宝	北宋 976	—	—		2.43	0.73	1.92	0.62	0.115	4.13	
28	8 A	淳化元宝	北宋 990	真	—		2.47	0.66	1.78	0.58	0.115	3.61	
29	8 B	"	"	"	—	背面外郭なし	2.42	0.66	1.76	0.58	0.105	3.51	
30	8 C	"	"	行	—		2.44	0.66	1.80	0.61	0.11	3.48	
31	8 D	"	"	草	—		2.46	0.70	1.84	0.62	0.14	3.97	
32	9 A	至道元宝	北宋 995	真	—		2.49	0.72	1.84	0.61	0.11	3.36	
33	9 B	"	"	"	—		2.30	0.71	1.80	0.63	0.10	2.58	
34	9 C	"	"	行	—	広縁	2.52	0.72	1.86	0.62	0.12	3.69	
35	9 D	"	"	草	—		2.44	0.72	1.83	0.62	0.12	3.07	
36	9 E	"	"	行	—	鑄造加工	2.16	0.70	1.66	0.61	0.13	2.28	
37	10 A	咸平元宝	北宋 998	—	—		2.47	0.74	1.88	0.61	0.13	3.50	
38	10 B	"	"	—	—		2.20	0.73	1.85	0.60	0.11	2.73	
39	11 A	景德元宝	北宋 1004	—	—		2.515	0.70	1.795	0.58	0.12	3.30	
40	11 B	"	"	—	—		2.46	0.70	1.98	0.61	0.13	3.59	
41	11 C	"	"	—	—	狭縁	2.33	0.76	2.01	0.62	0.11	2.71	
42	11 D	"	"	—	—		2.29	0.69	1.76	0.59	0.13	3.00	
43	12 A	祥符元宝	北宋 1008	—	—		2.46	0.69	1.80	0.56	0.12	3.92	
44	12 B	"	"	—	—	広縁	2.56	1.73	1.73	0.57	0.10	2.84	
45	12 C	"	"	—	—	狭縁	2.22	0.73	1.92	0.61	0.13	2.79	
46	13 A	祥符通宝	北宋 1008	—	—		2.56	0.77	1.90	0.66	0.13	3.31	
47	13 B	"	"	—	—		2.55	0.69	1.79	0.62	0.11	3.74	
48	13 C	"	"	—	—		2.21	0.76	1.89	0.65	0.12	2.29	
49	13 D	"	北宋 1008	—	—		2.23	0.73	1.81	0.64	0.10	2.20	
50	14 A	天禧通宝	北宋 1017	—	—		2.53	0.76	2.00	0.65	0.13	3.65	
51	14 B	"	"	—	—		2.37	0.72	1.84	0.61	0.13	3.40	
52	14 C	"	"	—	—		2.29	0.73	1.90	0.62	0.13	3.31	
53	15 A	天聖元宝	北宋 1023	真	—		2.49	0.79	1.97	0.62	0.14	4.18	
54	15 B	"	"	"	—		2.26	0.76	1.83	0.60	0.11	2.69	
55	15 C	"	"	篆	—		2.52	0.81	2.03	0.67	0.14	4.30	
56	15 D	"	"	"	—		2.30	0.83	2.05	0.69	0.13	3.19	
57	16 A	明道元宝	北宋 1032	真	—		2.54	0.79	2.05	0.64	0.13	3.94	
58	16 B	"	"	"	—		2.27	0.77	2.01	0.66	0.12	2.27	
59	16 C	"	"	篆	—		2.49	0.75	2.03	0.60	0.14	3.68	
60	16 D	"	"	"	—		2.54	0.78	2.00	0.65	0.10	3.58	
61	17 A	景祐元宝	北宋 1034	真	—		2.54	0.96	2.05	0.77	0.12	2.97	
62	17 B	"	"	"	—		2.53	0.73	1.93	0.58	0.11	3.40	
63	17 C	"	"	"	—		2.37	0.78	1.90	0.68	0.11	2.76	
64	17 D	"	"	篆	—		2.50	0.85	2.06	0.68	0.12	3.54	
65	17 E	"	"	真	—	内郭加工	2.53	0.94	2.08	0.77	0.15	4.12	
66	18 A	皇宋通宝	北宋 1039	真	—	内郭加工	2.48	0.86	2.01	0.75	0.11	3.01	
67	18 B	"	"	"	—	背に外郭なし	2.36	0.78	1.92	0.61	0.16	4.16	
68	18 C	"	"	"	—	潤縁	2.45	0.76	1.75	0.63	0.10	3.13	
69	18 D	"	"	"	—	細縁	2.20	0.83	1.83	0.70	0.12	2.69	

No.	分類No.	錢貨名	初	鑄年	書体	背文	特	徴	外縁外徑 (cm)	外縁内徑 (cm)	内郭外徑 (cm)	内郭内徑 (cm)	外縁厚 (cm)	重量 (g)	備考
70	18E	"	"	"	"	—			2.50	0.81	1.96	0.71	0.13	3.76	
71	18F	"	"	"	篆	—			2.40	0.74	1.95	0.62	0.13	3.76	
72	18G	"	"	"	"	—			2.53	0.79	1.90	0.66	0.10	3.09	
73	18H	皇宋通宝	北宋	1039	篆	—			2.48	0.87	1.96	0.77	0.09	2.55	
74	18I	"	"	"	"	—			2.43	0.77	1.97	0.66	0.13	3.25	
75	18J	"	"	"	"	—			2.44	0.84	1.72	0.69	0.10	3.23	
76	18K	"	"	"	真	—	内穿		2.45	—	1.80	0.92	0.10	2.61	
77	19A	至和通宝	北宋	1054	真	—			2.46	0.81	1.79	0.71	0.105	2.99	
78	19B	"	"	"	篆	—			2.51	0.82	1.84	0.69	0.11	3.77	
79	19C	"	"	"	真	—	内郭加工		2.47	0.86	1.88	0.80	0.14	3.87	
80	20A	至和元宝	北宋	1054	真	—			2.40	0.71	1.78	0.62	0.12	2.97	
81	20B	"	"	"	"	—			2.43	0.79	1.99	0.65	0.12	3.62	
82	20C	"	"	"	篆	—			2.45	0.84	1.91	0.78	0.10	2.51	
83	20D	"	"	"	"	—	内郭加工		2.36	0.73	1.86	0.66	0.13	3.40	
84	21A	嘉祐通宝	北宋	1056	真	—			2.52	0.82	1.90	0.70	0.09	3.08	
85	21B	"	"	"	"	—			2.43	0.78	1.99	0.66	0.16	3.88	
86	21C	"	"	"	篆	—			2.46	0.78	1.91	0.71	0.12	3.41	
87	21D	"	"	"	真	—	内郭加工		2.445	0.98	1.99	0.85	0.13	3.49	
88	22A	嘉祐元宝	北宋	1056	真	—			2.50	0.74	1.90	0.63	0.13	3.92	
89	22B	"	"	"	"	—			2.46	0.92	1.98	0.80	0.12	3.24	
90	22C	"	"	"	篆	—			2.46	0.89	2.03	0.81	0.10	4.04	
91	22D	"	"	"	"	—			2.36	0.83	1.88	0.65	0.15	2.78	
92	22E	"	"	"	真	—	内郭加工		2.47	0.98	2.01	0.84	0.11	3.11	
93	23A	治平通宝	北宋	1064	真	—			2.46	0.87	1.96	0.74	0.13	3.82	
94	23B	"	"	"	篆	—			2.43	0.88	1.94	0.73	0.12	3.47	
95	23C	"	"	"	"	—			2.46	0.82	1.93	0.74	0.11	3.36	
96	24A	治平元宝	北宋	1064	真	—			2.50	0.80	2.03	0.64	0.12	3.43	
97	24B	"	"	"	"	—			2.42	0.64	1.75	0.58	0.13	4.03	
98	24C	"	"	"	"	—			2.43	0.66	1.70	0.52	0.14	3.89	
99	24D	"	"	"	"	—	鑄造不良		2.33	0.83	1.94	0.65	0.10	2.53	
100	24E	"	"	"	篆	—			2.45	0.73	1.91	0.64	0.12	3.58	
101	24F	"	"	"	"	—			2.30	0.74	1.93	0.62	0.16	3.69	
102	25A	熙寧元宝	北宋	1068	真	—			2.49	0.85	2.02	0.71	0.13	3.88	
103	25B	"	"	"	"	—			2.38	0.83	2.08	0.72	0.13	3.18	
104	25C	"	"	"	"	—	細縁		2.19	0.83	2.04	0.70	0.10	2.06	
105	25D	"	"	"	"	—			2.43	0.78	1.87	0.68	0.13	4.24	
106	25E	"	"	"	"	—			2.41	0.80	1.86	0.62	0.17	3.86	
107	25F	"	"	"	"	—			2.31	0.78	1.90	0.61	0.16	3.89	
108	25G	"	"	"	篆	—			2.50	0.79	2.03	0.68	0.12	3.61	
109	25H	"	"	"	"	—			2.315	0.73	1.85	0.62	0.15	3.91	
110	25I	"	"	"	"	—			2.47	0.73	1.83	0.66	0.11	2.92	
111	25J	"	"	"	"	—			2.39	0.76	1.99	0.63	0.15	4.40	
112	25K	"	"	"	"	—	内郭加工		2.44	0.78	1.94	0.69	0.14	3.85	
113	26A	元豐通宝	北宋	1078	真	—			2.49	0.88	2.08	0.72	0.135	3.86	
114	26B	"	"	"	"	—			2.485	0.81	2.10	0.69	0.12	3.38	
115	26C	"	"	"	"	—	背鑄造不良		2.48	0.78	1.84	0.62	0.12	3.37	

No.	分類No.	錢貨名	初 鑄 年	書 體	背 文	特 徵	外緣外徑 (cm)	外緣內徑 (cm)	內郭外徑 (cm)	內郭內徑 (cm)	外 緣 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
116	26 D	元豐通寶	北宋	1078	真	—	2.39	0.78	1.80	0.62	0.13	3.56	
117	26 E	"	"	"	"	—	2.50	0.79	1.88	0.68	0.14	3.18	鑄造變形
118	26 F	"	"	"	"	—	2.16	0.83	1.82	0.66	0.14	2.84	
119	26 G	"	"	"	篆	—	2.37	0.72	1.77	0.59	0.11	3.54	
120	26 H	"	"	"	"	—	2.48	0.82	2.00	0.73	0.12	3.04	
121	26 I	"	"	"	"	—	2.36	0.73	1.83	0.58	0.17	4.57	
122	26 J	"	"	"	"	—	2.44	0.86	1.77	0.74	0.14	3.77	
123	26 K	"	"	"	"	—	2.42	0.89	1.85	0.81	0.12	2.95	內郭加工
124	27 A	元祐通寶	北宋	1086	真	—	2.39	0.77	1.86	0.67	0.15	3.69	
125	27 B	"	"	"	"	—	2.47	0.89	2.07	0.68	0.12	3.41	
126	27 C	"	"	"	"	—	2.49	0.71	1.78	0.60	0.14	3.94	
127	27 D	"	"	"	"	—	2.20	0.75	1.80	0.63	0.12	2.36	
128	27 E	"	"	"	"	—	2.42	0.97	1.94	0.84	0.13	3.07	內郭加工
129	27 F	"	"	"	篆	—	2.47	0.80	2.05	0.68	0.14	3.80	
130	27 G	"	"	"	"	—	2.34	0.80	2.05	0.67	0.13	3.08	
131	27 H	"	"	"	"	—	2.46	0.84	1.76	0.72	0.11	3.66	
132	27 I	"	"	"	"	—	2.17	0.74	1.70	0.60	0.12	2.53	
133	28	紹聖通寶	北宋	1094	—	—	2.32	0.765	1.77	0.61	0.13	2.91	
134	29 A	紹聖元寶	北宋	1094	真	—	2.42	0.86	1.98	0.70	0.14	3.83	
135	29 B	"	"	"	"	—	2.46	0.73	1.72	0.58	0.13	4.10	
136	29 C	"	"	"	"	—	2.46	0.74	1.75	0.66	0.12	3.82	潤 緣
137	29 D	"	"	"	"	—	2.27	0.76	1.83	0.68	0.12	2.78	外郭加工
138	29 E	"	"	"	篆	—	2.48	0.77	2.00	0.66	0.13	3.63	
139	29 F	"	"	"	"	—	2.44	0.84	2.29	0.72	0.10	2.49	細 緣
140	29 G	"	"	"	"	—	2.48	0.73	1.75	0.60	0.10	2.88	潤 緣
141	29 H	"	"	"	"	—	2.50	0.85	1.95	0.74	0.14	3.83	內郭加工
142	29 I	"	"	"	"	—	2.20	0.71	1.77	0.61	0.13	3.17	
143	30 A	元符通寶	北宋	1098	真	—	2.47	0.79	1.98	0.65	0.13	3.09	
144	30 B	"	"	"	"	—	2.38	0.73	1.75	0.64	0.15	4.09	
145	30 C	"	"	"	篆	—	2.54	0.84	2.03	0.68	0.13	3.97	
146	30 D	"	"	"	"	—	2.45	0.74	1.74	0.62	0.13	3.71	
147	30 E	"	"	"	"	—	2.44	0.80	1.98	0.67	0.12	3.37	
148	30 F	"	"	"	"	—	2.48	0.80	1.78	0.67	0.12	3.72	
149	31 A	聖宋元寶	北宋	1001	真	—	2.48	0.79	1.98	0.68	0.13	3.60	
150	31 B	"	"	"	"	—	2.40	0.79	1.83	0.69	0.13	3.84	
151	31 C	"	"	"	"	—	2.44	0.83	2.06	0.69	0.16	3.72	
152	31 D	"	"	"	"	—	2.47	0.76	1.88	0.62	0.13	3.58	
153	31 E	"	"	"	"	—	2.25	0.73	1.80	0.66	0.105	2.21	
154	31 F	"	"	"	篆	—	2.47	0.80	1.90	0.62	0.13	4.03	
155	31 G	"	"	"	"	—	2.45	0.73	2.04	0.62	0.15	3.94	
156	31 H	"	"	"	"	—	2.39	0.81	1.97	0.69	0.15	3.79	
157	32 A	大觀通寶	北宋	1007	真	—	2.45	0.79	2.07	0.63	0.18	4.35	
158	32 B	"	"	"	"	—	2.39	0.75	2.12	0.68	0.12	2.51	
159	33 A	政和通寶	北宋	1111	真	—	2.45	0.68	2.07	0.51	0.17	3.55	
160	33 B	"	"	"	"	—	2.46	0.69	2.14	0.58	0.15	4.15	
161	33 C	"	"	"	"	—	2.47	0.76	2.13	0.65	0.14	3.93	

No.	分類No.	錢貨名	初 鑄 年	書 體	背 文	特 徵	外緣外徑 (cm)	外緣內徑 (cm)	內郭外徑 (cm)	內郭內徑 (cm)	外 緣 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
162	33D	政和通寶	北宋	1111	真	—	2.51	0.69	1.93	0.62	0.13	3.85	
163	33E	"	"	"	"	—	2.47	0.78	1.94	0.67	0.11	3.14	
164	33F	"	"	"	篆	—	2.50	0.78	2.09	0.66	0.15	3.88	
165	34A	宣和通寶	北宋	1119	真	—	2.51	0.69	2.08	0.60	0.14	3.37	
166	34B	"	"	"	"	—	2.37	0.75	1.96	0.61	0.16	3.96	
167	34C	"	"	"	"	—	2.46	0.77	2.04	0.69	0.12	3.45	
168	34D	"	"	"	篆	—	2.46	0.76	2.06	0.62	0.14	3.55	
169	34E	"	北宋	"	"	—	2.50	0.78	2.04	0.63	0.13	3.78	
170	35	建炎通寶	南宋	1127	真	—	2.34	0.78	1.95	0.63	0.12	3.04	
171	36	紹興元寶	南宋	1131	真	—	2.64	0.83	2.15	0.72	0.11	3.34	
172	37	正隆元寶	金	1158	—	—	2.53	0.73	2.14	0.58	0.15	4.01	
173	38A	淳熙元寶	南宋	1174	—	九	2.39	0.70	1.83	0.63	0.12	3.15	
174	38B	"	"	"	—	十二	2.39	0.73	1.86	0.62	0.14	3.53	
175	38C	"	"	"	—	十五	2.45	0.82	1.97	0.69	0.13	3.55	
176	38D	"	"	"	—	十五	—	0.93	—	0.74	—	1.96	
177	38E	"	"	"	—	紫	2.38	0.82	1.84	0.71	0.12	3.45	
178	38F	"	"	"	—	捌	2.46	0.83	1.79	0.63	0.11	3.32	
179	38G	"	"	"	—	月星	2.43	0.78	1.83	0.65	0.13	3.74	
189	38H	"	"	"	—	月星	2.46	0.80	1.93	0.70	0.12	3.14	
181	39A	大定通寶	金	1178	—	—	2.53	0.72	2.12	0.59	0.15	3.81	
182	39B	"	"	"	—	酉	2.52	0.72	2.15	0.63	0.10	2.58	
183	40A	紹熙元寶	南宋	1190	—	元	2.43	0.73	2.08	0.63	0.15	3.28	
184	40B	"	"	"	—	二	2.43	0.78	2.07	0.63	0.12	3.29	
185	40C	"	"	"	—	三	2.36	0.71	1.97	0.62	0.13	3.58	
186	40D	"	"	"	—	四	2.38	0.78	1.86	0.64	0.14	3.58	
187	41A	慶元通寶	南宋	1195	—	三	2.43	0.82	2.03	0.69	0.14	3.85	
188	41B	"	"	"	—	四	2.43	0.80	1.96	0.71	0.13	3.59	
189	41C	"	"	"	—	六	2.44	0.79	1.92	0.67	0.13	3.64	
190	42A	嘉泰通寶	南宋	1201	—	元	2.44	0.80	2.02	0.70	0.12	3.12	
191	42B	"	"	"	—	二	2.47	0.83	2.04	0.72	0.10	2.57	
192	42C	"	"	"	—	三	2.48	0.81	2.00	0.69	0.13	3.53	
193	42D	"	"	"	—	四	2.47	0.82	2.05	0.65	0.12	3.37	
194	43A	開禧通寶	南宋	1205	—	元	2.50	0.79	2.08	0.64	0.13	4.10	
195	43B	"	"	"	—	二	2.48	0.84	2.03	0.68	0.14	3.75	
196	44A	嘉定通寶	南宋	1208	—	三	2.49	0.73	2.13	0.60	0.13	3.61	
197	44B	"	"	"	—	六	2.40	0.84	2.08	0.73	0.13	2.92	
198	44C	"	"	"	—	八	2.43	0.86	2.09	0.69	0.13	3.52	
199	44D	"	"	"	—	九	2.44	0.79	2.09	0.66	0.12	2.95	
200	44E	"	"	"	—	十	2.46	0.81	2.08	0.68	0.13	3.53	
201	44F	"	"	"	—	十一	2.42	0.83	1.98	0.69	0.13	3.29	
202	44G	"	"	"	—	十二	2.43	0.86	2.08	0.68	0.12	3.42	
203	44H	"	"	"	—	十四	2.41	0.84	2.02	0.67	0.12	3.18	
204	45	大宋元寶	南宋	1225	—	三	2.48	0.80	1.94	0.66	0.13	4.02	
205	46A	紹定通寶	南宋	1228	—	二	2.40	0.78	2.02	0.59	0.15	4.22	
206	46B	"	"	"	—	四	2.40	0.82	2.05	0.68	0.13	3.11	
207	46C	"	"	"	—	五	2.41	0.81	2.00	0.66	0.11	2.90	

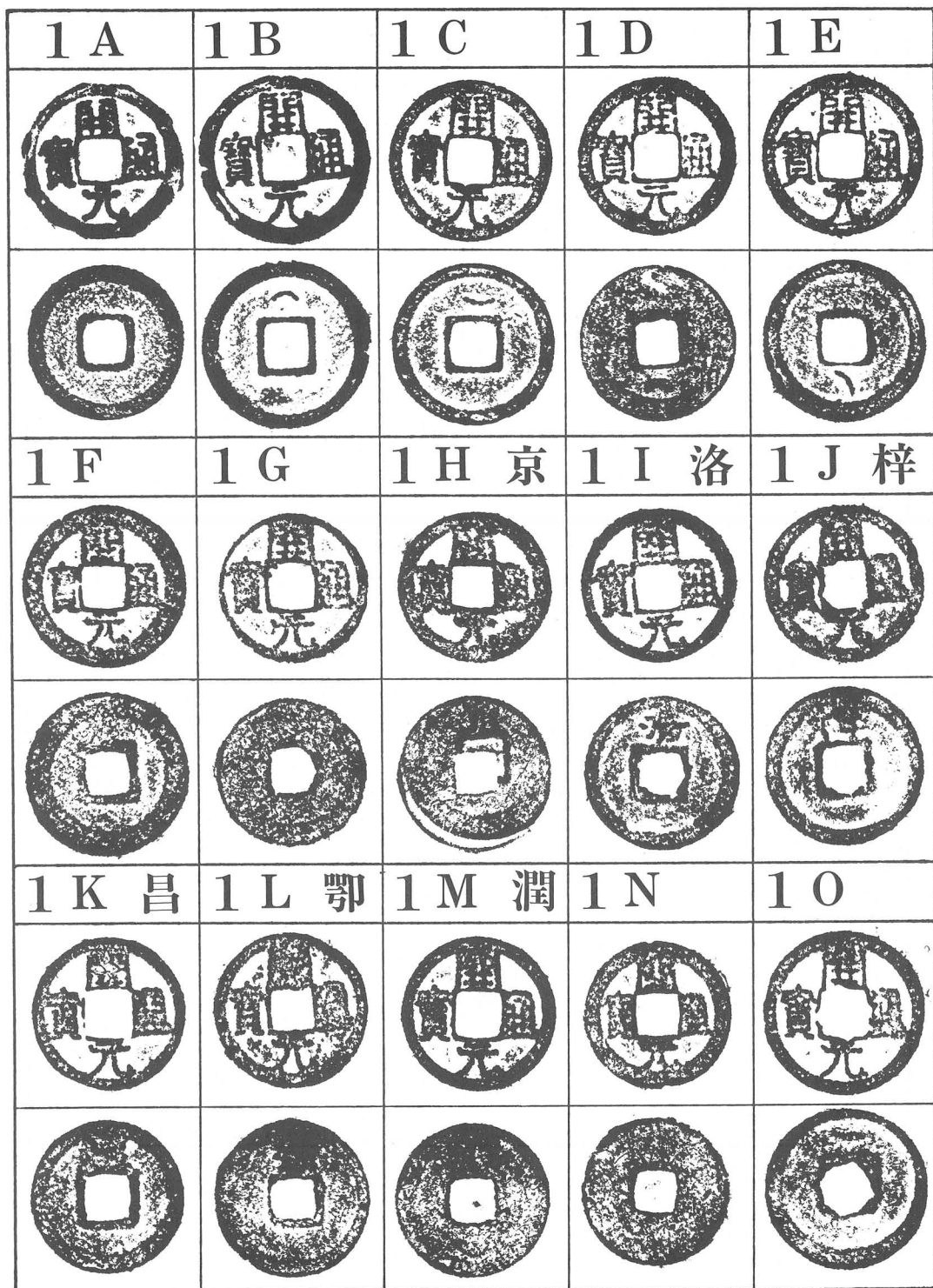
No.	分類No.	銭貨名	初 鑄 年	書 体	背 文	特 徴	外縁外径 (cm)	外縁内径 (cm)	内郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	外 縁 厚 (cm)	重量 (g)	備 考
208	46D	紹定通宝	南宋	1228	—	六	2.46	0.80	2.02	0.66	0.11	3.38	
209	47A	嘉熙通宝	南宋	1237	—	三	2.43	0.79	2.00	0.60	0.13	3.55	
210	47B	〃	〃	〃	—	四	2.47	0.84	1.96	0.65	0.14	4.47	
211	48A	淳祐元宝	南宋	1241	—	元	2.43	0.86	2.07	0.66	0.17	4.41	
212	48B	〃	〃	〃	—	二	2.32	0.90	1.96	0.69	0.12	3.36	
213	48C	〃	〃	〃	—	三	2.41	0.88	1.93	0.69	0.12	3.24	
214	48D	〃	〃	〃	—	八	2.39	0.89	2.02	0.70	0.12	2.75	
215	48E	〃	〃	〃	—	九	2.44	0.87	1.99	0.67	0.12	3.25	
216	48F	〃	〃	〃	—	十	2.43	0.88	1.46	0.68	0.12	3.22	
217	49A	皇宋元宝	南宋	1253	—	元	2.51	0.85	1.99	0.69	0.09	2.66	
218	49B	〃	〃	〃	—	三	2.48	0.86	2.00	0.67	0.13	3.88	
219	49C	〃	〃	〃	—	四	2.48	0.86	1.97	0.67	0.13	4.05	
220	49D	〃	〃	〃	—	六	2.42	0.86	1.99	0.65	0.12	3.62	
221	49E	〃	〃	〃	—	?	2.43	0.87	2.04	0.67	0.14	3.64	
222	50A	景定元宝	南宋	1260	—	元	2.48	0.85	2.05	0.66	0.11	3.15	
223	50B	〃	〃	〃	—	二	2.42	0.86	2.05	0.67	0.13	2.81	
224	50C	〃	〃	〃	—	三	2.41	0.86	2.04	0.71	0.10	3.18	
225	50D	〃	〃	〃	—	四	2.38	0.87	1.97	0.67	0.11	2.72	
226	51A	咸淳元宝	南宋	1266	—	二	2.37	0.86	1.92	0.70	0.11	2.84	
227	51B	〃	〃	〃	—	五	2.32	0.85	1.95	0.71	0.11	2.41	
228	52A	至大通宝	元	1310	—	—	2.37	0.77	1.94	0.57	0.17	4.25	
229	52B	〃	〃	〃	—	—	2.36	0.72	1.945	0.60	0.21	4.73	外郭変形
230	53A	大中通宝	明	1361	—	—	2.41	0.68	2.09	0.57	0.15	3.70	
231	53B	〃	〃	〃	—	—	2.31	0.66	1.96	0.55	0.17	3.26	
232	54A	洪武通宝	明	1368	—	浙	2.46	0.68	2.02	0.56	0.14	3.63	
233	54B	〃	〃	〃	—	北平	2.35	0.70	2.03	0.51	0.13	3.13	
234	54C	〃	〃	〃	—	福	2.44	0.70	2.01	0.51	0.16	4.25	
235	54D	〃	〃	〃	—	福	2.36	0.69	2.00	0.52	0.16	3.44	
236	54E	〃	〃	〃	—	月?	2.25	0.68	1.89	0.54	0.18	3.73	
237	54F	〃	〃	〃	—	月?	2.30	0.67	1.88	0.55	0.15	3.56	
238	54G	〃	〃	〃	—	浙	2.49	0.68	2.07	0.58	0.15	3.27	
239	54H	〃	〃	〃	—	—	2.37	0.70	2.03	0.56	0.17	4.28	
240	54I	〃	〃	〃	—	—	2.33	0.73	1.85	0.59	0.59	3.64	
241	54J	〃	〃	〃	—	一銭	2.29	0.73	1.74	0.54	0.16	3.89	
242	54K	〃	〃	〃	—	一銭	2.18	0.63	1.68	0.48	0.14	3.25	
243	54L	〃	〃	〃	—	一銭	2.13	0.60	1.69	0.46	0.17	3.60	
244	54M	〃	〃	〃	—	一銭	2.04	0.68	1.57	0.56	0.19	3.48	
245	55A	永樂通宝	明	1408	—	—	2.51	0.67	2.10	0.52	0.14	4.53	
246	55B	〃	〃	〃	—	—	2.53	0.67	2.08	0.55	0.13	3.34	
247	55C	〃	〃	〃	—	—	2.53	0.67	2.10	0.53	0.17	4.59	
248	56A	無 文 銭	?	?	—	—	2.36	—	—	0.52	0.13	1.74	
249	56B	〃	〃	〃	—	—	2.18	—	—	0.68	0.07	1.21	
250	56C	〃	〃	〃	—	—	2.23	—	—	0.73	0.08	1.15	

注1. 成田末五郎 1938.1「津軽地方発掘古銭の研究」青森県郷土誌料第2輯、他多数。

注2. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所指導主事福島政文氏の御教示による。

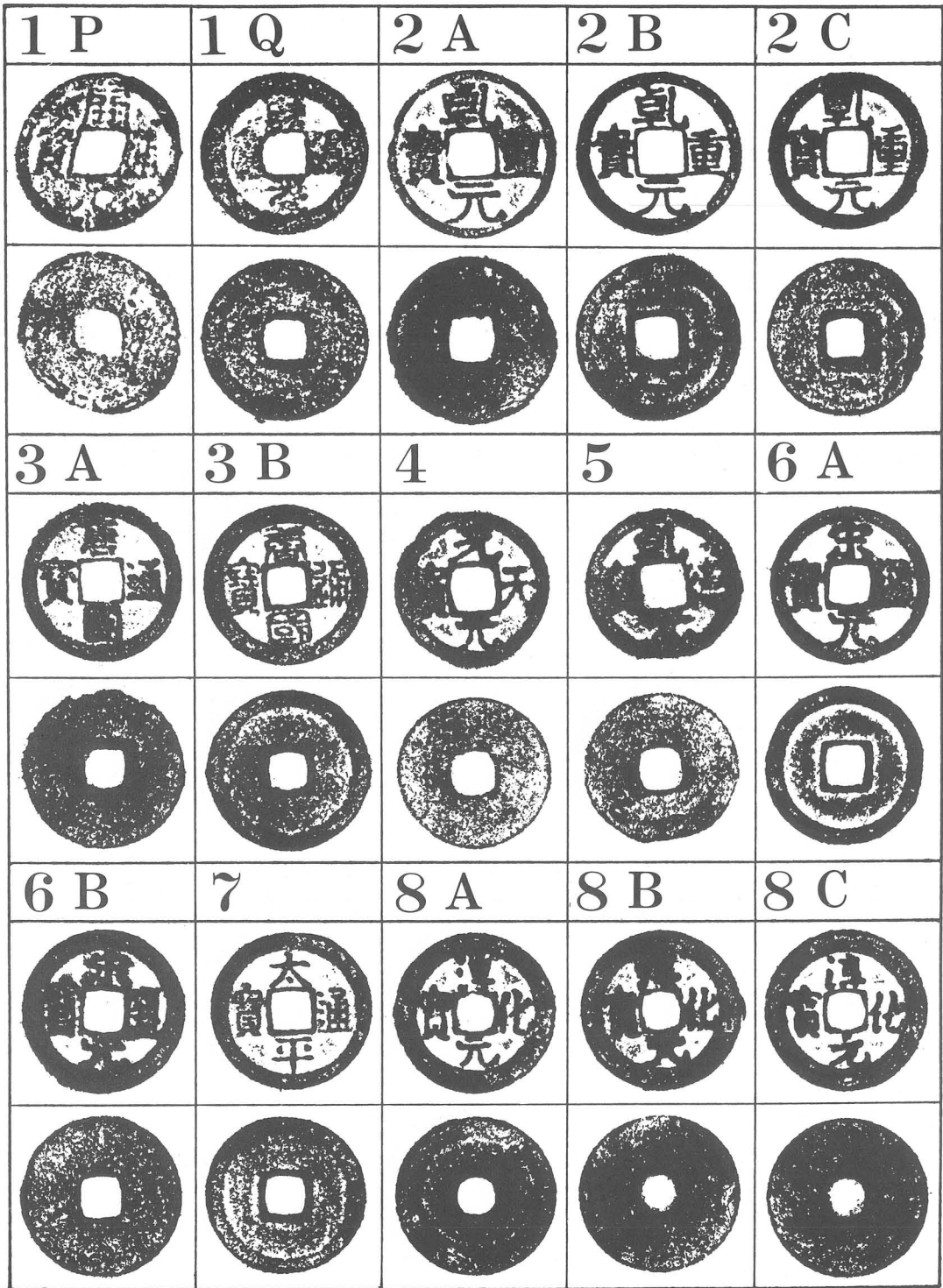
注3. 葛飾区葛西城址調査会 1983.3 葛西城一葛西城址発掘調査報告書一。

Fig. 57 錢貨拓影圖(1)



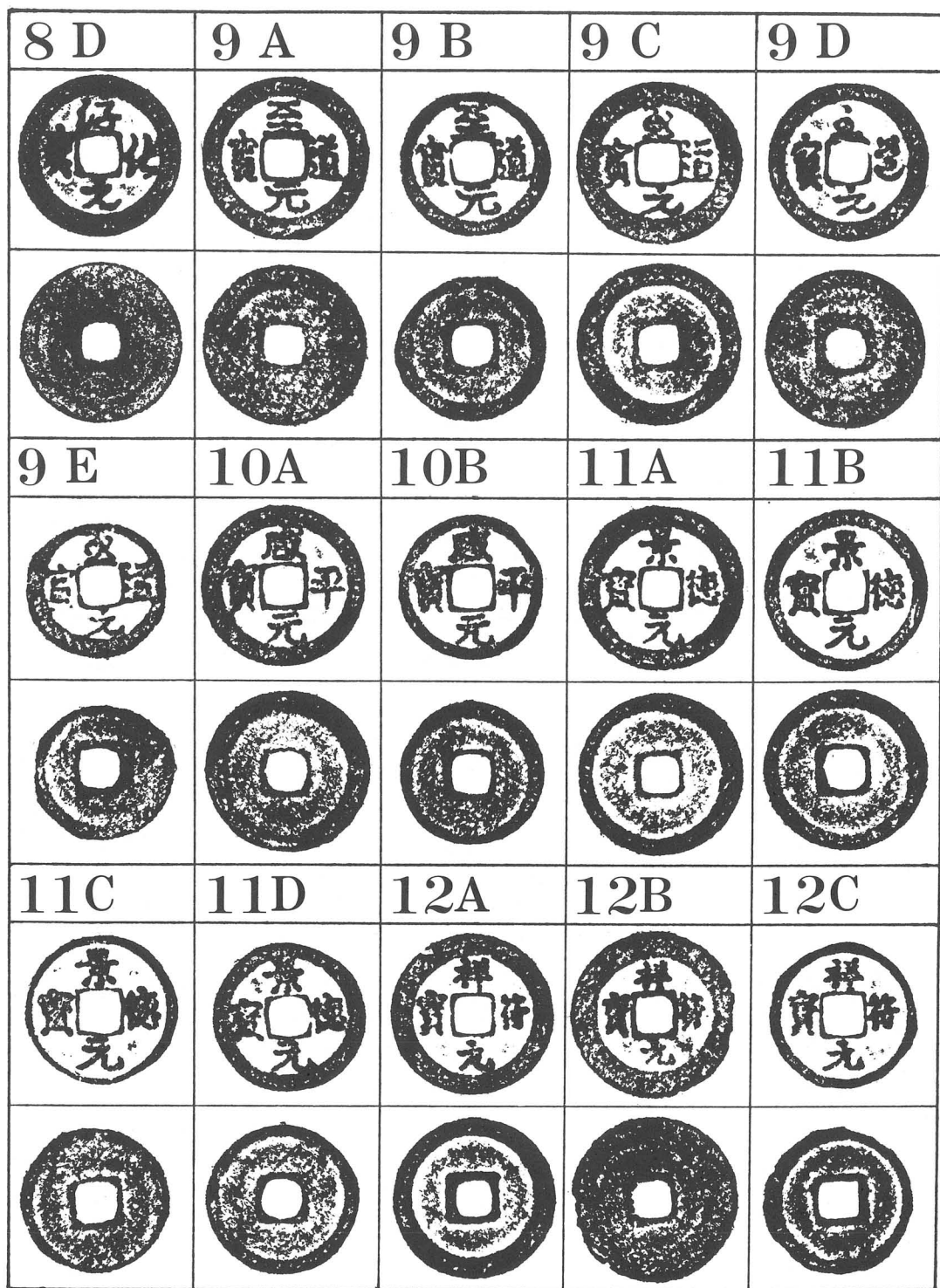
開元通寶(1 A ~ 1 O)

Fig. 58 錢貨拓影図(2)



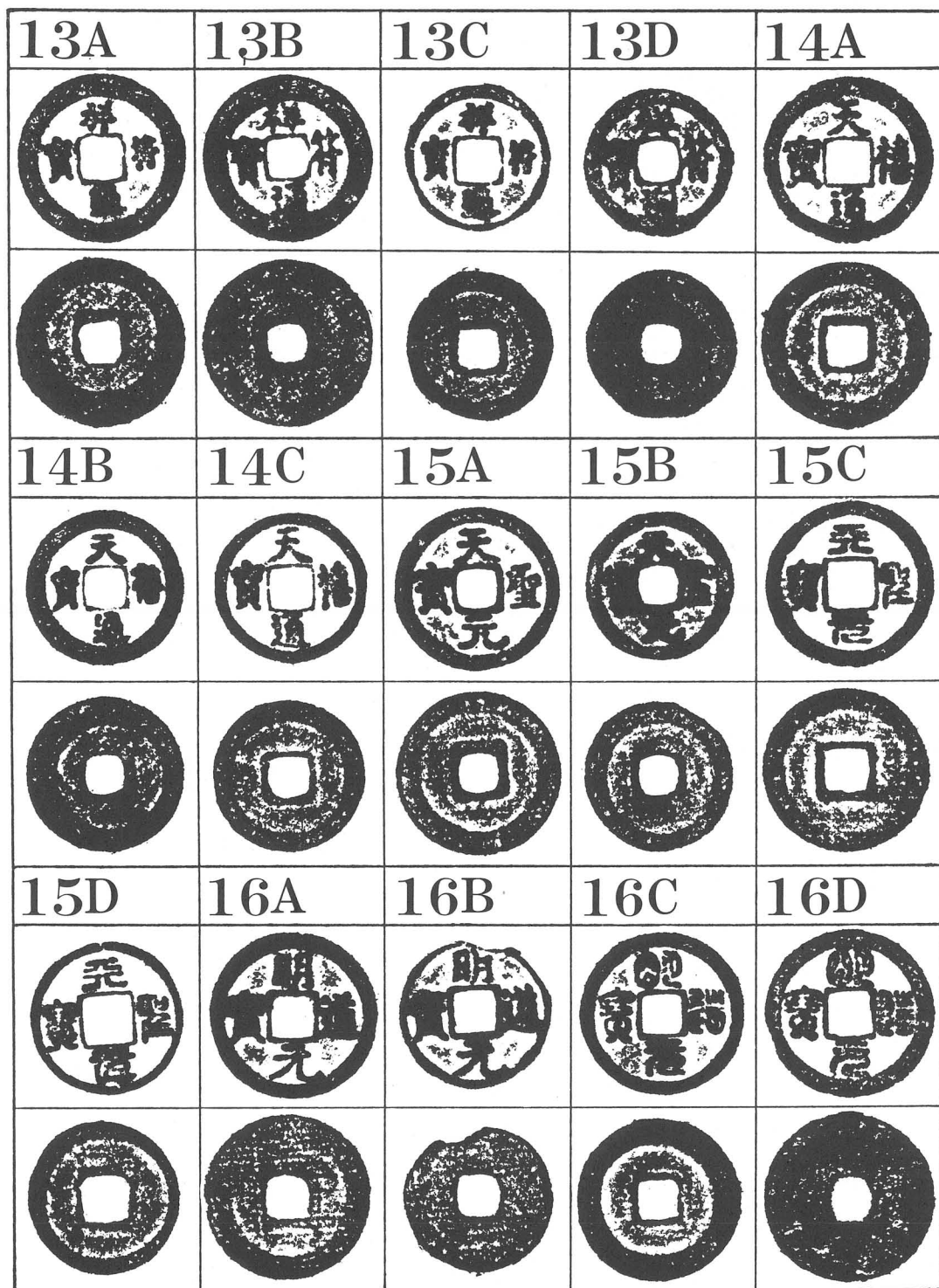
開元通宝(1 P・1 Q) 貞元重宝(2 A～2 C) 唐國通宝(3 A・3 B) 光天元宝(4) 軋德元宝(5)
 宋通元宝(6 A・6 B) 太平通宝(7) 淳化元宝(8 A～8 C)

Fig. 59 錢貨拓影図(3)



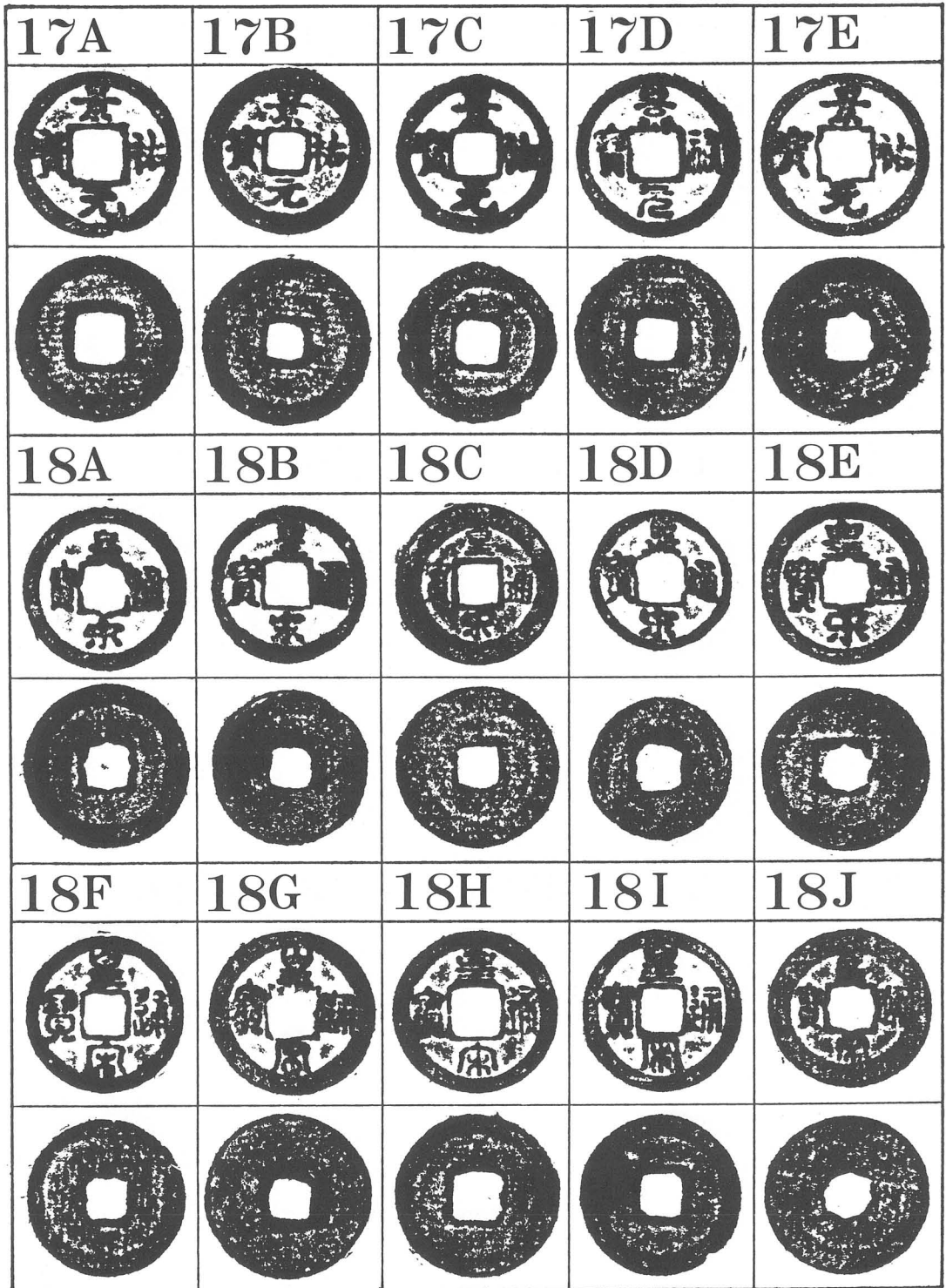
淳化元宝(8 D) 至道元宝(9 A ~ 9 E) 咸平元宝(10 A · 10 B)
 景德元宝(11 A ~ 11 D) 祥符元宝(12 A ~ 12 C)

Fig. 60 錢貨拓影圖(4)



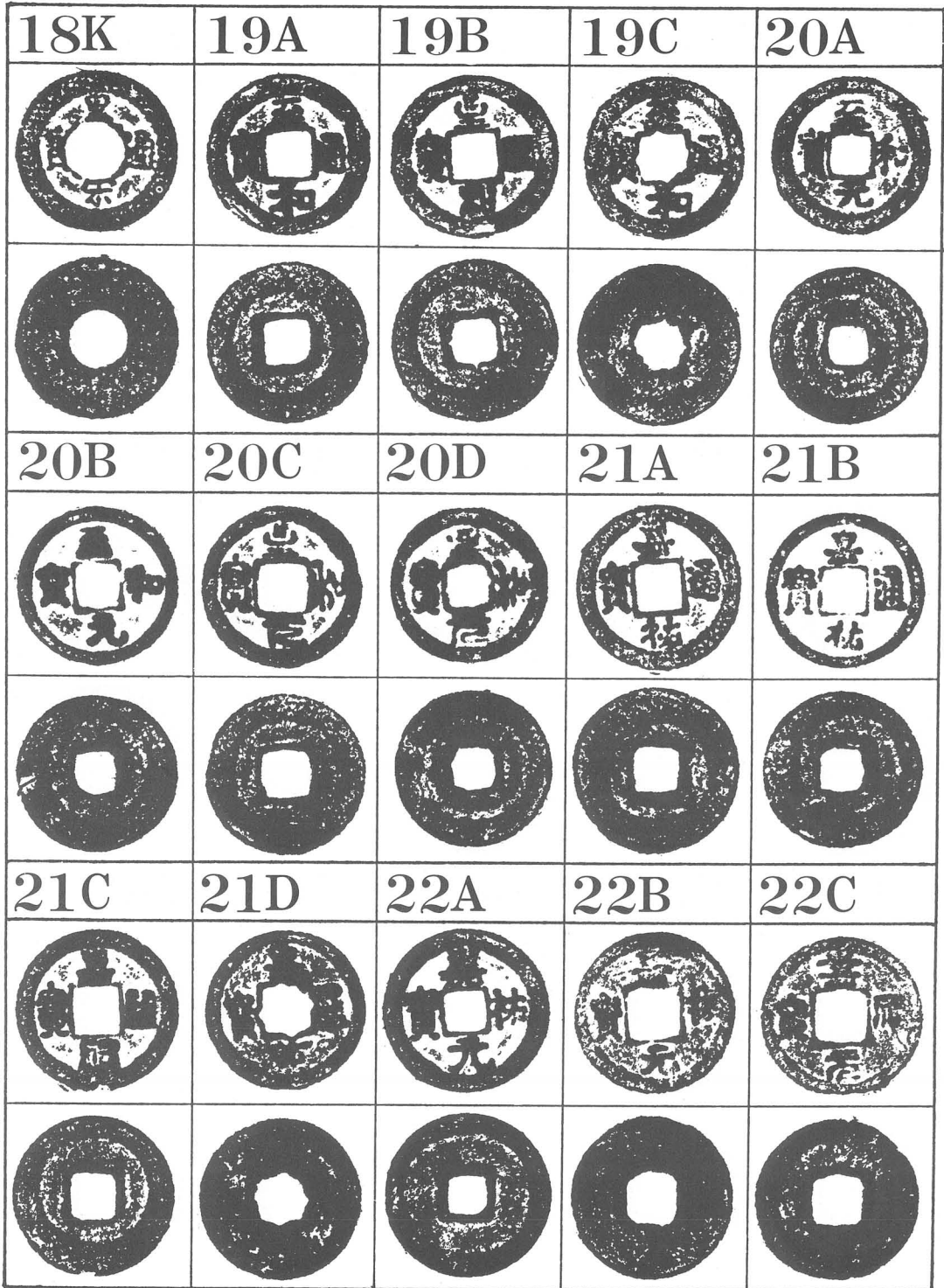
祥符通寶(13A ~ 13D) 天禧通寶(14A ~ 14C)
 天聖元寶(15A ~ 15D) 明道元寶(16A ~ 16D)

Fig. 61 錢貨拓影図(5)



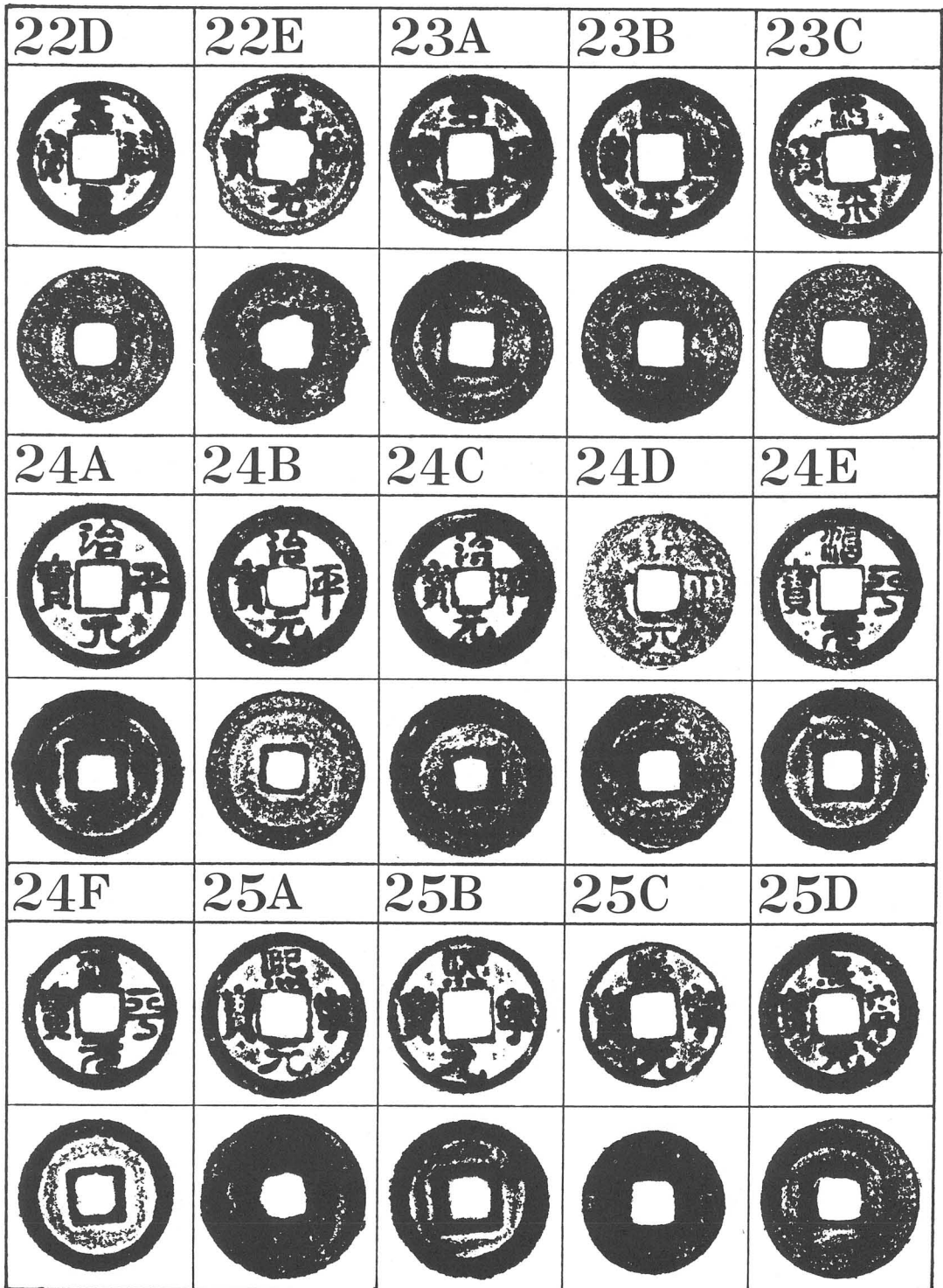
景祐元宝(17A ~ 17E) 皇宋通宝(18A ~ 18J)

Fig. 62 錢貨拓影図(6)



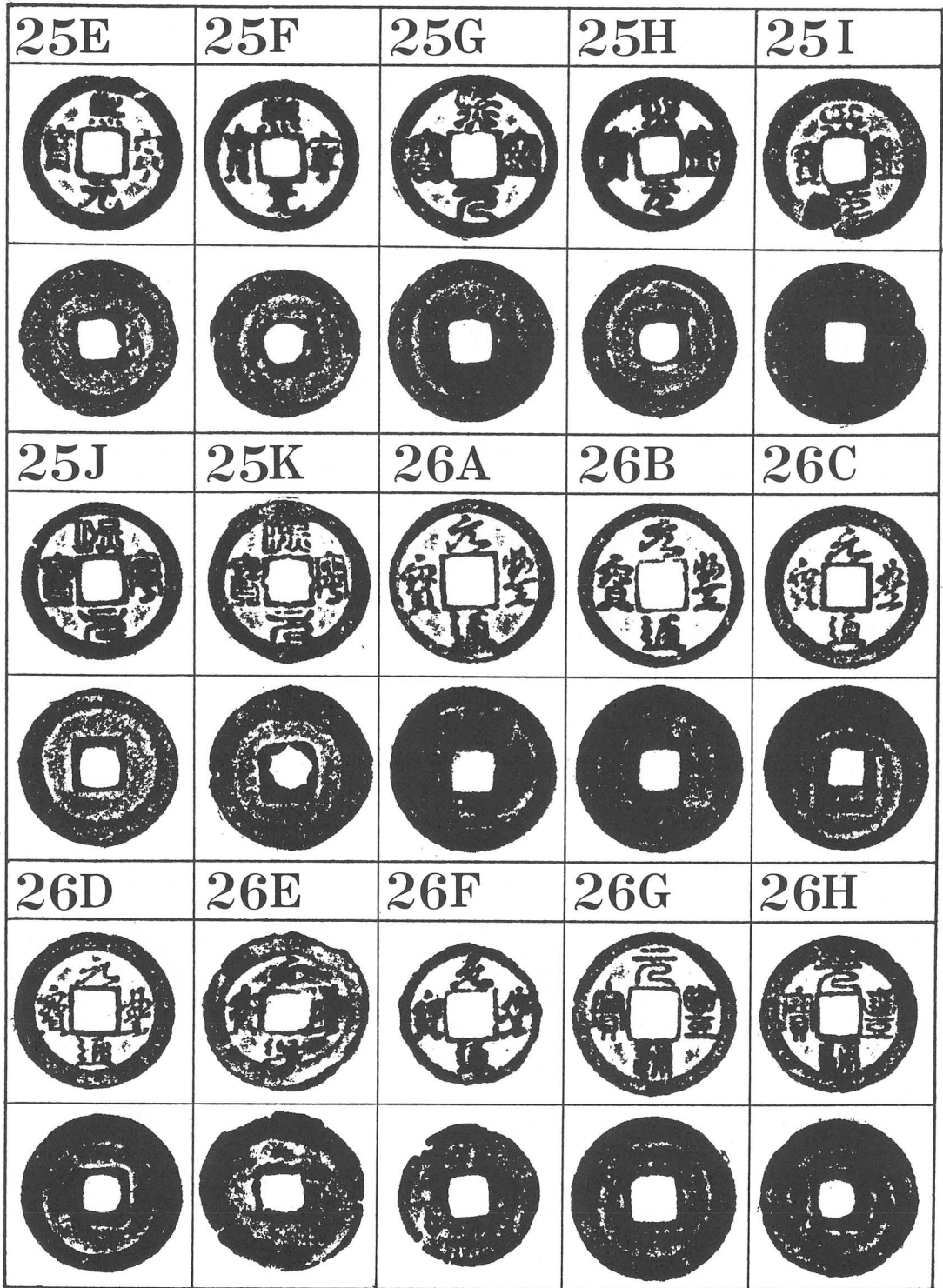
皇宋通宝(18K) 至和通宝(19A~19C) 至和元宝(20A~20D) 嘉祐通宝(21A~21D) 嘉祐元宝(22A~22C)

Fig. 63 錢貨拓影圖(7)



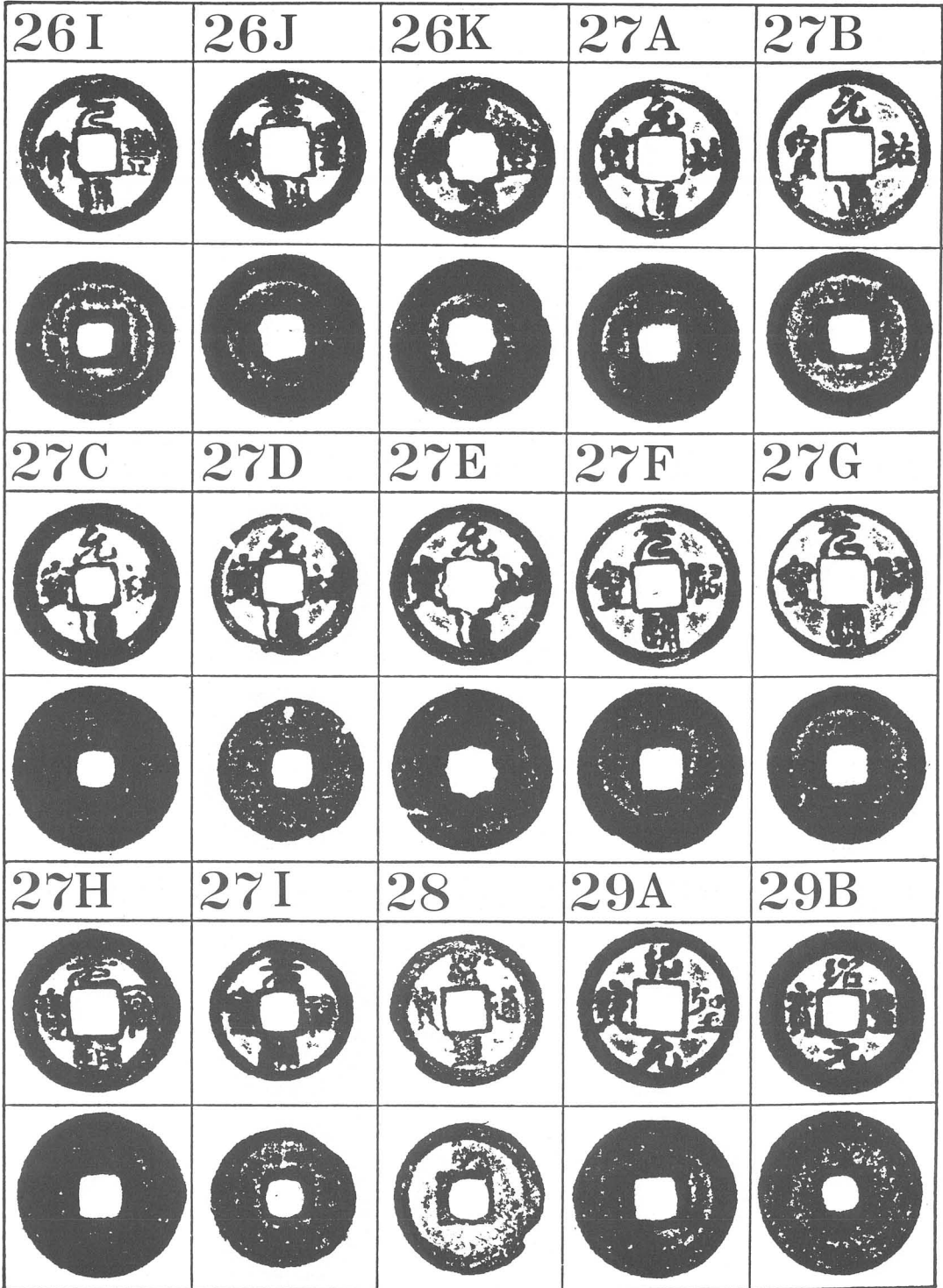
嘉祐元寶(22 D · 22 E) 治平通寶(23 A ~ 23 C) 治平元寶(24 A ~ 24 F) 熙寧元寶(25 A ~ 25 D)

Fig. 64 錢貨拓影図(8)



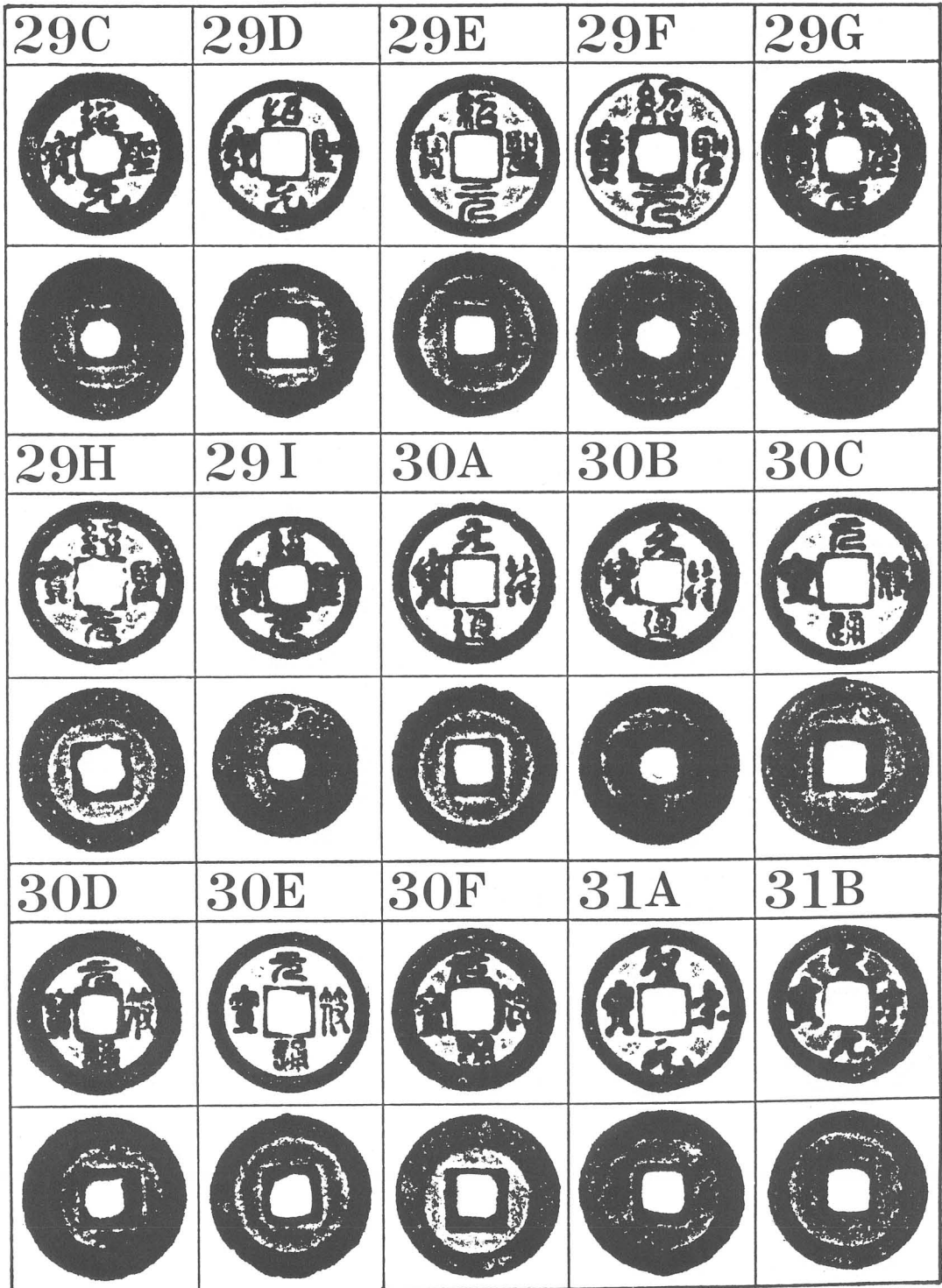
熙寧元寶(25 E ~ 25 K) 元豐通寶(26 A ~ 26 H)

Fig. 65 錢貨拓影図(9)



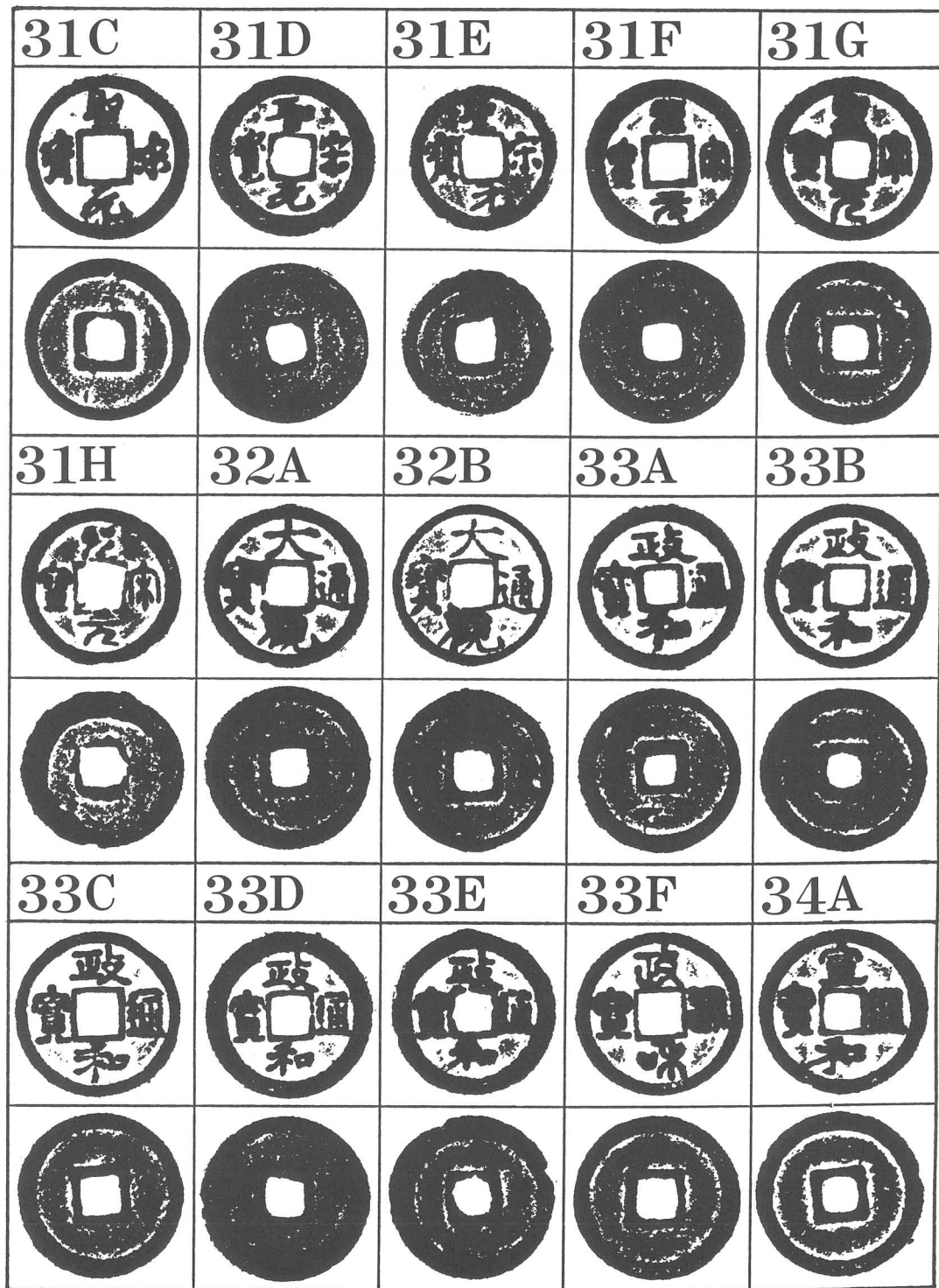
元祐通宝(26I ~ 26K) 元祐通宝(27A ~ 27I) 紹聖通宝(28) 紹聖元宝(29A・29B)

Fig. 66 錢貨拓影図(10)



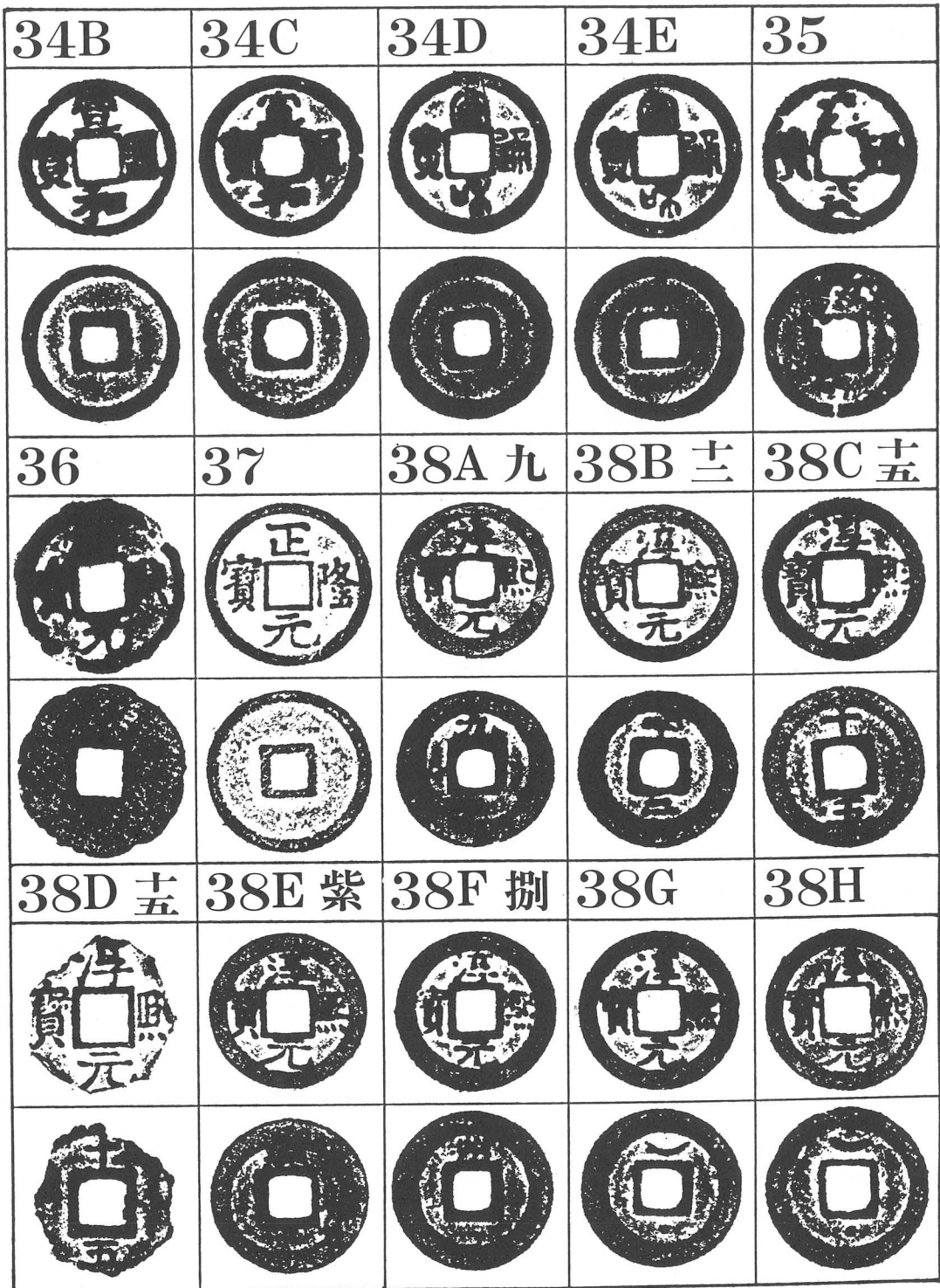
紹聖元寶(29C ~ 29 I) 元符通寶(30A ~ 30 F) 聖宋元寶(31A・31 B)

Fig. 67 錢貨拓影図(1)



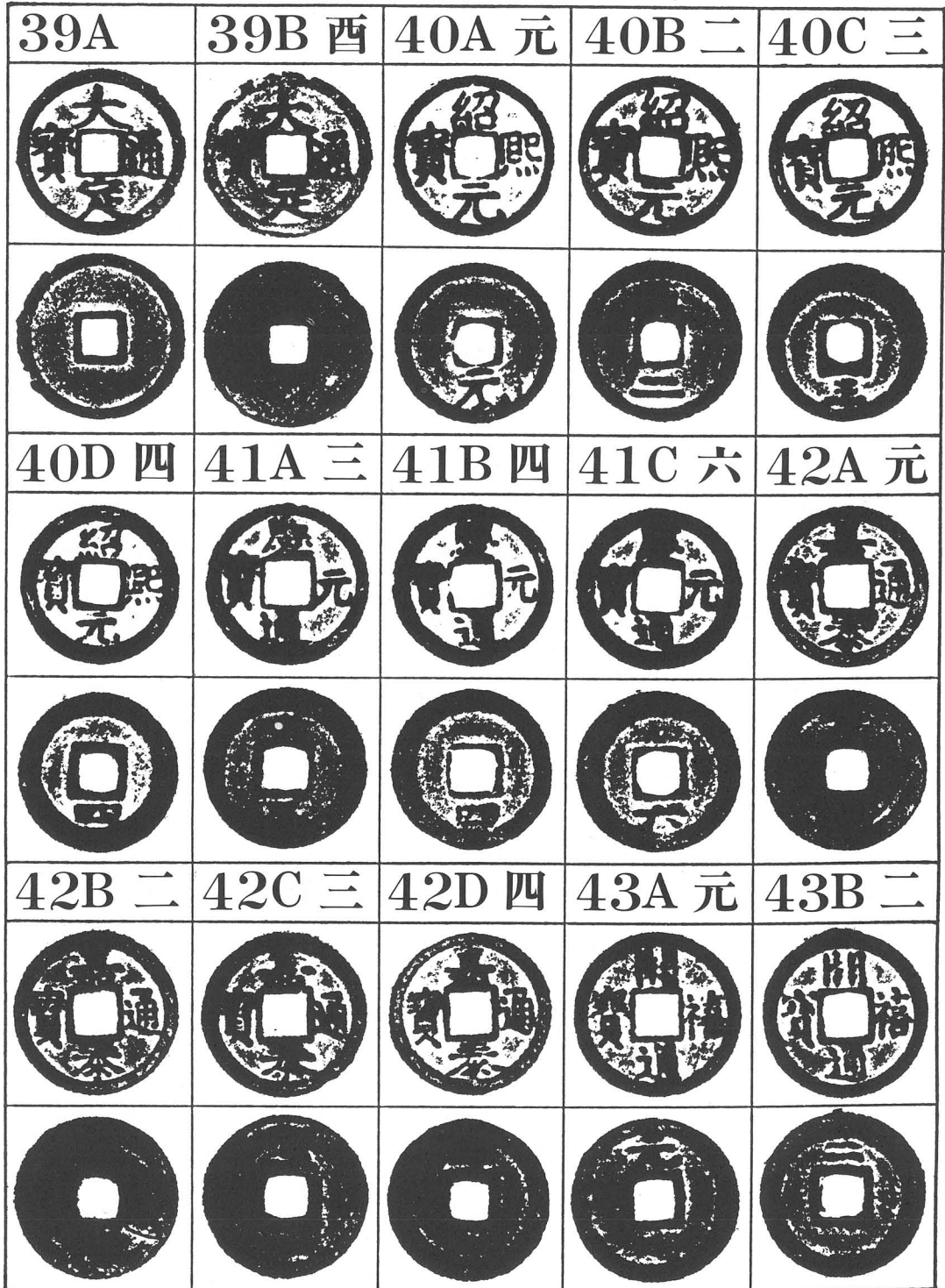
聖宋元宝(31C ~ 31H) 大觀通宝(32A・32B) 政和通宝(33A ~ 33F) 宣和通宝(34A)

Fig. 68 錢貨拓影圖(12)



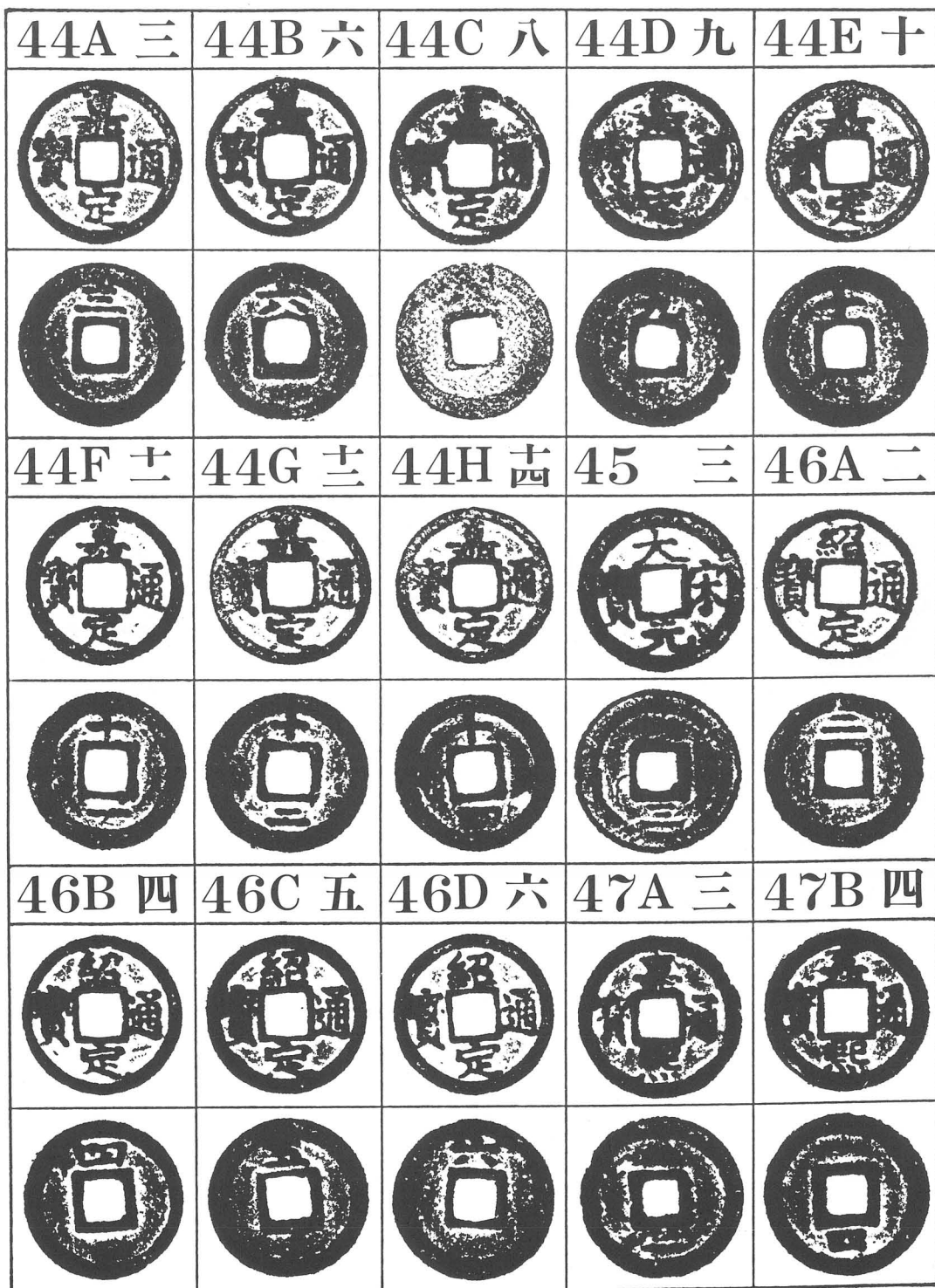
宣和通寶(34B~34E) 建炎通寶(35) 紹興元寶(36) 正隆元寶(37) 淳熙元寶(38A~38H)

Fig. 69 錢貨拓影圖(13)



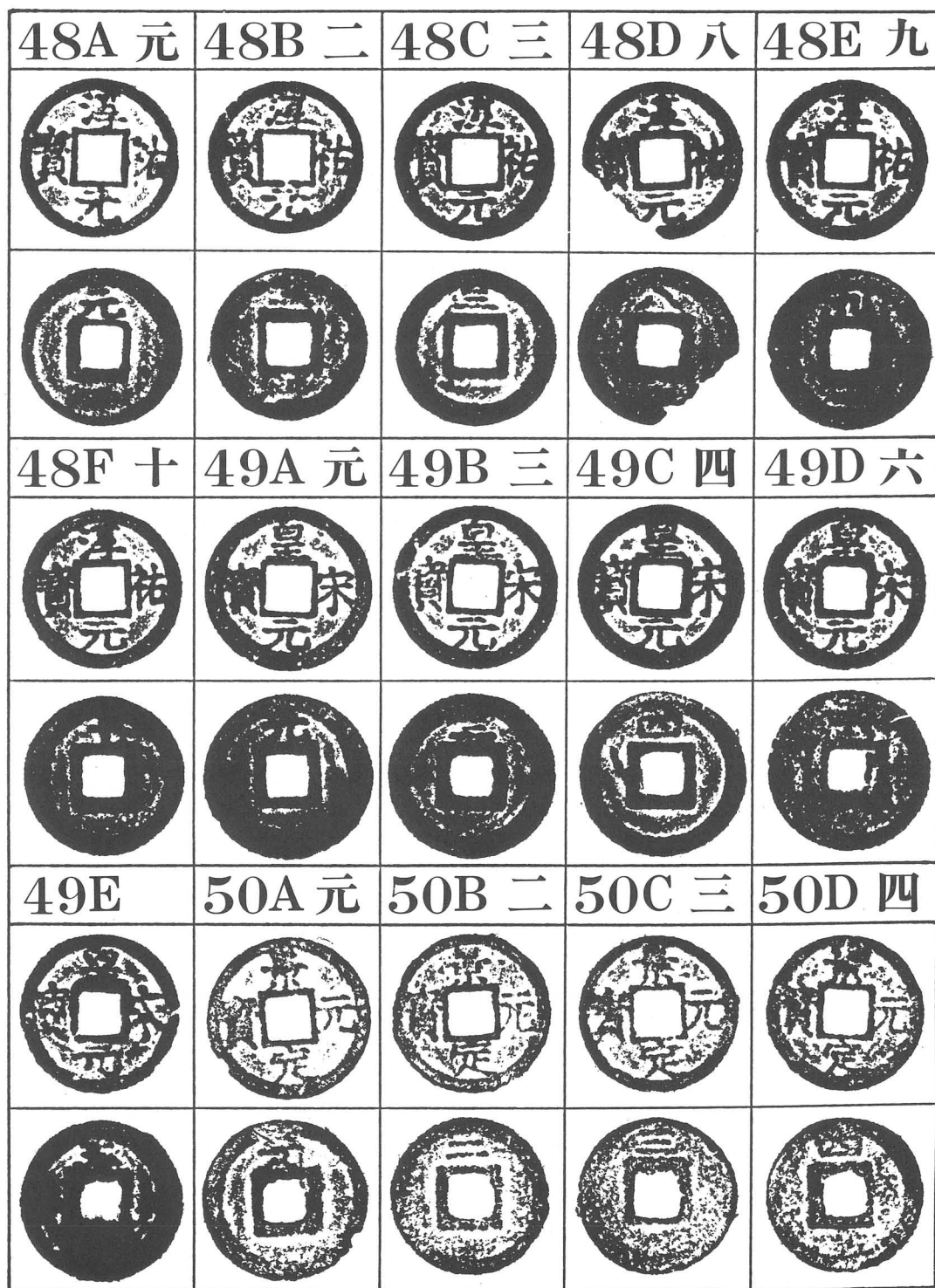
大定通寶(39A・39B) 紹熙元寶(40A~40D) 慶元通寶(41A~41C) 嘉泰通寶(42A~41D) 開禧通寶(43A・43B)

Fig. 70 錢貨拓影図(14)



嘉定通宝(44A ~ 44H) 大宋元宝(45) 紹定通宝(46A ~ 46D) 嘉熙通宝(47A・47B)

Fig. 71 錢貨拓影図(15)



淳祐元宝(48A ~ 48F) 皇宋通宝(49A ~ 49E) 景定元宝(50A ~ 50D)

Fig. 72 錢貨拓影図(16)

51A 二	51B 五	52A	52B	53A
53B	54A 浙	54B 華	54C 福	54D 福
54E	54F	54G 浙	54H	54I

咸淳元宝(51A・51B) 至大天寶(52A・52B) 大中通寶(53A・53B) 洪武通寶(54A~54I)

Fig. 73 錢貨拓影図(17)

54J 一錢	54K	54L 一錢	54M 一錢	55A
55B	55C	56A	56B	56C

洪武通宝(54J ~ 54M) 永樂通宝(55A ~ 55C) 無文錢(56A ~ 56C)

Ⅶ まとめ

昭和59年度における調査の要点を述べると以下ようになる。

(1)内館平場において、7間×4間の規模を有し1間の基本尺が6尺5寸の礎石建物跡が検出された。礎石建物跡は、県内および北日本においても検出例は少なく、浪岡城跡内館が城館全域の中で極めて重要な建物を配していたことが理解できる。

(2)出土遺物の中で陶磁器類についてみると、13～14世紀に製作されたと考えられる伝世品的製品の量が増加し、なおかつ15世紀後半頃に位置づけられる瀬戸美濃灰釉皿・鉢から16世紀末に位置づけられる唐津皿・志野皿まで、北館と比較した場合年代幅が四半世紀ほど広がったと考えられる。つまり、内館の使用年代は北館より上り得る状況がみられる。特に、破片数集計ではあるが舶載品と国産品を比較すると、北館が50：50であるのに対し内館は60：40と舶載品が増加し、浪岡城跡より古い遺跡形成年代を示す尻八館等に近似してくる。また、舶載品の中では、北館において青磁：白磁：染付の比率が49：17：34であるのに対し内館は41：30：29と白磁の比率が相対的に高くなっていることを指摘でき、内館の形成年代は北館に比較して古い傾向を示している。

(3)特殊な遺物を出土する遺構として、S X 213、S X 244、S P 11、S P 12を報告した。

S X 213は、多くの銭貨・鉄製品と漆器・鉄砲玉等がみられ、一括廃棄という点でその機能面は土坑あるいはそれに類似したものと考えられる。

S X 244は、完形に近い陶磁器11点、金属製武具・生活用品・工具、皮革製品、銭貨、溶解物、自然遺物等の多種多量な遺物が覆土に一括廃棄されていた。陶磁器については、意図的に破砕された後に捨てられた状況は明確であり、他の遺物にあっても安置・設置といった状態ではなく意図的に捨てられたものと理解している。特に本遺構の廃棄年代は、陶磁器の中で青磁碗・同小鉢、白磁内湾皿・同端反皿・同外反皿、染付玉取獅子文皿・同梵字文皿・同花卉文皿・同飛馬文碗・同アラベスク文碗、美濃灰釉端反皿の出土から、15世紀以前には上らず16世紀後半までは下らないと考えられ、16世紀前半（1500～1550年）の中に位置づけられると思われる。そうすると、本遺構は浪岡城北畠氏の最盛期に廃絶したことになり、鎧（小札・革札等）・武器（刀・小柄・筭・鉄鍬・目貫等）等の一括出土から単純な廃棄行為ではなく、精神的・意図的廃棄のあり方を示していると考えられる。

S P 11は、いわゆる備蓄銭遺構であり繻の状態で6,000枚近くの出土量があったことは、当時の貨幣経済を考える上で貴重な資料である。銭貨は、56種5971枚であり、中国本銭だけでなくいわゆる私鑄銭といわれる類のものが多数含まれていることに注意を払う必

要がある。埋納年代は下限銭貨が永樂通宝（初鑄年1408年）であることと、寛永通宝（初鑄年1626年）等が含まれないことから15世紀から16世紀の間と考えて大誤なく、城館期に埋納された可能性が極めて高い。

SP12は、内耳鉄鍋を伏せ内部に鋏・鎌・苧引金・轡・小刀・釘・左^な絢いの藁繩を安置していたもので、三浦の論考の通り儀礼・呪術的な意図を感知できる。特に、鉄鍋の内部にあったものがすべて鉄製工具（藁繩はこれらの鉄製品を結んでいた可能性もある）であり葬送儀礼に伴うような日常生活用具（陶磁器・化粧用具・銭貨等）の出土はまったくなかったこと、また鋏・鎌・苧引金・小刀は刃部を有する工具であることから、地霊・悪霊を鎮める意味をもって埋納したことは正鵠を得た考え方と理解できる。

(4)堀跡の調査においては、当初柵形遺構に伴う橋梁等の遺構検出を追求していたが、結果として何ら橋梁らしい痕跡は検出できなかった。しかし、出土遺物の中で「光明真言」を書いた柿経が一点出土したことは、浪岡北畠氏の宗教的行為を考える上で貴重な資料と考えることができる。特にこの柿経が堀跡に廃棄されていたものであることから城館内に墓域が存在した可能性があること、浪岡北畠氏が「光明真言」に関連するの仏教祭儀を実施していた可能性があることを指摘できる。

このように、調査による成果は当初の予想を大きく上まわり次第に浪岡城の全容を推定できる段階まで至ったという印象を強くしている。しかし、今後に残された問題点も多く、主なものを述べると次のようになる。(1)浪岡城跡は、一時期の築城によって形成されたものでなく、内館を中心に外郭へ拡張していったと考えられるが、何時何処の館を構築していったのか？(2)また、各館による機能分担がどの程度まで行なわれていたのか？(3)各館内における建物配置は、礎石建物跡・掘立柱建物跡・竪穴建物跡・井戸跡・溝跡・焼土遺構等が有機的に配置されていたと考えられることから、城館期の中で時期的変遷をたどることが可能と思われるがその根拠となる出土遺物の時期決定には問題点が多い。(4)出土遺物は、製作年代・使用年代・廃棄年代という三期にわたる幅の広い年代観を内包しているため。今後は遺構内出土遺物の廃棄年代を足がかりとしてセット関係の把握を中心に考える必要がある。(5)各遺構からの出土遺物をみると、陶磁器・金属器・石製品等の他に漆器被膜が多いことに注目でき、形状が残らない木器・木製品を十分に考慮した生活用具の復元を考える必要がある。

以上、昭和59年度の調査における成果と問題点を提示しまとめとする。なお、内館の調査が終了する昭和61年度以降に「浪岡城跡内館」の総括的報告を刊行する予定であり、関係各位の御指導・御助言をお願い申し上げる次第です。

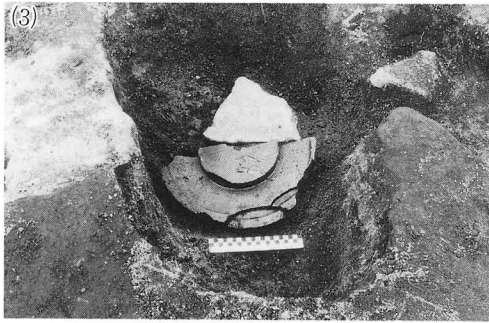
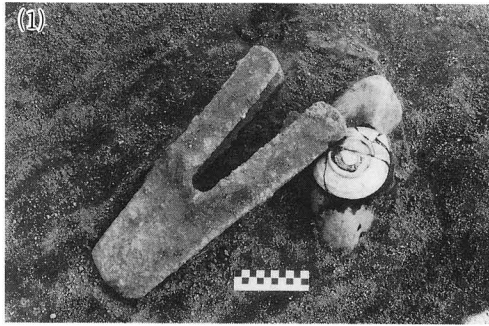
PL. 1



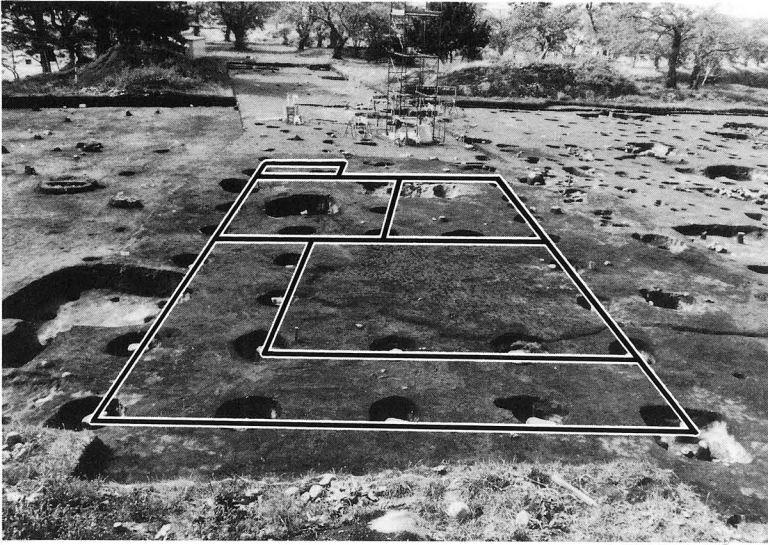
- (1) 発掘調査区北側全景
- (2) 発掘調査区南側作業風景
- (3) 児童の発掘調査教室
- (4) 現場説明会



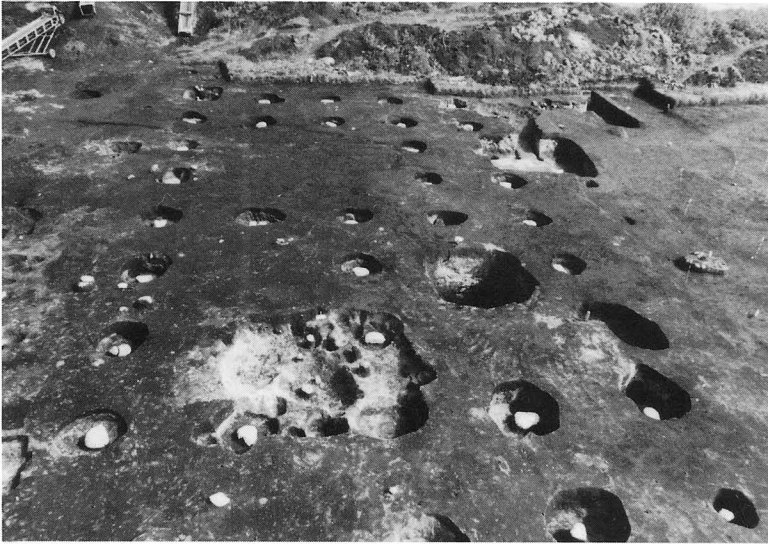
PL. 2



(1)R46区II層出土鋤先と美濃灰釉皿 (2)S47区II層出土青磁皿 (3)R47区柱穴内出土の茶臼 (4)V45区II層出土の赤絵が施された染付 (5)S46区柱穴内出土の石製人形 (6)SX213出土漆器高台 (7)Q46区柱穴内出土銅製分銅 (8)SX226出土石製人形



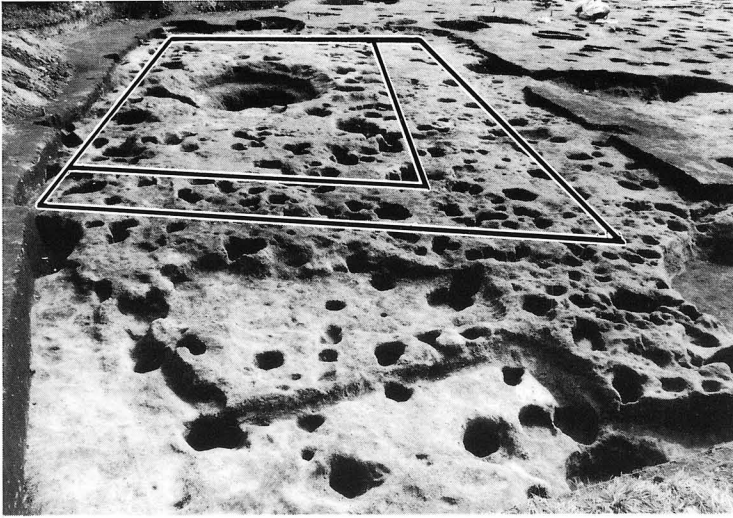
(1) SB38全景
(東から)



(2) SB38全景
(西から)



(3) SB38b 1 柱穴南壁層序



(1) SB37.他(西から)

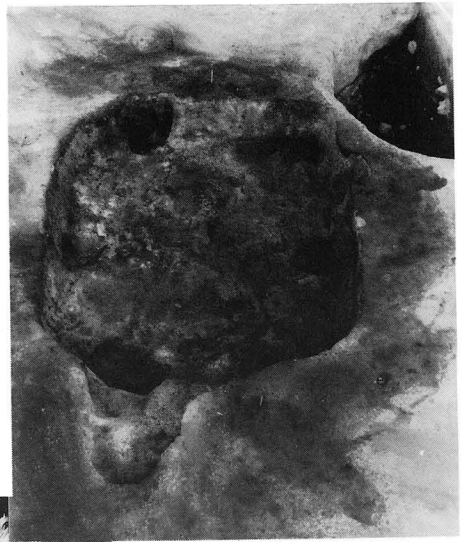


(2) SB37
SB46 (東から)
SB47



(3) 調査区南側全景

(1) ST248
(西側から)



(2) ST249 (南側から)



(3) ST252 (北側から)



(1) ST254 (南側から)

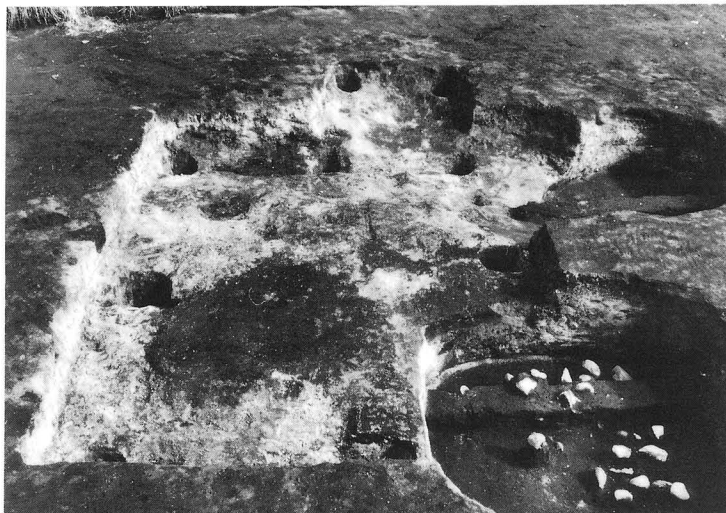


(2) ST256 (南側から)



(3) ST260 (南側から)

(1) ST261
(西側から)

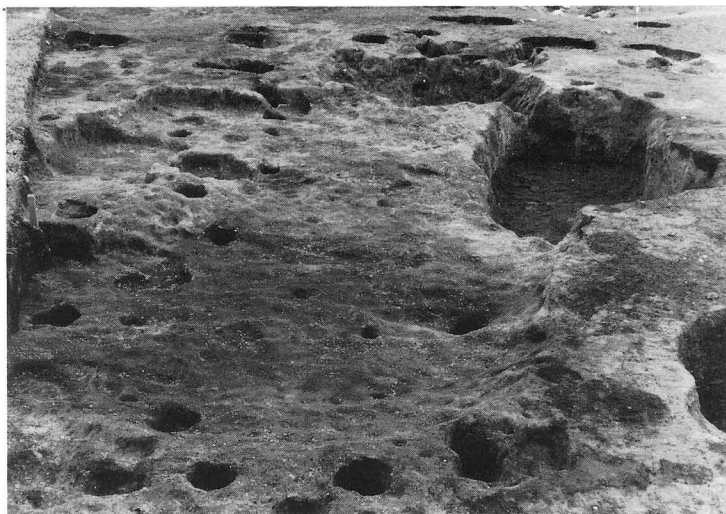


(3) ST262
(西側から)



(3) ST263
(南側から)

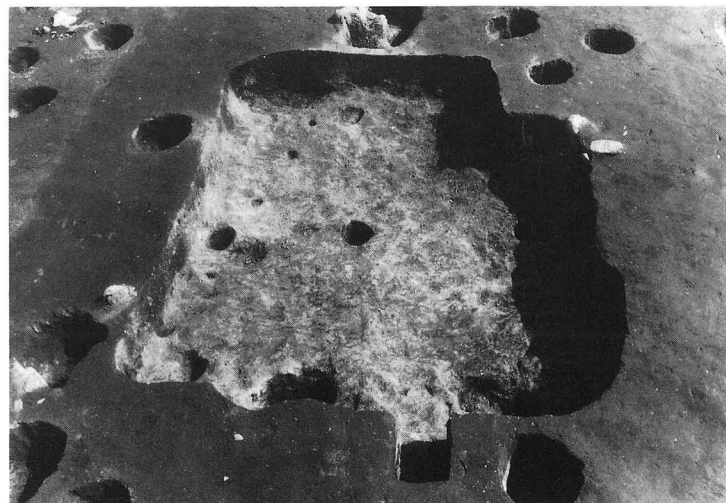




(1) SX206(北側から)
SX212

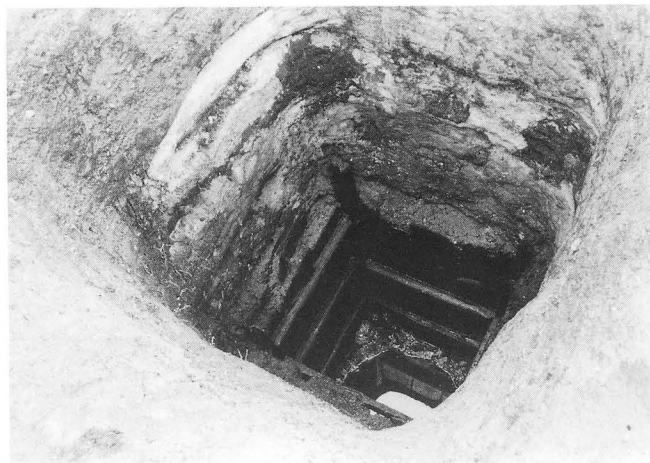


(2) SX213(北側から)

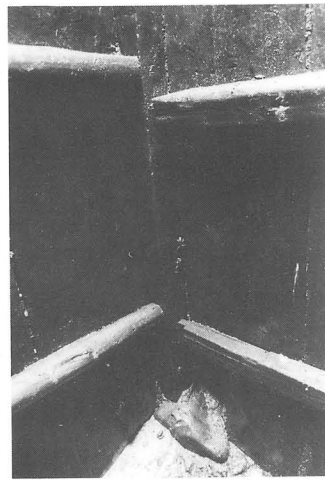
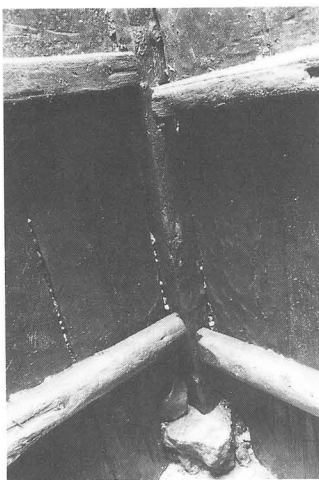


(3) SX222(西側から)

(1) SE82



(2) SE82木枠



(3) SE86

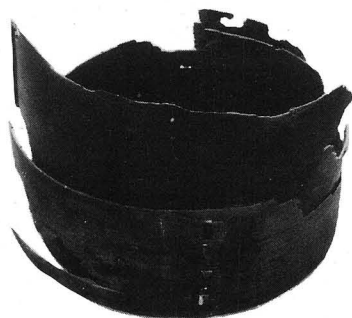




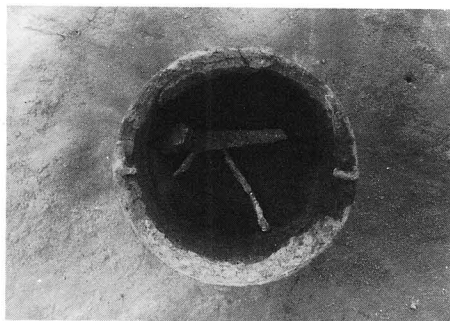
(1) SE80曲物出土状態



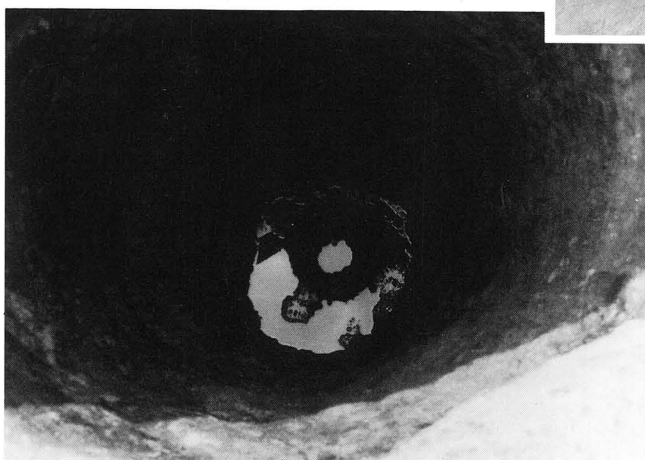
(2) SE80完掘



(3) SE80出土井筒

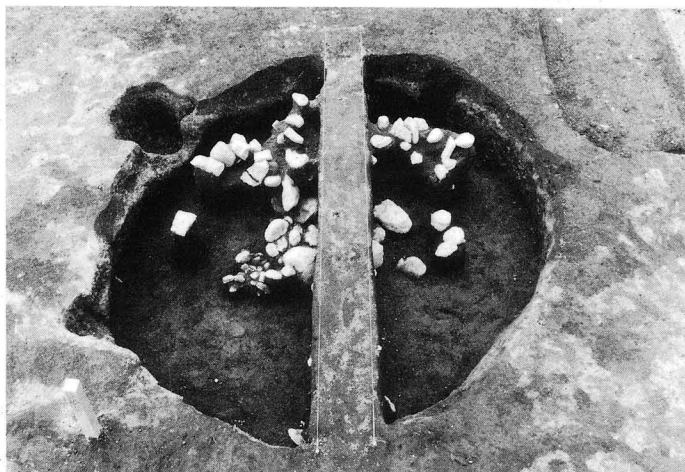


(5) SE92 出土
内耳鉄鍋



(4) SE92

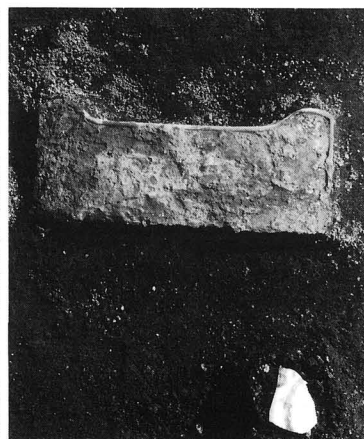
(1) SE84



(2) SX251



(3) SX245



(4) SX245出土胸板



(1) SX200(西側から)



(2) SX226(東側から)



(3) SX247(南側から)



(3) SX202(南側から)



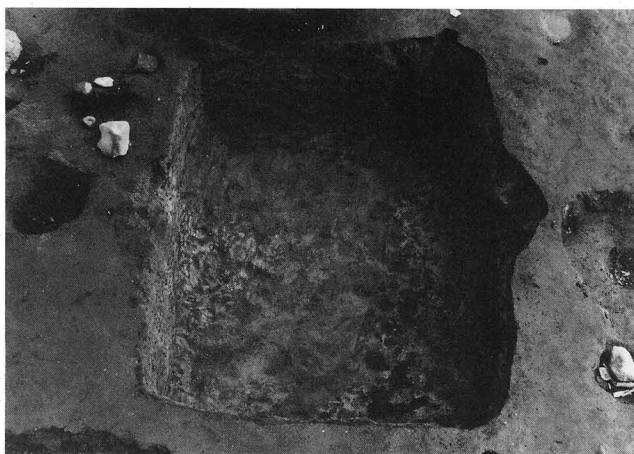
(2) SD84 (東側から)

(3) SF50 (北側から)

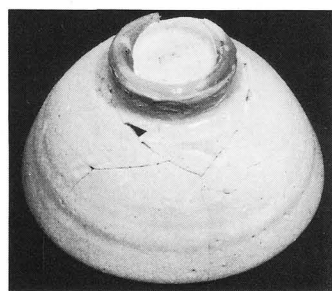




(1) SX244層序断面図
(西側から)



(2) SX244完掘状態
(西側から)



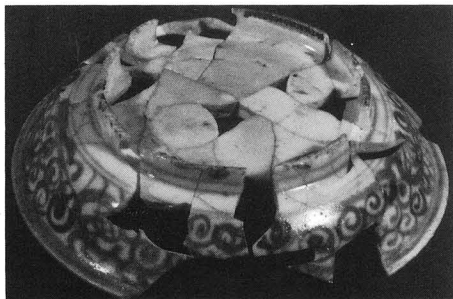
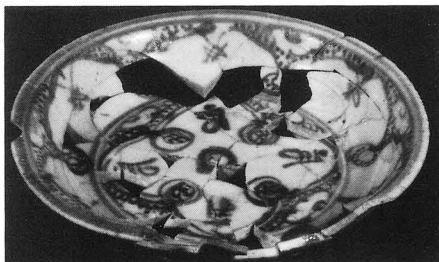
青磁小鉢(58)

青磁碗(57)

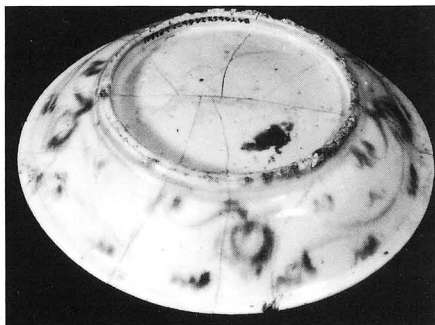
SX244出土陶磁器



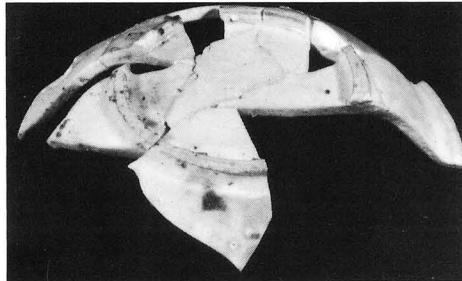
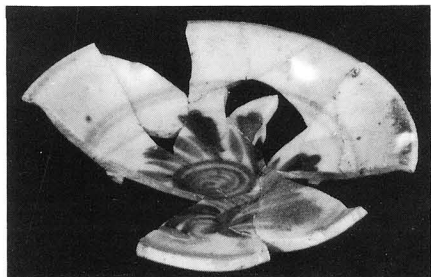
白磁皿(62)



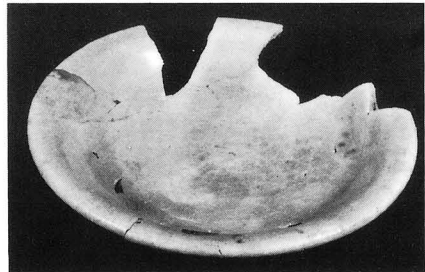
染付皿(64)



染付皿(65)



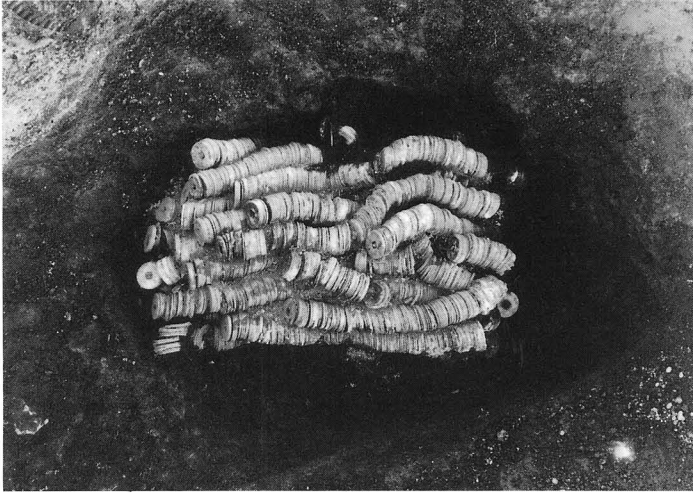
染付皿(66)



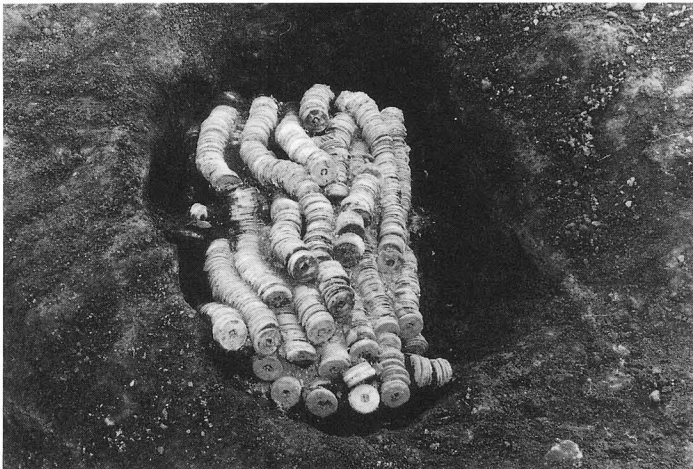
美濃灰釉皿(69)

PL. 16 SX244出土金属器·他





(1) SP11銭貨出土状態
(南側から)



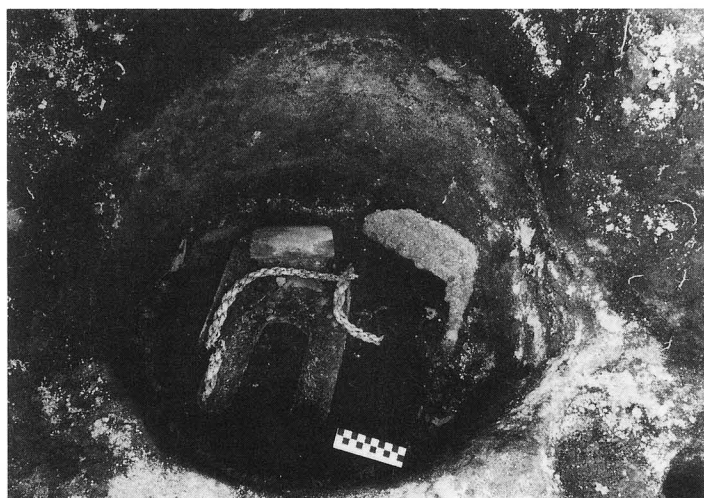
(2) SP11銭貨出土状態
(西側から)



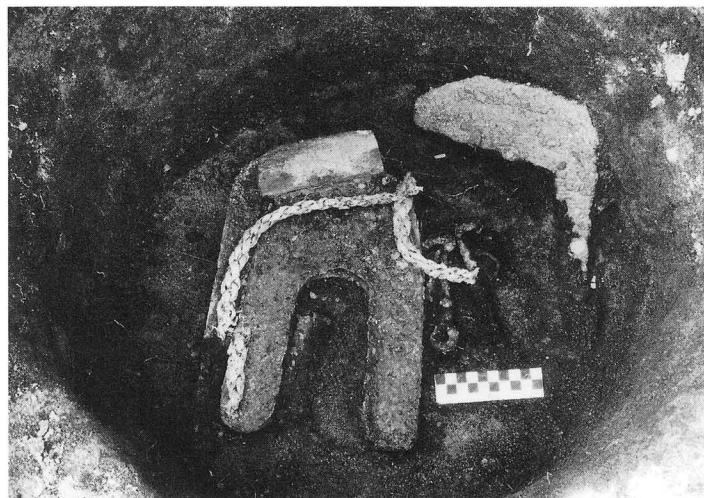
(3) 同拡大写真



(1) 鉄鍋出土状態



(2) 鉄鍋取り上げ状態

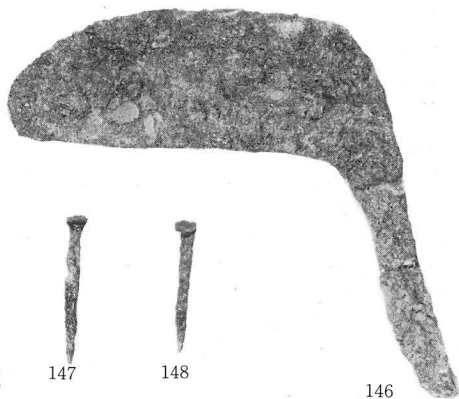


(3) 同拡大状態

PL. 19 SP12出土遺物



145



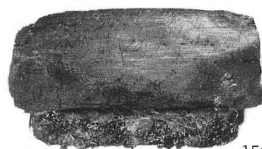
147

148

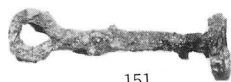
146



149



150



151



152



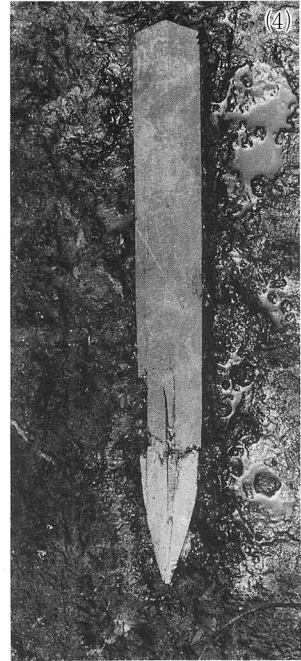
153



154

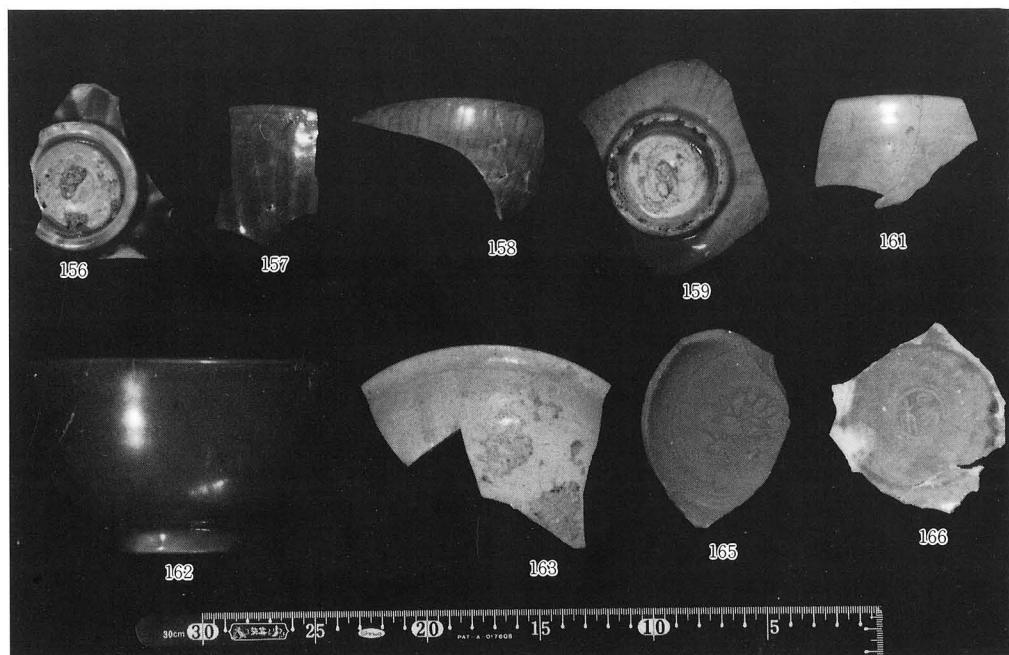
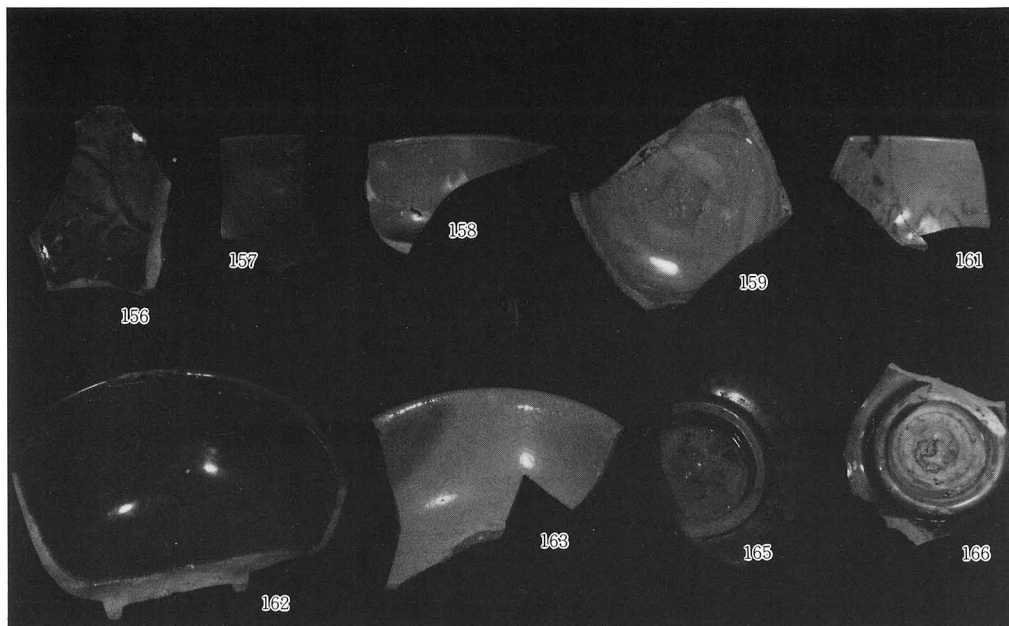


155

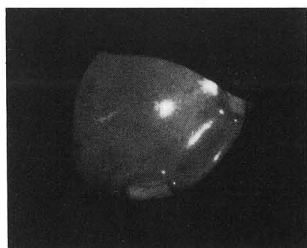
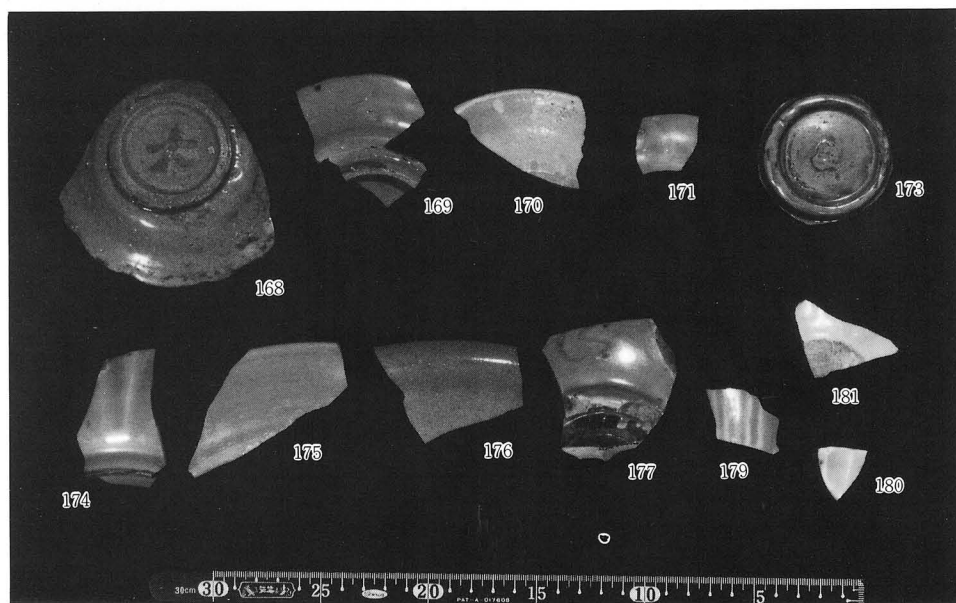
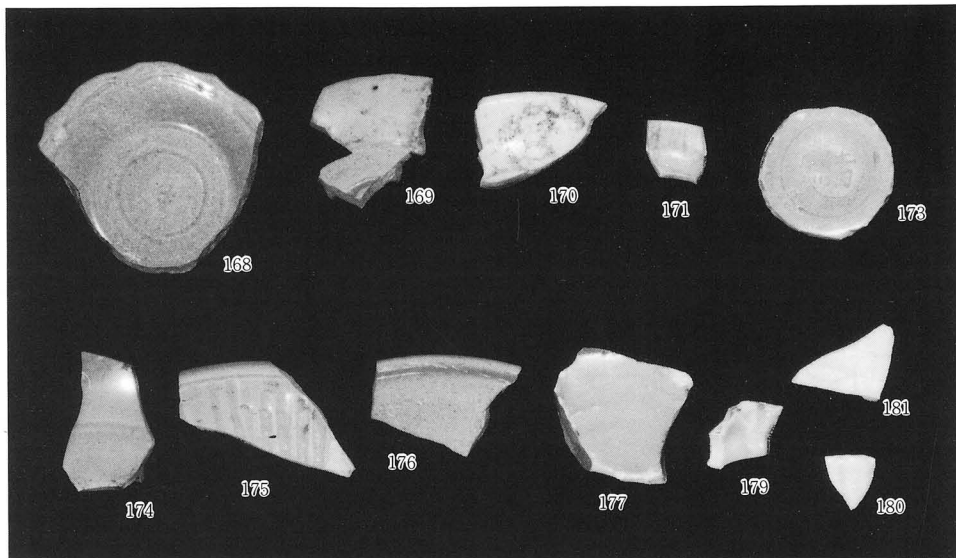


(1) 堀跡発掘調査状況
(2) 柿経出土状態
(3) 堀跡南壁断面
(4) 柿経
(5) 柿経

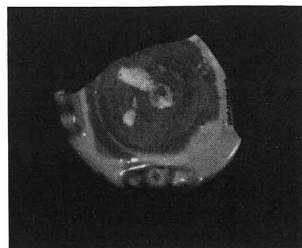
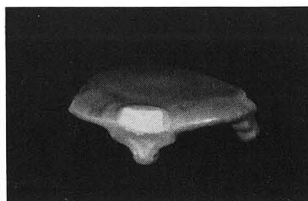
PL. 21 青磁

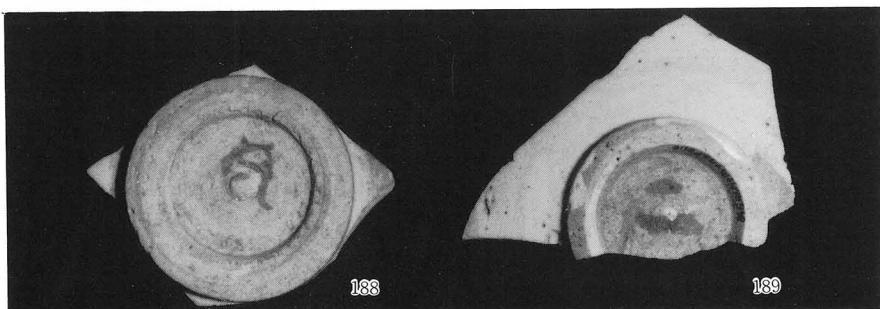
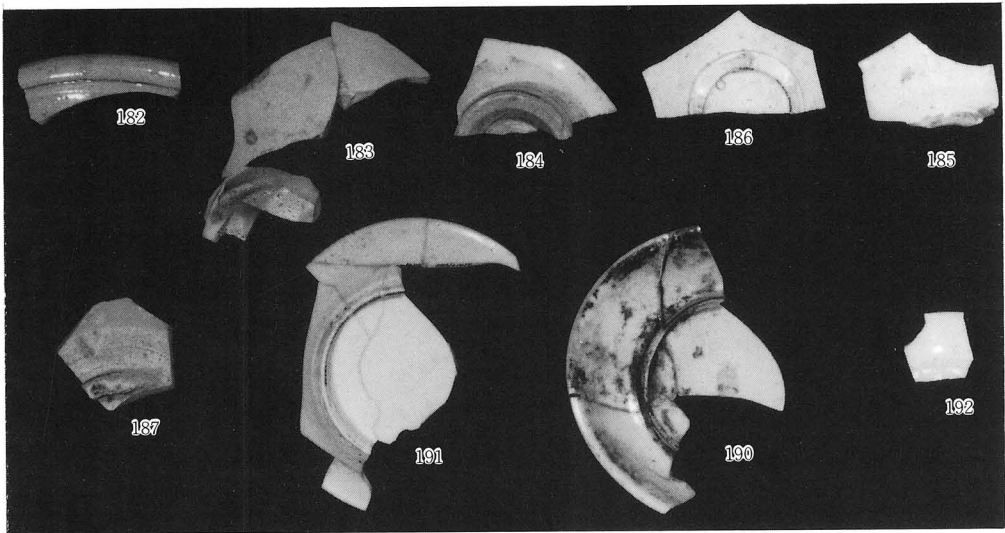
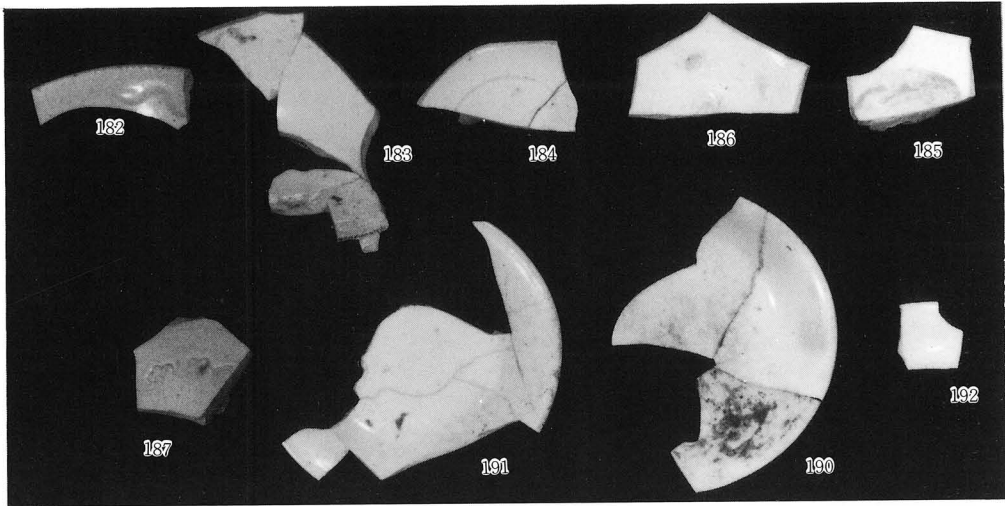


PL. 22 青磁



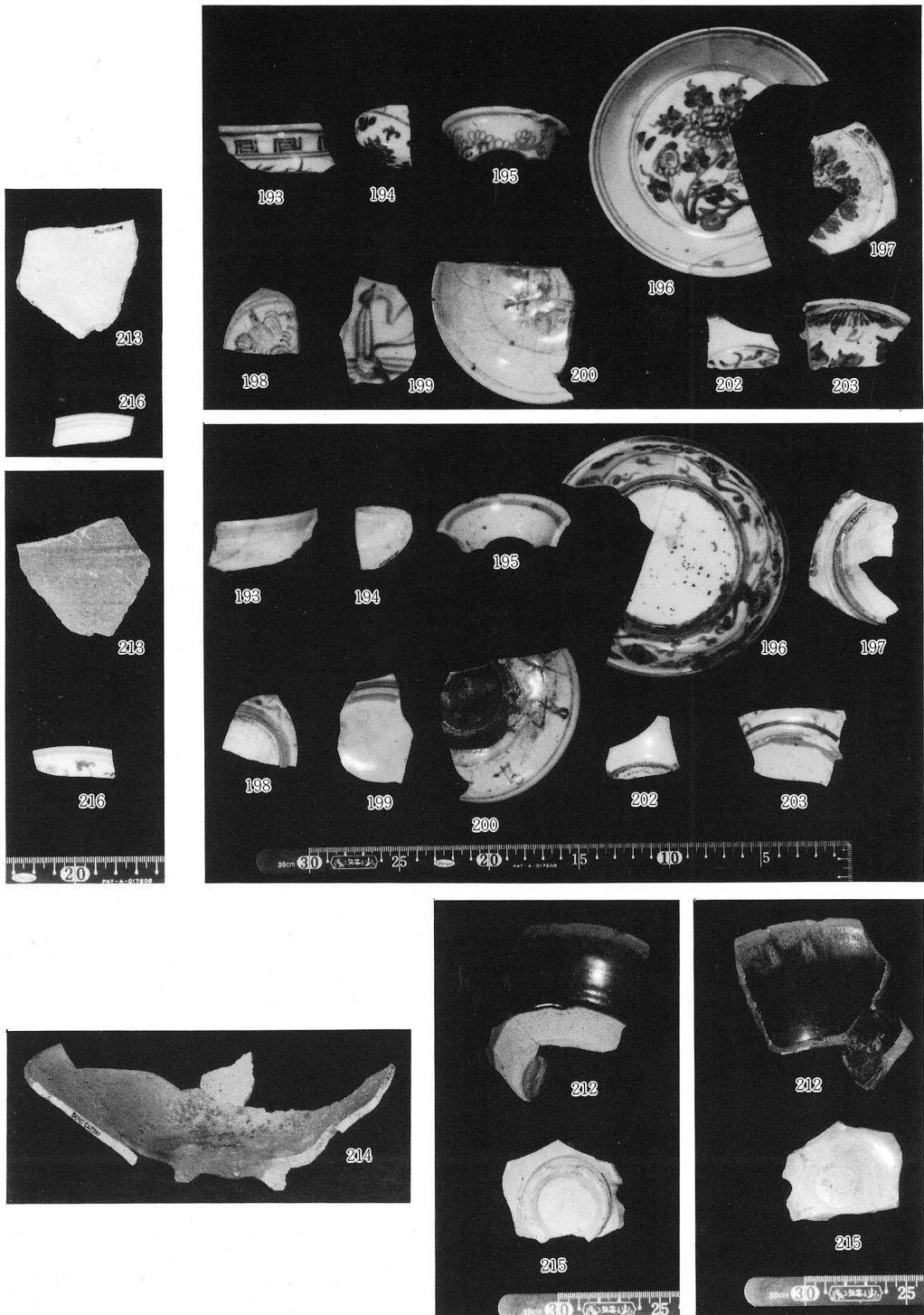
178

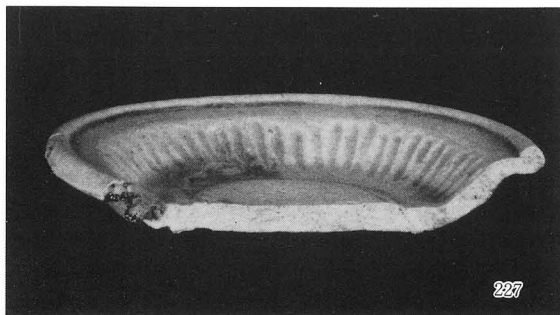
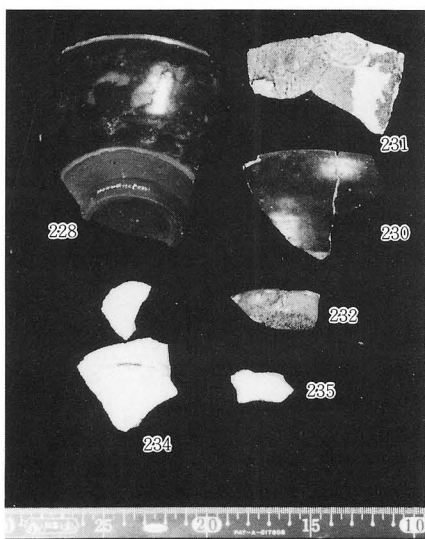
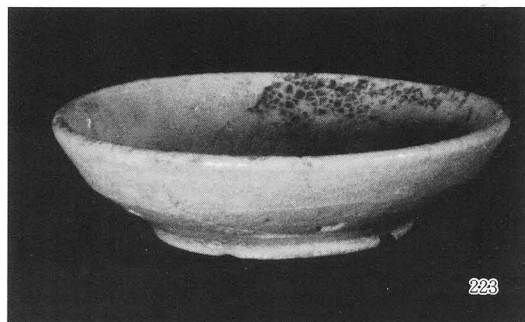
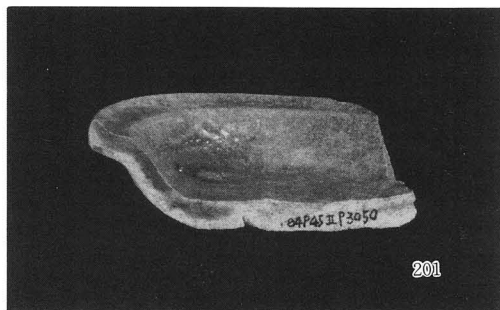
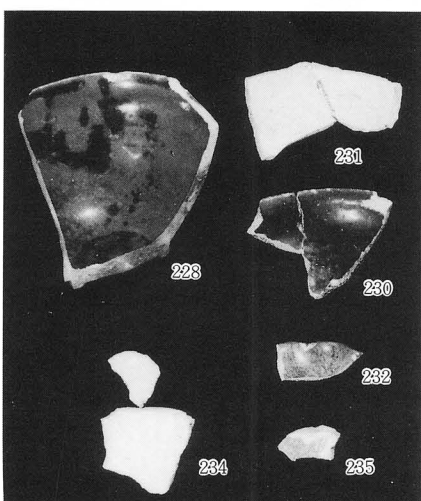
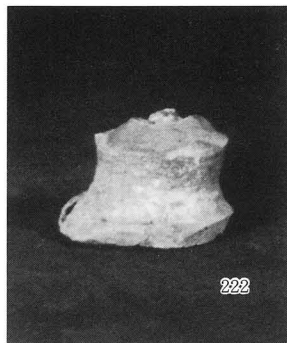
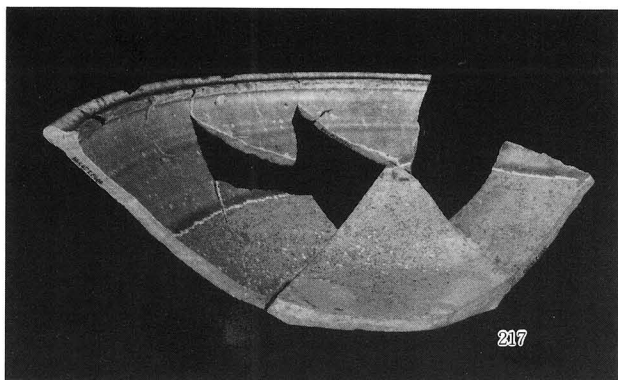


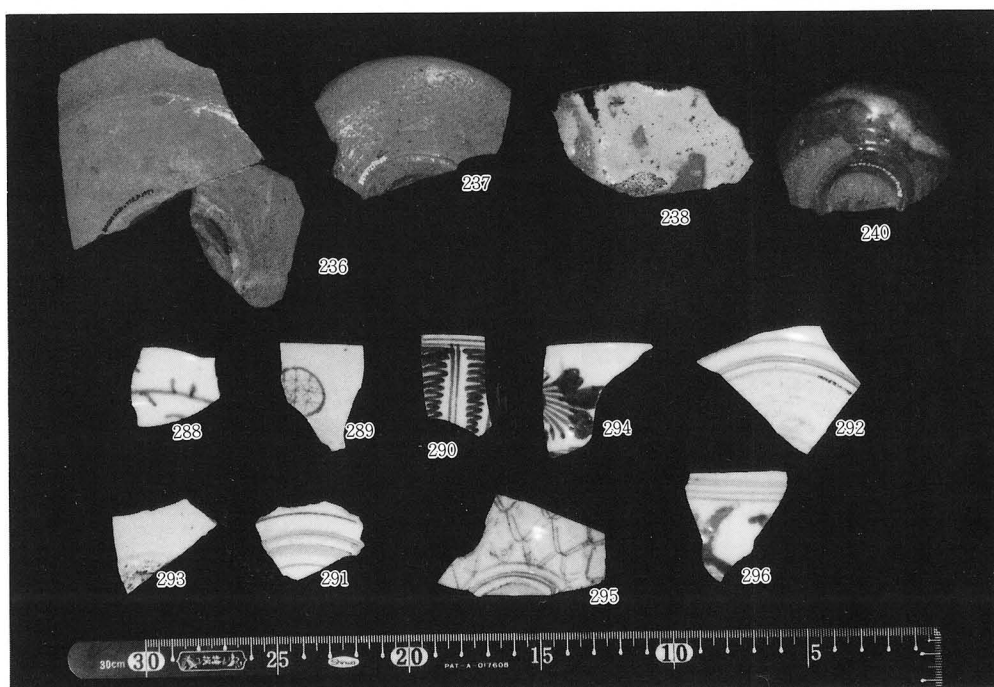
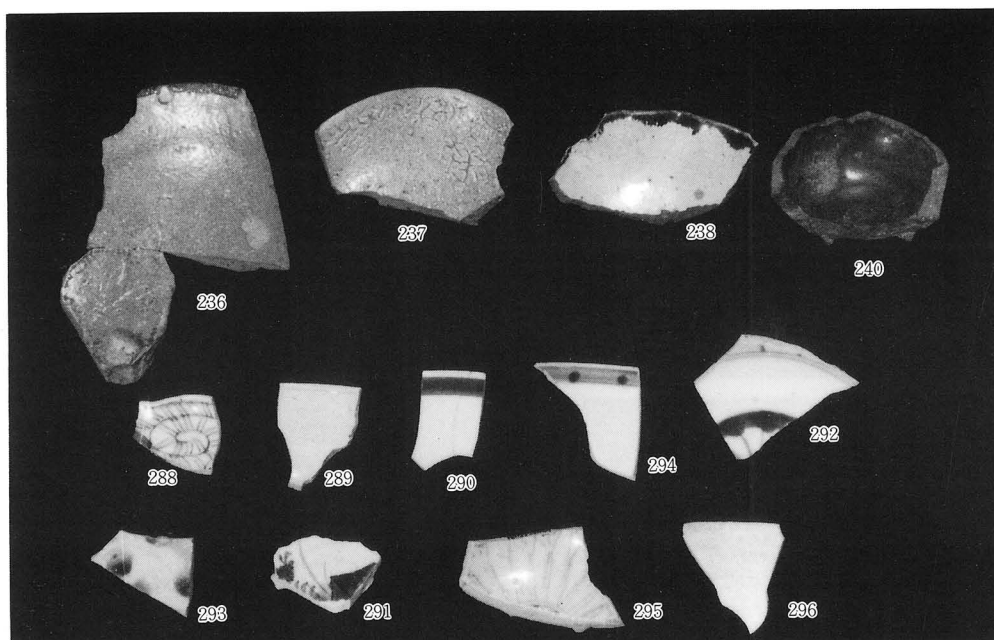


墨書のある白磁

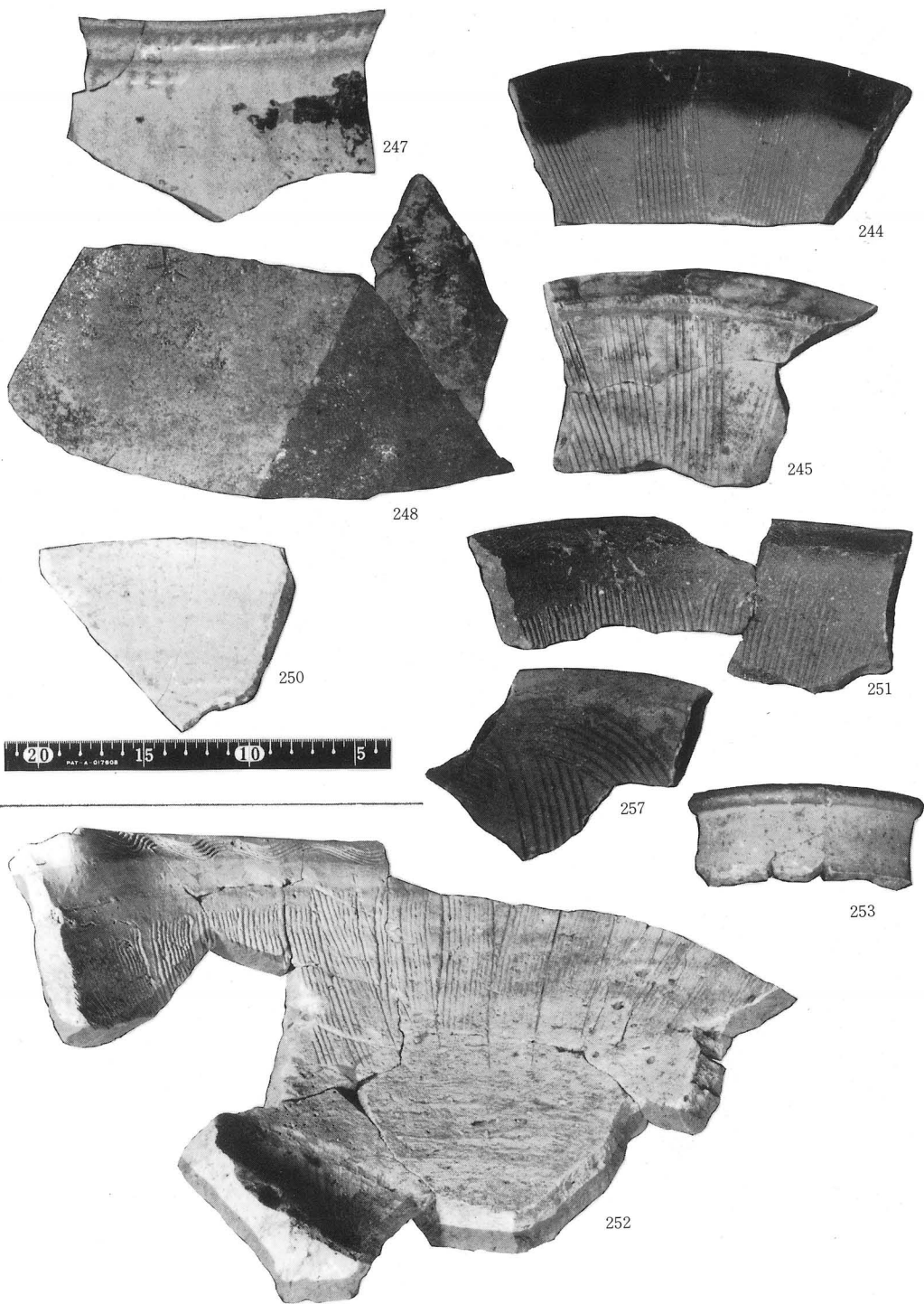
PL. 24 染付その他の舶載陶磁器







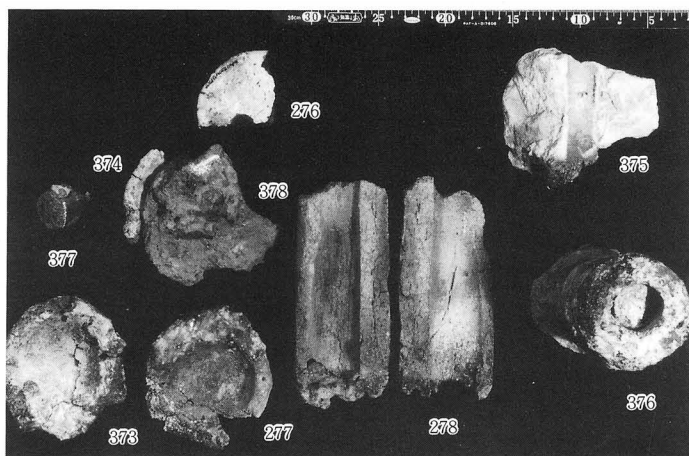
PL. 27 越前・珠洲他



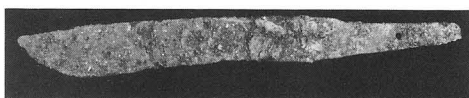
PL. 28 土製品・鉄銅製品



312



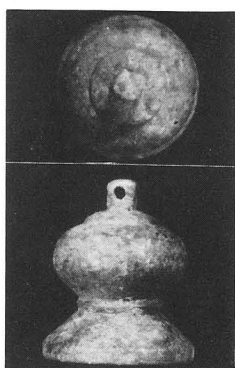
302



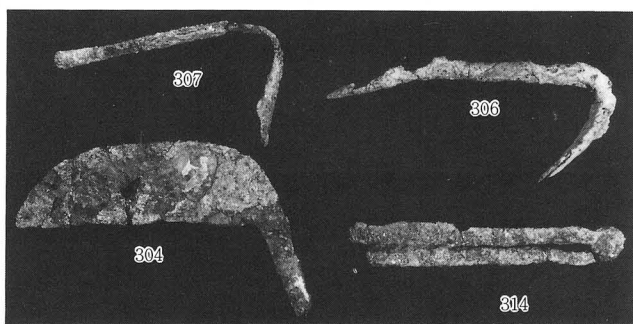
303



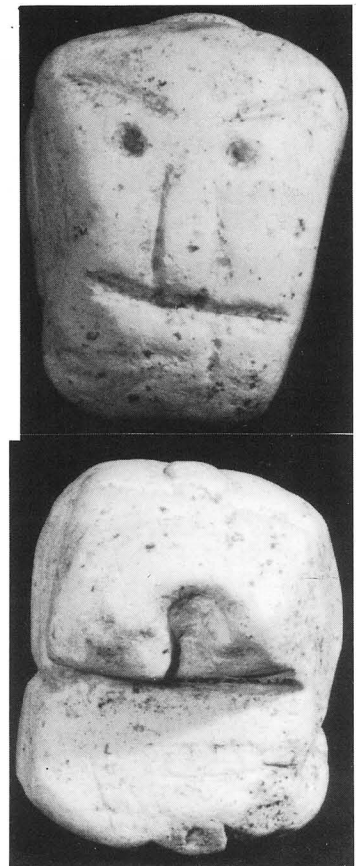
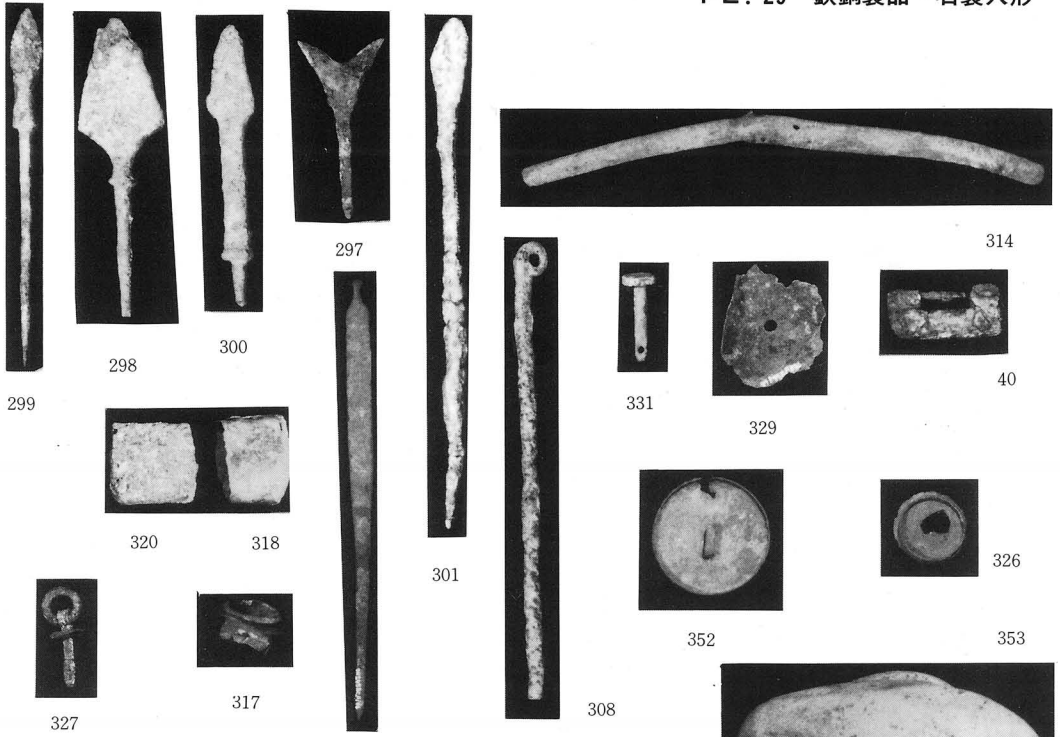
305



324



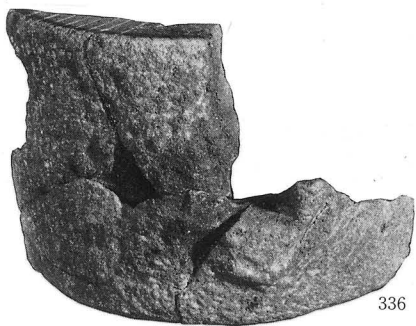
PL. 29 鉄銅製品・石製人形



PL. 30 石製品



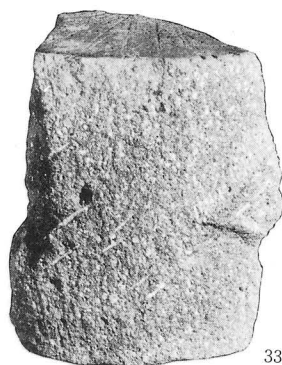
334



336



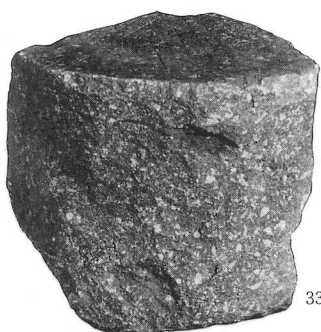
337



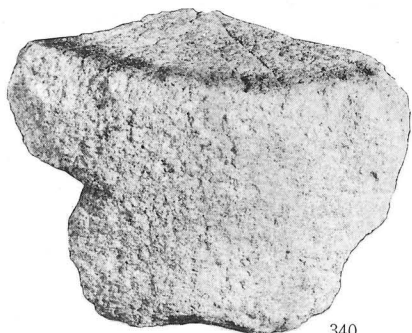
335



339



338



340



341

昭昭59年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 VIII

発 行 浪岡町教育委員会

発行日 昭和61年 3 月31日

印 刷 青森コロニー印刷

付図 発掘調査区全体図

45

46

47

